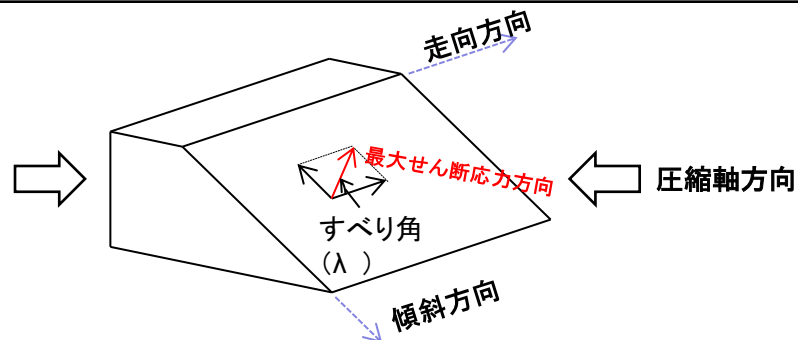


女島(女島地点)(ボーリング調査(破砕部の活動性))

破砕部の連続性は認められないが、仮に連続するとした安全側の評価として、「破砕部の条線観察結果」、「現在の東西圧縮応力場で推定されるすべり角計算値」及び「横ずれ断層の端部性状に係る文献調査結果」より、破砕部の活動性を検討する。

【検討方法】

すべり角は断層面上の最大せん断応力方向と一致するという仮定に基づき、現在の応力場を東西圧縮応力場として推定される破砕部①、②、③のすべり角を推定し、条線方向と比較検討した。



破砕部	観察結果			計算値	検討結果
	走向	傾斜	条線方向	東西圧縮応力場で推定されるすべり角(λ)	
破砕部①	N65E (概ね東西系)	78S	70° 左回転 (逆断層センス)	5° 右回転 (右横ずれ断層センス)	走向:文献断層①と概ね対応する。 条線方向:東西圧縮応力場で推定されるすべり角と対応しない。
破砕部②	N86E (東西系)	85S	90° 左回転 (逆断層センス)	0° (右横ずれ断層センス)	走向:文献断層①と対応する。 条線方向:東西圧縮応力場で推定されるすべり角と対応しない。
破砕部③	N1W* (南北系)	56E	70° 左回転 (逆断層センス)	(90° 左回転) (逆断層センス)	※南北走向であることから、東西走向の文献断層①と対応しない。

【条線観察結果】:破砕部①、②の条線方向は、「縦ずれ優勢(逆断層センス)」を示す。

【すべり角計算値】:現在の東西圧縮応力場で推定される破砕部①、②のすべり角は、「横ずれ」を示す。

【検討結果】:破砕部①、②の条線方向は、東西圧縮応力場で推定されるすべり角と対応しない。

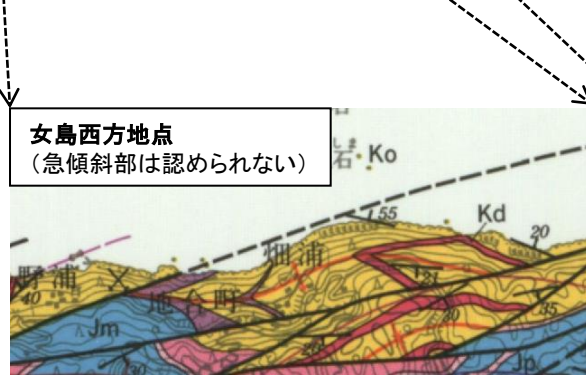
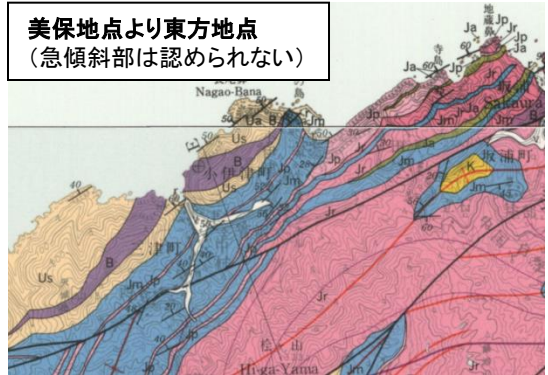
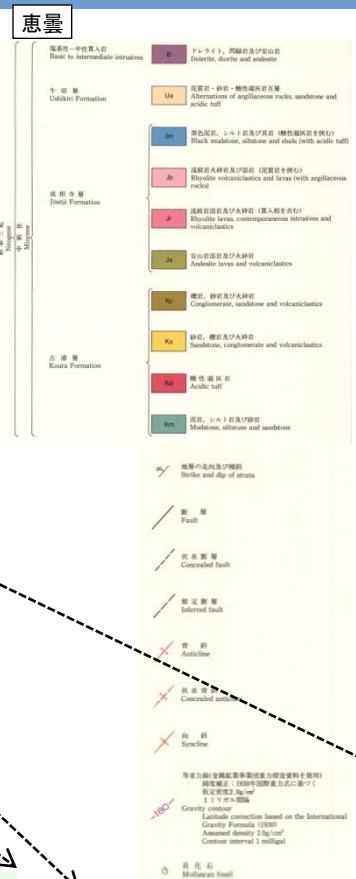
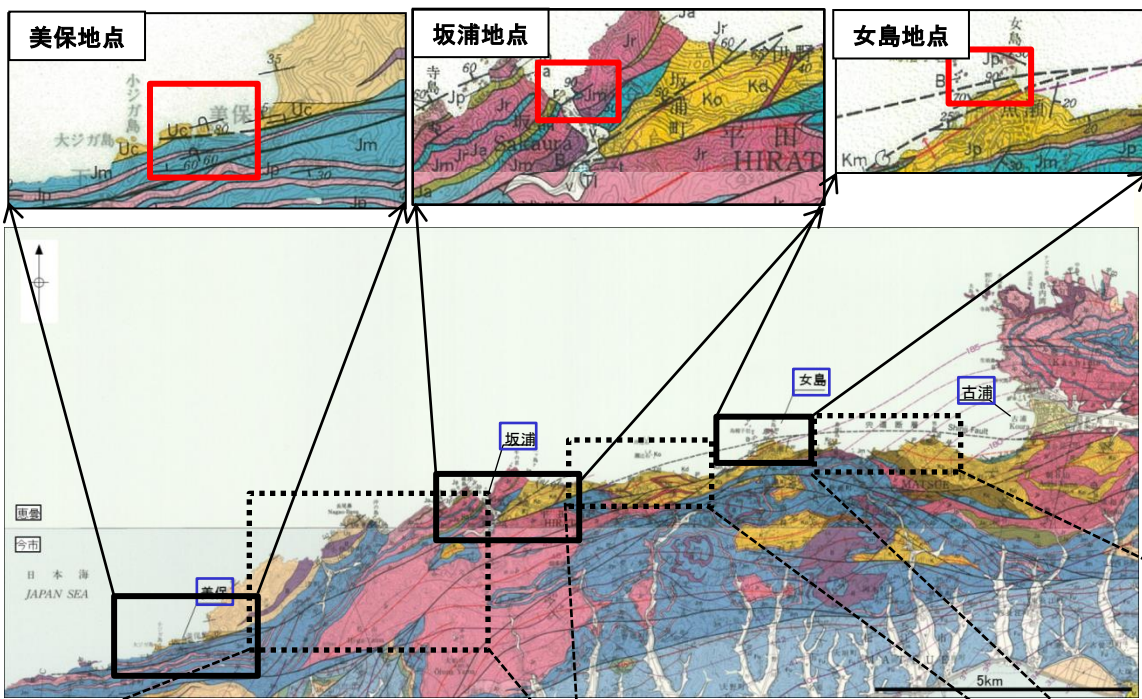
【文献調査結果】:栗田ほか(1996)⁽²⁹⁾の地震断層の変位量分布によると、右横ずれ逆断層の北淡地震断層系では、全域で水平変位とともに鉛直変位が確認されており、断層線が屈曲、ステップ、分岐する端部付近においても、水平変位と鉛直変位が認められ、鉛直変位が卓越する傾向は認められない。

女島(女島地点)(ボーリング調査(破砕部と活断層との性状比較))

項目	南講武 (活断層)	女島 (破砕部①, ②, ③)
地形	変位地形・リニアメント(Aランク)が認められる。	変位地形・リニアメントは認められない。
粘土幅	10cm	数mm
針貫入試験 (せん断面近傍, 破砕部)	(せん断面近傍)極めて軟質なため針貫入勾配は測定不能である。	(破砕部)針貫入勾配は, 0.65~1.25N/mmを示す。
基盤岩の性状	活断層を挟んだ基盤岩が, 幅約16mの区間が著しく破砕を被っている。	破砕部近傍の基盤岩が, 破砕を被っていない。
針貫入試験 (基盤岩)	著しく破砕を被っている範囲の基盤岩の針貫入勾配は3.0N/mm以下と軟質である。	破砕部近傍の基盤岩が, 硬質であり貫入不能である。
破砕部の連続性	連続性の良いせん断面が認められる。	破砕部①, ②, ③が確認されたが, それらの走向・傾斜等から, 連続する構造ではないと考えられる。
運動センス	横ずれ断層センスを示す。 (横ずれ断層に特徴的な構造が認められる。)	縦ずれ優勢の逆断層センスを示す。
活動時期	東西圧縮応力場の下にある後期更新世以降に活動している。	東西圧縮応力場の下にある後期更新世以降に活動したものではないと判断される。

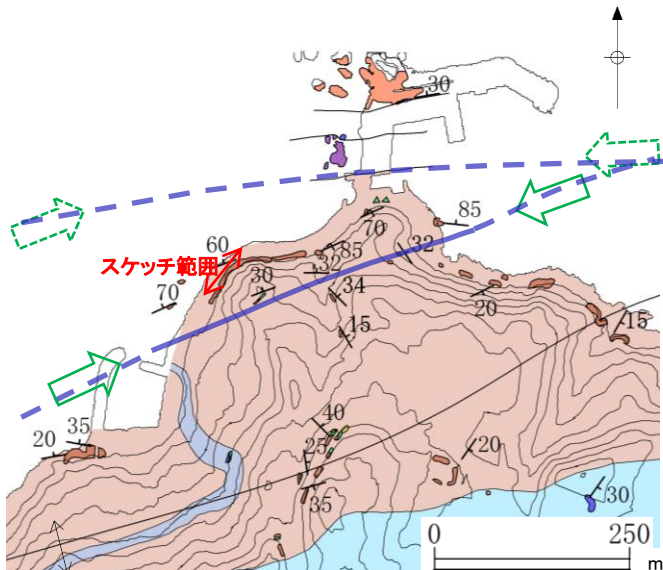
・女島の破砕部と, 南講武の活断層(宍道断層)の比較検討の結果, 性状等が著しく異なる。

3. 宍道断層の評価 (3)地質調査(宍道断層の西側) ⑦西端(女島) 女島(地層の急傾斜部に係る検討)

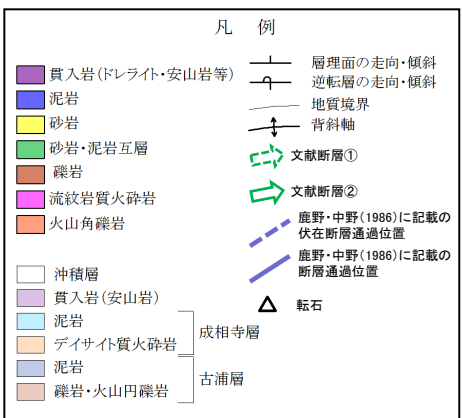
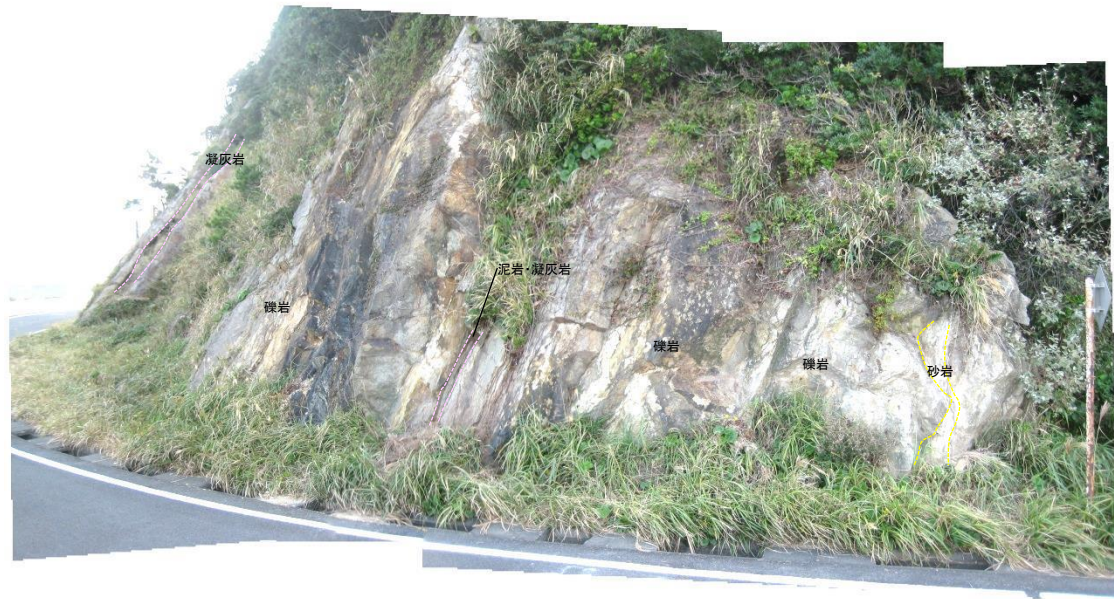


・鹿野・中野(1986), 鹿野・竹内ほか(1991)によると, 地質断層としての宍道断層の通過位置上における地層の急傾斜部は, 古浦~女島~美保地点の区間では女島地点と美保地点に示されているが, その他地点では示されていない。なお, 坂浦地点では, 宍道断層の通過位置の北側に地層の急傾斜部が示されている。
・以上のことから, 女島地点, 美保地点, 坂浦地点の地層の急傾斜部の性状を詳細に観察した。

3. 宍道断層の評価 (3)地質調査(宍道断層の西側) ⑦西端(女島) 女島(地層の急傾斜部の性状(女島地点))

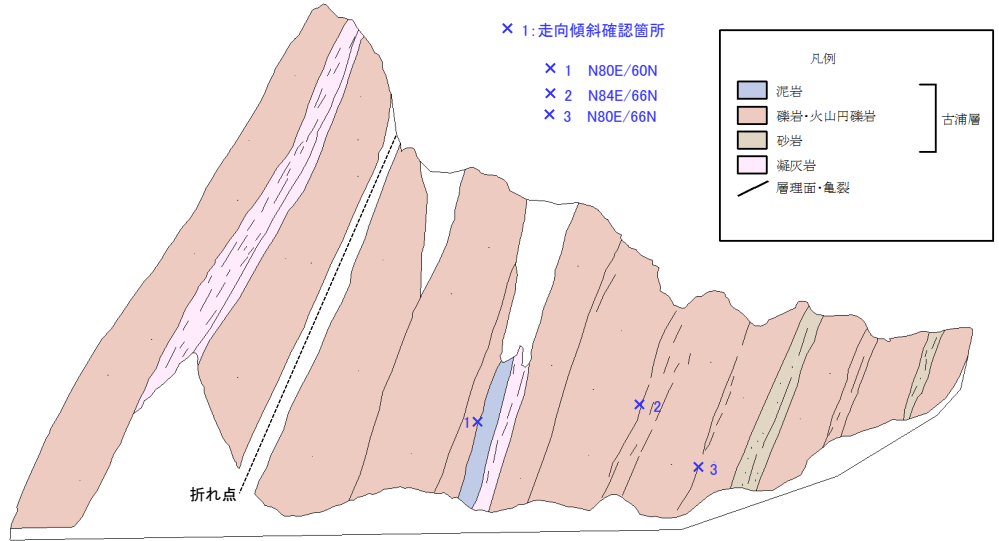


露頭写真全景



←NE

SW→

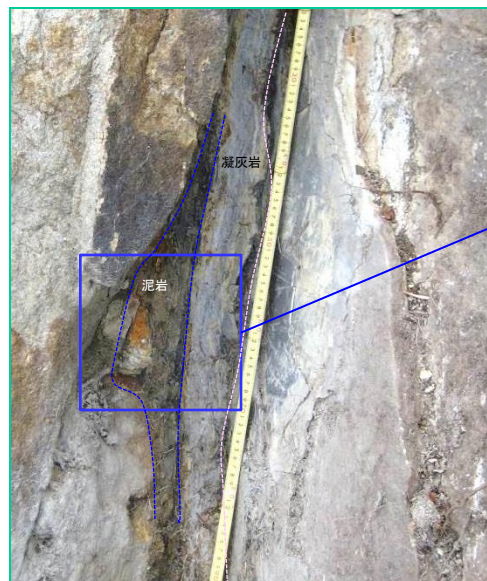
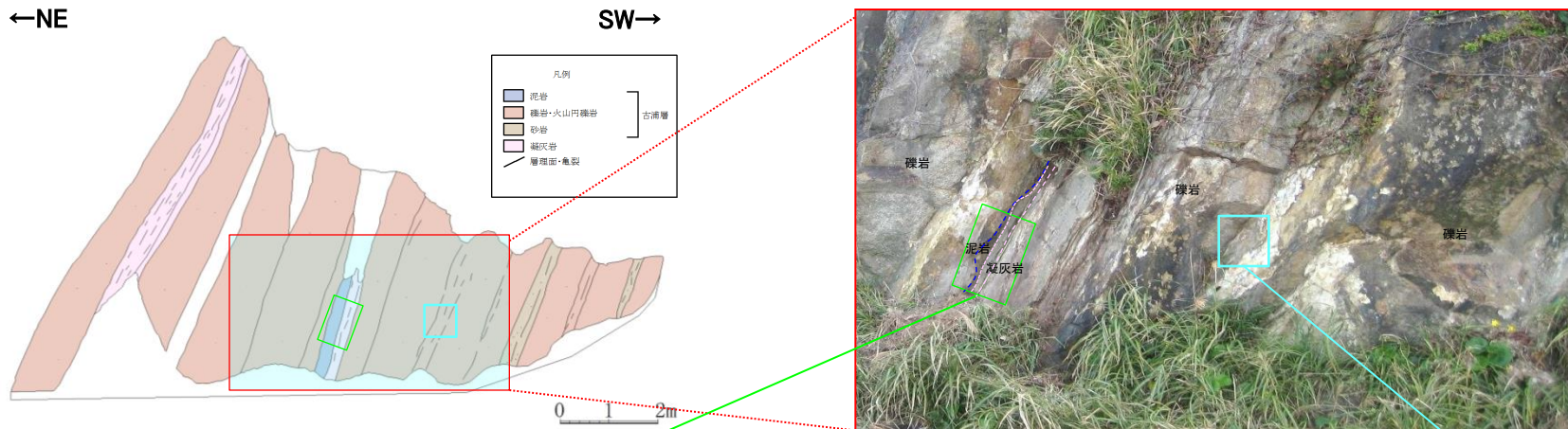


露頭スケッチ

・地質断層としての宍道断層の通過位置上における地層の急傾斜部は、古浦層の礫岩・火山円礫岩及び一部泥岩・凝灰岩の薄層からなる。一部の凝灰岩は風化作用により明灰色の粘土混りシルト状となるが、上方及び下方へは連続しない。また、層理面沿いは固結密着している。

・以上のことから、固結後の断層活動は認められない。

3. 宍道断層の評価 (3)地質調査(宍道断層の西側) ⑦西端(女島) 女島(地層の急傾斜部の性状(女島地点))



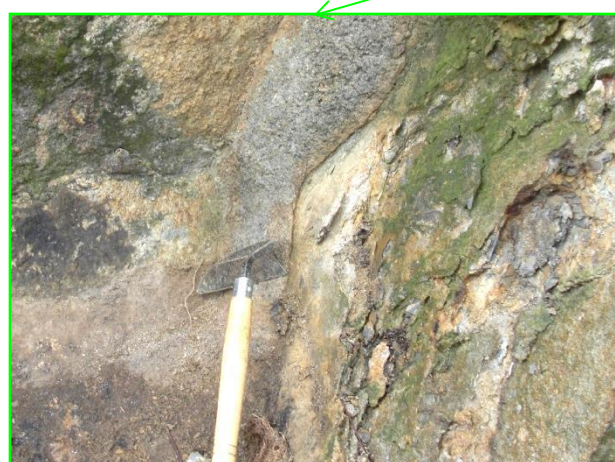
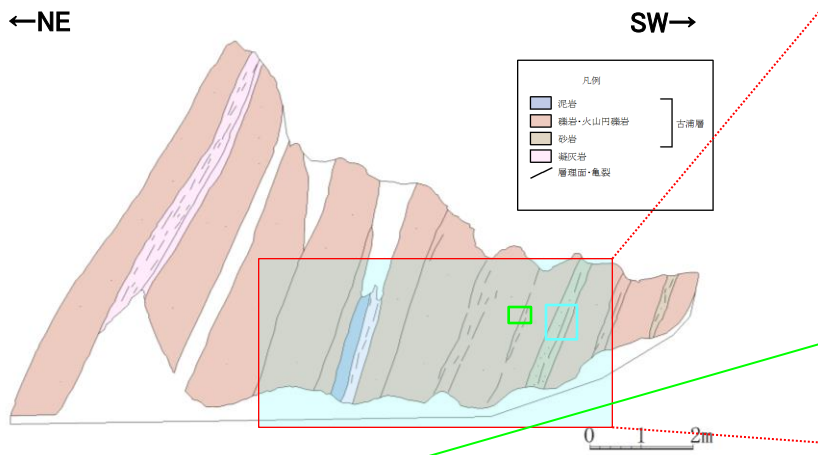
層理面は固結，密着している。

層厚約20cmの泥岩・凝灰岩で明瞭な葉片状の層理面が発達している。地層下位の凝灰岩は風化作用により明灰色の粘土混りシルト状となるが，上方及び下方へは連続しない。

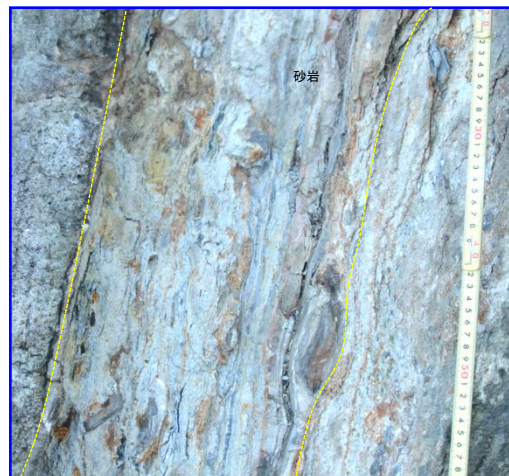
(拡大写真)

凝灰岩は，明瞭な葉片状の層理面が発達し，層理面は固結，密着している。
泥岩中には，扁平した偽礫等の未固結時の変形が認められる。

3. 中央断層の評価 (3)地質調査(中央断層の西側) ⑦西端(女島)
 女島(地層の急傾斜部の性状(女島地点))



層理面は固結，密着している。



(拡大写真)
 砂岩は，明瞭な葉片状の層理面が発達し，層理面は固結，密着している。



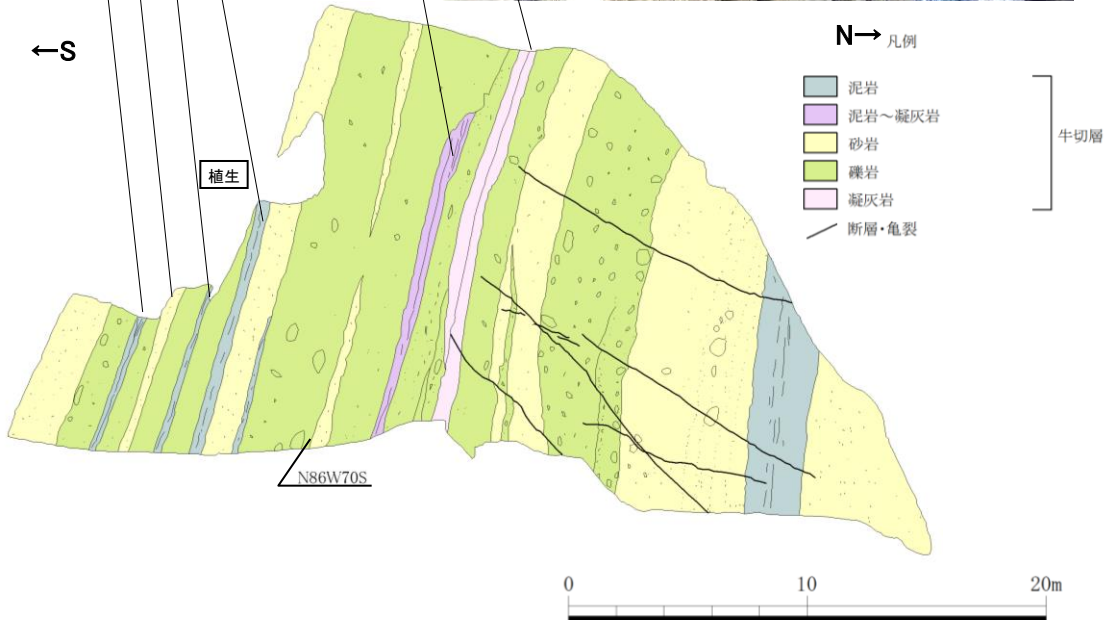
層厚約25cmの砂岩で泥岩を葉片状に挟み，細かな亀裂が発達している。

3. 宍道断層の評価 (3)地質調査(宍道断層の西側) ⑦西端(女島) 女島(地層の急傾斜部の性状(美保地点))



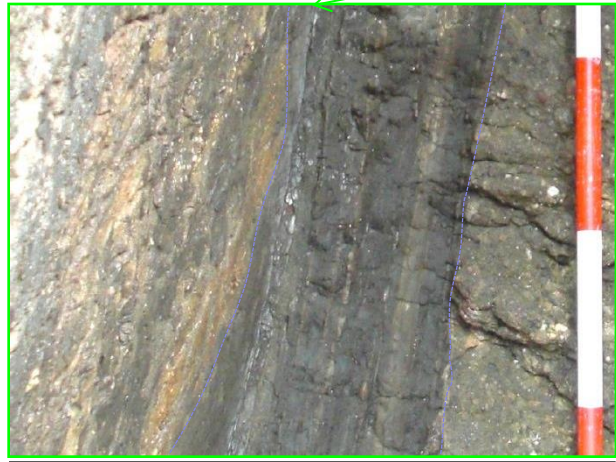
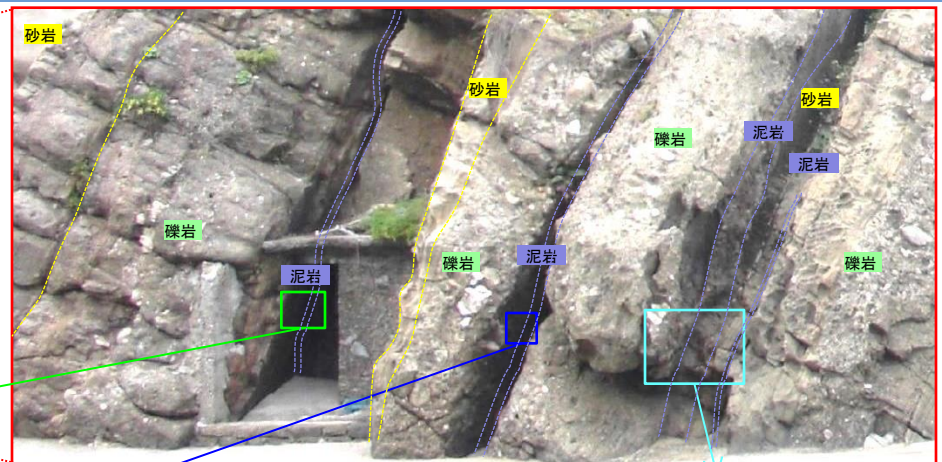
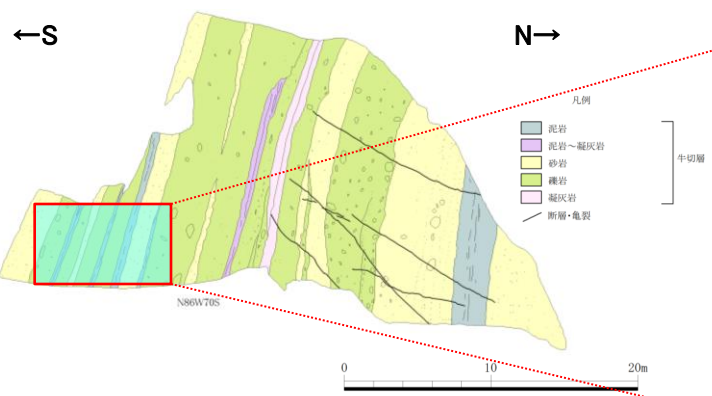
0 250 500m

凡例				
牛切層	Us	砂岩泥質岩互層(礫岩を挟む)	↗	地層の走向及び傾斜
	Uc	礫岩及び礫岩砂岩互層(泥質岩及び安山岩溶岩・火砕岩を伴う)	⊥	直立層
成相寺層	Ja	安山岩溶岩・火砕岩	↖	逆転層
	Jp	流紋岩火砕岩(泥質岩を挟む)	—	断層
	Jr	流紋岩溶岩・火砕岩(貫入相を含む)	—	推定断層
	Jm	黒色泥岩, シルト岩及び頁岩	—	伏在断層



- ・地質断層としての宍道断層の通過位置上における地層の急傾斜部は、牛切層の礫岩・火山円礫岩及び一部泥岩及び凝灰岩の薄層からなり、急傾斜を示す層理面沿いは固結、密着している。
- ・凝灰岩は、風化作用を受け亀裂が発達しやや軟質であるが、礫岩との境界部は固結、密着している。
- ・以上のことから、固結後の断層活動は認められない。

3. 宍道断層の評価 (3)地質調査(宍道断層の西側) ⑦西端(女島)
 女島(地層の急傾斜部の性状(美保地点))



泥岩の層理面及び礫岩との地層境界は固結，密着している。

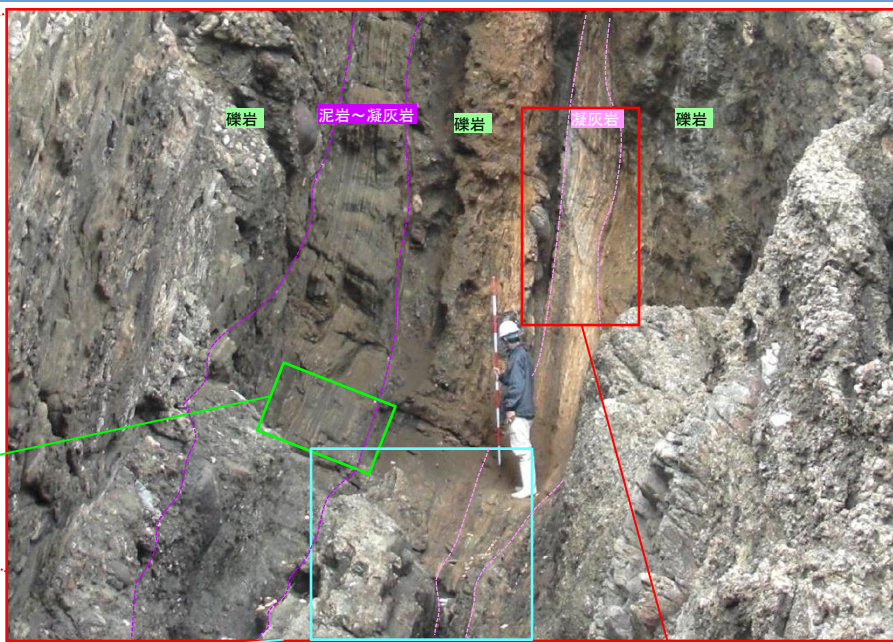
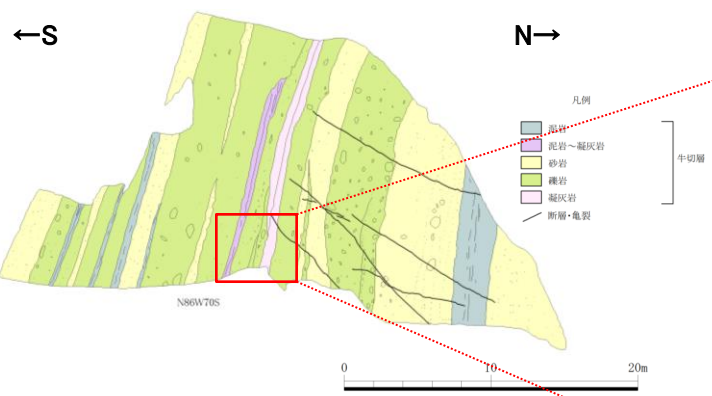


泥岩の層理面は固結，密着している。



泥岩の層理面及び砂岩との地層境界は固結，密着している。

3. 宍道断層の評価 (3)地質調査(宍道断層の西側) ⑦西端(女島) 女島(地層の急傾斜部の性状(美保地点))



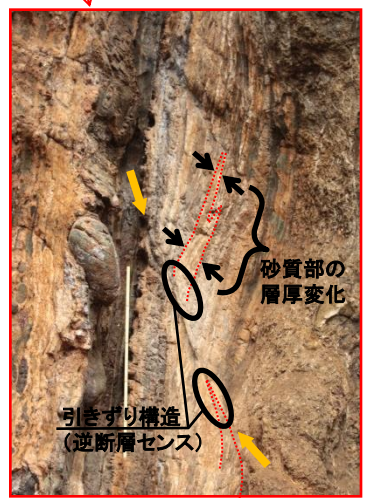
泥岩～凝灰岩の層理面及び礫岩との地層境界は固結，密着している。また，層理面は波打っており，未固結時の変形が認められる。



凝灰岩及び礫岩は，風化作用を受け亀裂が発達するが，明瞭な堆積構造を示す。

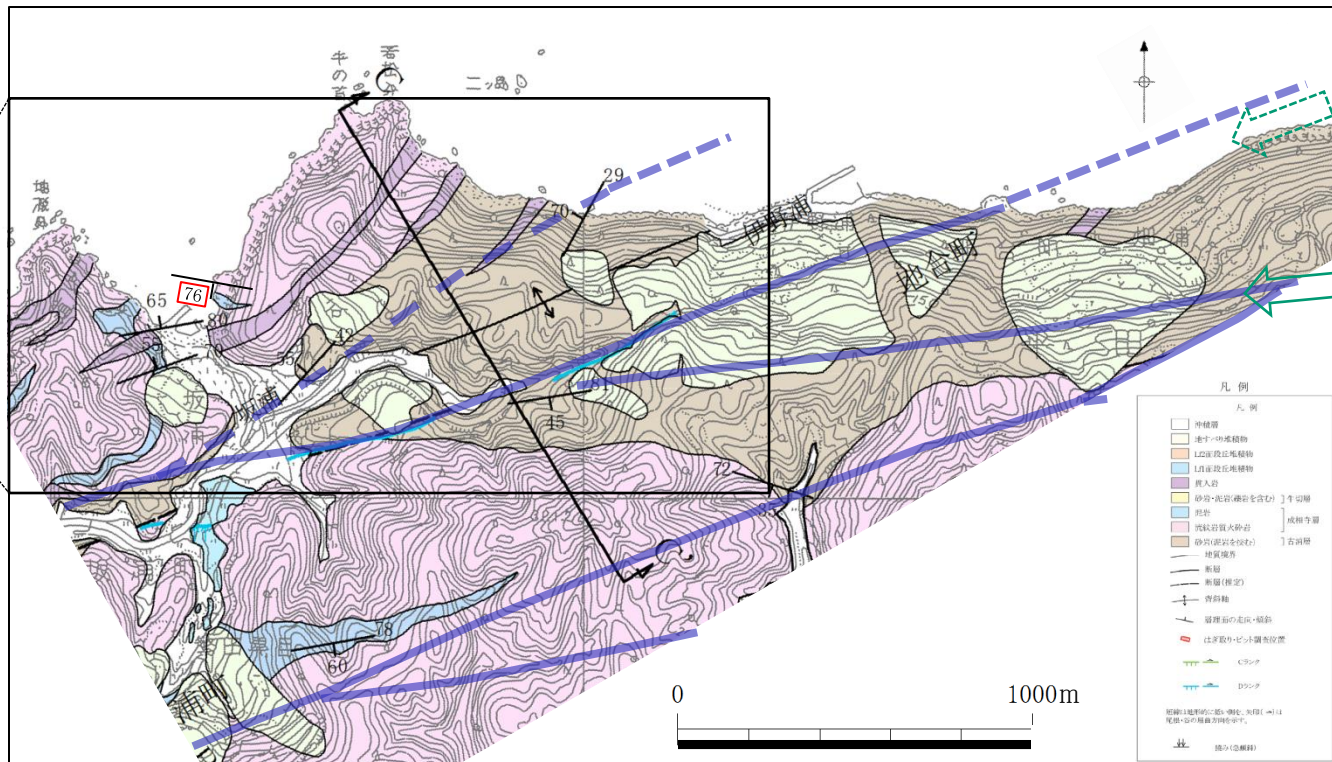
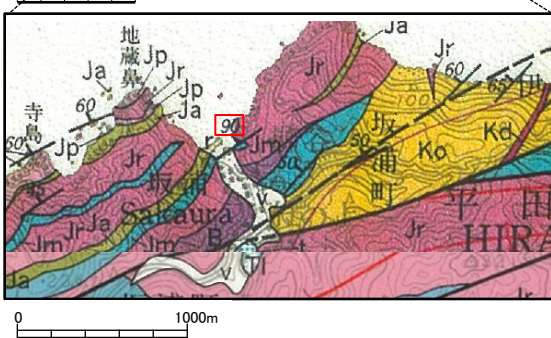
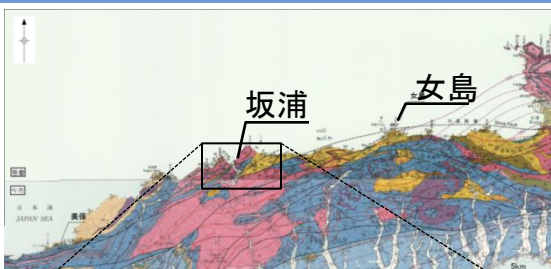


(拡大写真)
凝灰岩と礫岩の境界は固結，密着している。

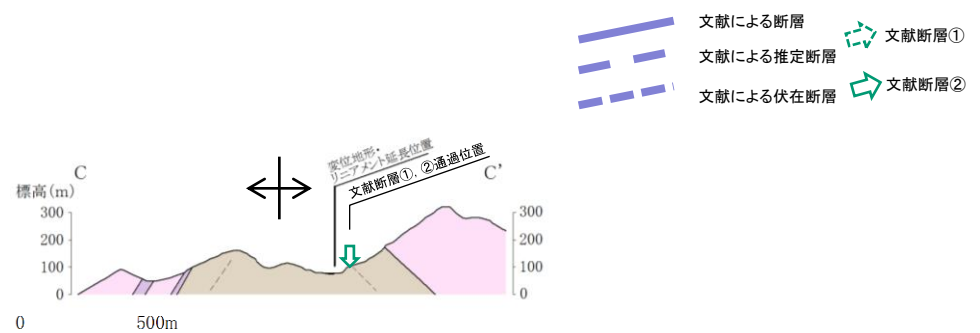


未固結時の変形として，凝灰岩中の砂質部に層厚変化が認められ，固結した断層沿いに引きずり構造が認められる。

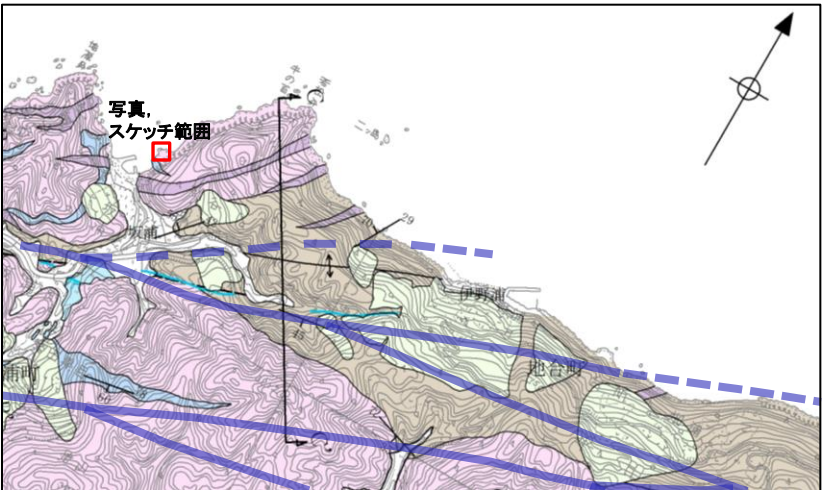
3. 宍道断層の評価 (3)地質調査(宍道断層の西側) ⑦西端(女島) 女島(地層の急傾斜部の性状(坂浦地点))



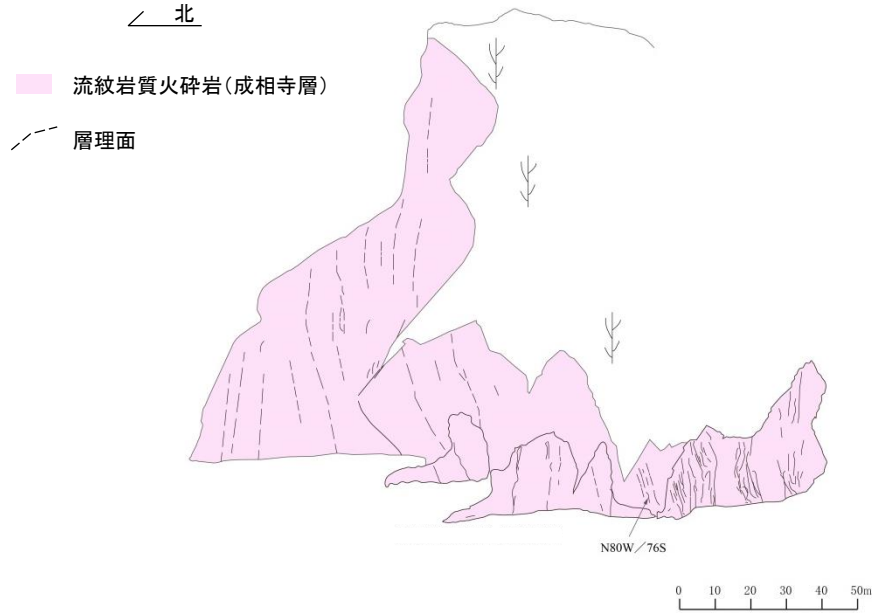
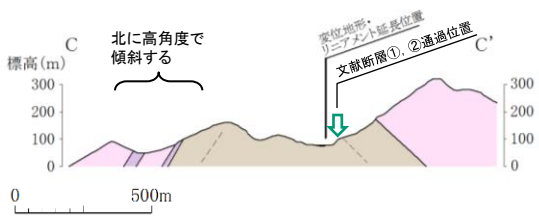
- ・鹿野・中野(1986)によると、地質断層としての宍道断層の通過位置の北側である、坂浦地点で最大90°地層が傾斜するとされている。
- ・地表地質踏査の結果、貫入岩付近に文献と同様に地層の急傾斜部が認められるが、貫入岩の末端に向かって地層が緩くなり、大局的には背斜軸から北では北傾斜を示す。
- ・文献断層及び変位地形・リニアメント延長位置付近には急傾斜部は認められない。



3. 宍道断層の評価 (3)地質調査(宍道断層の西側) ⑦西端(女島) 女島(地層の急傾斜部の性状(坂浦地点))

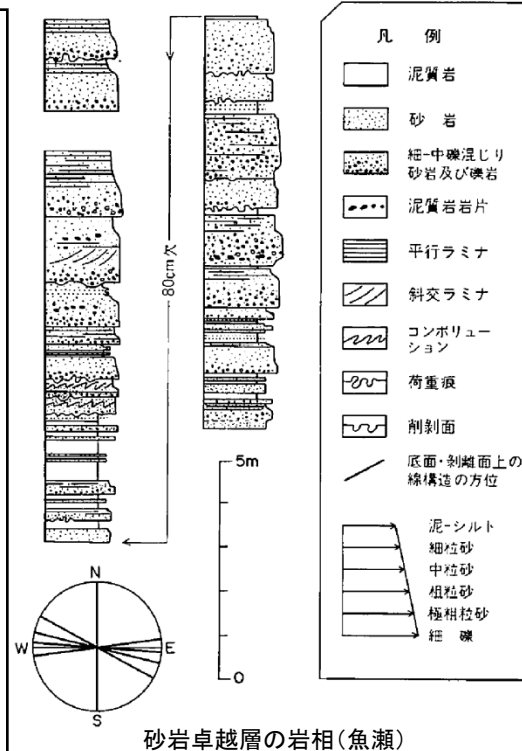
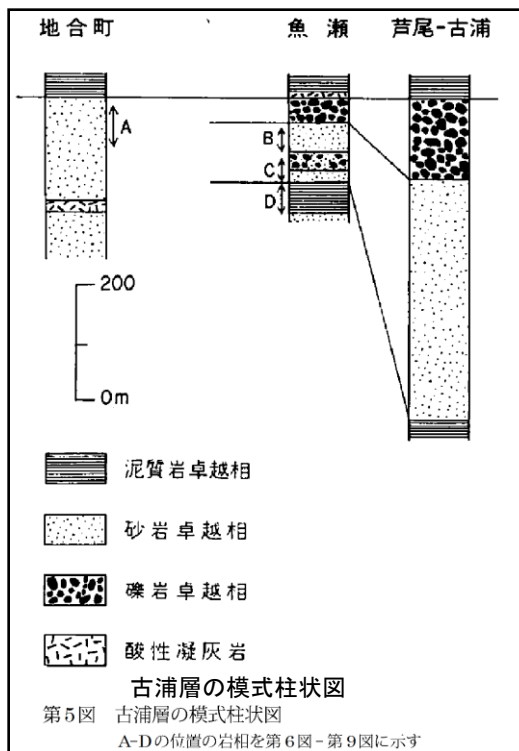
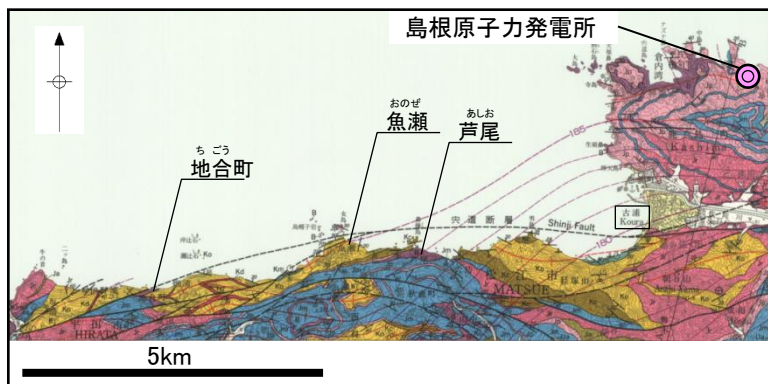


文献による断層
 文献による推定断層
 文献による伏在断層



・坂浦の急傾斜部は、成相寺層の流紋岩質火砕岩から成り、急傾斜を示す露頭に断層は認められない。

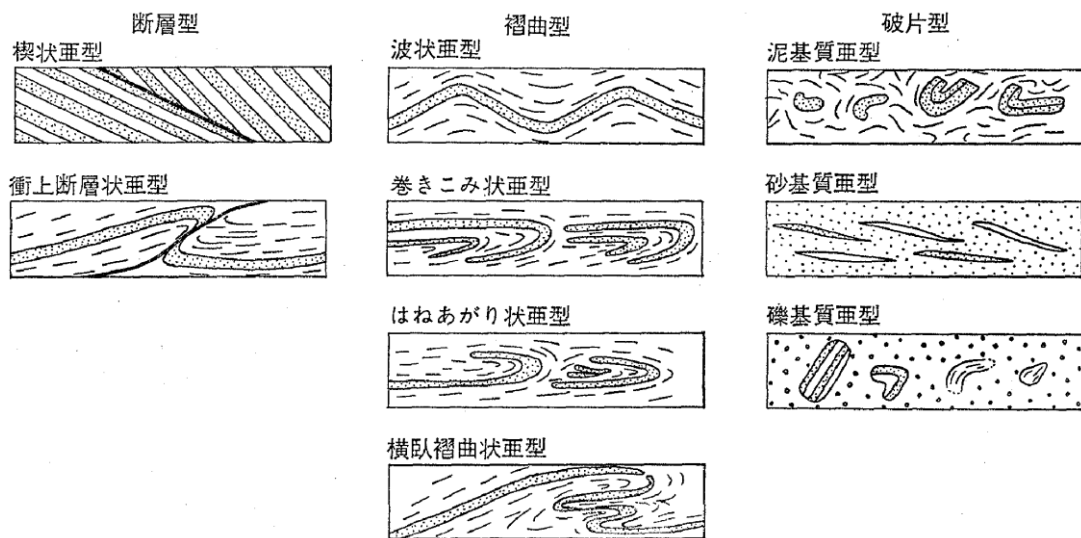
女島(地層の急傾斜部の成因(文献調査(古浦層の堆積構造)))



柱状図に示される砂岩の底面・稜面上にはほぼ縦構造が認められる。その方位を左下隅にまとめて示す
鹿野・中野(1986)より引用・加筆

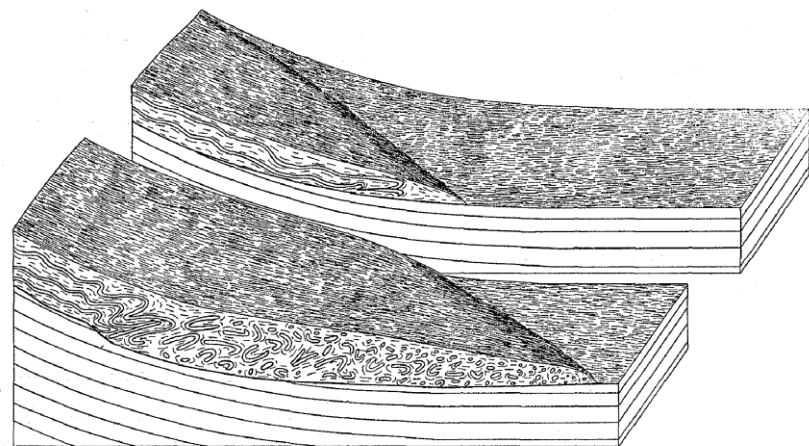
- 鹿野・中野(1986)によると、古浦層は、下部の方で泥質岩が卓越し、上位に向かうにつれて砂岩～礫岩が卓越するようになるとされている。また、砂岩は下部の方でタービダイトあるいはタービダイト類似の特徴を示すものが多いとされている。
- 鹿野・中野(1986)によると、古浦層の堆積環境は、上位層準ほど粗粒堆積物が卓越する等の特徴から、堆積場の水深が次第に浅くなったか、堆積物の供給源が近い所に迫ってきたことを意味しているとし、泥質岩は湖の静かな水底に堆積したことを示し、上方に向かうにつれてそこにより粗粒の重力流堆積物が流入するようになり、扇状地を形成したとされている。また、粗粒の重力流堆積物は扇状地のチャネル堆積物と考えられるとされている。
- 古川ほか(2008)⁽³⁰⁾によると、古浦層中部～上部の地層に対して堆積相解析の方法を適用して、堆積環境の復元を試みた結果、波浪堆積構造やスランプ堆積物が頻繁に見られることから、この地層は比較的浅い斜面環境の地層であるとし、ファンデルタの地層が推定されるとされている。

女島(地層の急傾斜部の成因(文献調査(中新統内の乱堆積構造)))



第2図 乱堆積構造の分類
乱堆積(スランプ)構造の分類

山内(1977)より引用

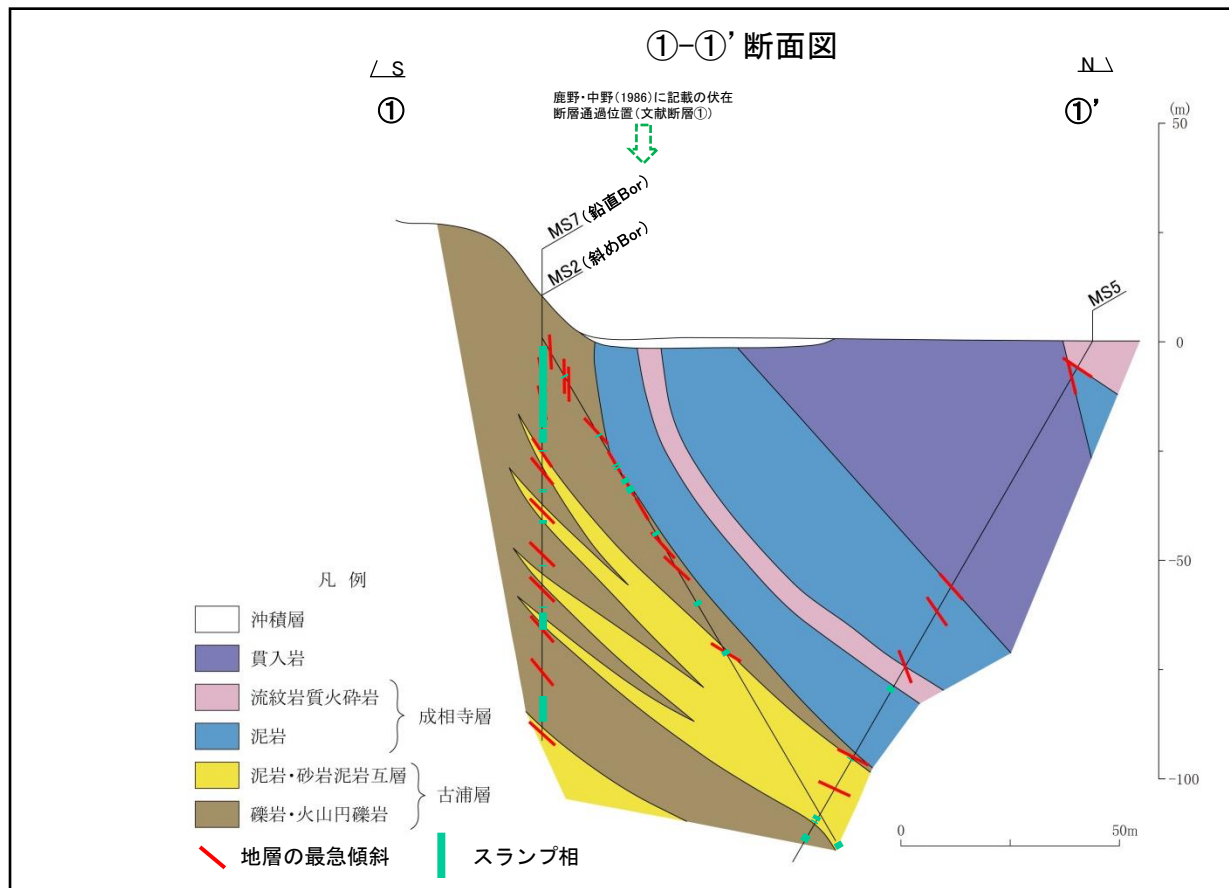
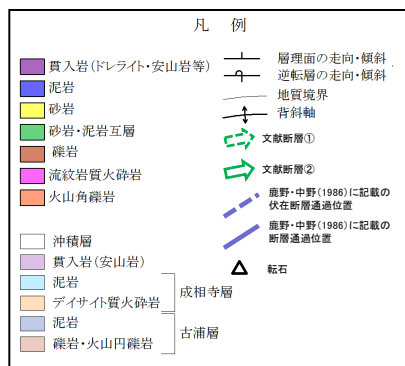
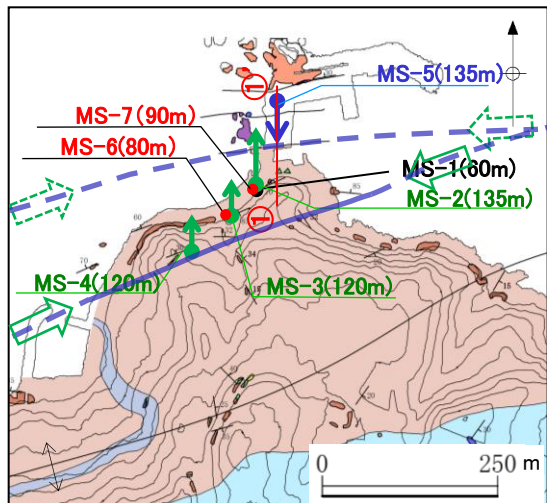


第16図 典型的な乱堆積構造の三次元モデル
縦方向を誇張してある
典型的な乱堆積(スランプ)構造の三次元モデル

山内(1977)より引用

- ・山内(1977)⁽³¹⁾によると、秩父盆地を事例として中新統内の乱堆積(スランプ)構造の形態的特徴を3つの型と9つの亜型に区分されている。また、山内(1977)は、乱堆積(スランプ)構造が比較的発達した段階の三次元モデルを示している。
- ・山内(1979)⁽³²⁾によると、中新統内の乱堆積(スランプ)層は特定の層準に密集して発達しているものが多いとされている。また、山内(1979)は、乱堆積(スランプ)層を形成した海底地すべり(スランピング)の成因について、堆積物の可動性(滑動層の存在、滑動性に影響を与える岩相の相違等)と堆積面の傾斜にあるとし、後者について海底地すべりが発生した古海底斜面の傾斜を計算した結果、3~10°の緩傾斜であることを示している。

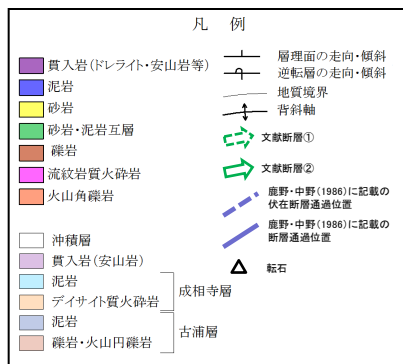
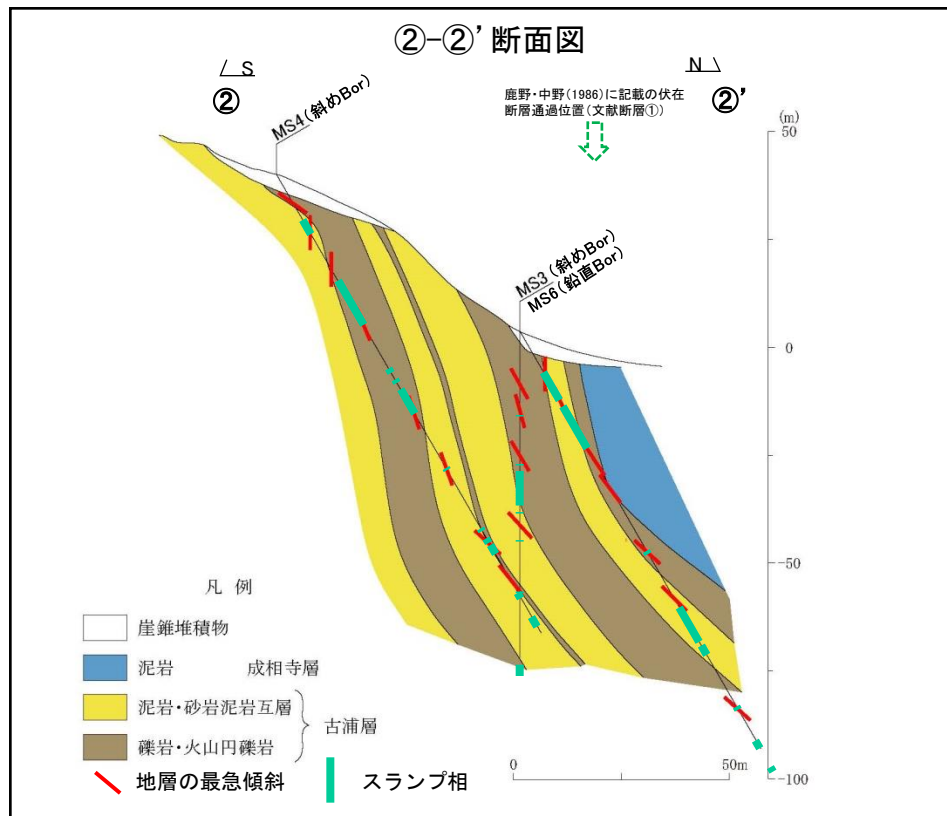
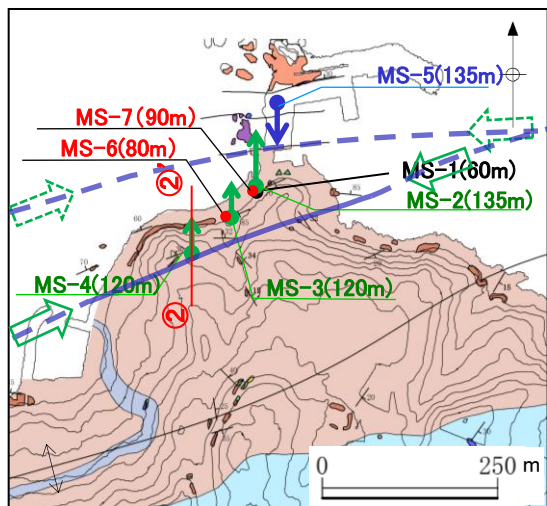
女島(地層の急傾斜部の成因(スランプ相の分布(①-①'断面図)))



・ボーリング調査の結果、古浦層には、偽礫を含む堆積層が複数箇所認められ、また、一部で堆積構造の乱れやスランプ褶曲が認められる(スランプ相)。これらの堆積構造は、古浦層中部～上部の地層に対して認められる未固結時の堆積構造(スランプ構造)と考えられ(古川ほか(2008)等)、女島では、比較的小規模であり連続性に乏しい。

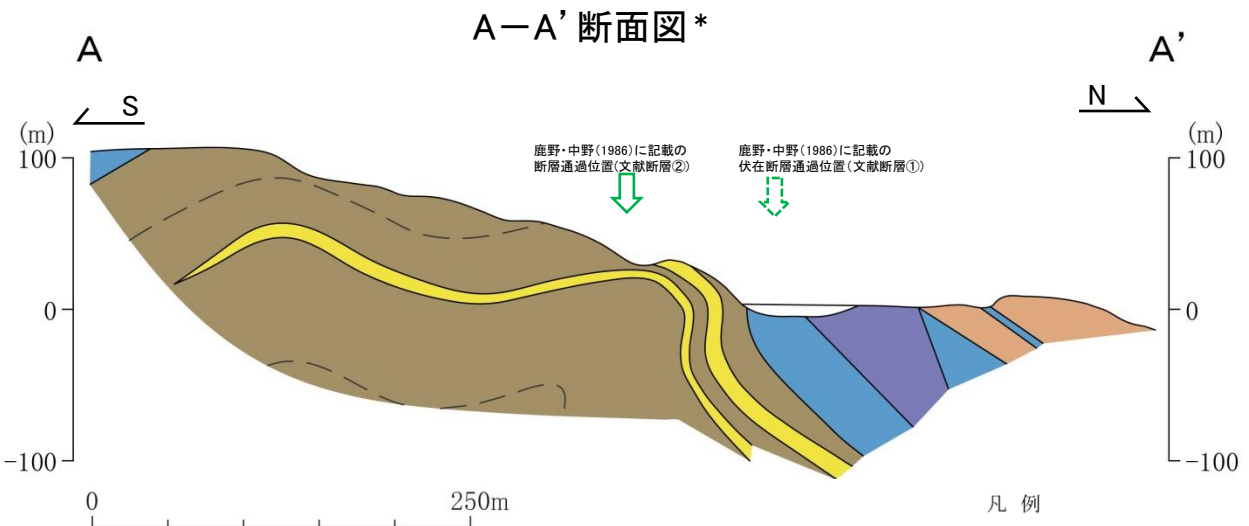
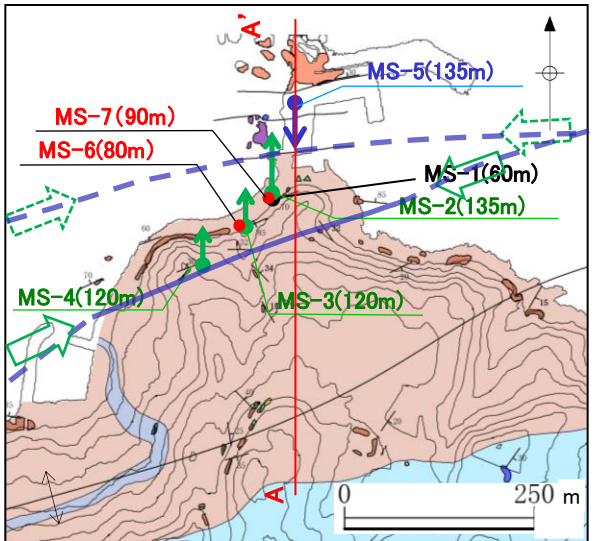
・スランプ相の分布と地層の傾斜との関係は認められない。

女島(地層の急傾斜部の成因(スランプ相の分布(②-②'断面図)))

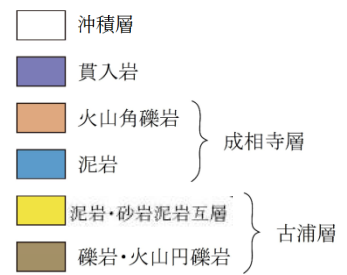
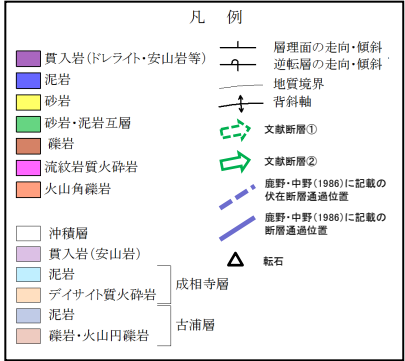


- ・ボーリング調査の結果、①-①'断面図と同様に、古浦層において、比較的小規模であり連続性に乏しいスランプ構造が認められる。
- ・スランプ相の分布と地層の傾斜との関係は認められない。

女島(まとめ)



* 地表地質踏査及びボーリング調査結果から、A-A'断面を作成
(①-①'断面を基本とし、②-②'断面を参考に作成)



3. 宍道断層の評価 (3)地質調査(宍道断層の西側) ⑦西端(女島)

女島(まとめ)

1. 文献調査

- ・鹿野・中野(1986)によると、地質断層としての宍道断層について、「古浦から西方での行方は確認されていないが、その延長に当たる魚瀬や、更に西方に宍道断層と同規模の北上がり高角逆断層があることから、それに続く可能性が高い。宍道断層やその延長部に当たる断層の南側にある断層の多くは北あるいは南傾斜40-90°の逆断層で宍道断層同様複背斜を切っており、恐らく宍道断層とほぼ同時期に形成された。」とされている。
- ・鹿野・中野(1986)によると、女島地点において、地質断層としての宍道断層の延長に当たる可能性が高いとして、沿岸部に90°の急傾斜を示す古浦層と30°の緩傾斜を示す成相寺層との間に伏在断層(文献断層①)、その分岐断層として、陸域部に25°の緩傾斜を示す古浦層と70°の急傾斜を示す古浦層との間に断層(文献断層②)が示されている。また、文献断層②は、女島西方において、東北東-西南西方向の背斜軸を切る断層として示されている。
- ・山陰地域における応力場の変遷について、鹿野・吉田(1985)によると、中期～後期中新世頃まで主応力(σ_{Hmax})の方向はNS方向であり、宍道断層は中期中新世末期～後期中新世に形成されたとしている。また、多井(1973)を引用し、宍道褶曲帯を形成した運動は、和久羅山安山岩噴出(後期中新世末期)前に終了したと考えられているとしている。

2. 変動地形学的調査

- ・鹿島町古浦～福原町の間は尾根・谷の系統的かつ明瞭な右屈曲が認められるが、古浦西方においては、変位地形・リニアメントは認められない。さらに、宍道断層の主要部が尾根・谷の右屈曲を示すのに対して、男島付近では左屈曲が認められる。
- ・女島付近においては、変位地形・リニアメントは認められない。

3. 地表地質踏査

(1)女島西方地点

- ・文献断層②の通過位置付近の沿岸部の露頭に断層は認められない。
- ・女島から女島西方まで背斜軸が通過し、連続した構造と考えられる。

(2)女島地点

- ・文献断層②の通過位置付近の露頭に断層は認められない。また、古浦層の礫岩・火山円礫岩が緩やかな背斜・向斜を示すことから、断層は推定されない。
- ・急傾斜(85°北)の古浦層の礫岩・火山円礫岩と、やや緩傾斜(30°北)の成相寺層のデイサイト質火砕岩が分布することから、文献断層①の通過位置付近に、南傾斜の逆断層が推定される。

1～3の調査結果から、文献断層②の通過位置付近に断層は認められない。急傾斜を示す古浦層と緩傾斜を示す成相寺層との間の文献断層①の通過位置付近に、南傾斜の逆断層が推定されることから、ボーリング調査により、断層の存否を確認した。

3. 宍道断層の評価 (3)地質調査(宍道断層の西側) ⑦西端(女島)

女島(まとめ)

4. ボーリング調査(女島地点)

(1)①-①'断面

- ・地表から約20mまでの地層は急傾斜を示し、それ以深の地層は緩傾斜を示しており、断層は認められない。また、傾斜変換部において、破碎部は認められない。
- ・古浦層内の地層は連続して分布していること及び古浦層と成相寺層が整合関係と考えられることから、地層に顕著な不連続は想定されない。
- ・古浦層と成相寺層の境界に文献断層①に相当する断層は認められない。
- ・成相寺層の泥岩に貫入岩が分布しており、貫入岩と貫入境界付近に、貫入後の断層活動は認められない。なお、鹿野ほか(1994)によると、塩基性-中性の貫入岩の年代は中期中新世~後期中新世とされている。

(2)②-②'断面

- ・文献断層①の通過位置付近において、細粒部を伴う破碎部①, ②, ③が認められる。
- ・地表から約20mまでの地層は急傾斜を示し、それ以深の地層は緩傾斜を示しており、傾斜変換部において破碎部は認められない。
- ・古浦層内の地層は連続して分布していることから、地層に顕著な不連続は想定されない。

a. 破碎部の連続性評価

- ・破碎部の連続性評価の結果、破碎部①はN65E/78S, 破碎部②はN86E/85Sであることに対して、破碎部③はN1W/56Eであることから、破碎部①, ②と破碎部③の連続性は認められない。
- また、3次元的な詳細な検討により、各ボーリングにおける破碎部①及び破碎部②の走向傾斜延長に位置するコア性状の確認の結果、破碎部は認められないこと等から、破碎部①, 破碎部②及び破碎部③の連続性は認められない。

b. 破碎部の活動性評価

- ・破碎部の活動性評価の結果、横ずれ断層の端部性状に係る文献調査では横ずれ断層の端部は鉛直変位が卓越する傾向は認められないことから、破碎部①及び破碎部②の縦ずれ優勢の条線は、横ずれ断層の端部性状を示すものではない。
- 更に、現在の東西圧縮応力場で推定される破碎部のすべり角は横ずれを示すと考えられるが、破碎部の条線観察結果は縦ずれ優勢を示すことから、現在の東西圧縮応力場に活動したものではないと判断される。

c. 破碎部と活断層との性状比較

- ・破碎部と活断層(南講武地点)の性状の比較検討の結果、女島の破碎部の針貫入勾配が0.65~1.25N/mmを示すことに対して、南講武の破碎部は極めて軟質なため測定不能を示すこと等から、活断層とは性状が著しく異なる。

(1), (2)の調査結果より、文献断層①の通過位置付近に、震源として考慮する活断層は認められない。

女島(まとめ)

5. 女島地点の地層の急傾斜部に係る検討

(1) 地層の急傾斜部の性状

- ・地質断層としての宍道断層の通過位置上における地層の急傾斜部は、古浦～女島～美保地点の区間では女島地点と美保地点に示されているが、その他地点では示されていない。なお、坂浦地点では、宍道断層の通過位置の北側に地層の急傾斜部が示されている。
- ・女島地点の地層の急傾斜部に関する露頭状況の調査の結果、急傾斜を示す層理面沿いは、概ね固結、密着していることから、固結後の断層活動は認められない。
- ・美保地点の地層の急傾斜部に関する露頭状況の調査の結果、急傾斜を示す層理面沿いは、固結、密着していることから、固結後の断層活動は認められない。
- ・坂浦地点の地表地質踏査の結果、文献と同様に貫入岩付近に地層の急傾斜が認められるが、貫入岩の末端に向かって地層が緩くなり、大局的には背斜軸から北では北傾斜を示す。また、急傾斜を示す露頭に断層は認められない。
- ・以上のことから、地層の急傾斜部の連続性は認められず、また少なくとも後期更新世以降の断層活動は認められない。

(2) 地層の急傾斜部の成因

- ・文献調査及びボーリング調査の結果、古浦層には、海底地すべりに伴うスランプ構造が複数認められるが、スランプ相の分布と地層の傾斜との関係は認められない。
- ・また、文献調査の結果、海底地すべりが発生する古海底斜面の傾斜は、 $3\sim 10^\circ$ の緩傾斜であるとされている。
- ・以上のことから、地層の急傾斜部の成因は、海底地すべりによるものでなく、中期中新世頃から後期中新世頃までの南北圧縮応力場による褶曲運動の可能性が考えられる。

(1)、(2)の調査結果より、女島地点の地層の急傾斜部の成因は、中期中新世頃から後期中新世頃までの南北圧縮応力場による褶曲運動の可能性が考えられる。

また、ボーリング調査等の結果、地層が非対称褶曲を示すことから、ボーリング調査範囲より更に深部に断層が存在する可能性は否定できないが、存在すると仮定した場合でも女島地点の連続露頭の調査の結果、少なくとも後期更新世以降の断層活動を示す性状が認められないことから、震源として考慮する活断層ではないと考えられる。

余白

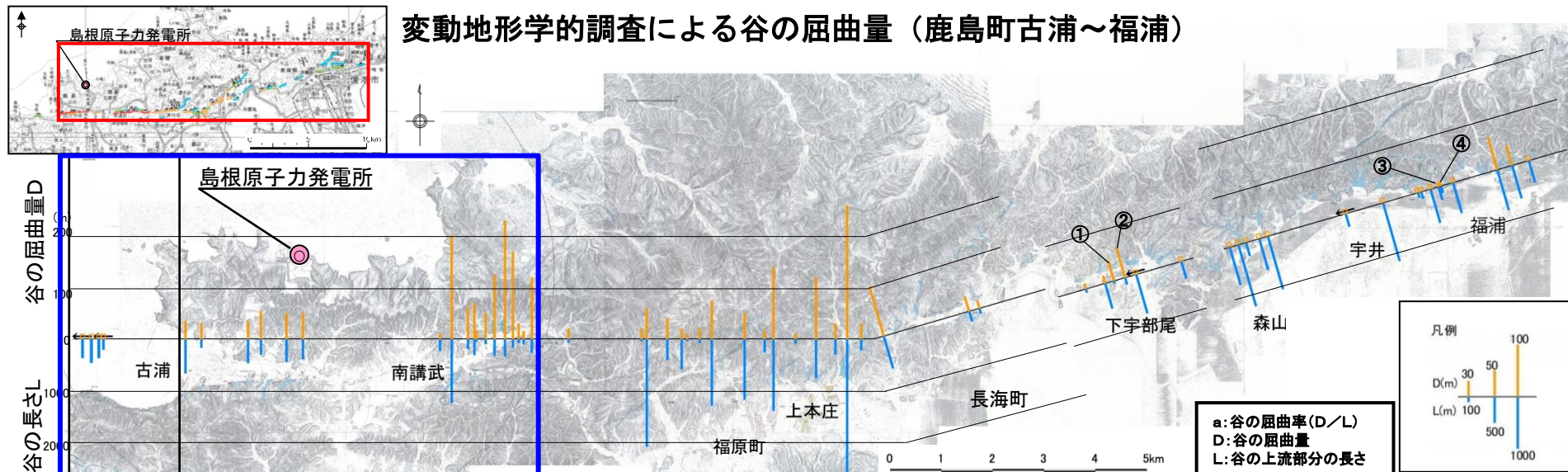
⑧西端付近の断層活動性(評価内容)

宍道断層の西端付近の断層活動性を評価するために、以下の観点から、各地点の調査結果を比較・検討した。

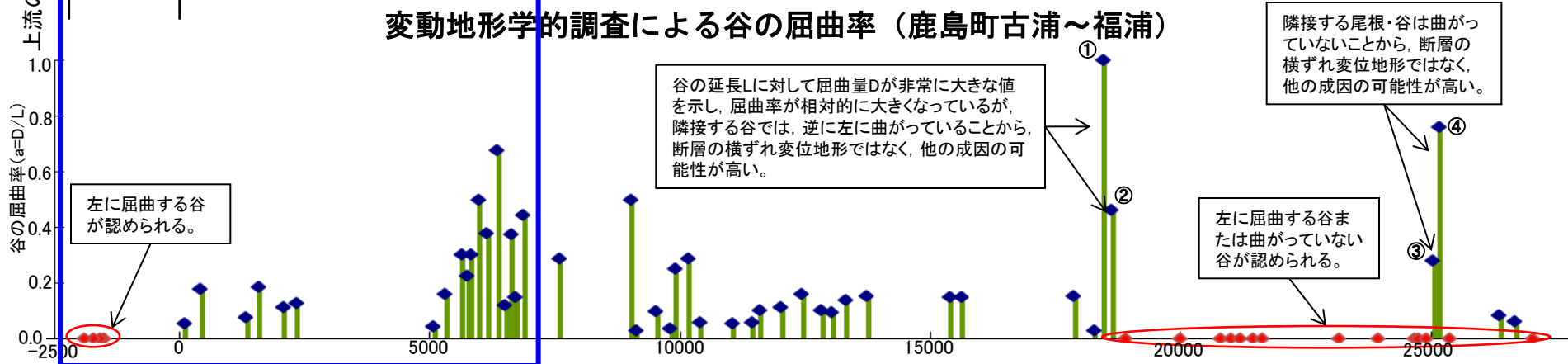
- ・変動地形学的調査による谷の屈曲量・屈曲率
- ・地層の高度差(断層による鉛直変位量)
- ・断層の性状

⑧西端付近の断層活動性(谷の屈曲量・屈曲率の比較)

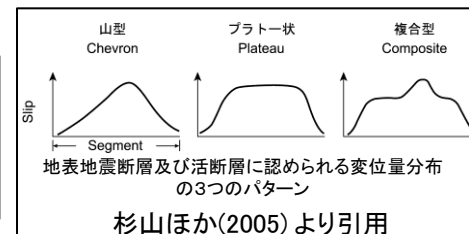
変動地形学的調査による谷の屈曲量 (鹿島町古浦～福浦)



変動地形学的調査による谷の屈曲率 (鹿島町古浦～福浦)



・谷の屈曲量・屈曲率について、西端付近は南講武付近と比較して、次第に小さくなる傾向が認められ、杉山ほか(2005)で示された横ずれ断層の変位量分布のパターン(山型・複合型)と整合的であると考えられる。
・なお、男島付近では、主要部が尾根・谷の右屈曲を示すのに対して、左屈曲が認められる。更に女島では、変位地形・リニアメントは認められない。



⑧西端付近の断層活動性(鉛直変位量の比較)



地層の年代毎の鉛直変位量の比較

	廻谷	佐陀宮内仲田	南講武
鉛直変位量	約0 [*] ~約0.4m (約7千~1万年前の地層)	約1.3m (約1.2万年前の地層)	約1.3m (約1.1万年前の地層)
	約0.8 [*] ~約1.3m (約2万年前の地層)	—	約1.6m (約2万年前の地層)
	約1.0 [*] ~約1.5m (約2.5万年前の地層)	—	—

※地表面の傾斜(約0.5m北側低下)を考慮した場合

・地層の高度差を断層による鉛直変位量として検討した結果、廻谷の鉛直変位量は、東側(佐陀宮内仲田及び南講武)に比べて小さい。

⑧西端付近の断層活動性(断層の性状比較)



断層の性状の比較

地点 検討項目	女島 (ボーリング調査)	廻谷 (ボーリング調査)	長廻池西方 (断層露頭)	佐陀本郷 (ボーリング調査, トレンチ調査)	南講武～尾坂間 の平野部 (ボーリング調査)	南講武 (ボーリング調査, トレンチ調査)	七田南方 の沢 (断層露頭)
せん断面の 性状	— (破碎部は確認されたが、宍道断層の延長部に対応する断層は認められない。)	断層部に明瞭なせん断面は認められず、断層粘土を伴わない。	断層部に明瞭なせん断面が認められる。	礫岩と安山岩質火砕岩との間に、幅30cm程度の断層粘土と連続性の良いせん断面が認められる。	断層部は粘土化し、明瞭なせん断面が認められる。	新第三系に接する幅10cm程度の断層粘土と、連続性の良いせん断面が認められる。	幅5cm程度の断層粘土を切る直線的なせん断面が認められる。
基盤岩の 性状	—	断層上盤側の古浦層の泥岩は、顕著な破碎を被っていない。	断層を挟んで成相寺層の流紋岩及び泥岩は、断層粘土を伴うが、顕著な破碎は被っていない。	断層を挟んで古浦層の安山岩質火砕岩は角礫化し、断層粘土を伴うが、顕著な破碎は被っていない。	断層を挟んで成相寺層の泥岩・流紋岩質火砕岩は顕著な破碎を被っている。	断層を挟んで、古浦層の安山岩質火砕岩及び成相寺層の泥岩・流紋岩質凝灰岩が顕著な破碎を被っている。	古浦層と成相寺層が断層で接しており、断層面沿いでは成相寺層の泥岩の破碎が著しい。

- ・南講武(宍道断層の主要部)では、連続性の良いせん断面が認められ、基盤岩は断層による顕著な破碎を被っている。
- ・佐陀本郷、長廻池西方、廻谷では、基盤岩は断層による顕著な破碎を被っていない。
- ・廻谷では、明瞭なせん断面は認められない(断層粘土を伴わない)。
- ・女島では、宍道断層の延長部に対応する断層は認められない。なお、女島で確認された破碎部の性状は、南講武の活断層の性状と著しく異なる(次頁以降参照)。

⑧西端付近の断層活動性(まとめ)

宍道断層の西端付近の断層活動性を評価するために、各地点の調査結果を比較・検討した結果、以下のことを確認した。

1. 谷の屈曲量・屈曲率の比較

- ・変動地形学的調査による谷の屈曲量・屈曲率を比較・検討した結果、西端付近は南講武付近と比較して、次第に小さくなる傾向が認められ、杉山ほか(2005)で示された横ずれ断層の変位量分布のパターン(山型・複合型)と整合的であると考えられる。

2. 鉛直変位量の比較

- ・地層の高度差を断層による鉛直変位量として比較・検討した結果、廻谷の鉛直変位量は、東側(佐陀宮内仲田及び南講武)に比べて小さい。

3. 断層の性状比較

- ・断層性状を比較・検討した結果、佐陀本郷、長廻池西方、廻谷では、基盤岩は断層による顕著な破碎を被っていない。また、廻谷では明瞭なせん断面は認められない。

以上のことから、断層活動性について、西端付近は宍道断層の主要部である南講武付近と比べて低下していると考えられる。また、女島では、宍道断層の延長部に対応する断層は認められない。

3. 宍道断層の評価 (3)地質調査(宍道断層の西側)

⑨西端の評価((参考)宍道断層と古浦～十六島沿岸付近の重力異常の関係について 1/2)

■宍道断層の端部評価

○ 精度や信頼性のより高い調査結果が得られている「女島」を宍道断層の西端とする

- ・古浦沖から大田沖断層の海域及び沿岸付近における音波探査の結果、後期更新世以降の断層活動を示唆する変位や変形は認められない。
- ・古浦沖から女島付近の陸海境界付近における海底面調査の結果、一部で組織地形と考えられる溝地形及び海底地形の高まりが認められるものの、東西方向へ連続する構造は認められない。さらに、女島では陸海境界付近を横断する群列ボーリング調査、急傾斜部における露頭調査等の結果、いずれの調査地点においても、宍道断層の延長部に対応する断層は認められない。
- ・古浦西方から女島付近の陸域における地表地質踏査、ピット調査等の結果、断層は認められない。
- ・上記のいずれの調査地点においても、宍道断層の延長部に対応する断層は認められないが、陸海境界付近の調査結果の不確かさを考慮し、精度や信頼性のより高い調査結果が得られている「女島」を西端とする。

■宍道断層の末端性状

○ 変動地形学的調査の結果、宍道断層の西端付近では、断層活動性が低下している

- ・変動地形学的調査(変位地形・リニアメントの有無、谷の屈曲量・屈曲率の検討)の結果、古浦以西では、南講武付近と比べて、断層活動性が低下している。

3. 宍道断層の評価 (3)地質調査(宍道断層の西側)

⑨西端の評価((参考)宍道断層と古浦～十六島沿岸付近の重力異常の関係について 2/2)

■古浦～十六島沿岸付近の重力異常(補足説明「1. (1)・古浦～十六島沿岸付近」参照)

○古浦～十六島沿岸付近の重力コンターの傾斜部は、後期更新世以降の断層活動が認められないF-①断層及びF-②断層に伴う音響基盤の落差(音響基盤の傾斜部)を反映したものと考えられる

- ・古浦～十六島沿岸付近に重力コンターの傾斜部が認められる。
- ・深部の地質・地質構造に関する音波探査の結果、F-①断層及びF-②断層が認められる。
- ・重力コンターの傾斜部は、F-①断層及びF-②断層の南側に位置するものの、音響基盤の傾斜部に対応している。
- ・音波探査の結果、F-①断層及びF-②断層は、D₂層(中新統)に変位や変形が認められるが、後期更新世以降の断層活動は認められない。
- ・以上のことから、古浦～十六島沿岸付近に認められる重力コンターの傾斜部は、後期更新世以降の断層活動が認められないF-①断層及びF-②断層に伴う音響基盤の落差(音響基盤の傾斜部)を反映したものと考えられる。

○古浦～十六島沿岸付近の重力異常は、宍道断層で認められる明瞭な重力異常へ連続しない

- ・古浦～十六島沿岸付近の重力異常は、女島より北側の海域において東北東～西南西方向へ帯状に分布し、宍道断層(中海北岸付近)で認められる明瞭な重力異常へ連続しない。



・地質調査の結果、

- ①古浦沖から大田沖断層の海域及び沿岸付近における音波探査の結果、古浦沖から女島付近の陸海境界付近における群列ボーリング調査等の結果、さらに、古浦西方から女島付近の陸域における地表地質踏査等の結果、宍道断層の延長部に対応する断層は認められないこと
- ②宍道断層の末端性状について、変動地形学的調査の結果、端部付近では断層活動性が低下していること
- ③古浦～十六島沿岸付近の重力コンターの傾斜部は、後期更新世以降の断層活動が認められないF-①断層及びF-②断層に伴う音響基盤の落差(音響基盤の傾斜部)を反映したものと考えられ、その重力異常は、宍道断層で認められる明瞭な重力異常へ連続しないこと

から、宍道断層と古浦～十六島沿岸付近の重力異常は関連しないものと評価する。

3. 宍道断層の評価

(4) 地質調査(宍道断層の東側)

3. 宍道断層の評価 (4)地質調査(宍道断層の東側) ①調査結果の概要

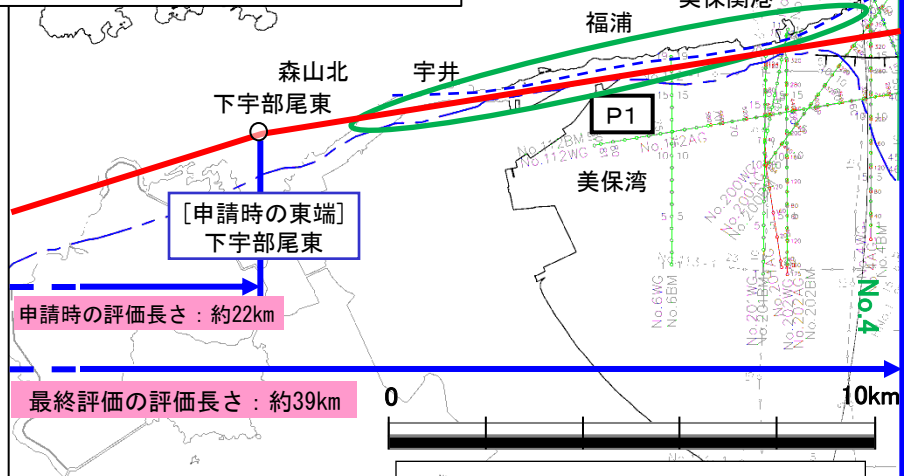
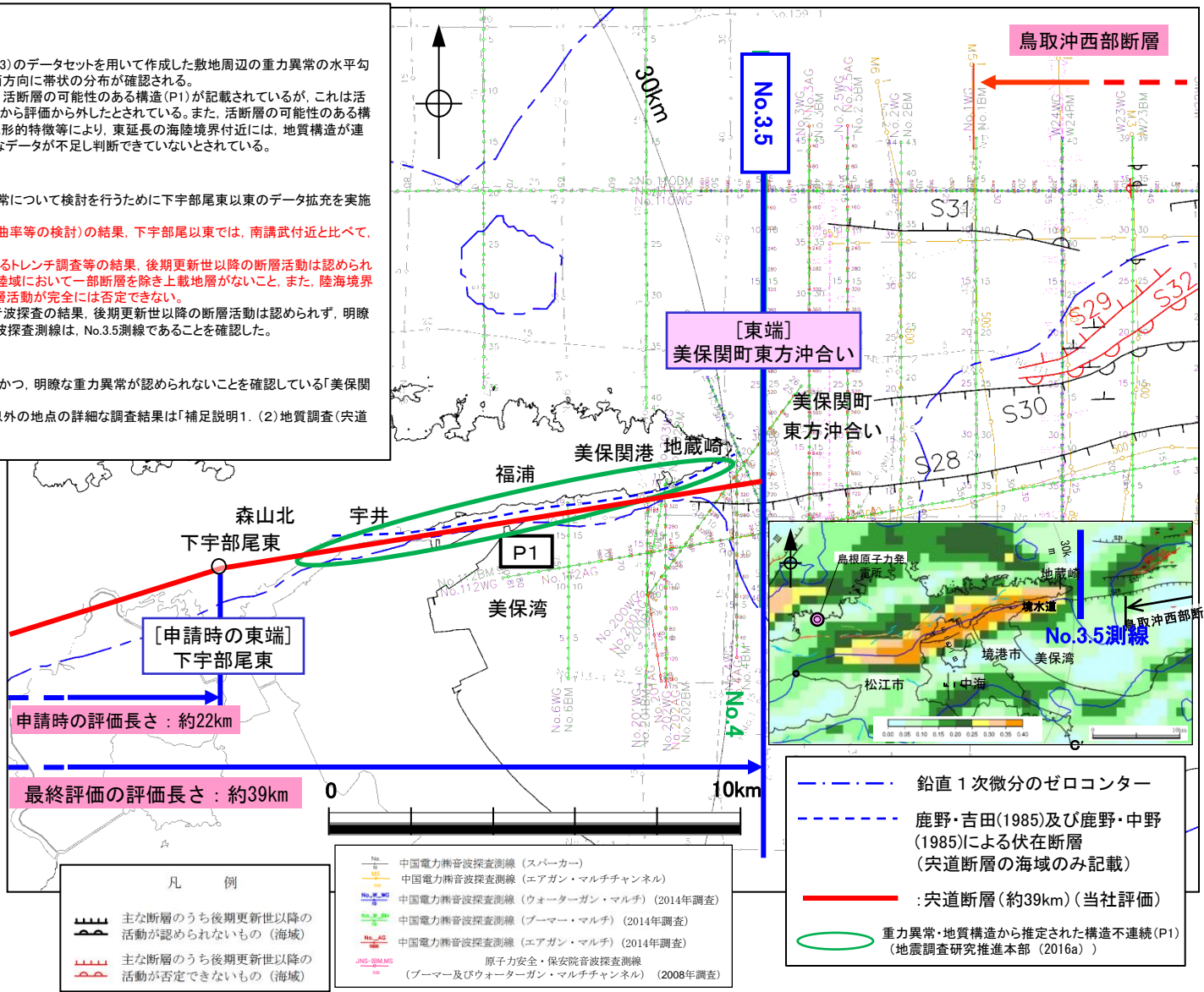
調査結果の概要(宍道断層の東端評価)

宍道断層の東端検討

文献調査
 ・「日本の重力データベース DVD版」(地質調査総合センター編, 2013)のデータセットを用いて作成した敷地周辺の重力異常の水平勾配図及び鉛直1次微分図において, 中海北岸付近に東北東-西南西方向に帯状の分布が確認される。
 ・地震調査研究推進本部(2016a)において, 宍道断層(鹿島)東部に, 活断層の可能性のある構造(P1)が記載されているが, これは活断層の可能性のあるものの, 活断層としての証拠が揃っていないことから評価から外したとされている。また, 活断層の可能性のある構造(P1)については, 重力異常による構造不連続, 鳥根半島東部の地形的特徴等により, 東延長の海陸境界付近には, 地質構造が連続する可能性があるものの, 活断層としての活動性については詳細なデータが不足し判断できていないとされている。

当社調査
 ・宍道断層の東端評価において, 端部の評価, 末端性状及び重力異常について検討を行うために下宇部尾東以東のデータ拡充を実施した。調査結果を以下に示す。
 ・変動地形学的調査(変位地形・リニアメントの有無, 谷の屈曲量・屈曲率等の検討)の結果, 下宇部尾東では, 南講武付近と比べて, 断層活動性が低下している。
 ・下宇部尾東におけるボーリング調査及びはぎ取り調査, 森山におけるトレンチ調査等の結果, 後期更新世以降の断層活動は認められないもの, 更に東方の森山から地蔵崎における地質調査の結果, 陸域において一部断層を除き上載地層がないこと, また, 陸海境界において十分な調査が実施できないことから, 後期更新世以降の断層活動が完全には否定できない。
 ・美保湾~美保関町東方沖合いにおいて, 複数の音源・測線による音波探査の結果, 後期更新世以降の断層活動は認められず, 明瞭な重力異常(重力コンターの急傾斜部)が認められなくなる位置の音波探査測線は, No.3.5測線であることを確認した。

宍道断層の東端評価
 ・音波探査により精度や信頼性のより高い調査結果が得られており, かつ, 明瞭な重力異常が認められないことを確認している「美保関町東方沖合い」を東端とする。
 (東端検討に係る詳細な調査結果は「3. (4) ②~④」に示す。それ以外の地点の詳細な調査結果は「補足説明1. (2)地質調査(宍道断層の東側)」に示す。)

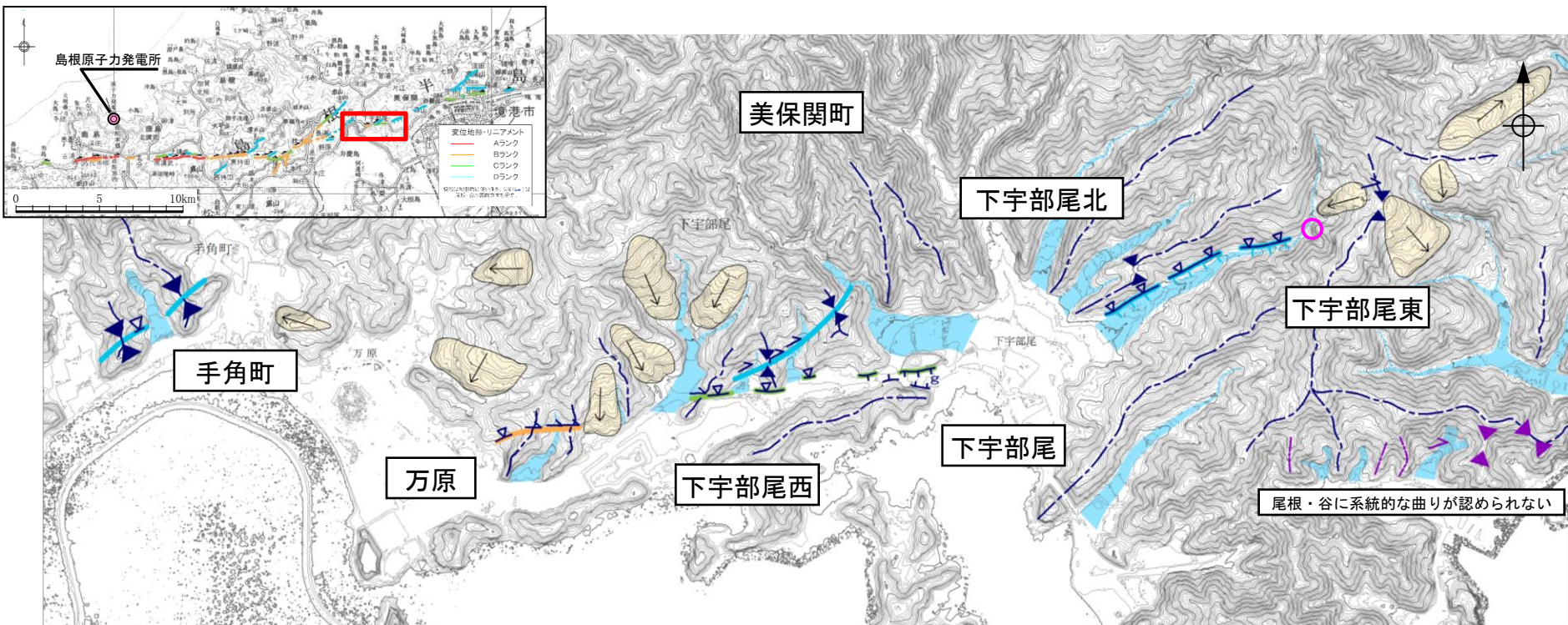


凡 例	
	主な断層のうち後期更新世以降の活動が認められないもの(海域)
	主な断層のうち後期更新世以降の活動が否定できないもの(海域)
	中国電力音波探査測線(スパーカー)
	中国電力音波探査測線(エアガン・マルチチャンネル)
	中国電力音波探査測線(ウォーターガン・マルチ)(2014年調査)
	中国電力音波探査測線(プーマー・マルチ)(2014年調査)
	中国電力音波探査測線(エアガン・マルチ)(2014年調査)
	原子力安全・保安院音波探査測線(プーマー及びウォーターガン・マルチチャンネル)(2008年調査)

- 鉛直1次微分のゼロコンター
- 鹿野・吉田(1985)及び鹿野・中野(1985)による伏在断層(宍道断層の海域のみ記載)
- : 宍道断層(約39km)(当社評価)
- 重力異常・地質構造から推定された構造不連続(P1)(地震調査研究推進本部(2016a))

音波探査により精度や信頼性のより高い調査結果が得られており, かつ, 明瞭な重力異常が認められないことを確認している「美保関町東方沖合い」を東端として評価する。

下宇部尾付近(変動地形学的調査)



※2007年中国電力取得の2mDEM(航空レーザー測量)を使用

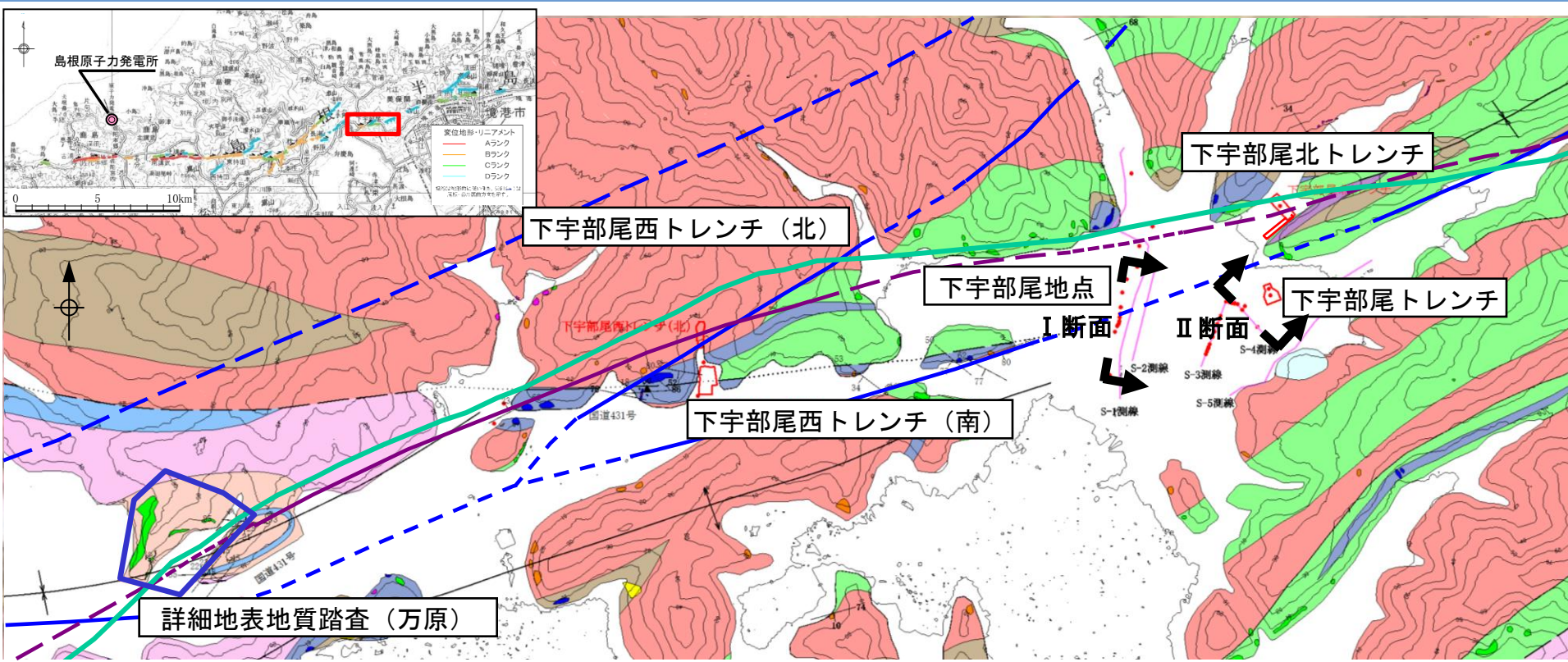
— 変位地形・リニアメント(Bランク)
— 変位地形・リニアメント(Cランク)
— 変位地形・リニアメント(Dランク)

○ 調査地点

<p>地形要素 (変位地形・リニアメントを判読したもの)</p> <ul style="list-style-type: none"> 傾斜変換線(遷緩線) 谷線(▶は屈曲の方向を示す) 尾根線(▶は屈曲の方向を示す) 鞍部 溝状地 	<p>地形要素 (変位地形・リニアメントを判読していないもの)</p> <ul style="list-style-type: none"> 谷線(▶は屈曲の方向を示す) 尾根線(▶は屈曲の方向を示す) 鞍部
	<p>地形面</p> <ul style="list-style-type: none"> 地すべり

- ・美保関町万原から下宇部尾の間では河谷や尾根の右屈曲が認められ、また道路に沿って直線的な凹地が認められる。
- ・下宇部尾東までは傾斜変換線が認められるが、その東では変位地形・リニアメントは認められない。

3. 央道断層の評価 (4)地質調査(央道断層の東側) ②下宇部尾付近
下宇部尾付近(調査位置及び地質図)



- 反射法地震探査測線(S波)
- トレンチ調査
- ボーリング調査
- 詳細ルートマップ

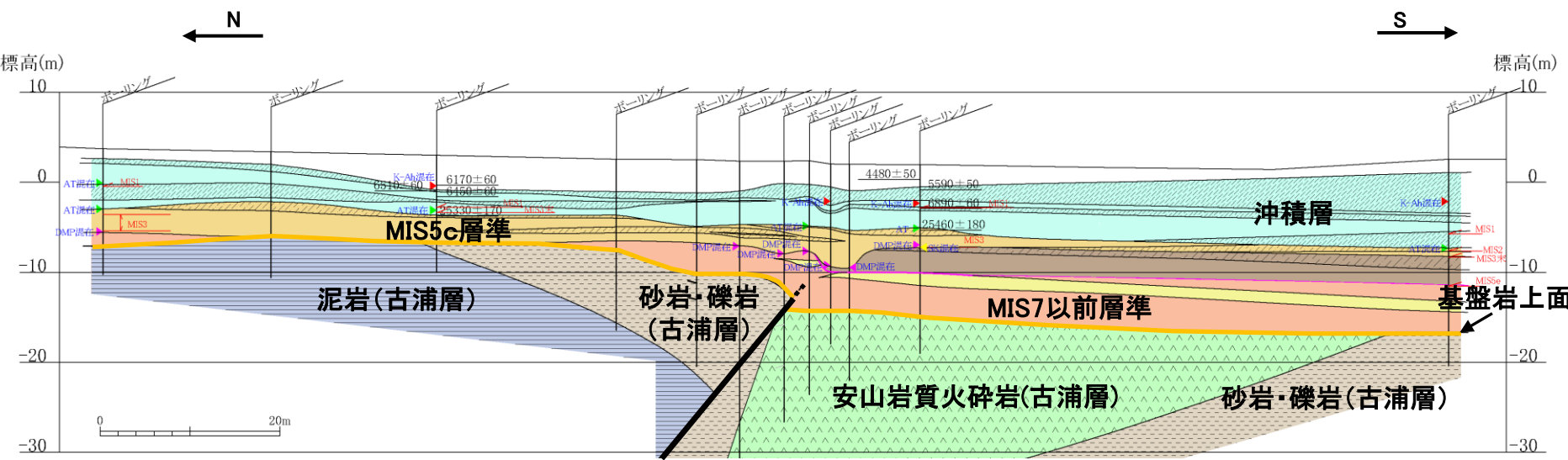
- 中田ほか(2008)による鹿島断層
- 今泉ほか編(2018)による央道(鹿島)断層
- 鹿野・吉田(1985)による断層, 推定断層, 伏在断層

- 地質境界線
- 断層(推定)
- 断層(伏在)
- ↗ 褶曲軸(背斜)
- ↘ 褶曲軸(向斜)
- ↗↘ 層理面の走向・傾斜

- 露頭岩種
- 貫入岩(ドレライト・安山岩)
 - 泥岩
 - 砂岩
 - 安山岩質火砕岩
 - デイサイト質火砕岩
 - 流紋岩質火砕岩

- 沖積層
 - 段丘堆積物
 - 貫入岩
 - 泥岩
 - 流紋岩質火砕岩類
 - デイサイト～安山岩質火砕岩
 - 泥岩
 - 砂岩・礫岩
 - デイサイト～流紋岩質火砕岩類
 - 安山岩質火砕岩類
- 成相寺層
- 古浦層

下宇部尾地点(地質断面図(I断面))



凡例

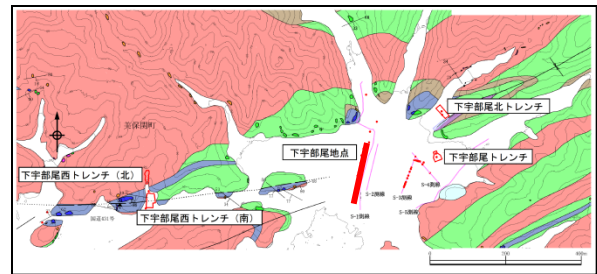
人工改変土含む	泥岩	古浦層
シルト・砂層	砂岩・礫岩	
礫層	安山岩質火砕岩	
シルト・砂層		沖積層
礫層 (DMP層在層を挟む)		
シルト・砂層		MIS3~5c
礫層		
シルト・砂層		MIS5e
礫層		
砂・礫層		MIS7以前
風化砂層		

5e層準基底
 基盤岩上面
 層理面 (ポアホールカメラの画像による)
 断層

K-Ah: 鬼界アカホヤ火山灰
 AT: 始良Tn火山灰
 SK: 三瓶木次軽石
 DMP: 大山松江軽石

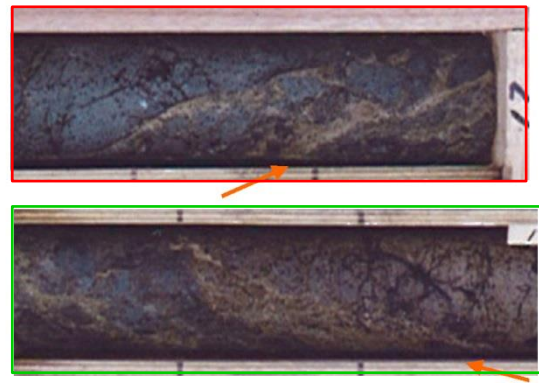
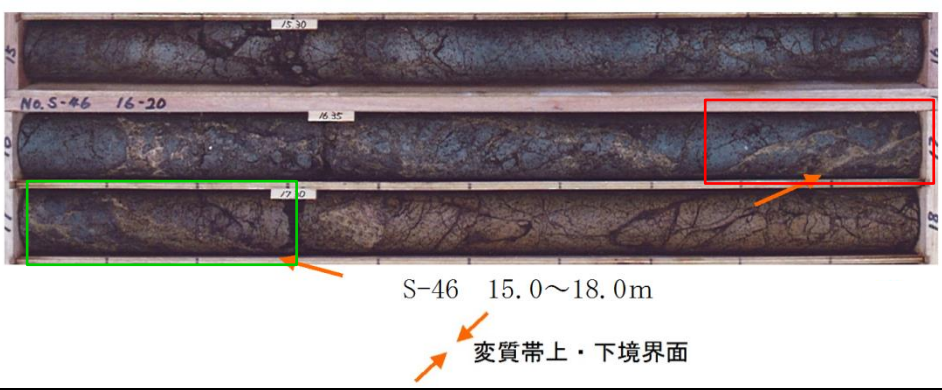
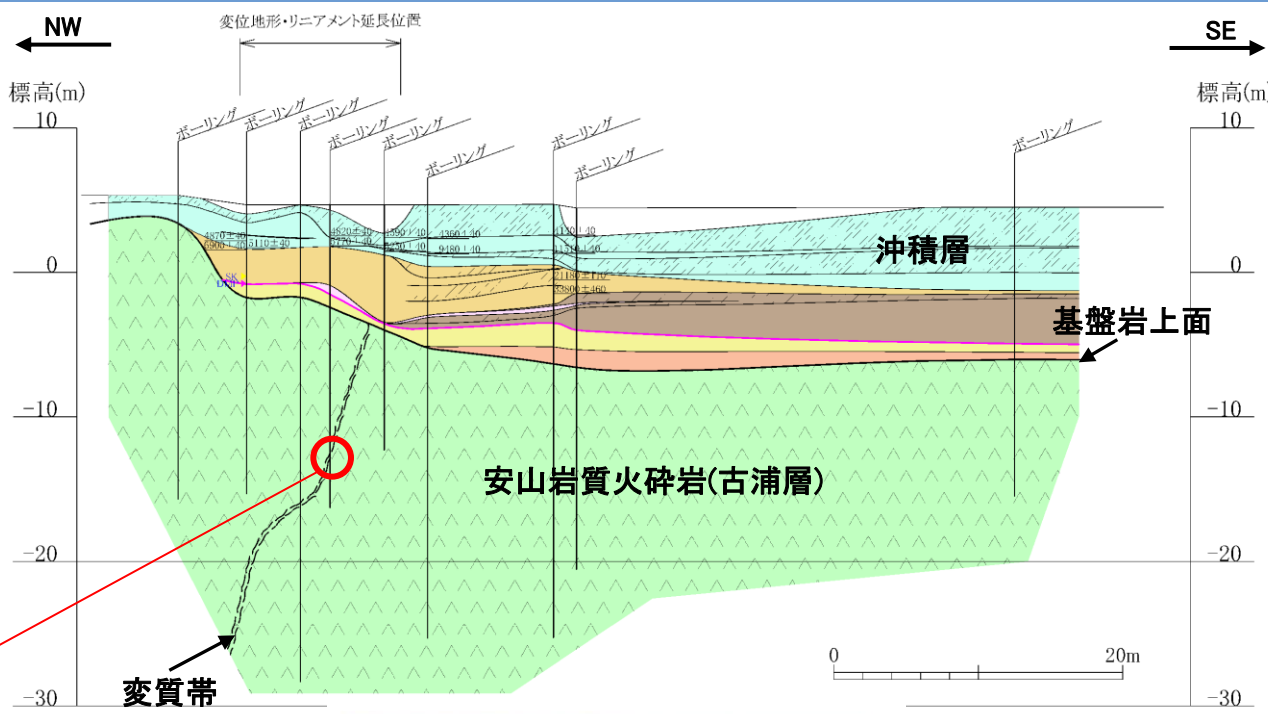
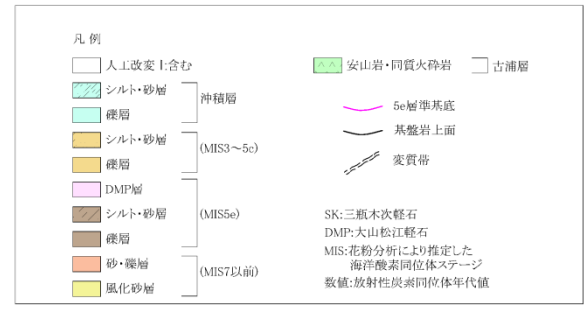
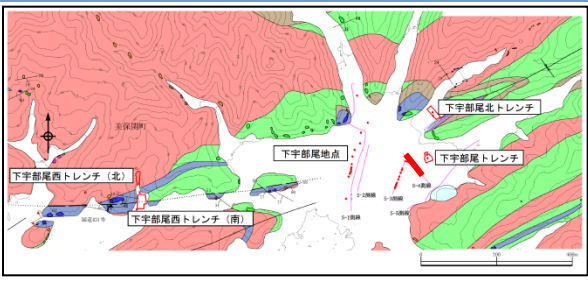
MIS: 花粉分析により推定した海洋酸素同位体ステージ
 数値: 放射性炭素同位体年代値

・ボーリング調査の結果、北側に泥岩・礫岩を主とする堆積岩が、南側に安山岩質火砕岩が分布しており、両者は断層により境される。
 ・断層を挟んで基盤の上面に高度差が認められ、断層がMIS7以前の地層に及んでいる可能性があるが、それらを覆うDMP層及びMIS5cの堆積物に変位や変形は認められない。



・しかしながら、断層の上部地層に落ち込み構造が認められることから、本地点を挟んだ両外側においてトレンチ調査(下宇部尾西トレンチ, 下宇部尾トレンチ)を実施した。

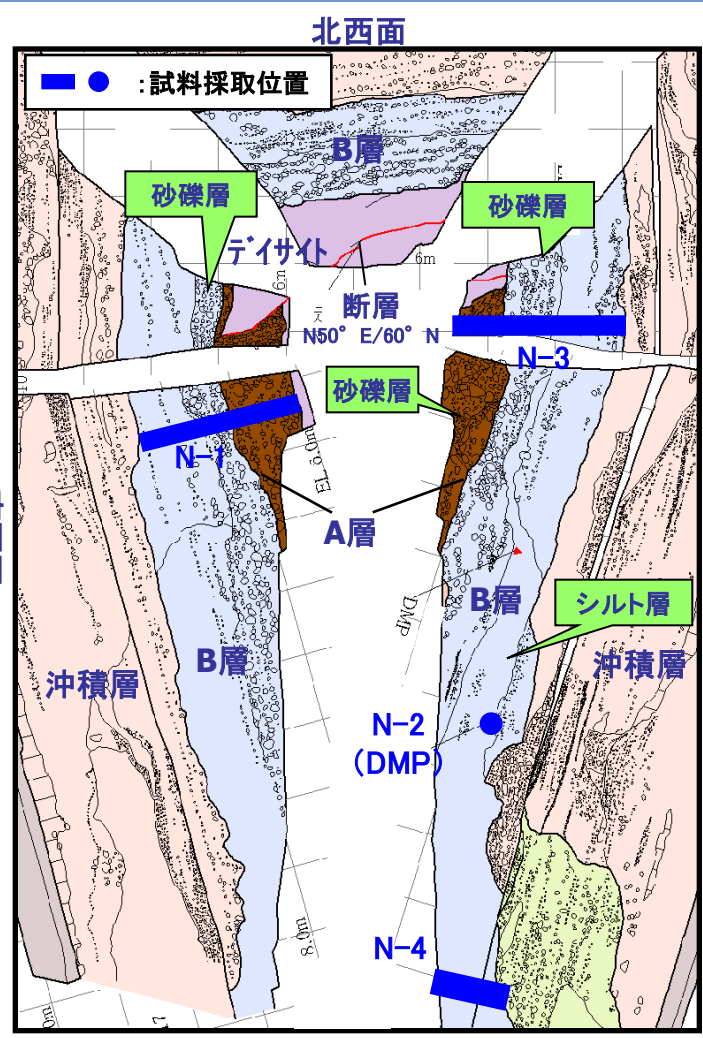
3. 央道断層の評価 (4)地質調査(央道断層の東側) ②下宇部尾付近
(参考)下宇部尾地点(地質断面図(Ⅱ断面))



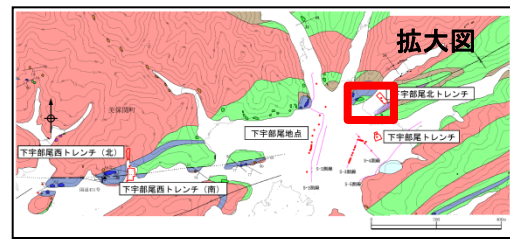
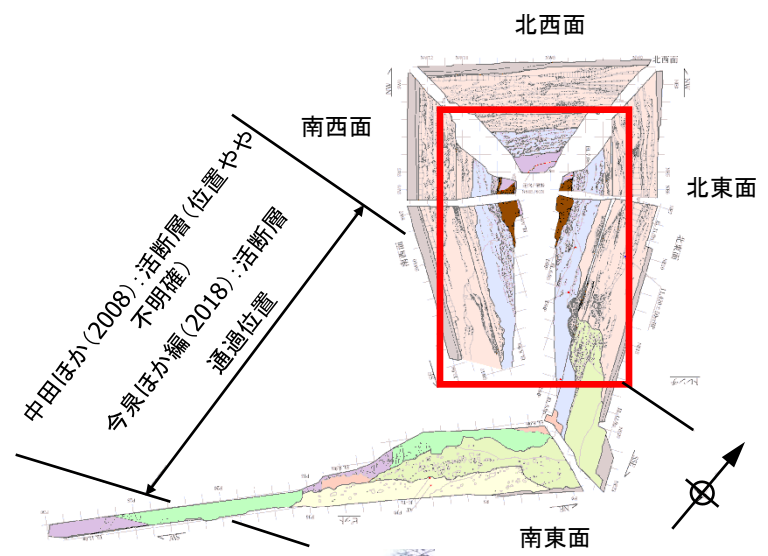
・変質帯内部は、極薄い粘土脈が網目状に発達している。
・変質帯の上端・下端面ともにやや波打った形状を示し、直線的なせん断面は認められない。

・ボーリング調査の結果、安山岩質火砕岩が広く分布し、小規模な変質帯(熱水変質作用により岩石・鉱物に変化が及んだ範囲)が認められるものの、断層は認められない。
・変位地形・リニアメント延長位置を含む下宇部尾トレンチ調査の結果、変質帯は確認されていないことから(次頁以降参照)、申請時(H25.12.25)の地質断面図(Ⅱ断面)に記載していた変質帯を削除する。

下宇部尾北トレンチ(スケッチ)

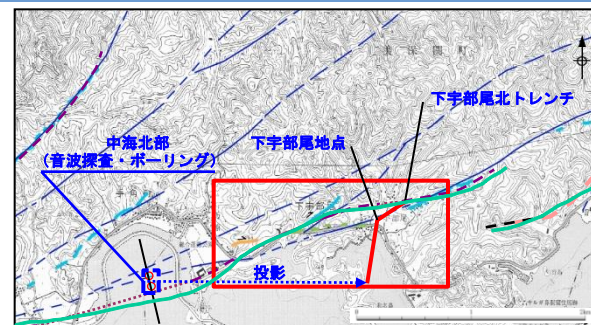
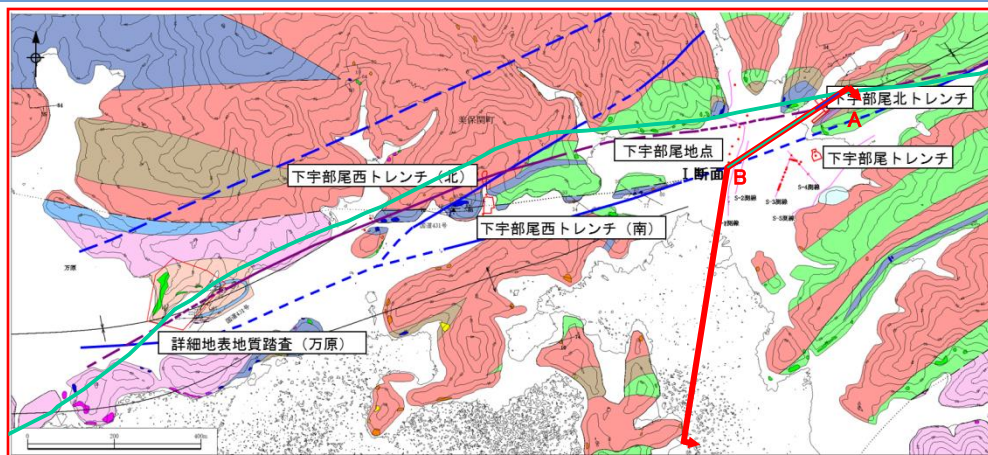


拡大図

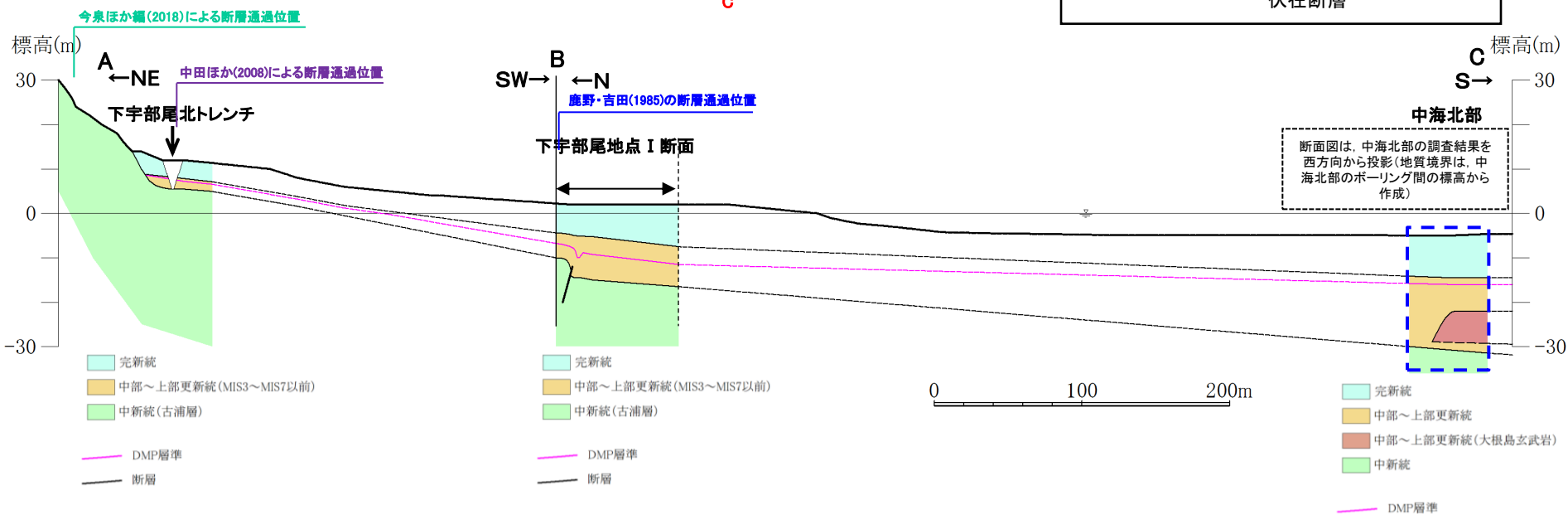


- ・幅広いトレンチ調査の結果、文献に示される範囲において断層は認められないが、北西面の基盤(デイサイト)に断層を確認。
- ・重鉱物分析、花粉分析等の結果より、A層はMIS6(約13万年前)以前、B層はMIS5e(約11.5~13万年前)の堆積層と判断。
- ・確認された断層はA層(MIS6以前の砂礫層)に変位を与えているものの、上位のB層(MIS5eのシルト層及び砂礫層)に変位や変形が認められないため考慮する活断層ではないと考えているが、A層に含まれる火山灰は再堆積したものであるとも考えられることから、後期更新世以降の断層活動を完全には否定できないと判断される。

(参考) 下宇部尾平野部(地質断面図(DMP層準の高度分布))



- 中田ほか(2008)による鹿島断層
- 今泉ほか編(2018)による央道(鹿島)断層
- 鹿野・吉田(1985)による断層, 推定断層, 伏在断層

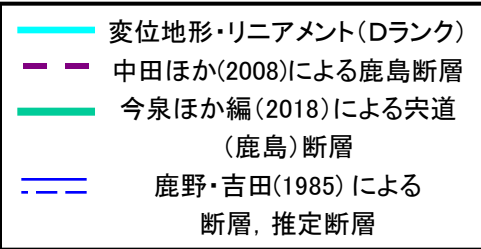
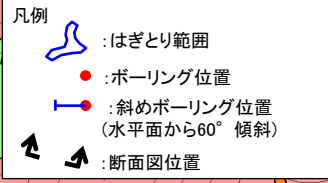
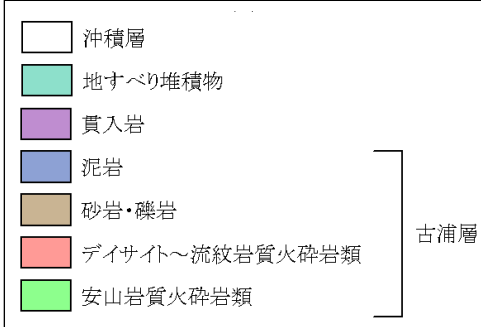
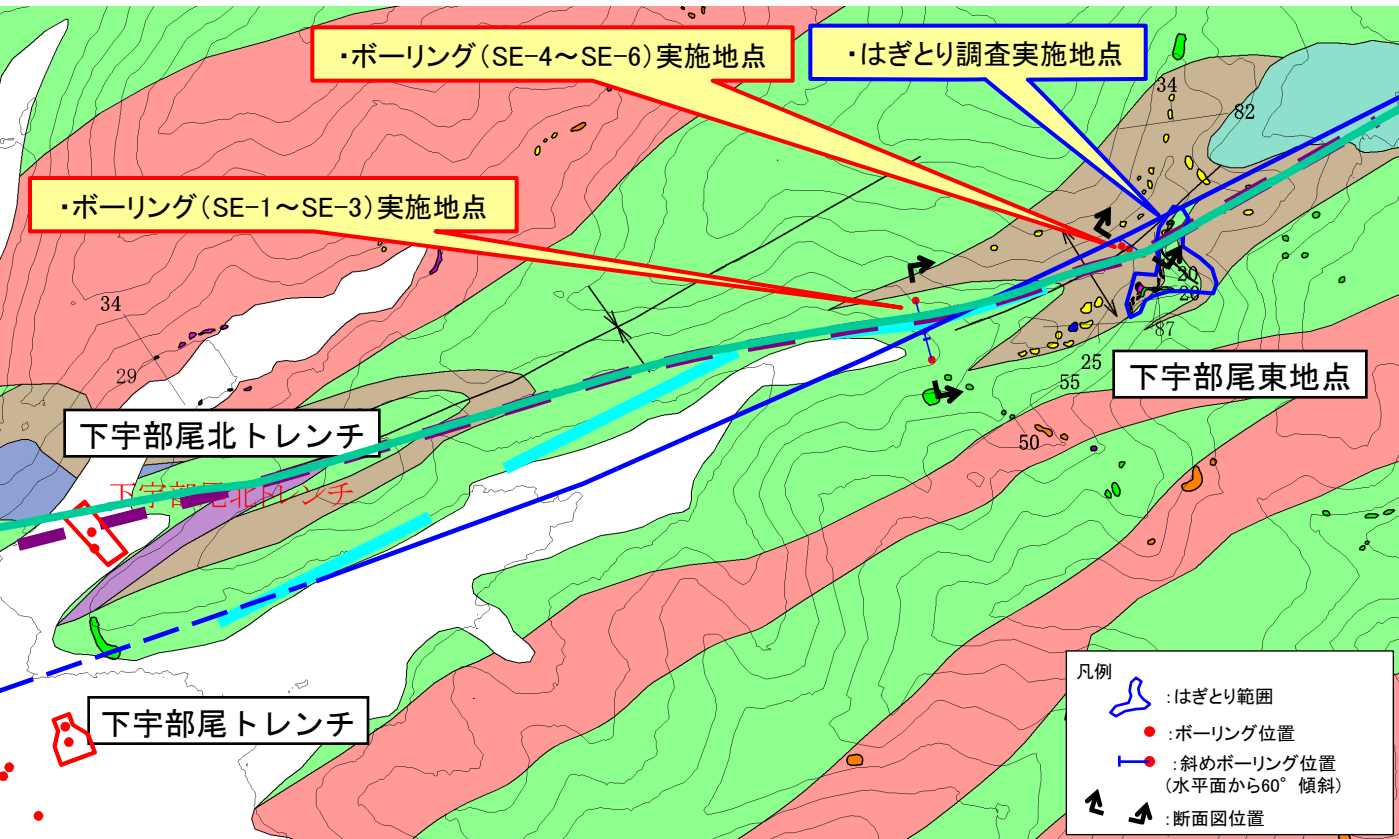
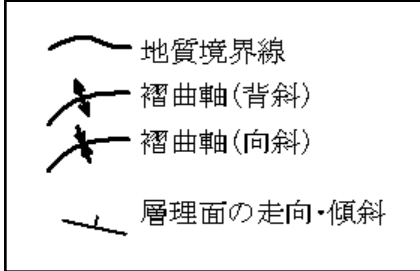


・下宇部尾北トレンチからほぼ谷筋に沿って下宇部尾平野部から中海北岸に至る地質断面図では、沖積層やDMP層準は谷の傾斜と調和的な高度分布を示しており、断層活動を示唆する変位や変形は認められない

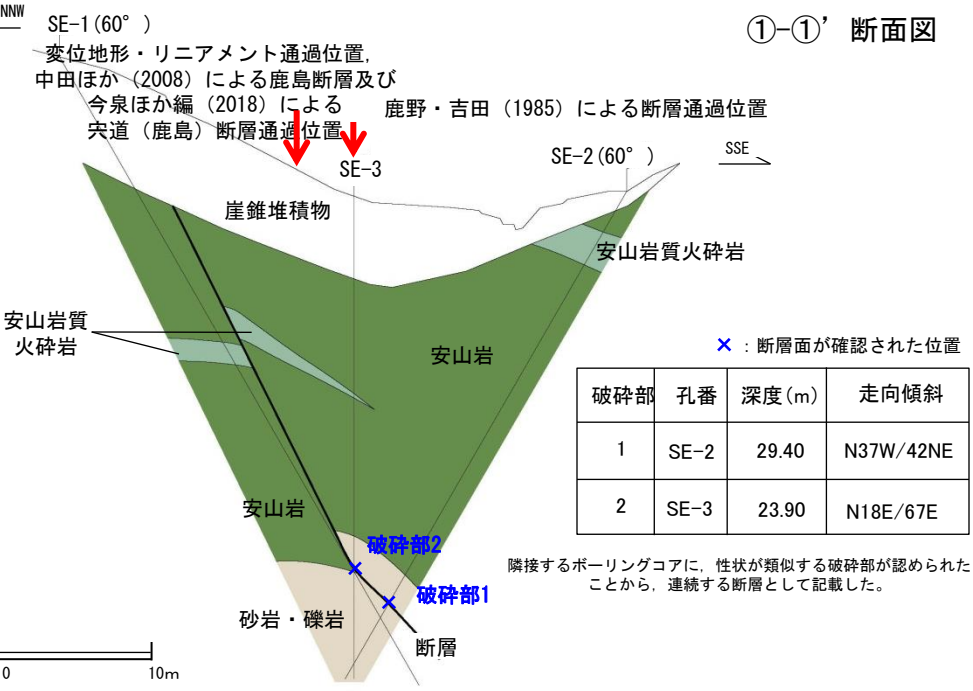
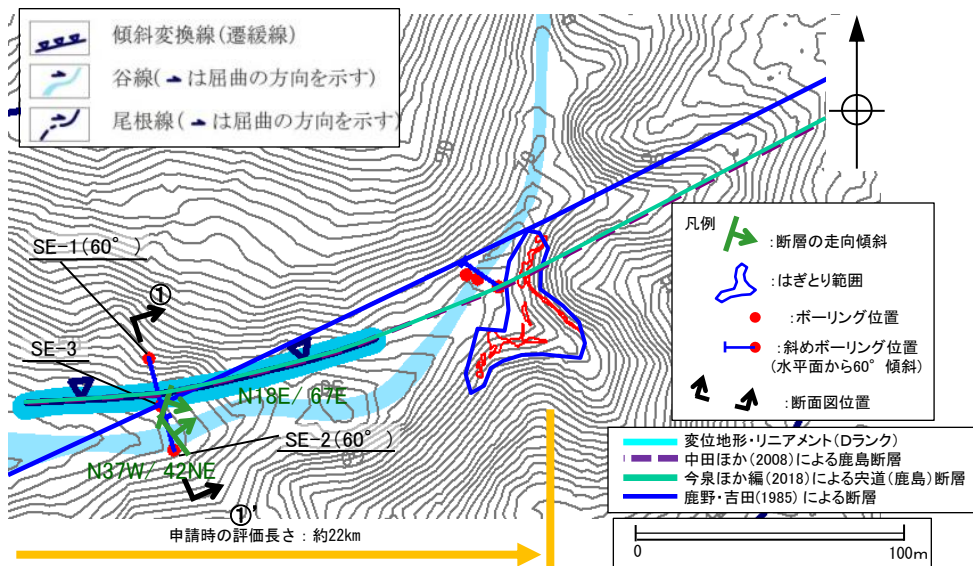
3. 宍道断層の評価 (4)地質調査(宍道断層の東側) ②下宇部尾付近
 下宇部尾東(地表地質踏査及び追加調査位置図)



変位地形・リニアメント及び文献断層の
 端部付近では、緩やかな背斜構造を示す。

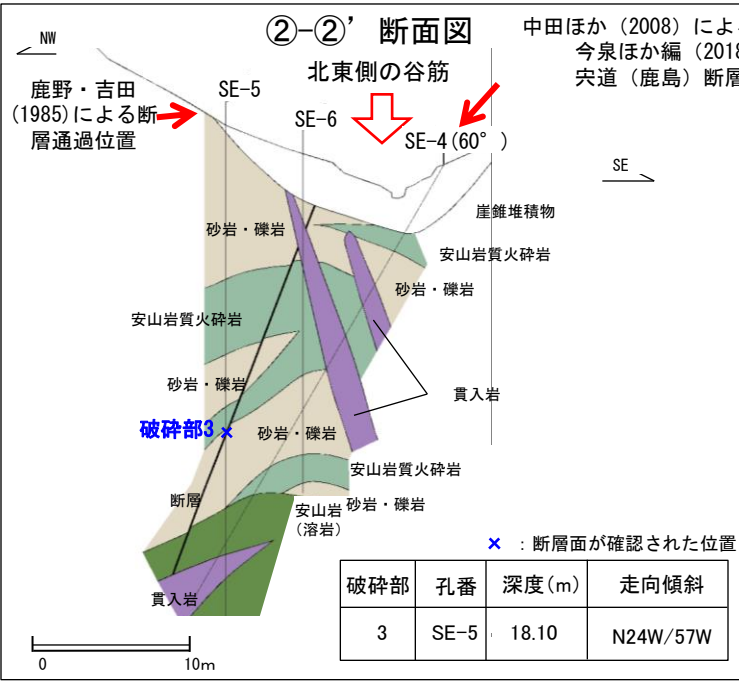
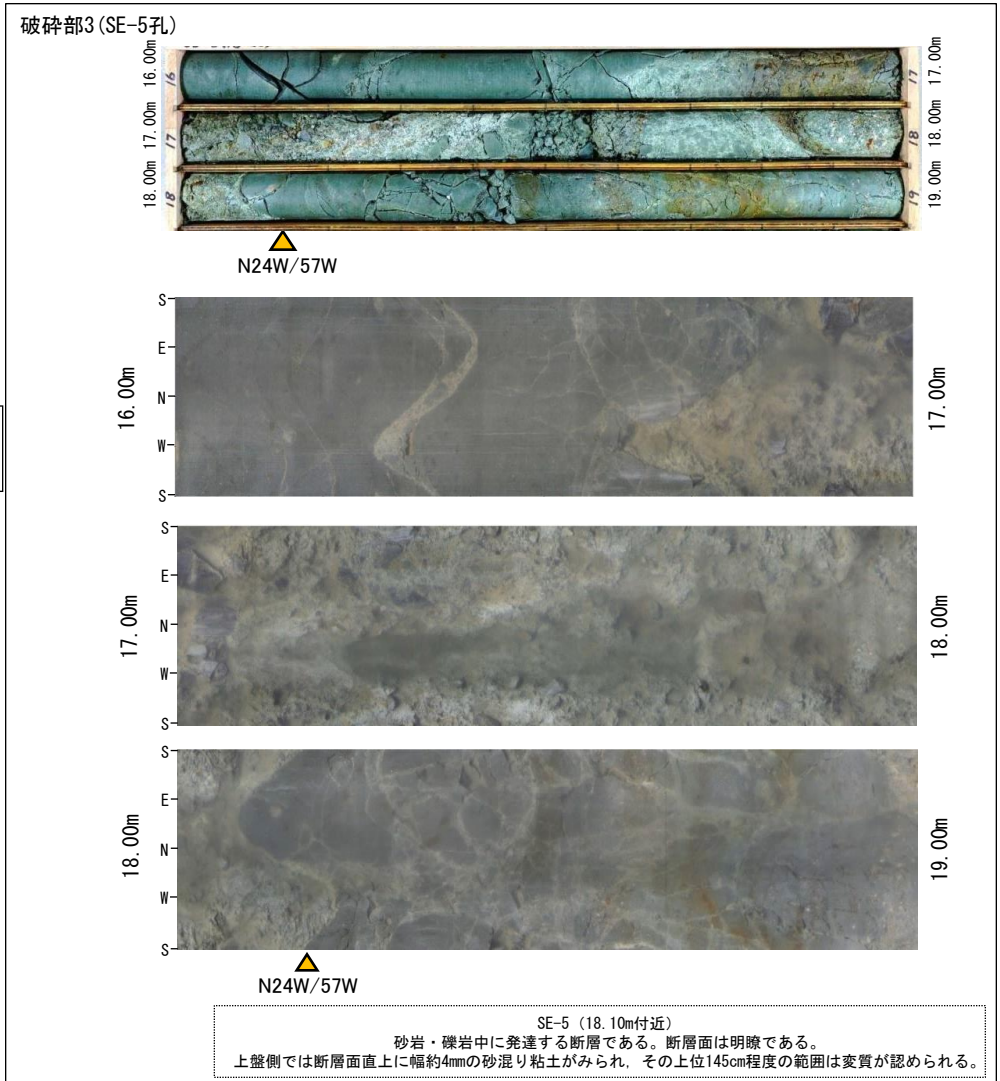
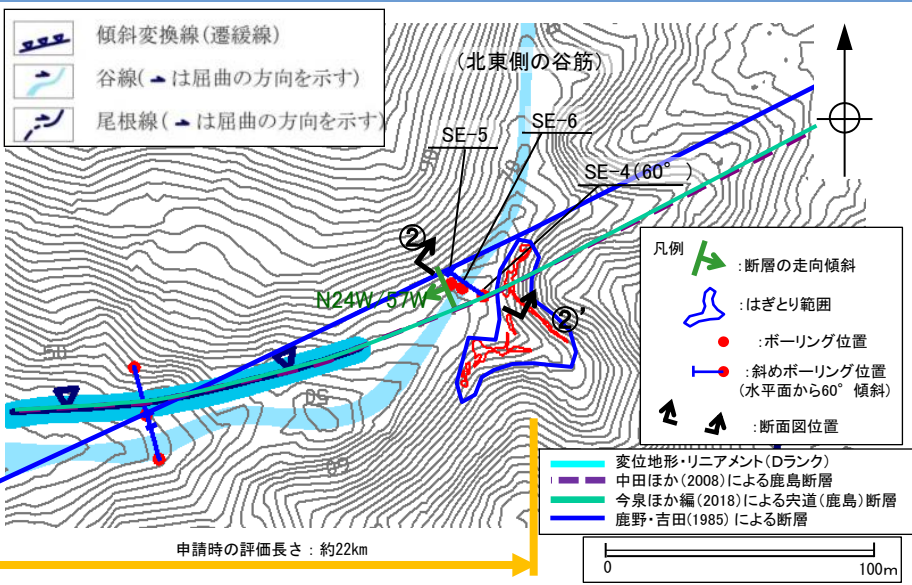


3. 宍道断層の評価 (4)地質調査(宍道断層の東側) ②下宇部尾付近 下宇部尾東(ボーリング調査(①-①)'断面図))



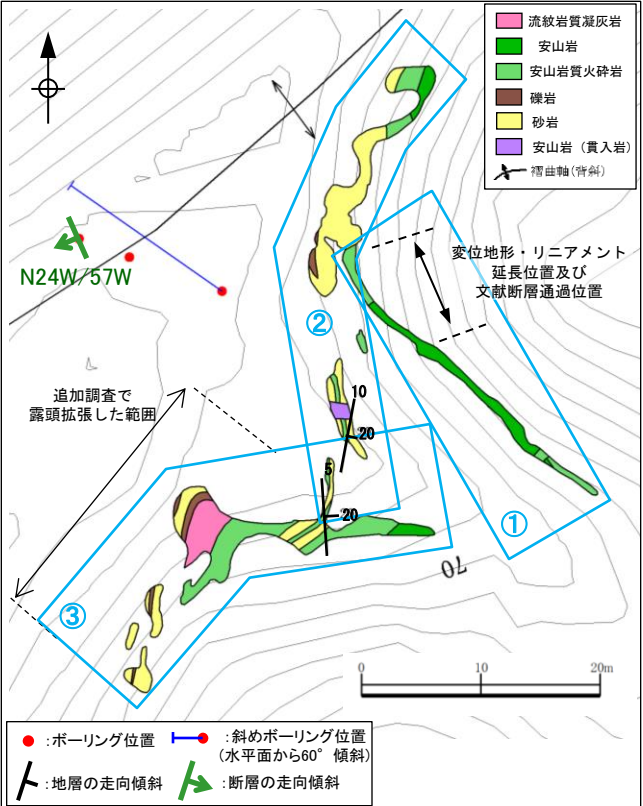
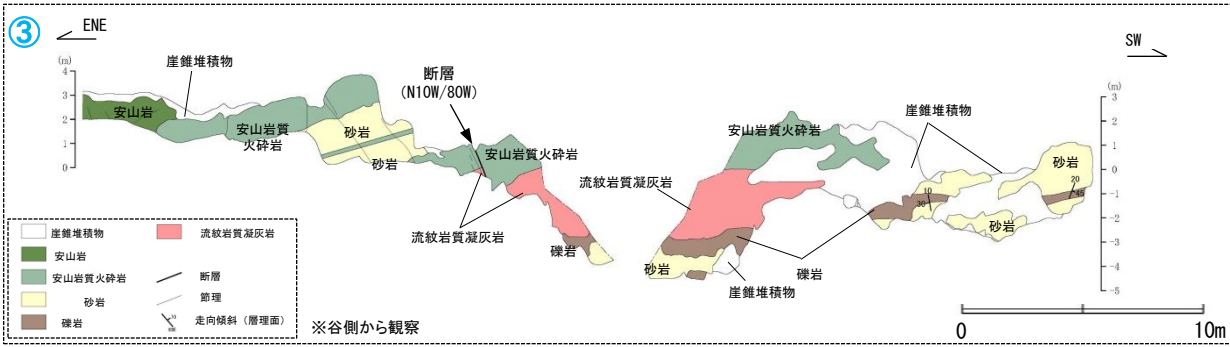
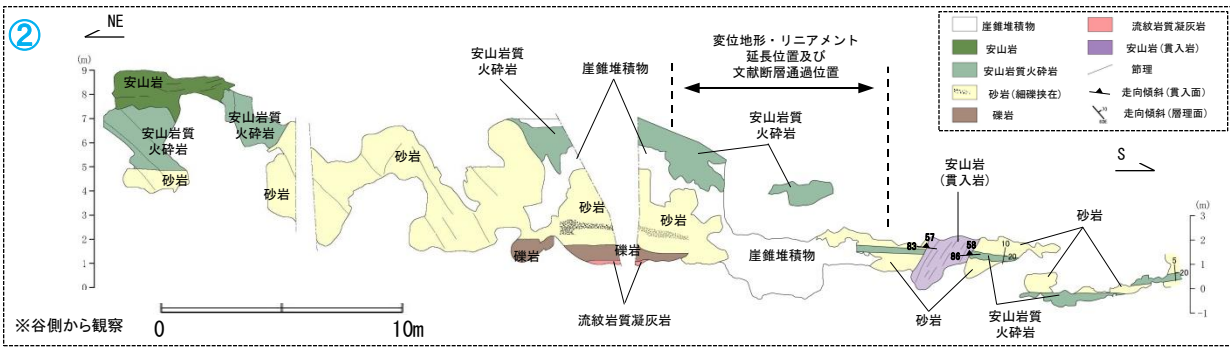
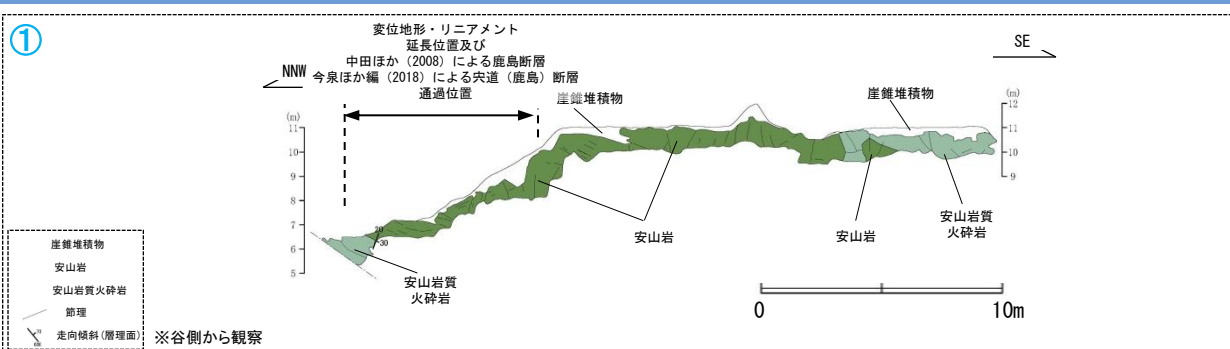
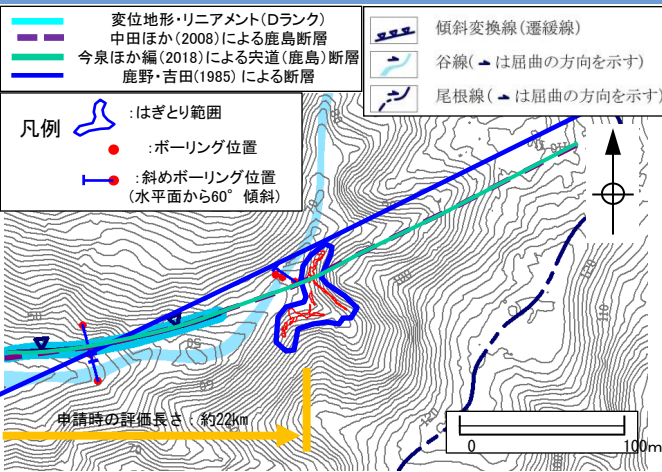
ボーリング調査の結果、ほぼ南北走向(北西-南東, 北北東-南南西走向)の断層は認められるが、変位地形・リニアメント及び文献断層に対応する断層は認められない。

3. 宍道断層の評価 (4)地質調査(宍道断層の東側) ②下宇部尾付近 下宇部尾東(ボーリング調査(②-②')断面図))



ボーリング調査(SE-4~SE-6)の結果、ほぼ南北走向(北北西-南南東走向)の断層は認められるが、北東側の谷筋に向かう断層は認められない。
また、変位地形・リニアメント及び文献断層に対応する断層も認められない。

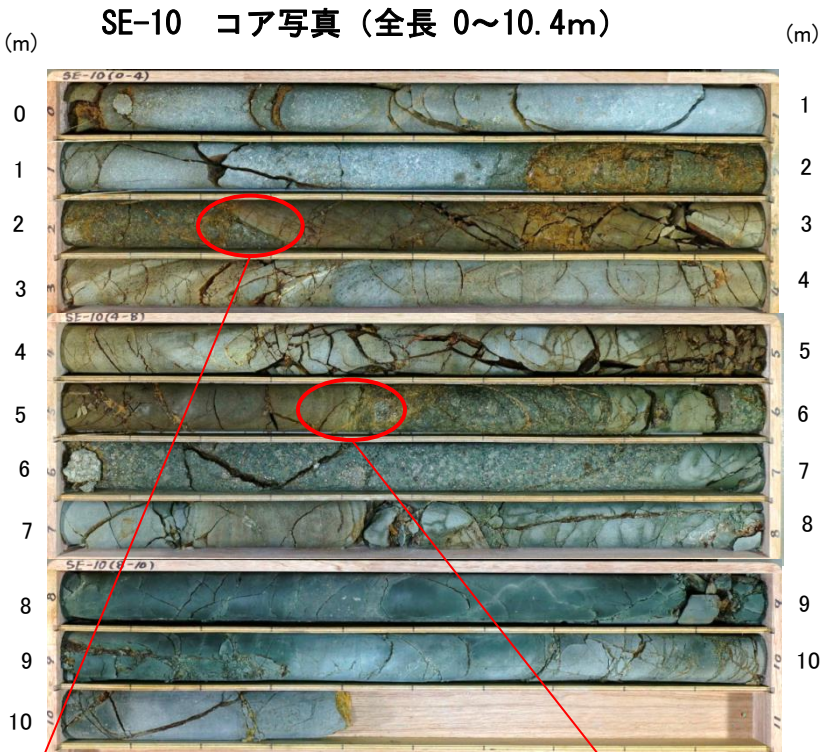
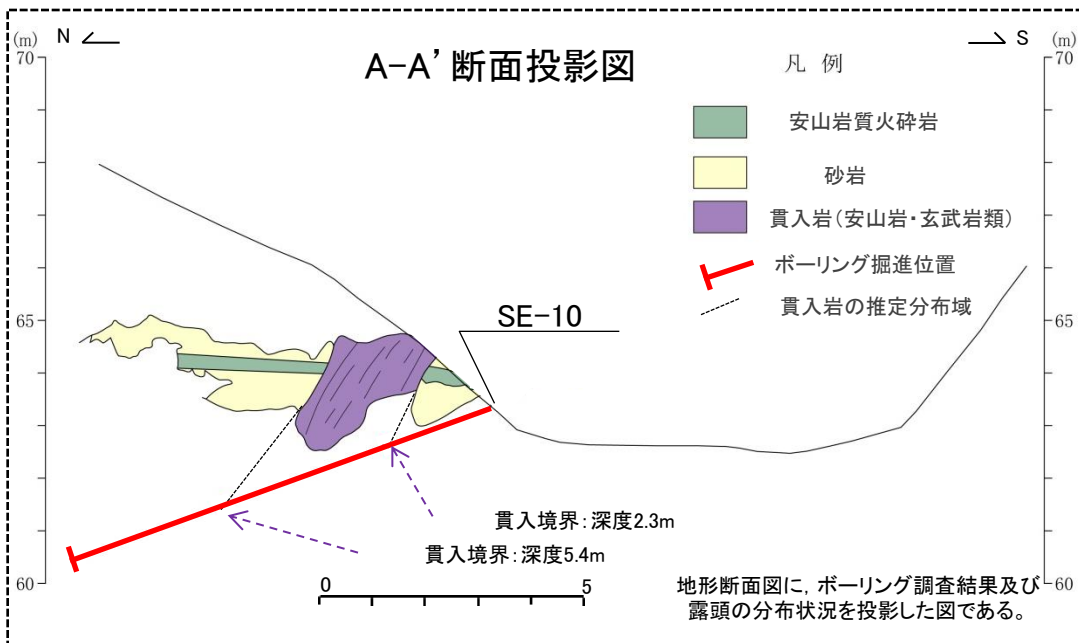
下宇部尾東(はぎ取り調査(スケッチ))



・既往調査範囲を拡張した、約70mの幅広いはぎ取り調査の結果、地質の連続性を確認し、変位地形・リニアメントの延長位置及び文献断層の通過位置付近において、断層は認められない。

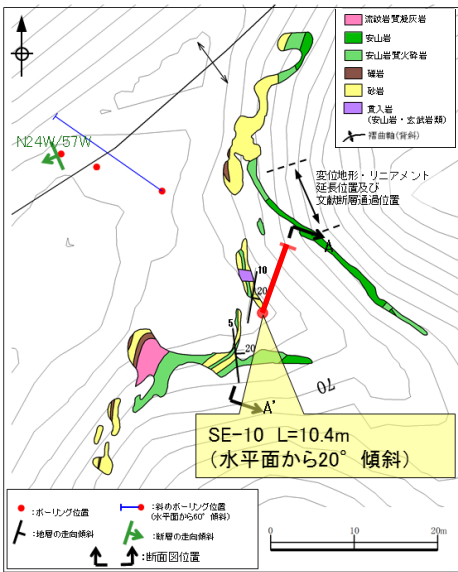
・なお、変位地形・リニアメント延長位置及び文献断層通過位置付近には貫入岩が分布するものの、接触変成作用の影響は認められない。

3. 央道断層の評価 (4)地質調査(央道断層の東側) ②下宇部尾付近 下宇部尾東(ボーリング調査(コア写真))



深度2.3m付近の貫入境界

深度5.4m付近の貫入境界



・ボーリング調査の結果、深度2.3m付近と5.4m付近において、貫入岩と堆積岩の貫入境界を確認した。
 ・貫入岩には、貫入境界面と同方向の割れ目が発達するが、せん断面は認められない。

3. 宍道断層の評価 (4)地質調査(宍道断層の東側) ②下宇部尾付近

下宇部尾付近(まとめ)

1. 変動地形学的調査(万原～下宇部尾東)

- ・美保関町万原から下宇部尾の間では河谷や尾根の右屈曲が認められ、また道路に沿って直線的な凹地が認められる。また、下宇部尾東までは傾斜変換線が認められる。

2. 地表地質踏査(万原)

- ・詳細地表地質踏査の結果、文献や変位地形・リニアメントの通過位置付近にはほぼ全面にわたって安山岩が分布しており、変位地形・リニアメントに対応する断層は認められない。(補足説明1.(2)万原参照)

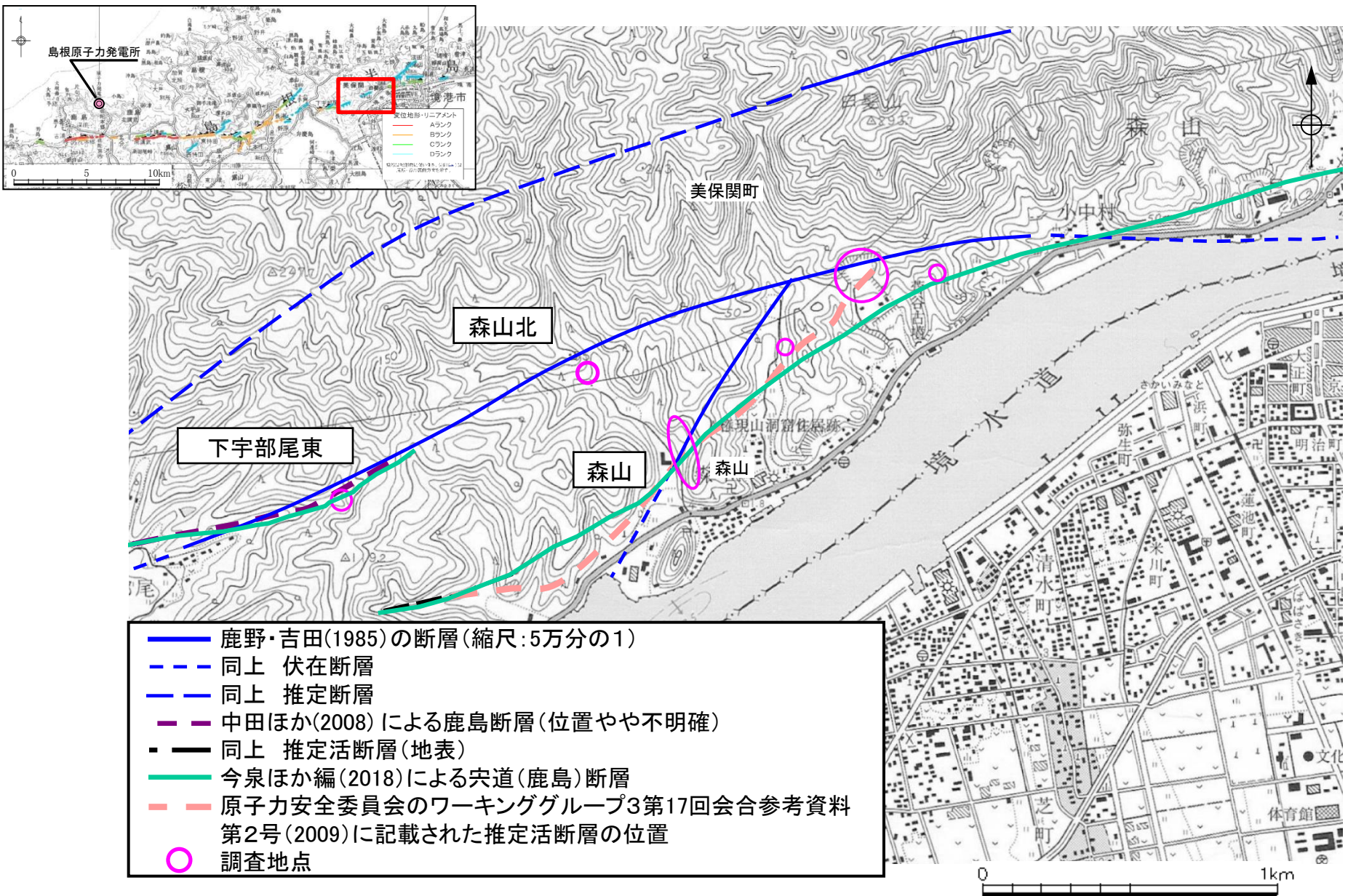
3. ボーリング調査, トレンチ調査(下宇部尾)

- ・下宇部尾におけるボーリング調査の結果、断層が認められ、MIS7以前の地層に及んでいる可能性があるが、それらを覆うDMP層及びMIS5cの堆積物に変位や変形は認められない。
- ・下宇部尾西トレンチ(北)、(南)及び下宇部尾トレンチの結果、断層は認められない。
- ・下宇部尾北トレンチの結果、断層が認められる。断層はA層(MIS6以前の砂礫層)に変位を与えているものの、上位のB層(MIS5eのシルト層及び砂礫層)に変位や変形が認められないため考慮する活断層ではないと考えているが、A層に含まれる火山灰は再堆積したものであるとも考えられることから、後期更新世以降の断層活動を完全には否定できないと判断される。

4. ボーリング調査, はぎ取り調査(下宇部尾東)

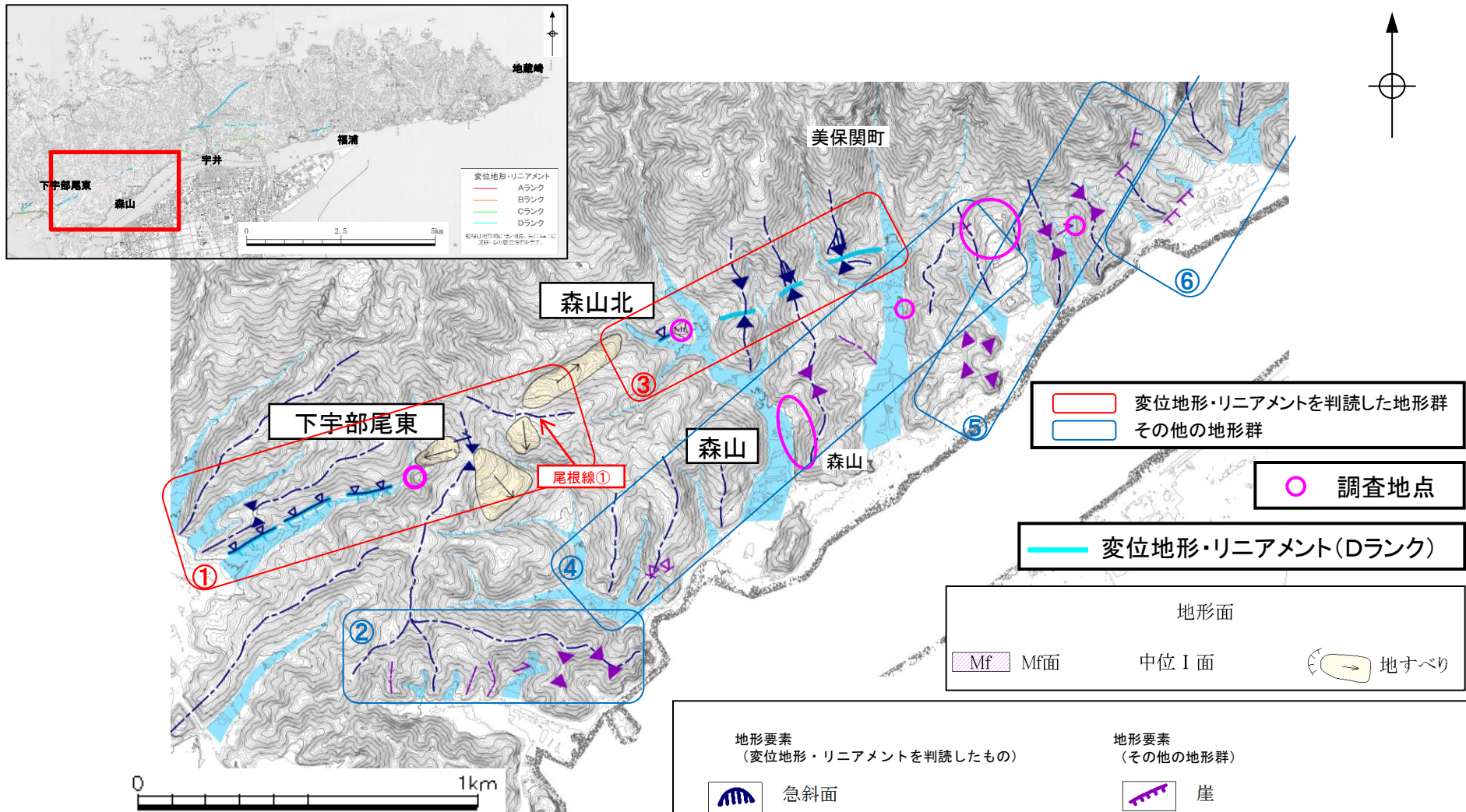
- ・ボーリング調査の結果、ほぼ南北走向の断層は認められるが、北東側の谷筋に向かう断層は認められない。また、変位地形・リニアメント及び文献断層に対応する断層も認められない。
- ・はぎ取り調査の結果、地質の連続性を確認し、変位地形・リニアメントの延長位置及び文献断層の通過位置付近において、断層は認められない。
- ・はぎ取り調査で確認された貫入岩を対象にボーリング調査を行った結果、深度2.3m付近と5.4m付近において、貫入岩と堆積岩の貫入境界を確認した。
- ・貫入岩には、貫入境界面と同方向の割れ目が発達するが、せん断面は認められない。
- ・以上のことから、下宇部尾東において、変位地形・リニアメント及び文献断層に対応する断層は認められない。

森山付近(文献調査)



- 鹿野・吉田(1985)の断層(縮尺:5万分の1)
- - - 同上 伏在断層
- - - 同上 推定断層
- - - 中田ほか(2008)による鹿島断層(位置やや不明確)
- - - 同上 推定活断層(地表)
- 今泉ほか編(2018)による宍道(鹿島)断層
- - - 原子力安全委員会のワーキンググループ3第17回会合参考資料第2号(2009)に記載された推定活断層の位置
- 調査地点

森山付近(変動地形学的調査)



変位地形・リニアメントを判読した地形群
その他の地形群

調査地点

変位地形・リニアメント(Dランク)

地形面
Mf Mf面 中位 I 面 地すべり

地形要素 (変位地形・リニアメントを判読したもの)		地形要素 (その他の地形群)	
	急斜面		崖
	傾斜変換線(遷緩線)		傾斜変換線(遷緩線)
	谷線(▲は屈曲の方向を示す)		谷線(▲は屈曲の方向を示す)
	尾根線(▲は屈曲の方向を示す)		尾根線(▲は屈曲の方向を示す)
	鞍部		鞍部

※2007年中国電力取得の2mDEM(航空レーザー測量)を使用

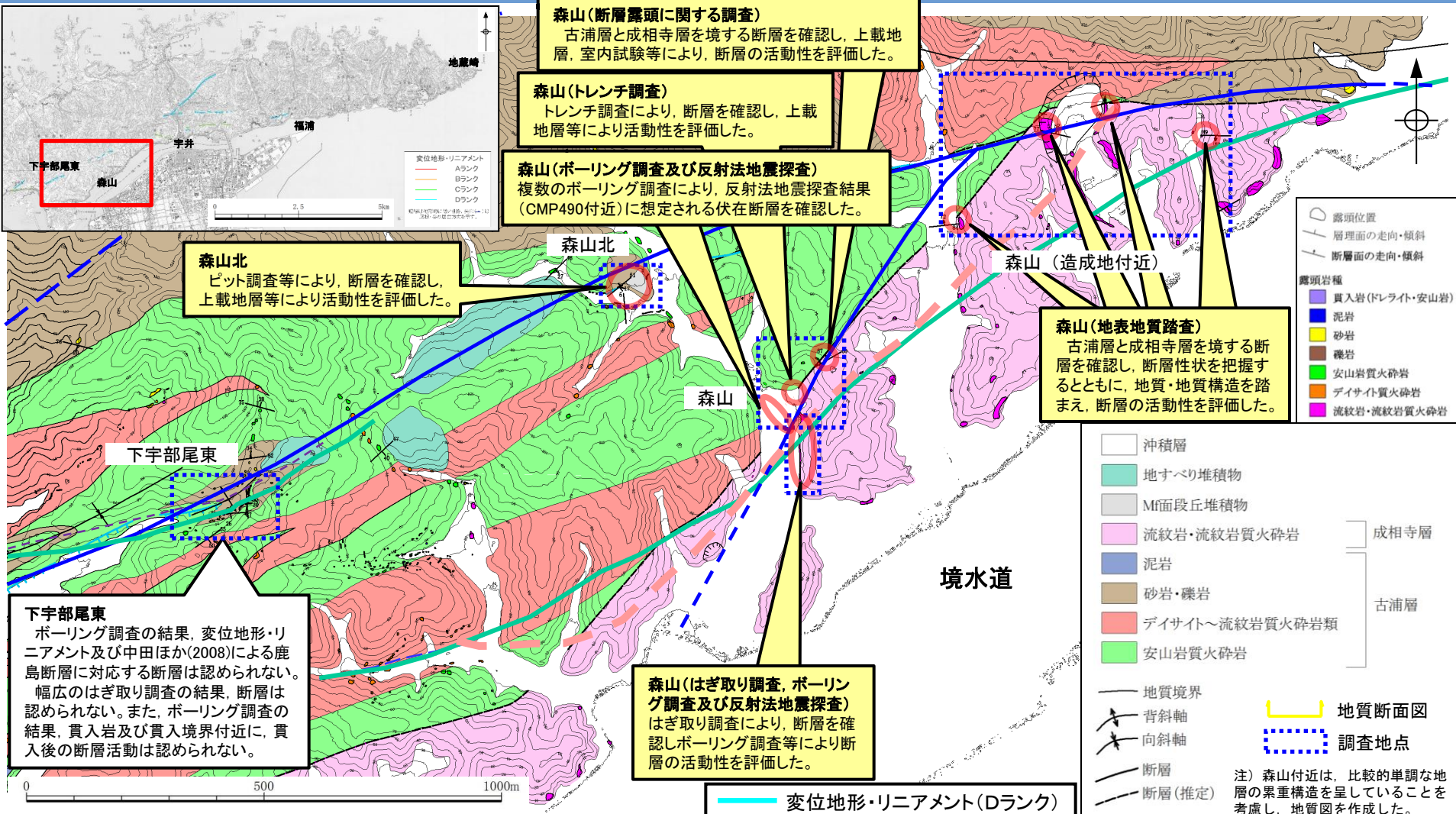
・下宇部尾東までは傾斜変換線が認められる。
・美保関町北方の森山北では鞍部が断続的に認められるが、南方の森山では尾根・谷の系統的な屈曲等は認められない。

判読内容(変位地形・リニアメント, その他の地形群)

変位地形・リニアメント及びその他の地形群一覧表(下宇部尾東・森山付近)

番号	変位地形・リニアメント及びその他の地形群の判読内容			活断層研究会編(1991) ⁽²⁰⁾ , 中田ほか(2008), 原安委WG3(2009)及び 今泉ほか編(2018)との対比
	変位地形・リニアメント のランク	地形要素	理由	
①	D(下宇部尾東)	山地高度は北側が高い。谷の北縁をつくる急斜面(傾斜変換線)。その他, 1箇所の尾根の右屈曲, 2箇所の鞍部。東延長の尾根線①に右屈曲は認められない。	下宇部尾付近のBランク及びCランクのリニアメントの東延長にあたる山地高度に差がある。 地形群(傾斜変換線)の長さは短いことからDランクとした。	・活断層研究会編(1991)の森山(確実度Ⅲ)に対応 ・中田ほか(2008)の活断層, 今泉ほか編(2018)の活断層(位置やや不明確)に対応
②	—	尾根高度に差はない。1本の谷の右屈曲, 2箇所の鞍部。しかし, 西部の4本の尾根は曲がっていない。	系統的な屈曲地形及び高度差は認められず, 地形群が同一方向に横ずれあるいは縦ずれしたと解釈できないことから変動地形の可能性はない。	—
③	D(森山北)	番号①(下宇部尾東)の変位地形・リニアメントの東延長上にあり, 山地高度は北側が高い。3箇所の明瞭な鞍部。1箇所の傾斜変換線。	山地高度不連続をなす山麓に3箇所の鞍部が連続する。 地形群の長さは短く, 西延長上の番号①(下宇部尾東)の変位地形・リニアメントでは尾根線①に屈曲がないことからDランクとした。	・活断層研究会編(1991)の森山(確実度Ⅲ)に対応
④	—	1箇所の鞍部及び尾根, 2箇所の傾斜変換線, 7本の尾根。しかし, 尾根・谷に明瞭な屈曲は認められない。1箇所で尾根高度は北側がやや高い。	系統的な屈曲地形及び高度差は認められず, 地形群が同一方向に横ずれあるいは縦ずれしたと解釈できないことから変動地形の可能性はない。	・中田ほか(2008)の推定活断層(地表)に対応 ・原安委WG3(2009)の推定活断層に対応 ・今泉ほか編(2018)の活断層(位置やや不明確)に対応
⑤	—	4箇所の鞍部, 1本の谷の右屈曲, 2箇所の崖。しかし, その他の尾根・谷に右屈曲は認められない。東半分の尾根高度は北側がやや高い。	系統的な屈曲地形は認められず, 地形群が同一方向に横ずれしたと解釈できない。また, 高度差も系統的ではない。地形群は連続性に乏しく, 長さは短いことから変動地形の可能性はない。	—
⑥	—	2箇所の崖, 7本の尾根, 2箇所の風隙からなり, 山地高度は北西が高い。しかし, 地形群は連続性, 鮮明さに欠ける。また, 尾根・谷に明瞭な屈曲は認められない。	系統的な屈曲地形は認められず, 地形群が同一方向に横ずれしたと解釈できない。また, 高度差も系統的ではない。地形群は連続性に乏しく, 鮮明さに欠け, 長さは短いことから変動地形の可能性はない。	—

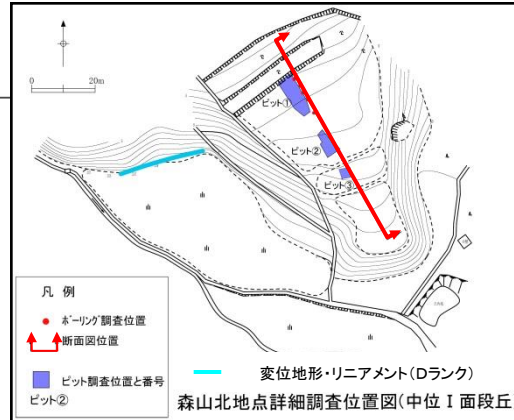
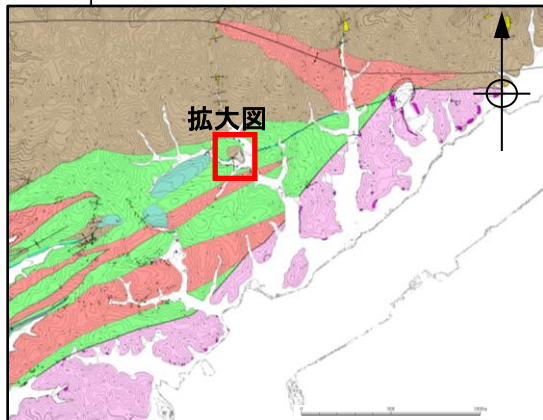
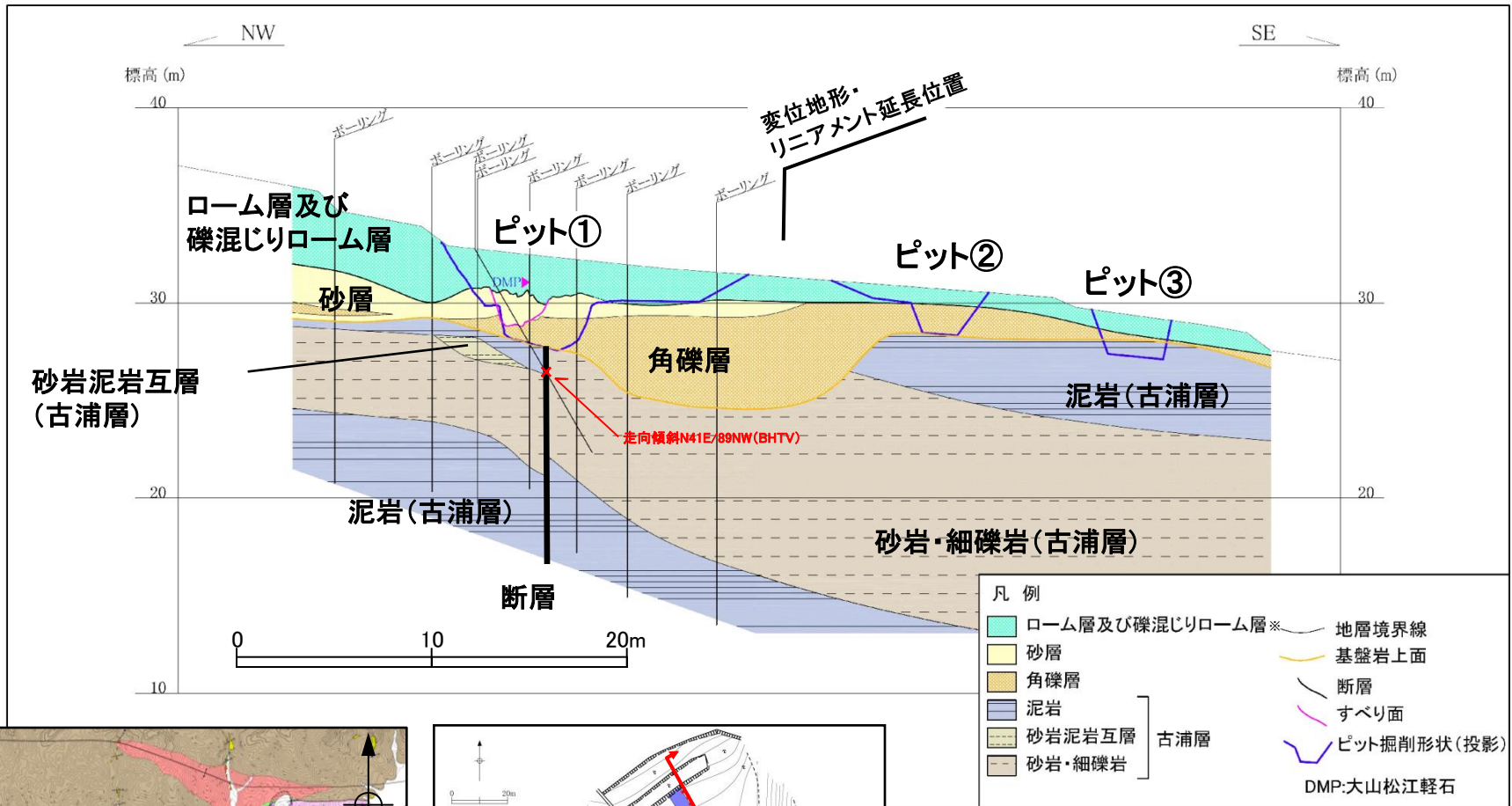
森山付近(地表地質踏査(地質図))



変位地形・リニアメント及び文献断層の通過位置付近において、はぎ取り調査、ボーリング調査、ピット調査、トレンチ調査、反射法地震探査等の詳細な調査を実施し、後期更新世以降の断層活動の有無を確認した。

- - 中田ほか(2008)による鹿島断層(位置やや不明確)
- - 同上推定活断層(地表)
- 今泉ほか編(2018)による央道(鹿島)断層
- 原子力安全委員会のワーキンググループ3第17回会合参考資料第2号(2009)に記載された推定活断層の位置
- 鹿野・吉田(1985)による断層、推定断層、伏在断層

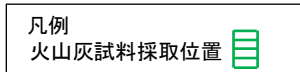
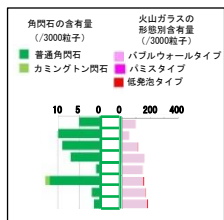
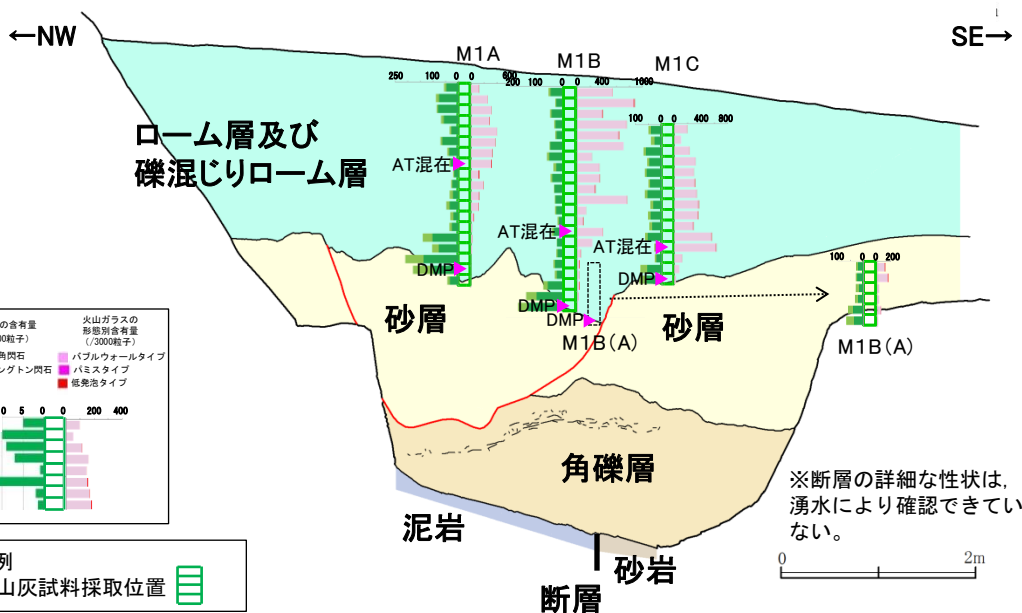
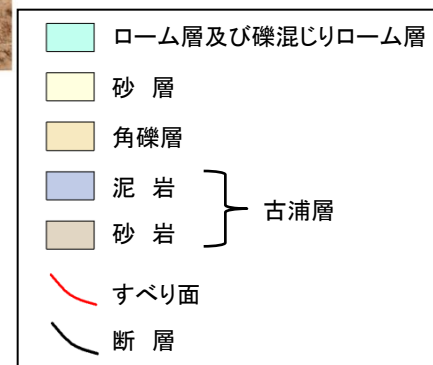
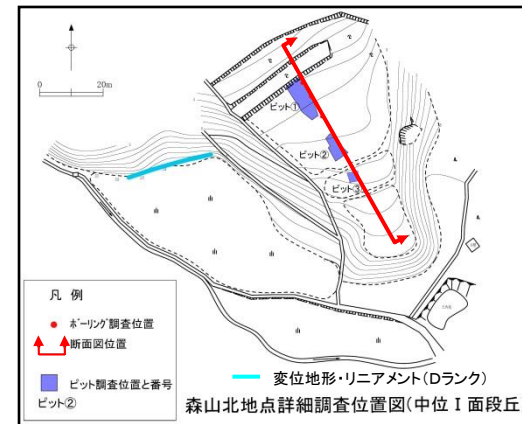
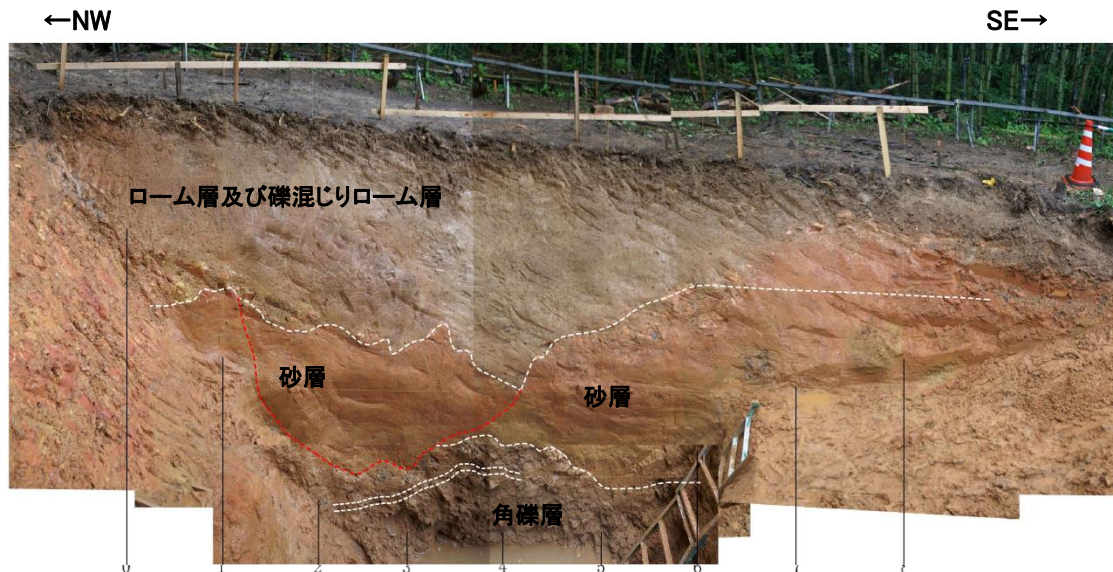
3. 央道断層の評価 (4)地質調査(央道断層の東側) ③森山付近
森山北(ボーリング調査(地質断面図))



※ローム層主体であるが、ピット③では下部に礫混じりロームを多く含む。

・変位地形・リニアメントの延長位置のMf面(中位I面)におけるボーリング調査の結果、断層を確認した。
・活動性を確認するためピット調査を実施した。

森山北(ピット調査(ピット①))



※断層の詳細な性状は、湧水により確認できていない。
0 2m

・ピット調査の結果、基盤に認められる断層上位の地層(大山松江軽石層(DMP)を含むローム層, 砂層, 角礫層)に変位・変形は認められないことから、後期更新世以降の断層活動は認められない。

3. 宍道断層の評価 (4)地質調査(宍道断層の東側) ③森山付近 森山北(断層露頭箇所, トレンチ調査箇所)(まとめ)

1. 森山北

(1) 変動地形学的調査

- ・ 鞍部が断続的に認められるが, 尾根・谷の系統的な屈曲は認められない。

(2) ボーリング調査

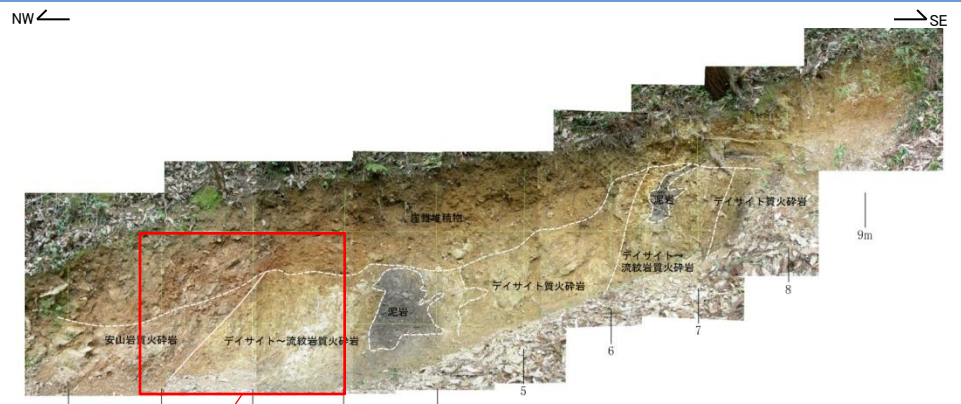
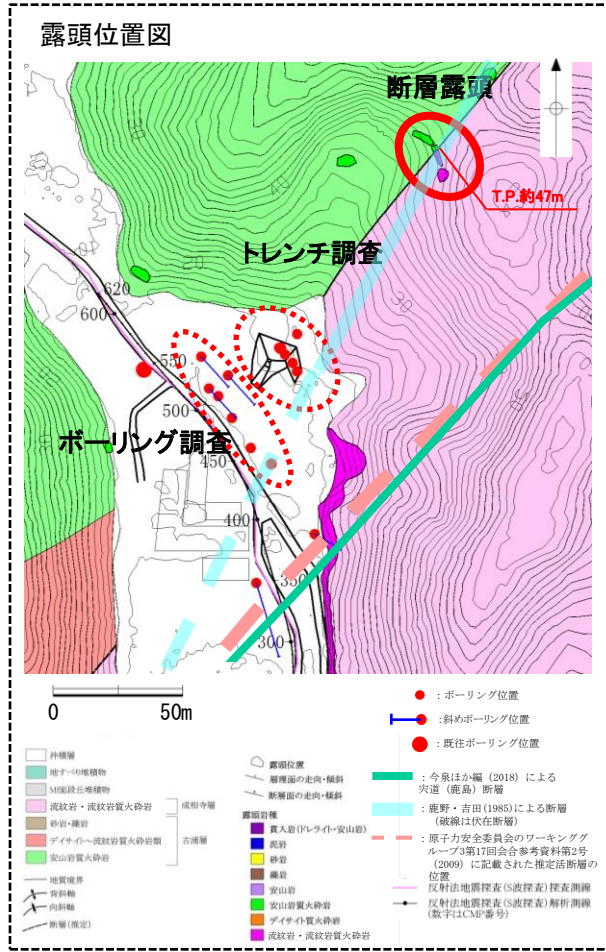
- ・ 変位地形・リニアメントの延長位置において断層が認められる。

(3) ピット調査

- ・ 基盤に認められる断層上位の地層(大山松江軽石層(DMP)を含むローム層, 砂層, 角礫層)に変位・変形は認められないことから, 少なくとも大山松江軽石層の堆積時期以降の断層活動はない。

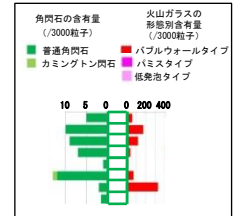
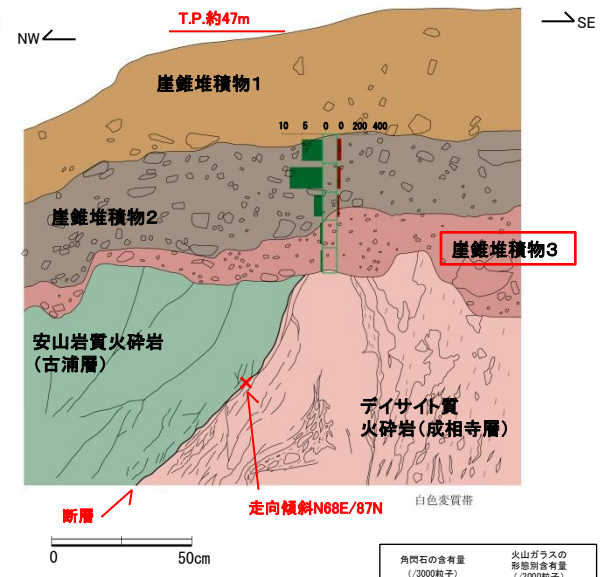
以上のことから, 断層露頭の調査, ボーリング調査及びピット調査結果により総合的に検討した結果, 泥岩と砂岩を境する断層を確認し, 後期更新世以降の断層活動は認められない。

3. 宍道断層の評価 (4)地質調査(宍道断層の東側) ③森山付近
森山(露頭観察及び火山灰分析)



崖錐堆積物は、砂混り礫からなり、安山岩質の礫に富む。中礫サイズの垂角礫主体である。

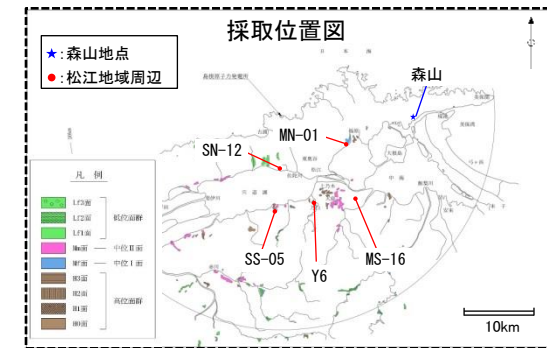
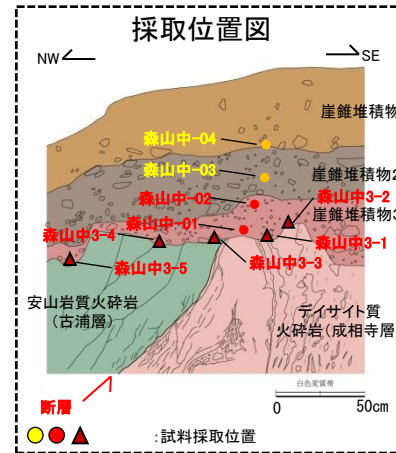
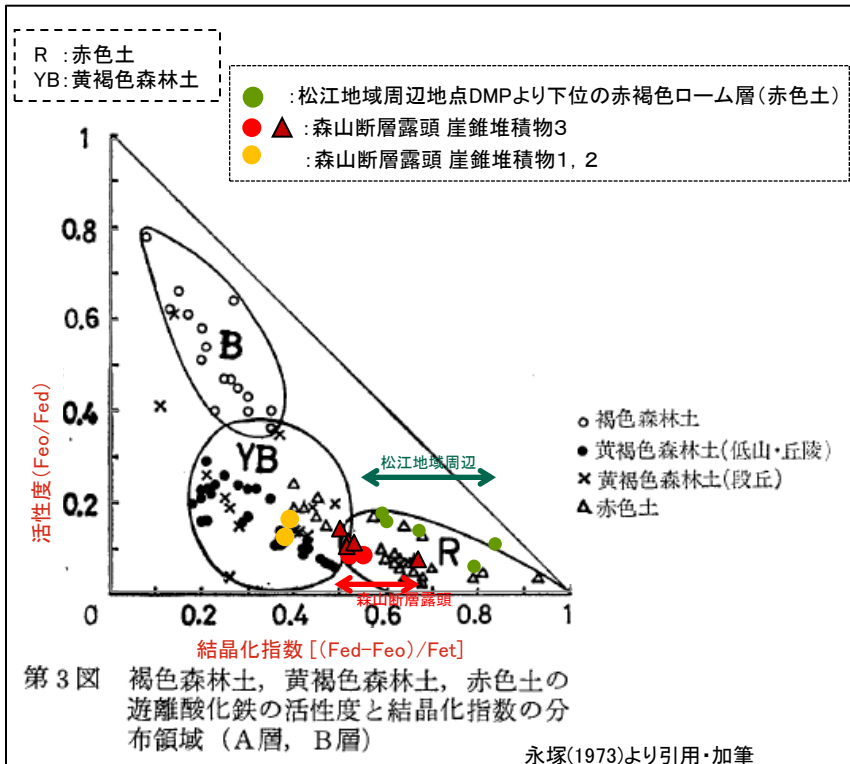
崖錐堆積物1: 灰褐～暗褐色を呈する。
崖錐堆積物2: 崖錐堆積物3に比較し礫率はやや低い。
崖錐堆積物2: 暗赤褐色を呈する。
崖錐堆積物3: 赤褐色を呈し、基盤を覆う。



- 露頭観察により、鹿野・吉田(1985)に示された断層に対応する、古浦層と成相寺層を境する断層を確認した。
- 断層には、明瞭なせん断面は認められず、北傾斜を示しており、断層を覆う崖錐堆積物に変位・変形は認められない。
- 研磨片観察の結果、幅2cm程度の角礫部が認められる。また、薄片観察の結果、複合面構造は認められない。
- 崖錐堆積物において、堆積構造の異常(すべり面や異質岩片の混入等)は認められず、松井(1993)⁽²⁴⁾による一般的な土壌の色相変化と整合している。
- 崖錐堆積物3層は赤褐色を呈する。また、斜面上方において赤色化した土壌は認められない。
- 崖錐堆積物における火山灰分析の結果、崖錐堆積物2層には、AT(始良Tn火山灰、約2.8~3.0万年前)が含まれる。

凡例
火山灰試料採取位置

3. 宍道断層の評価 (4)地質調査(宍道断層の東側) ③森山付近 森山(遊離酸化鉄分析(森山断層露頭の赤色土との比較))



遊離酸化鉄分析結果

試料名	層準	酸性シュウ酸塩可溶鉄	ジチオナイト可溶鉄	全鉄	活性度	結晶化指数	結晶化指数の範囲
		Feo(mg/g)	Fed(mg/g)				
森山中-03	崖錐堆積物2	5	44	102.9	0.12	0.38	0.38~0.39
森山中-04	崖錐堆積物1	6	39	84.2	0.16	0.39	
森山中-01	崖錐堆積物3	6	80	134.5	0.08	0.55	0.50~0.67
森山中-02	崖錐堆積物3	5	69	122.3	0.08	0.52	
森山中3-1	崖錐堆積物3	9	78	133.6	0.11	0.52	
森山中3-2	崖錐堆積物3	7	100	138.9	0.07	0.67	
森山中3-3	崖錐堆積物3	8	81	141.2	0.10	0.51	
森山中3-4	崖錐堆積物3	8	72	121.1	0.11	0.53	
森山中3-5	崖錐堆積物3	8	61	105.7	0.14	0.50	0.40~0.84
SS-05	DMPより下位	10	43	83.7	0.22	0.40 ※	
SS-05	DMPより下位	8	48	67.3	0.17	0.59	
Y-6	DMPより下位	7	47	66.1	0.15	0.60	
MN-01	DMPより下位	7	55	70.3	0.13	0.67	
SN-12	DMPより下位	6	53	57.2	0.10	0.84	
MS-16	DMPより下位	4	72	86.5	0.06	0.79	

■ : 森山断層露頭 崖錐堆積物3 □ : 松江地域周辺地点DMPより下位の赤褐色ローム層(赤色土)

※SS-05(1回目):DMPが混入した可能性が高いため、左記のダイアグラムには記載していない

- 森山断層露頭における遊離酸化鉄分析の結果、崖錐堆積物3層の遊離酸化鉄の結晶化指数は、0.50~0.67の範囲にあり、永塚(1973)における赤色土に分類される。
- 松江地域周辺における遊離酸化鉄分析の結果、DMPより下位の遊離酸化鉄の結晶化指数は、0.40~0.84の範囲にあり、概ね永塚(1973)における赤色土に分類される。
- 以上のことから、森山断層露頭の崖錐堆積物3層については、遊離酸化鉄の結晶化指数が、松江地域周辺におけるDMPより下位の赤色土のそれと同程度であることから、その形成年代はDMP降灰(約13万年前以降)層準と考えられる。

森山(遊離酸化鉄分析(松江地域周辺の赤色土との比較))

森山断層露頭及び松江地域周辺の試料採取地点の地質及び遊離酸化鉄の結晶化指数

地点	地形	現標高 (現河床からの比高)	基盤地質	堆積物	堆積物の 風化程度	試料採取 層準	遊離酸化鉄の 結晶化指数	備考	
森山 断層露頭	山地 (緩斜面)	約47m	成相寺層 古浦層	崖錐堆積物 (基質支持)	半くさり礫化 (崖錐堆積物3層)	崖錐堆積物 3層	0.50~0.67(注)	崖錐堆積物の礫の風化 程度は次頁参照	
松江 地域 周辺	MN-01	段丘 (Mf面)	約30m (約12m)	古江層	赤褐色シルト質 ローム	礫の表面 のみ風化	DMPの下 約5cm	0.67	—
	SN-12	丘陵 (緩斜面)	約24m	松江層 (泥岩)	赤褐色シルト質 ローム	くさり礫~ 半くさり礫化	DMPの下 約10cm	0.84	—
	MS-16	丘陵 (緩斜面)	約26m	松江層 (細粒砂岩)	赤褐色シルト質 ローム	虎斑状の 土壤構造が発達	DMPの下 約60cm	0.79	—
	Y6	段丘 (H2面)	約44m	布志名層	赤褐色シルト質 ローム	—	DMPの下 約10cm	0.60	—
	SS-05	段丘 (H3面)	約29m (約24m)	布志名層 大森層	赤褐色軽石質 ローム	—	DMPの下 約5cm	0.59	—

(注)遊離酸化鉄の結晶化指数の平均値は0.54, 標準偏差は0.06である。

【森山断層露頭】

- ・崖錐堆積物において、堆積構造の異常(すべり面や異質岩片の混入等)は認められず、松井(1993)による一般的な土壌の色相変化と整合する。また、崖錐堆積物3層は赤褐色を呈する。
- ・崖錐堆積物の構成礫は安山岩質の角礫を主体とし、基質は砂(一部、シルト・粘土分を含む)からなる基質支持の構造を示す。また、崖錐堆積物3層の構成礫は、半くさり礫化する。

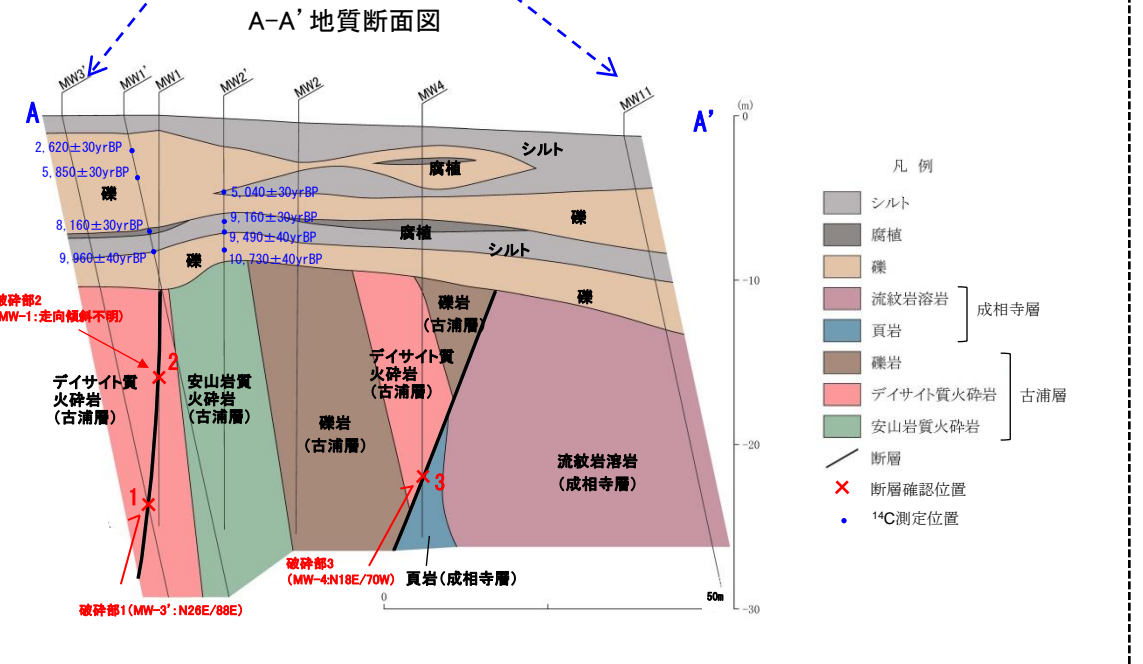
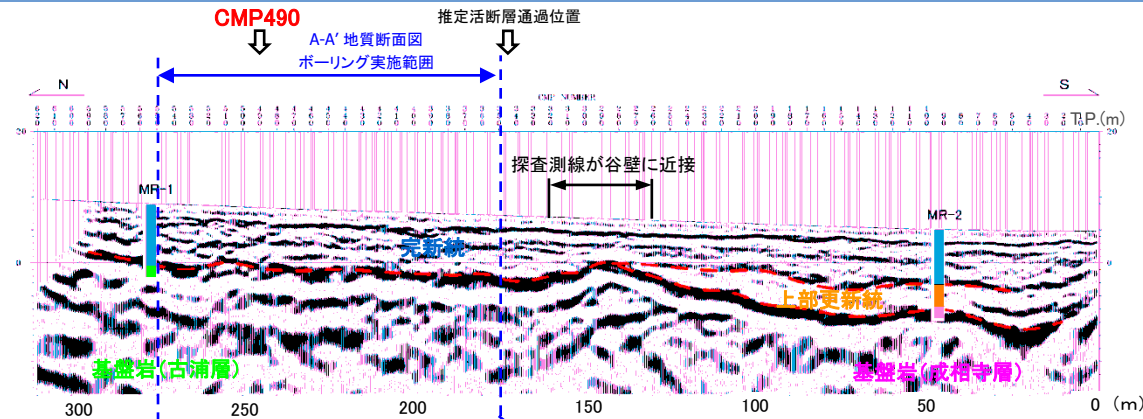
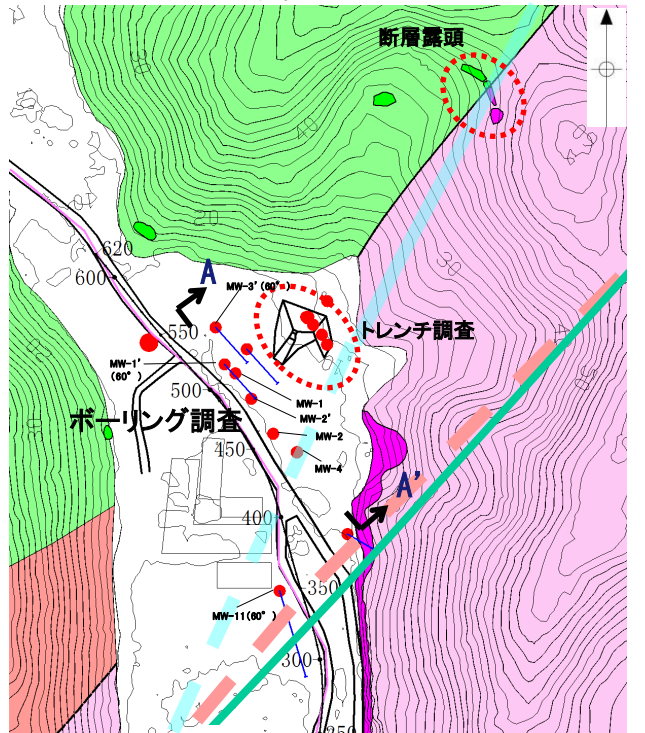
【松江地域周辺】

- ・現標高や現河床からの比高に依存せず、中位段丘(Mf面)及び高位段丘(H2面, H3面)を含むいずれの地点においても、DMPの直下で赤色土が形成されている。
- ・赤色土は、基盤地質に依存せず、様々な岩種の分布域において形成されている。

- ・森山断層露頭及び松江地域周辺のいずれも基質支持の堆積物であり、基質部(細粒物質)を対象として遊離酸化鉄分析を実施していることから、森山断層露頭の崖錐堆積物3層と松江地域周辺のローム層との比較は可能である。また、遊離酸化鉄分析の比較検討結果より、崖錐堆積物3層はDMP層準と考えられる。

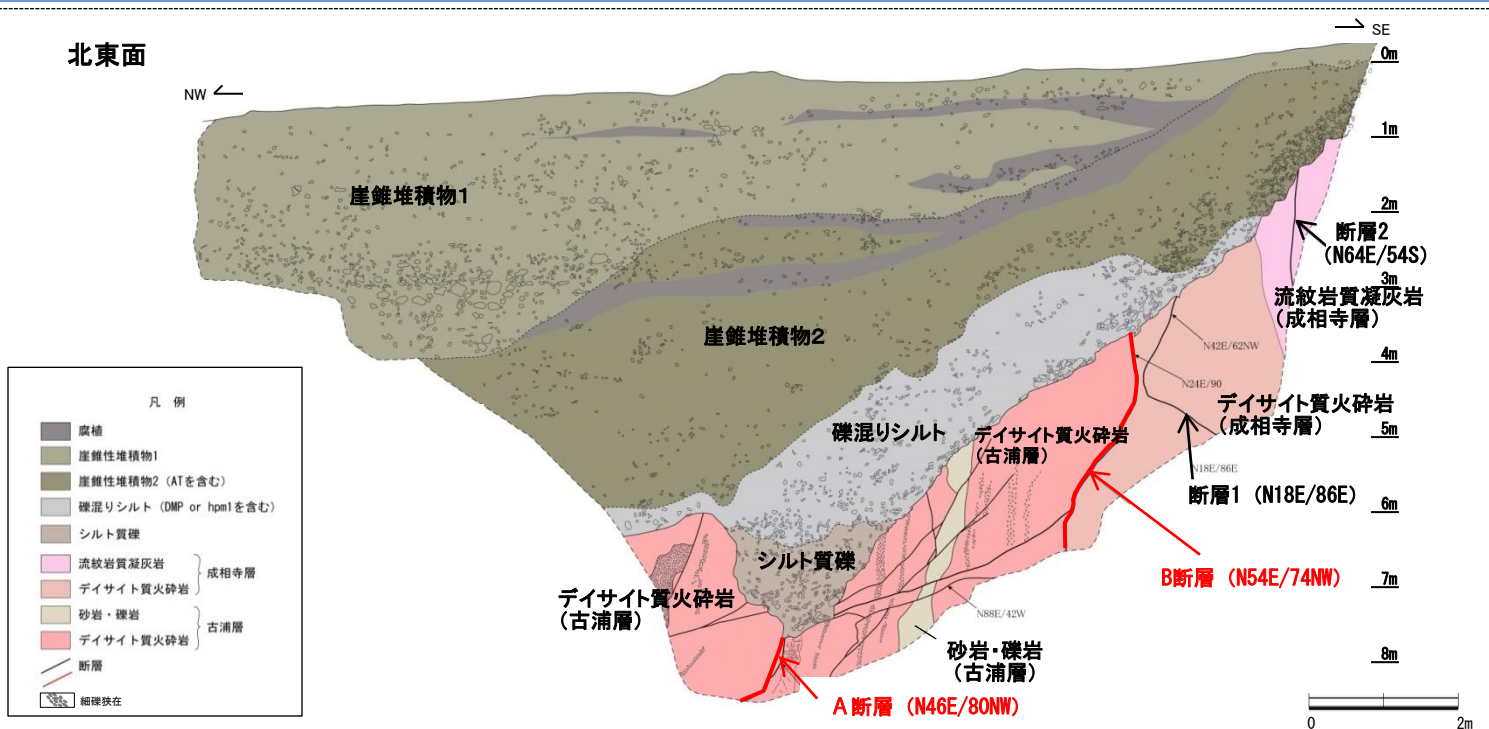
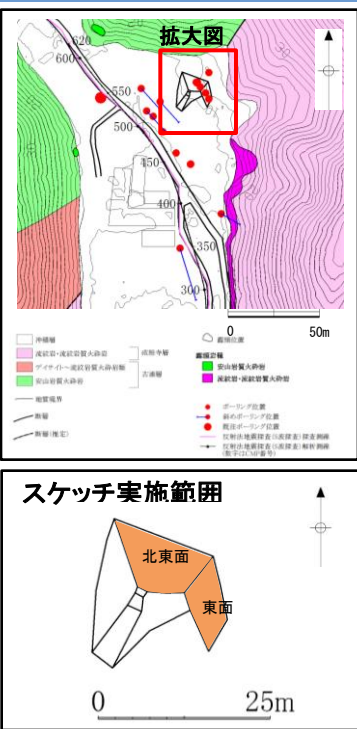
森山(ボーリング調査)

ボーリングおよび断面位置図

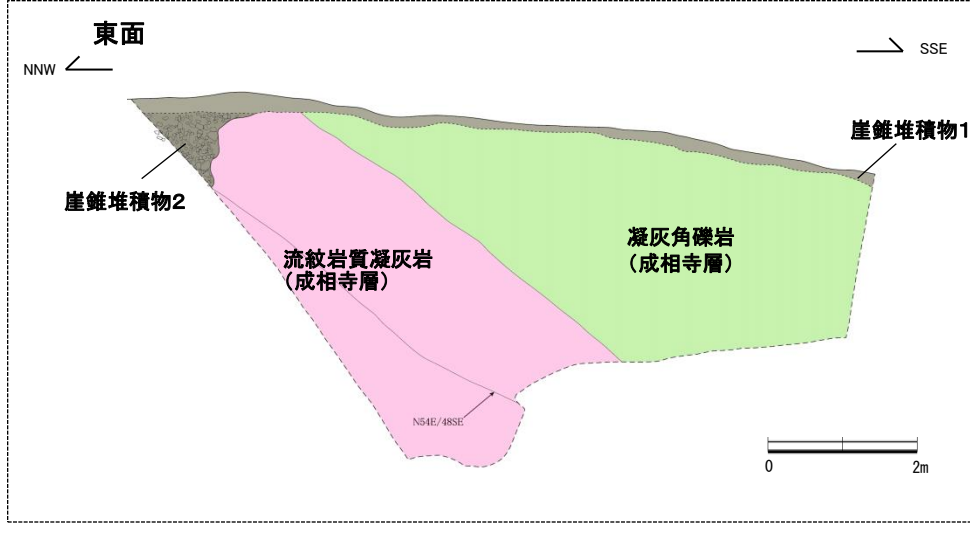


- 断層露頭の南西側の平野部(CMP490付近)におけるボーリング調査の結果, 古浦層のデイサイト質火砕岩中に断層が認められ, その南側に, 古浦層と成相寺層を境する断層が認められる。また, 反射法地震探査等の結果, これらの断層は, 完新統に変位・変形を与えていない。
- 断層の走向及び北東側に位置する断層露頭から断層通過位置を推定し, トレンチ位置を選定した。

3. 央道断層の評価 (4)地質調査(央道断層の東側) ③森山付近
森山(トレンチ調査)

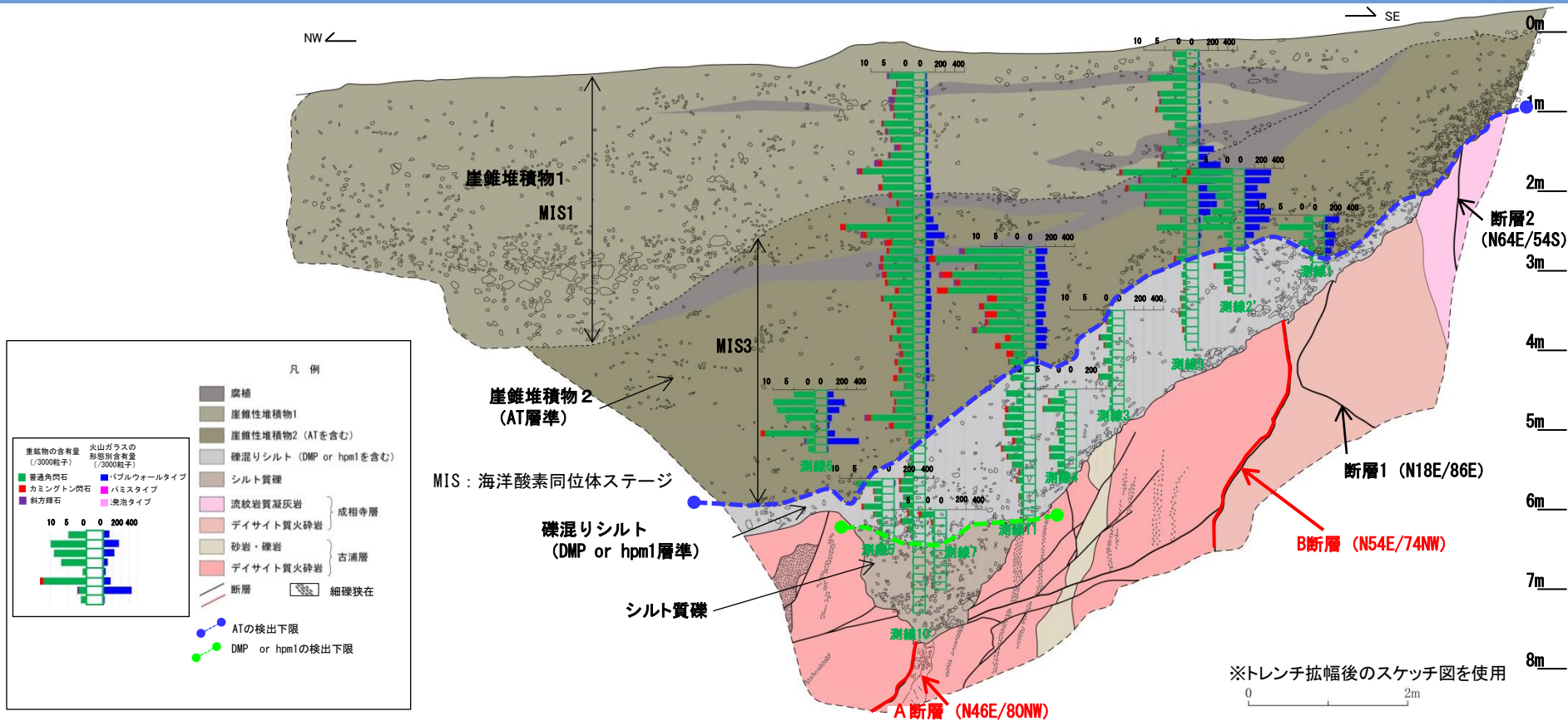


- ・トレンチ調査の結果、基盤に2条の断層(A断層, B断層)が認められた。
- ・A断層・B断層と、ボーリング調査で認められた2条の断層の走向は、北東方向であり、概ね一致する。
- ・A断層が古浦層中のデイサイト質火砕岩中に発達すること、B断層が古浦層と成相寺層の地質境界に発達することは、ボーリング調査による2条の断層と整合的である。
- ・B断層は、古浦層と成相寺層を境し、北傾斜を示すという点で、既往調査で確認された鹿野・吉田(1985)に示された断層に対応する断層露頭と整合的である。
- ・2条の断層(A断層, B断層)を覆う地層に変位・変形は認められない。
- ・なお、上記以外に、大きく屈曲している、または南傾斜を示す断層が2条認められた。



3. 宍道断層の評価 (4)地質調査(宍道断層の東側) ③森山付近

森山(トレンチ調査)



【堆積層の形成年代】

- ・シルト質礫層には、DMPもしくはhpm1を示唆する普通角閃石やカミングトン閃石がほとんど含まれていない。後述する礫混りシルト層の形成年代を踏まえると、MIS5eより古い地層と考えられる。
- ・礫混りシルト層は、下位のシルト質礫層をほぼ水平に覆い、DMPもしくはhpm1を示唆する普通角閃石やカミングトン閃石が含まれていることから、DMPもしくはhpm1降灰時から直後の堆積物であり、MIS5e以前の地層と考えられる。その理由として、DMPもしくはhpm1の検出下限は礫混りシルトの基底とほぼ一致し、下位のシルト質礫層には火山灰が検出されないことから、火山灰の降灰時期と礫混りシルト層の堆積開始時期との時間間隔はほとんどないと考えられる。また、シルト主体の層相を呈すること等から、比較的静穏な堆積環境により形成されたと考えられる。
- ・崖錐堆積物2層は、ATを含むことからMIS3の地層と考えられる。また、下位の礫混りシルト層を削り込んで堆積していることから、不整合関係にある。また、ATの検出下限は崖錐堆積物2層の基底とほぼ一致し、下位の礫混りシルト層にATは検出されない。
- ・崖錐堆積物1層はATを含むが、その含有量が崖錐堆積物2層のそれより少ないこと、及び礫層が下位の崖錐堆積物2層を削り込んで堆積しており不整合関係にあることから、MIS1の地層と考えられる。

【断層の活動性評価】

- ・ A断層は、シルト質礫層に変位・変形を与えていないことから、後期更新世以降の断層活動は認められない。
- ・ B断層は、礫混りシルト層に変位・変形を与えていないことから、後期更新世以降の断層活動は認められない。

3. 宍道断層の評価 (4)地質調査(宍道断層の東側) ③森山付近 森山(断層露頭箇所, トレンチ調査箇所)(まとめ)

1. 断層露頭の調査

- ・ 露頭観察により、鹿野・吉田(1985)に示された断層に対応する、古浦層と成相寺層を境する断層を確認した。断層には、明瞭なせん断面は認められず、断層を覆う崖錐堆積物3層に変位・変形は認められない。
- ・ 研磨片観察及び薄片観察の結果、幅2cm程度の角礫部が認められるが、複合面構造は認められない。
- ・ 永塚(1973)における土壌型と活性度－結晶化指数ダイアグラムの関係によると、崖錐堆積物3層は赤色土に分類される。
- ・ 宍道湖東岸地域の赤色土がDMP(約13万年前以降)降灰以前の地層に発達するとされる大西(1979)の知見及び松江地域周辺の赤色土に関する遊離酸化鉄分析の結果、崖錐堆積物3層の遊離酸化鉄の結晶化指数が、松江地域周辺のDMPより下位の赤色土のそれと同程度であることから、崖錐堆積物3層の形成年代はDMP降灰層準と考えられる。また、森山断層露頭の崖錐堆積物を構成する安山岩質の礫の風化程度を確認した結果、崖錐堆積物3層の礫は、崖錐堆積物1層及び崖錐堆積物2層の礫と比較し風化が進行している。
- ・ 断層は、DMP降灰層準の崖錐堆積物3層に変位・変形を与えていないことから、後期更新世以降の断層活動は認められない。

2. ボーリング調査

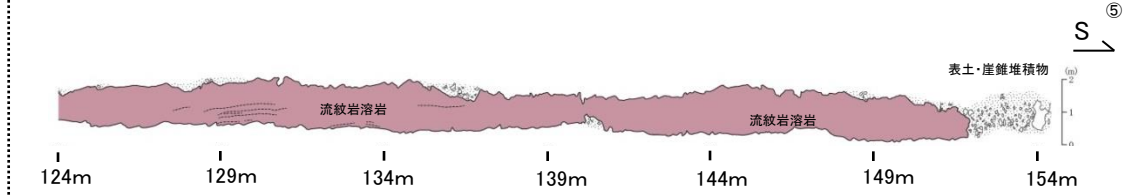
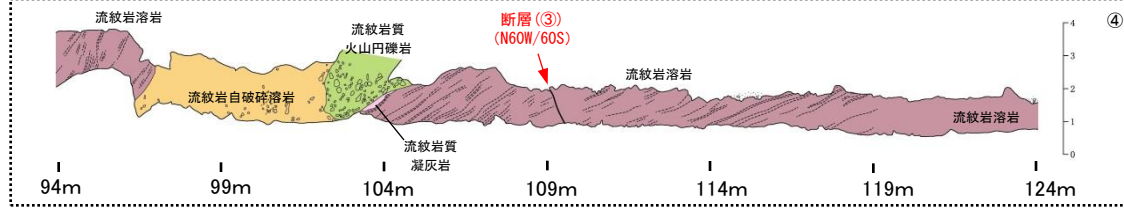
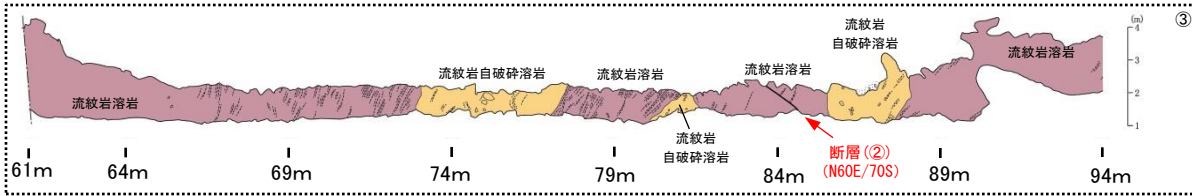
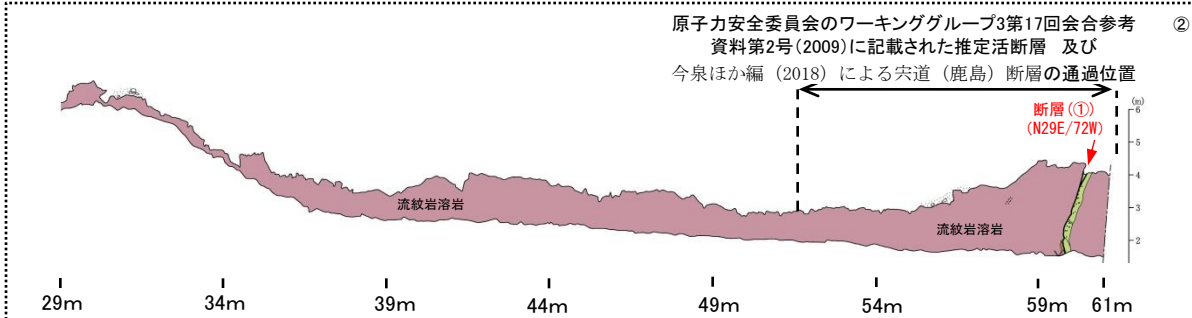
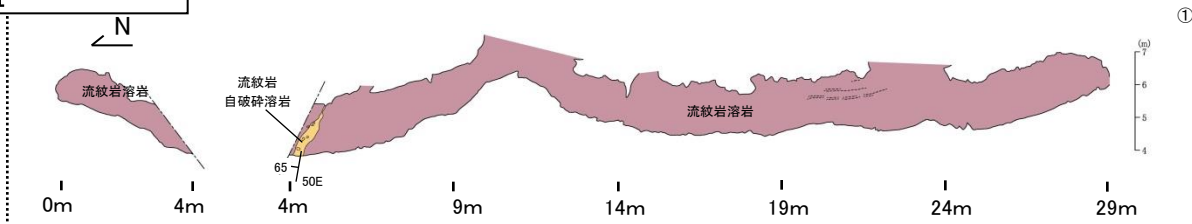
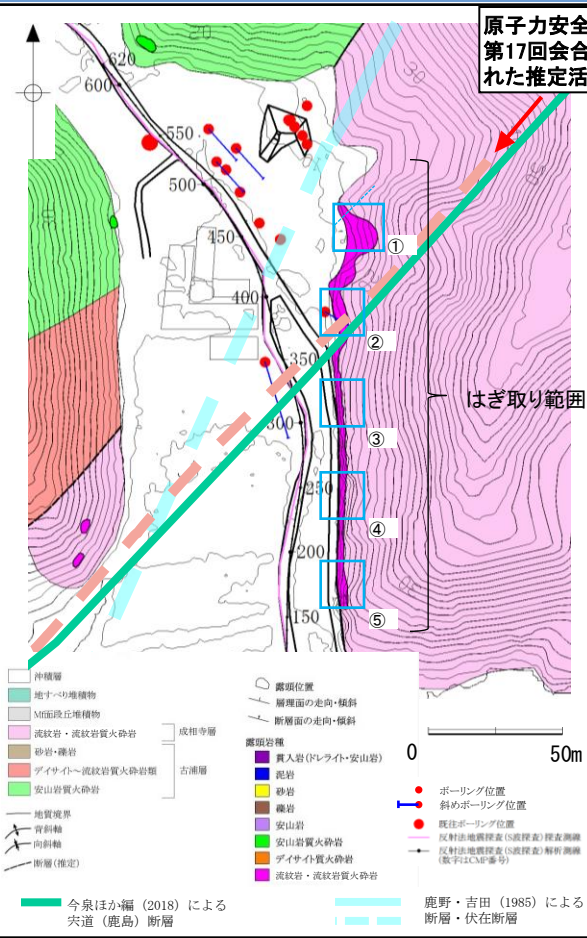
- ・ 群列ボーリング調査の結果、断層露頭の南西側の平野部(CMP490付近)において古浦層のデイサイト質火砕岩中に断層が認められ、その南側に、古浦層と成相寺層を境する断層が認められる。また、反射法地震探査等の結果、これらの断層は、完新統に変位・変形を与えていない。

3. トレンチ調査

- ・ ボーリング調査で認められた2条の断層に対応する、断層(A断層, B断層)が認められる。A断層は、一部に軟質な部分がみられるが、明瞭な断層ガウジは認められず、断層面は凹凸が著しく、断層を覆うシルト質礫層に変位・変形は認められない。B断層は、断層面沿いに幅約1mmの断層ガウジが認められるものの、断層面は凹凸が著しく、断層を覆う礫混りシルト層に変位・変形は認められない。
- ・ 礫混りシルト層は、下位のシルト質礫層をほぼ水平に覆い、DMPもしくはhpm1を示唆する普通角閃石やカミングトン閃石が含まれていることから、DMPもしくはhpm1降灰時から直後の堆積物であり、MIS5e以前の地層と考えられる。
- ・ シルト質礫層には、DMPもしくはhpm1を示唆する普通角閃石やカミングトン閃石がほとんど含まれていないことから、礫混りシルト層の形成年代を踏まえると、MIS5eより古い地層と考えられる。
- ・ A断層は、MIS5eより古いシルト質礫層に変位・変形を与えていないことから、後期更新世以降の断層活動は認められない。
- ・ B断層は、MIS5e以前の礫混りシルト層に変位・変形を与えていないことから、後期更新世以降の断層活動は認められない。

以上のことから、断層露頭の調査、ボーリング調査及びトレンチ調査結果により総合的に検討した結果、古浦層と成相寺層を境する一連の断層を確認し、後期更新世以降の断層活動は認められない。

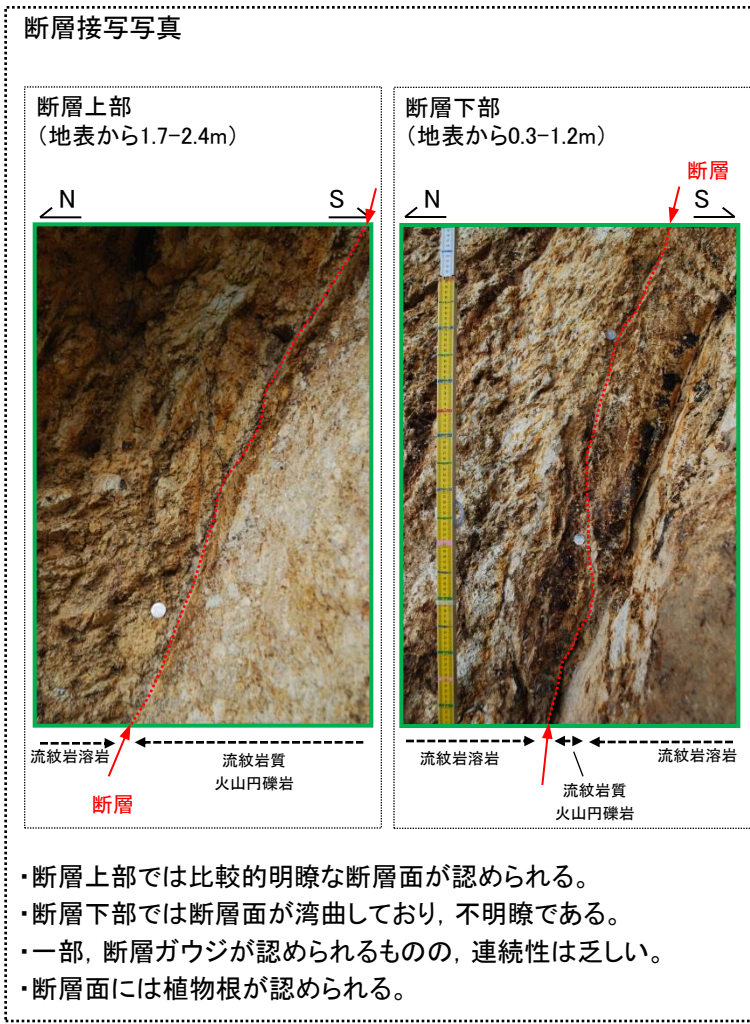
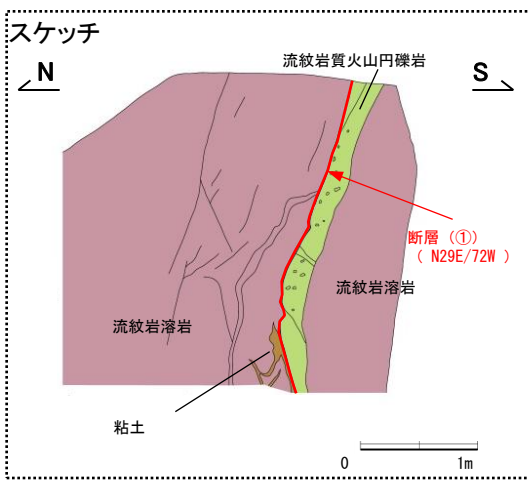
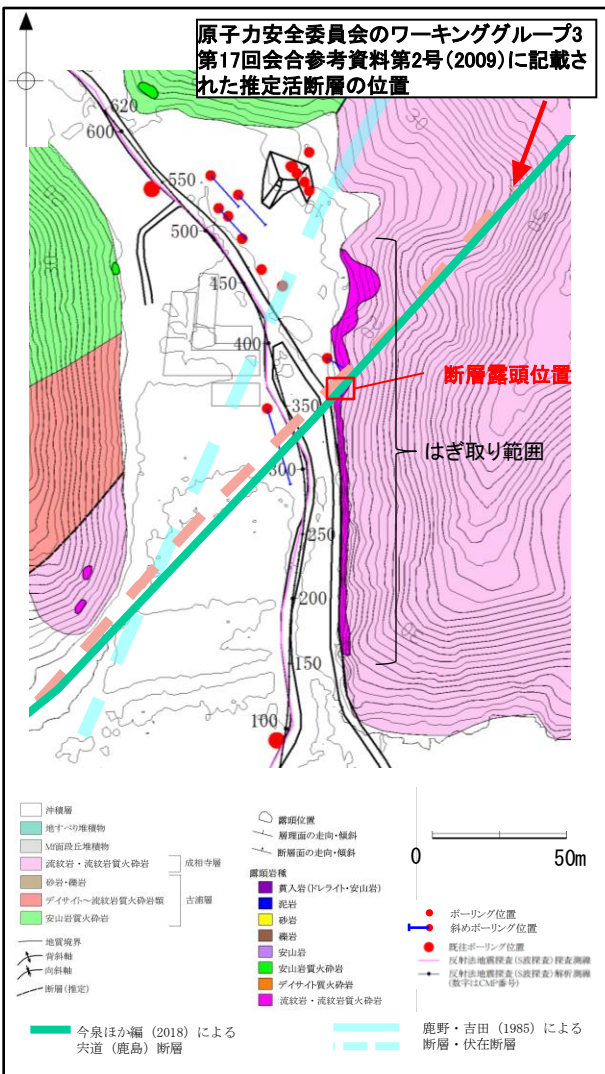
森山(はぎ取り調査)



幅約150m区間のはぎ取り調査の結果, 原子力安全委員会のワーキンググループ3第17回会合参考資料第2号(2009)に記載された推定活断層及び今泉ほか編(2018)による宍道(鹿島)断層の通過位置付近に, 断層が認められる。

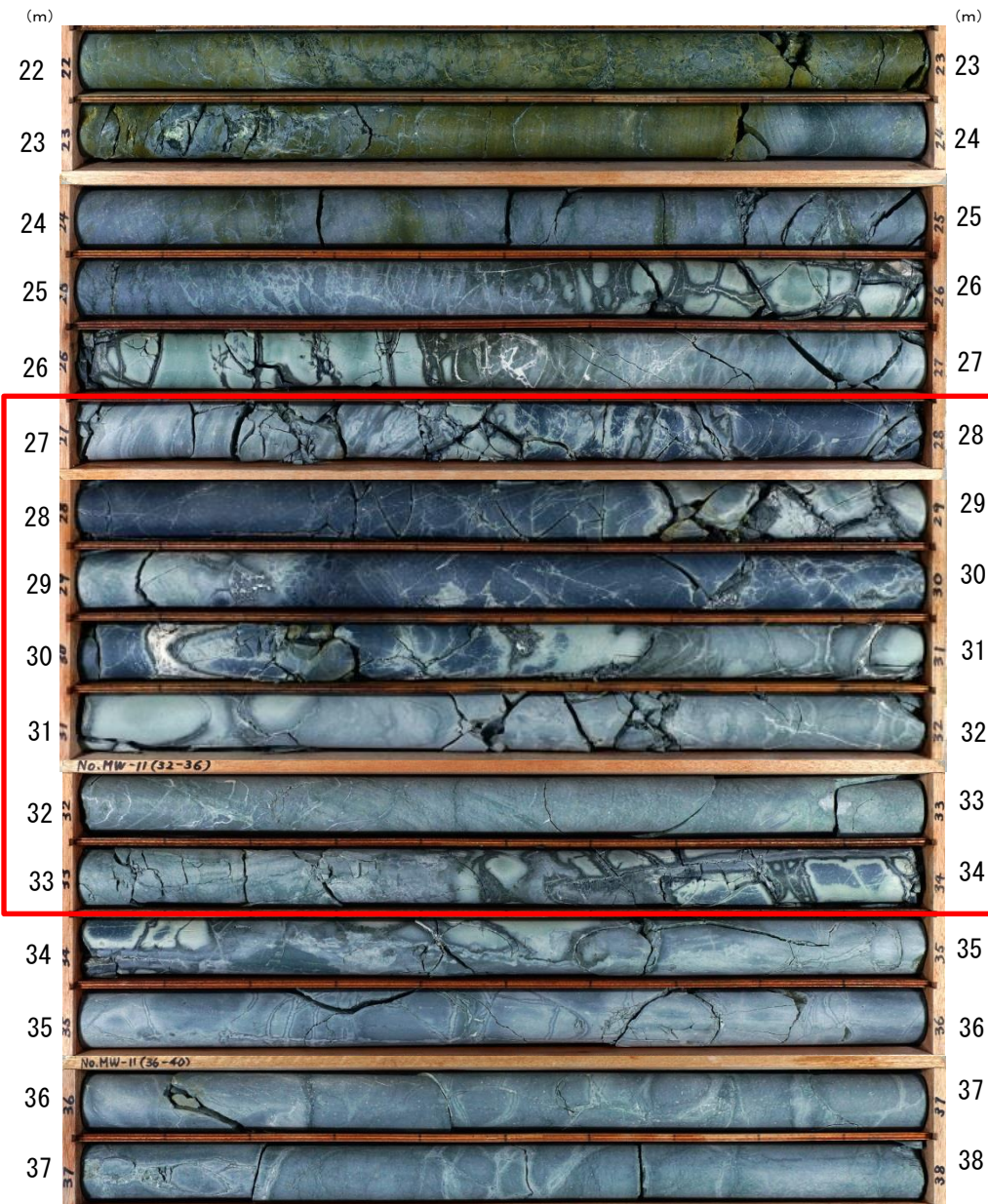
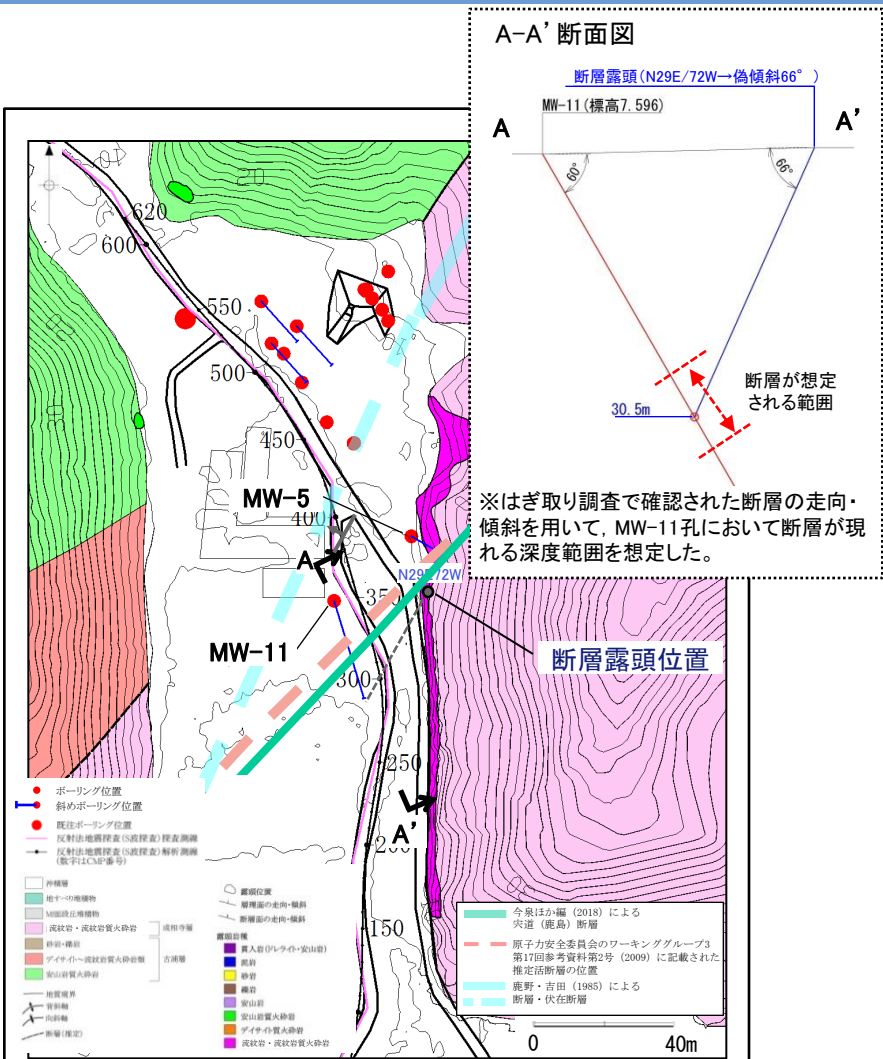


3. 宍道断層の評価 (4)地質調査(宍道断層の東側) ③森山付近 森山(はぎ取り調査(断層露頭①))



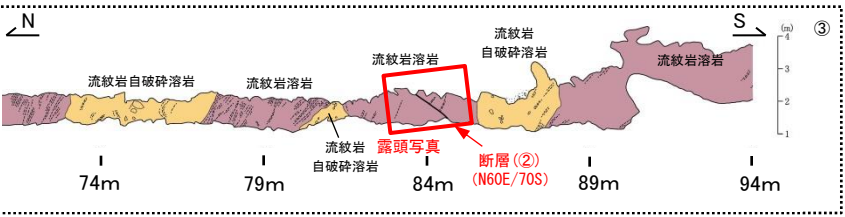
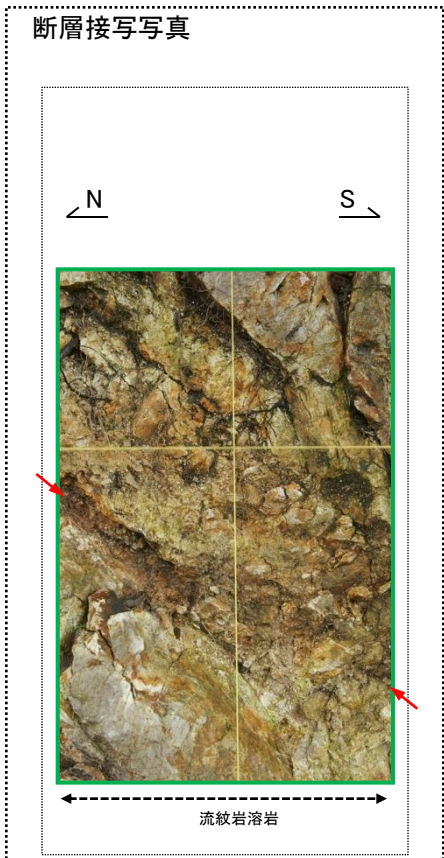
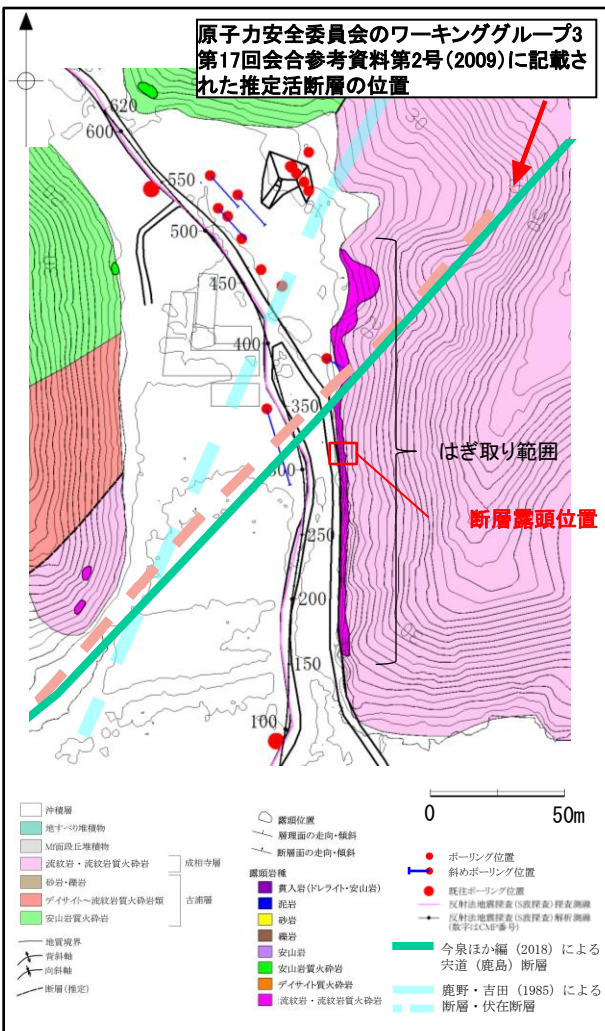
・はぎ取り調査の結果、成相寺層の流紋岩溶岩と流紋岩質火山円礫岩とを境する断層が認められる。
・断層面は湾曲しており、不明瞭である。また、断層ガウジが認められるものの、連続性は乏しい。

森山(ボーリング調査(断層①の連続性確認))



- はぎ取り調査で確認された断層の連続性を確認するため、はぎ取り調査の南西側でボーリング調査(MW-11)を実施した。
- ボーリング調査の結果、はぎ取り調査で確認された断層の走向・傾斜の延長付近に明瞭なせん断面は認められないことから、当該断層の連続性は乏しいと考えられる。

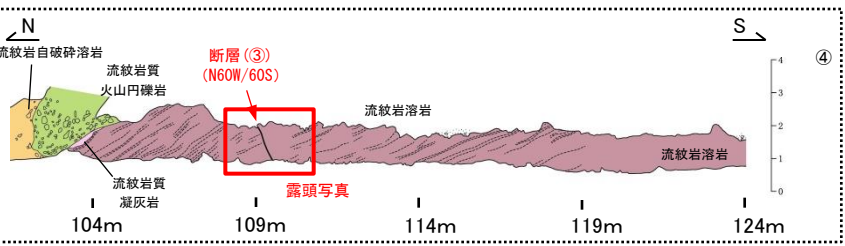
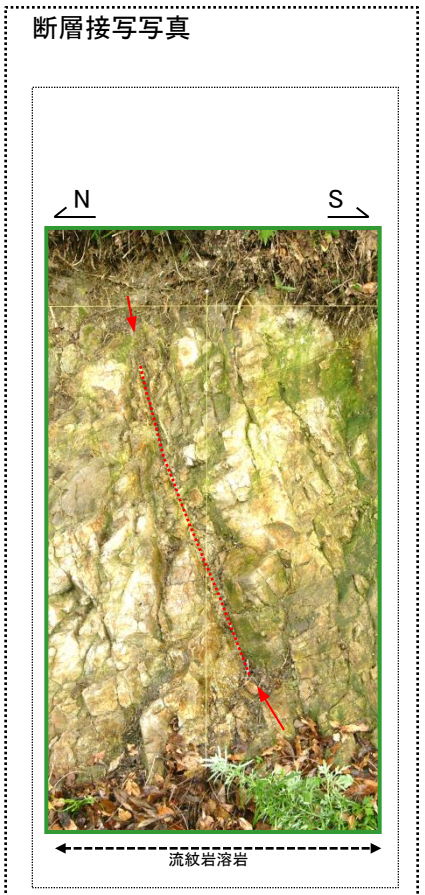
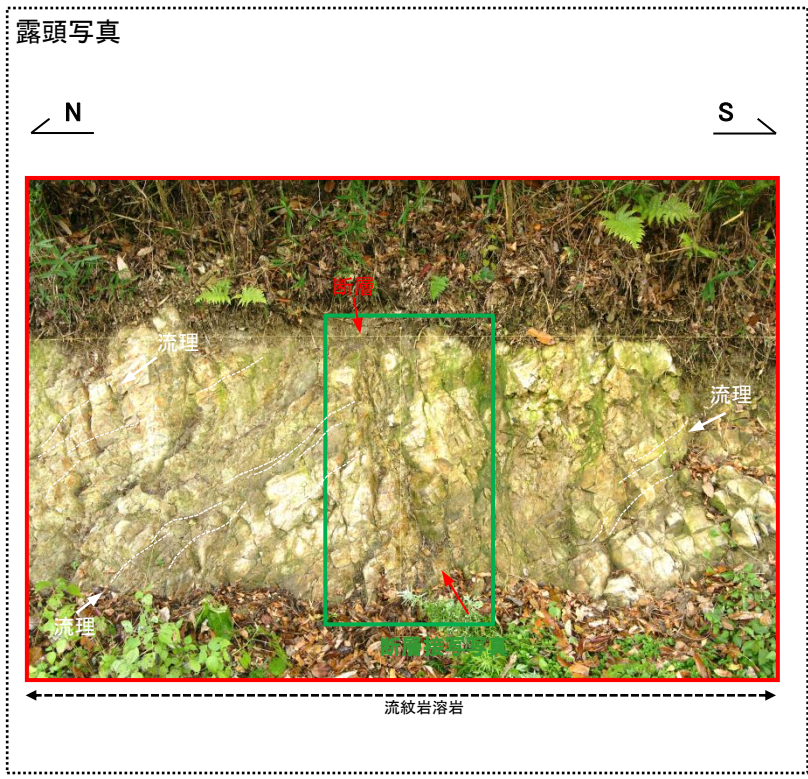
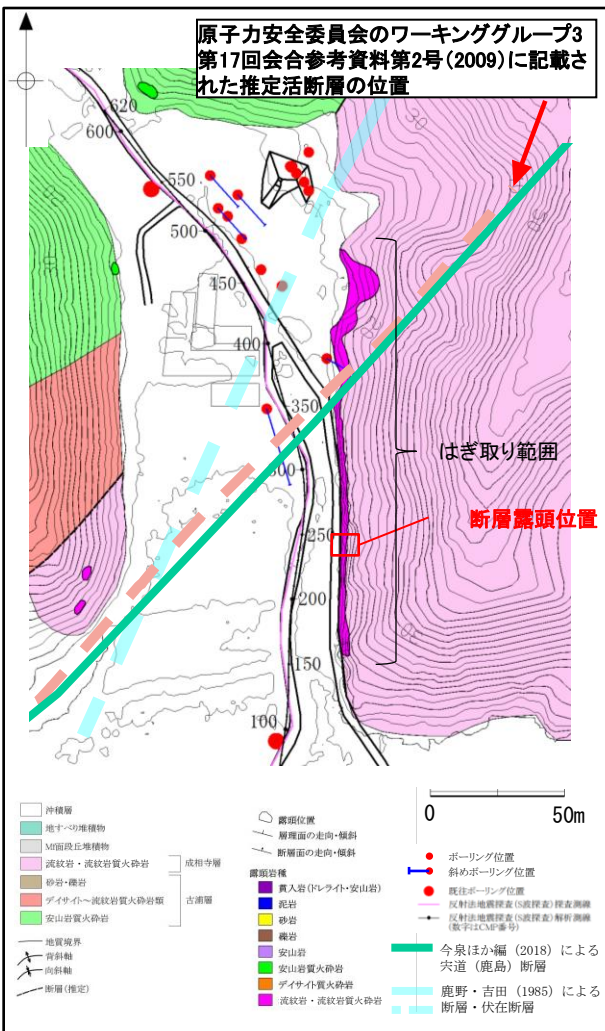
3. 宍道断層の評価 (4)地質調査(宍道断層の東側) ③森山付近 森山(はぎ取り調査(断層露頭②))



・断層ガウジは認められず、周囲の母岩は破碎を受けていない。

- ・はぎ取り調査の結果、成相寺層の流紋岩溶岩中に断層が認められる。
- ・断層ガウジは認められず、周囲の母岩は破碎を受けていない。

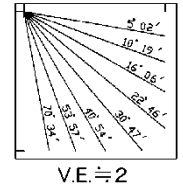
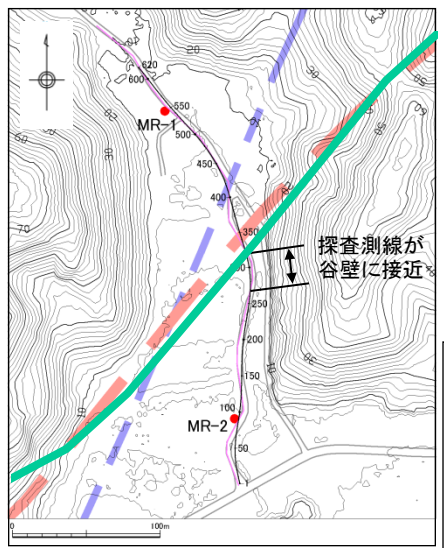
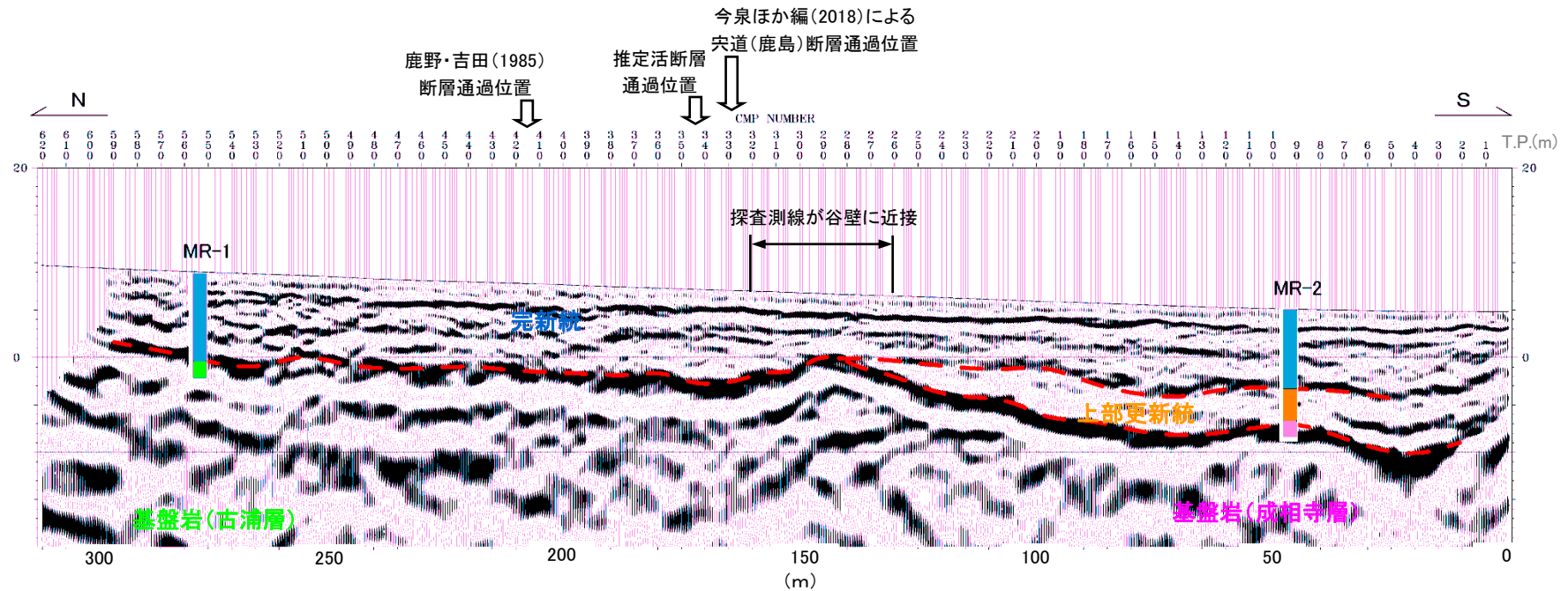
森山(はぎ取り調査(断層露頭③))



④
断層ガウジは認められず、周囲の母岩は破碎を受けていない。

- ・はぎ取り調査の結果、成相寺層の流紋岩溶岩中に断層が認められる。
- ・断層ガウジは認められず、周囲の母岩は破碎を受けていない。

3. 宍道断層の評価 (4)地質調査(宍道断層の東側) ③森山付近
森山(反射法地震探査(S波探査)の解析断面図)



- ボーリング調査位置
- 反射法地震探査(S波探査) 探査測線
- 反射法地震探査(S波探査) 解析測線 (数字はCMP番号)
- ▬ 鹿野・吉田(1985) の断層(縮尺:5万分の1) (破線は推定断層)
- ▨ 原子力安全委員会のワーキンググループ3 第17回参考資料第2号(2009)に記載された推定活断層の位置
- 今泉ほか編(2018)による宍道(鹿島)断層

- ・ 反射面の連続性とボーリング調査結果との対比により、下位から基盤岩(古浦層、成相寺層)、上部更新統及び完新統に区分される。
- ・ 基盤岩上面の反射面は緩やかに下流(南)側へ傾斜し、上部更新統及び完新統の反射面は地表面にほぼ平行な成層パターンを示す。
- ・ 基盤岩上面、完新統及び南側に分布する上部更新統には断層活動を示唆する変位・変形は認められない。
- ・ 基盤岩上面は、最終氷期において陸化した際に、河川の流路変更に伴う削りこみにより不陸が生じている。なお、CMP260~320で認められる高まりは、探査測線が東側の谷壁に近接していることも考えられる。

基盤岩上面、完新統及び南側に分布する上部更新統には断層活動を示唆する変位や変形は認められない。

3. 宍道断層の評価 (4)地質調査(宍道断層の東側) ③森山付近

森山(はぎ取り調査箇所)(まとめ)

1. 変動地形学的調査

- ・ 全ての地形要素を確認した結果、地形要素はいずれも系統的ではないことから、変位地形・リニアメントは認められない。

2. はぎ取り調査

- ・ はぎ取り調査の結果、成相寺層の流紋岩溶岩と流紋岩質火山円礫岩とを境する、または成相寺層の流紋岩溶岩中に発達する流理構造を切る断層が3条認められるものの、いずれも断層面は不明瞭である。
- ・ そのうち断層露頭①では、一部で断層ガウジが認められるため、研磨片観察及び薄片観察を実施した結果、幅4mm程度の白色を呈する細粒部が認められるが、複合面構造は認められない。

3. ボーリング調査

- ・ 断層露頭①の南西側で実施したボーリング調査の結果、断層露頭で得られた走向・傾斜の延長付近に明瞭なせん断面は認められず、断層の連続性は乏しいと考えられる。

4. 反射法地震探査(S波探査)

- ・ 既往調査で実施した反射法地震探査(S波探査)の結果、基盤岩上面、完新統及び南側に分布する上部更新統には断層活動を示唆する変位・変形は認められない。

以上のことから、はぎ取り調査で認められた断層について、後期更新世以降の活動は認められない。

3. 宍道断層の評価 (4)地質調査(宍道断層の東側) ③森山付近 森山(調査の概要(造成地付近))

変位地形・リニアメント(Dランク)

- 中田ほか(2008)による鹿島断層(位置やや不明確)
- - - 同上推定活断層(地表)
- 原子力安全委員会のワーキンググループ3第17回会合参考資料第2号(2009)に記載された推定活断層の位置
- 鹿野・吉田(1985)による断層, 推定断層, 伏在断層
- 今泉ほか編(2018)による宍道(鹿島)断層

□ 沖積層	○ 露頭位置
■ 地すべり堆積物	— 層理面の走向・傾斜
■ M面段丘堆積物	— 断層面の走向・傾斜
■ 流紋岩・流紋岩質火砕岩	露頭岩種
■ 砂岩・礫岩	
■ デイサイト～流紋岩質火砕岩類	■ 砂岩
■ 安山岩質火砕岩	■ 礫岩
— 地質境界	■ 安山岩質火砕岩
— 背斜軸	■ デイサイト質火砕岩
— 断層	■ 流紋岩・流紋岩質火砕岩
— 断層(推定)	

成相寺層
古浦層

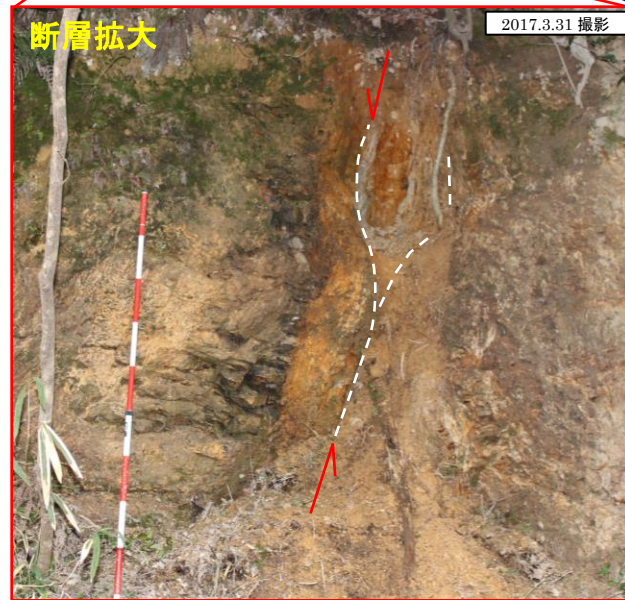
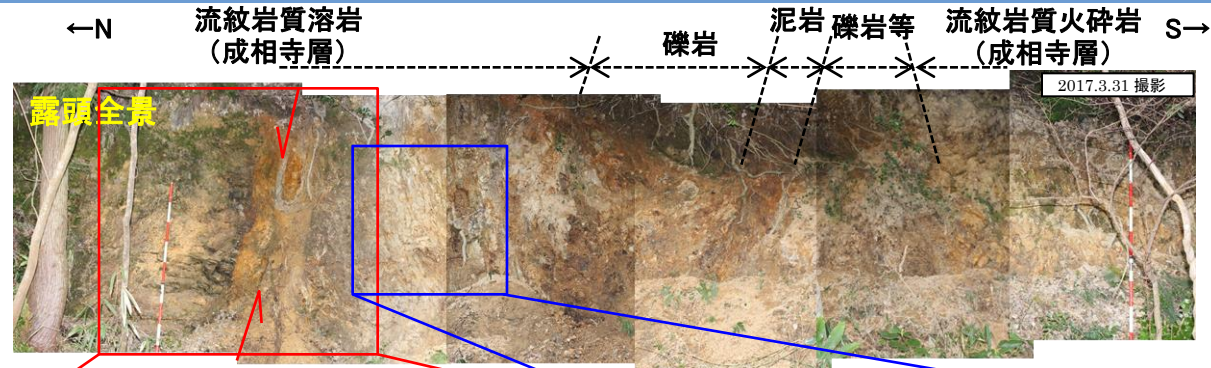
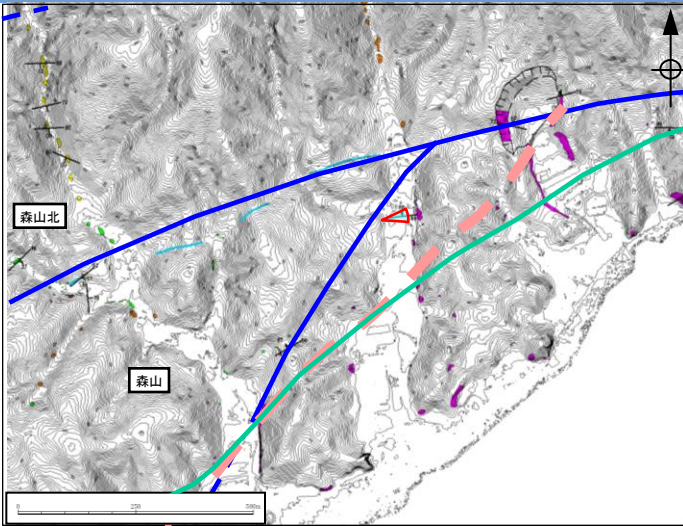
○ 断層露頭

本資料のうち、枠囲みの内容は公開できません。

・森山の造成地付近における地表地質踏査の結果、複数の断層露頭(断層露頭④～⑦)を確認した。
・いずれの断層も鹿野・吉田(1985)の断層通過位置付近に認められ、断層近傍に成相寺層の最下部に分布すると考えられる泥岩を取り込む特徴が確認されること等から、古浦層と成相寺層を境する一連の断層と推定される(詳細は次頁以降参照)。

3. 央道断層の評価 (4)地質調査(央道断層の東側) ③森山付近

断層露頭④(地表地質踏査)



変位地形・リニアメント(Dランク)

- 原子力安全委員会のワーキンググループ3第17回会合参考資料第2号(2009)に記載された推定活断層の位置
- 鹿野・吉田(1985)による断層, 伏在断層
- 今泉ほか編(2018)による央道(鹿島)断層

露頭位置

層理面の走向・傾斜

断層面の走向・傾斜

露頭岩種

- 泥岩
- 砂岩
- 礫岩
- 安山岩質火砕岩
- デイサイト質火砕岩
- 流紋岩・流紋岩質火砕岩

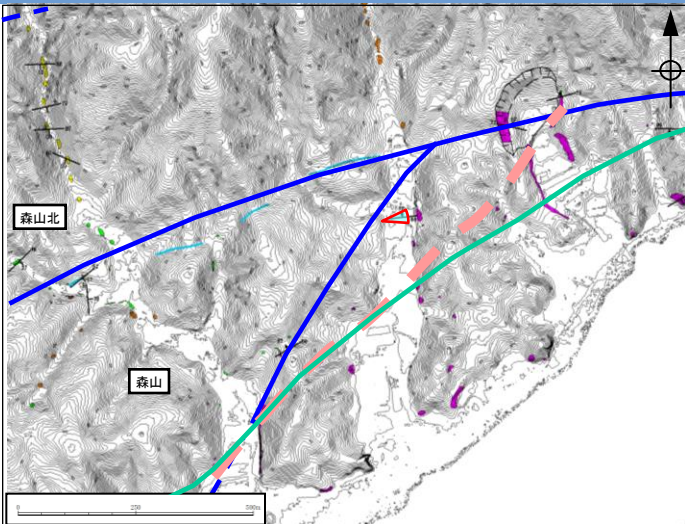
- ・流紋岩(成相寺層)は比較的高角度の流理を示し, その他の岩相境界も高角度である。
- ・流紋岩中に幅50cm程度の断層(N84E/72Nの走向傾斜)が認められるが, 条線は確認されず, 不明である。

今村・向吉(2017)⁽³⁶⁾ :

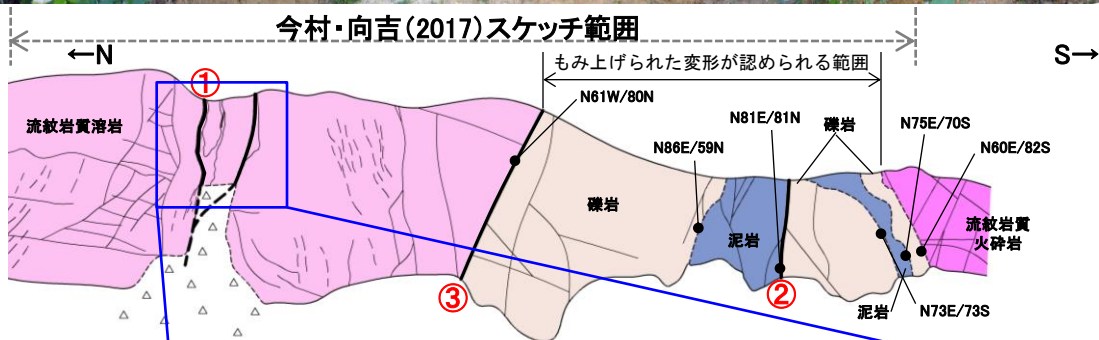
- ・流紋岩, 泥岩基質の礫岩層中に断層を確認。
- ・露頭における複合面構造, 条線姿勢より高角の右横ずれを伴う南落ち正断層であることが示唆される。

- ・森山付近において, 鹿野・吉田(1985)による断層通過位置付近の成相寺層の流紋岩中に断層が確認される。この露頭は今村・向吉(2017)の「A」森山南西断層露頭」に対応する。
- ・断層はN84E/72Nの走向傾斜を示し, 破碎幅50cm程度で風化が進み, 直線性に乏しい。
- ・断層露頭④では, 北から成相寺層の流紋岩, 礫岩, 泥岩, 成相寺層の流紋岩質火砕岩が比較的高角度で接し, 露頭は地層境界及び断層沿いで熱水変質とみられる粘土化が進み, 軟質である。

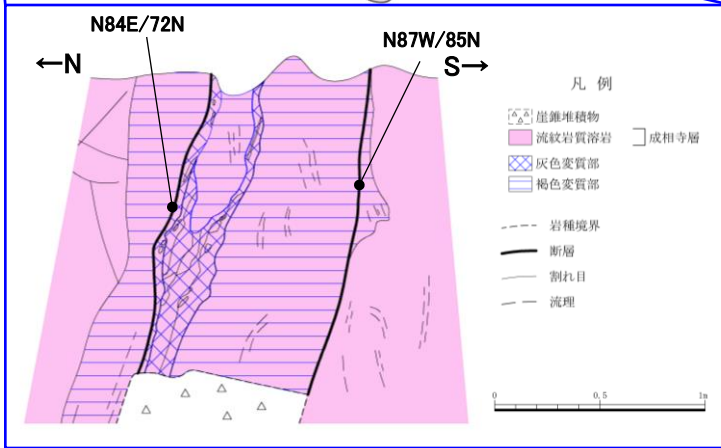
断層露頭④(スケッチ図)



←N 流紋岩質溶岩 (成相寺層) 礫岩 泥岩 礫岩等 流紋岩質火砕岩 (成相寺層) S→



今村・向吉(2017)スケッチ範囲



0 1 2m

- 凡例
- △ 崖堆積物
 - 成相寺層
 - 流紋岩質火砕岩
 - 流紋岩質溶岩
 - 泥岩
 - 礫岩
- 凡例
- 岩種境界
 - 断層
 - 割れ目
 - - - 流理

変位地形・リニアメント(Dランク)

- 原子力安全委員会のワーキンググループ3第17回会合 参考資料第2号(2009)に記載された推定活断層の位置
- 鹿野・吉田(1985)による断層, 伏在断層
- 今泉ほか編(2018)による央道(鹿島)断層

- 露頭位置
層理面の走向・傾斜
断層面の走向・傾斜
- 露頭岩種
- 泥岩
 - 砂岩
 - 礫岩
 - 安山岩質火砕岩
 - デイサイト質火砕岩
 - 流紋岩・流紋岩質火砕岩

今村・向吉(2017):
・流紋岩のガウジ帯中(a)に北落ちの正断層①, 流紋岩と泥岩基質の礫岩層境界中(b)に北落ちの正断層②が確認できる。
この他に流紋岩と泥岩基質の礫岩層境界に南落ちの断層③を記載している。

○当社の調査結果

- ①の断層に対して当社は, 鹿野・吉田(1985)に示されるせん断面に対応する断層と評価。
- ②及び③の断層に対して当社は, 流紋岩質溶岩及び流紋岩質火砕岩に挟まれた変形帯で認められる小断層と評価。

断層露頭⑤(地表地質踏査)

変位地形・リニアメント(Dランク)

- 原子力安全委員会のワーキンググループ3第17回会合参考資料第2号(2009)に記載された推定活断層の位置
- 鹿野・吉田(1985)による断層、伏在断層
- 今泉ほか編(2018)による宍道(鹿島)断層

露頭位置
層理面の走向・傾斜
断層面の走向・傾斜

露頭岩種

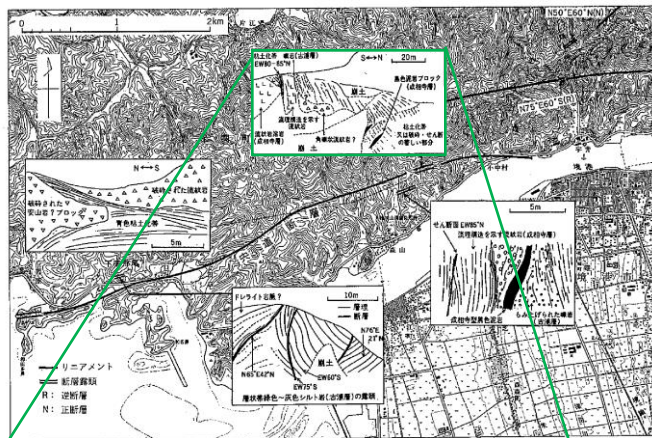
- 泥岩
- 砂岩
- 礫岩
- 安山岩質火砕岩
- デイサイト質火砕岩
- 流紋岩・流紋岩質火砕岩

本資料のうち、枠囲みの内容は公開できません。

・森山付近の造成地では、沢奥部の凹型斜面が切土され、延長約250mに及ぶ法面が形成されているが、大半は植生に覆われ、観察ができるのは西側の一部法面のみである。
・法面の西側には、成相寺層の流紋岩質火砕岩が分布し、断層が認められる(断層露頭⑤)。

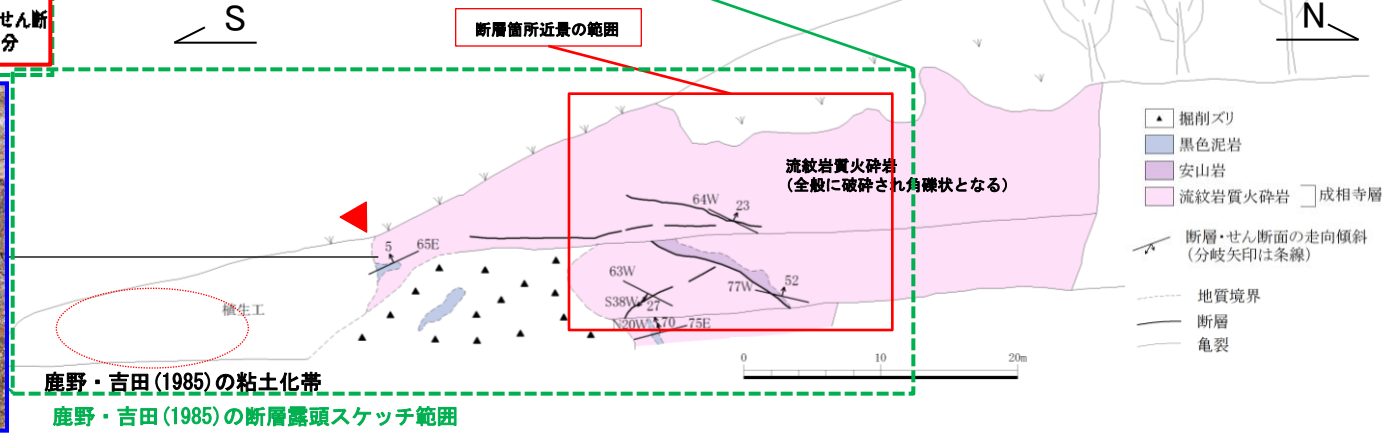
3. 央道断層の評価 (4)地質調査(央道断層の東側) ③森山付近

断層露頭⑤(地表地質踏査)



鹿野・吉田(1985)より引用・加筆

本資料のうち、枠囲みの内容は公開できません。

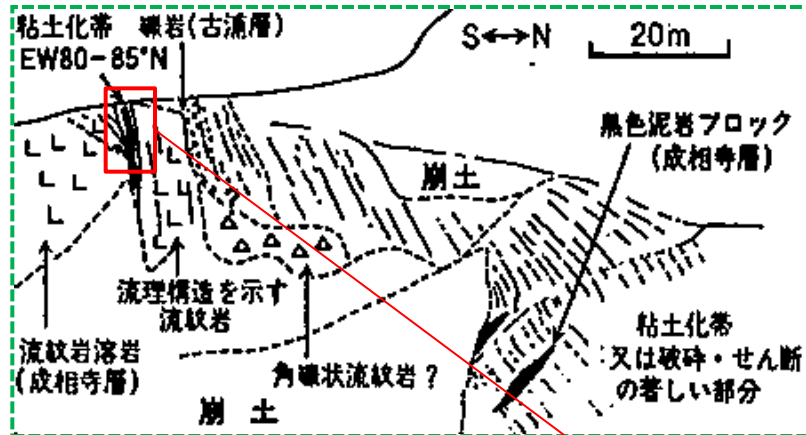


鹿野・吉田(1985)の粘土化帯

鹿野・吉田(1985)の断層露頭スケッチ範囲

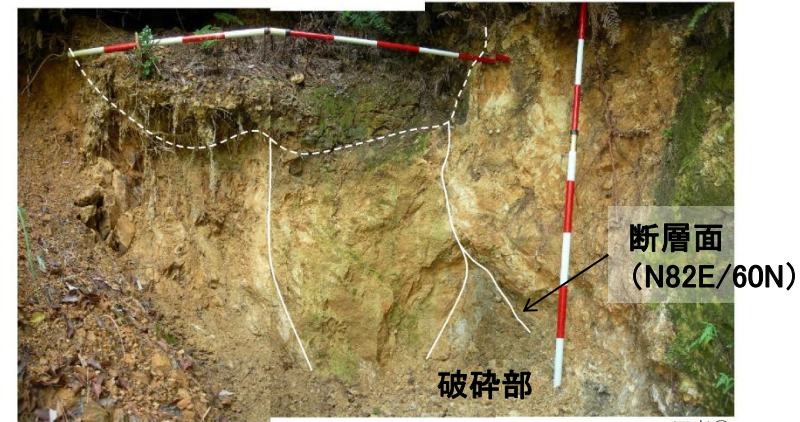
- 鹿野・吉田(1985)に記載されている「粘土化帯 EW80-85°N」に対応する断層(断層露頭⑤-1)は、現在、法面南側の植生工に覆われているが、造成前のこれまでの地表地質踏査(2007年3月)において、これに対応する断層露頭が確認されている(次頁参照)。「粘土化帯または破碎・せん断の著しい部分」は本地点の法面中央部の植生工未施工部(断層露頭⑤-2)に対応すると考えられる。
- 鹿野・吉田(1985)に記載されている「黒色泥岩ブロック(成相寺層)」は、法面に断片的に観察される泥岩と考えられる。

3. 宍道断層の評価 (4)地質調査(宍道断層の東側) ③森山付近
断層露頭⑤-1(地表地質踏査)



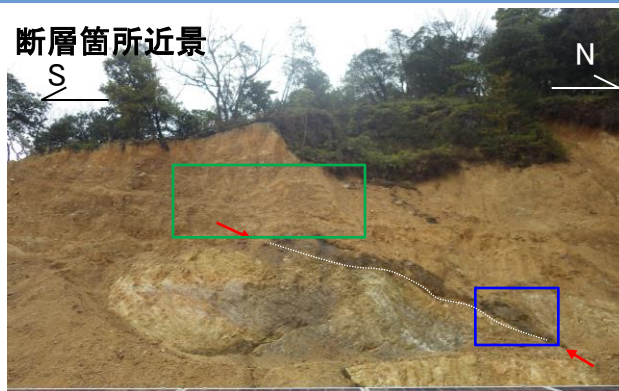
鹿野・吉田(1985)より引用・加筆

断層箇所近景(2007年3月)



- ・鹿野・吉田(1985)に記載されている「粘土帯EW80-85N」は、現在、法面南側の植生工に覆われているが、造成前のこれまでの地表地質踏査(2007年3月)において、これに対応する断層露頭が確認されている。
- ・断層は、N82E/60Nの走向傾斜を示し、幅0.2m~1m程度の破碎部を伴うが、断層面には連続する粘土は認められない。
- ・また、断層の上部は破碎を受けておらず、断層面は密着している。

3. 宍道断層の評価 (4)地質調査(宍道断層の東側) ③森山付近 断層露頭⑤-2(地表地質踏査)

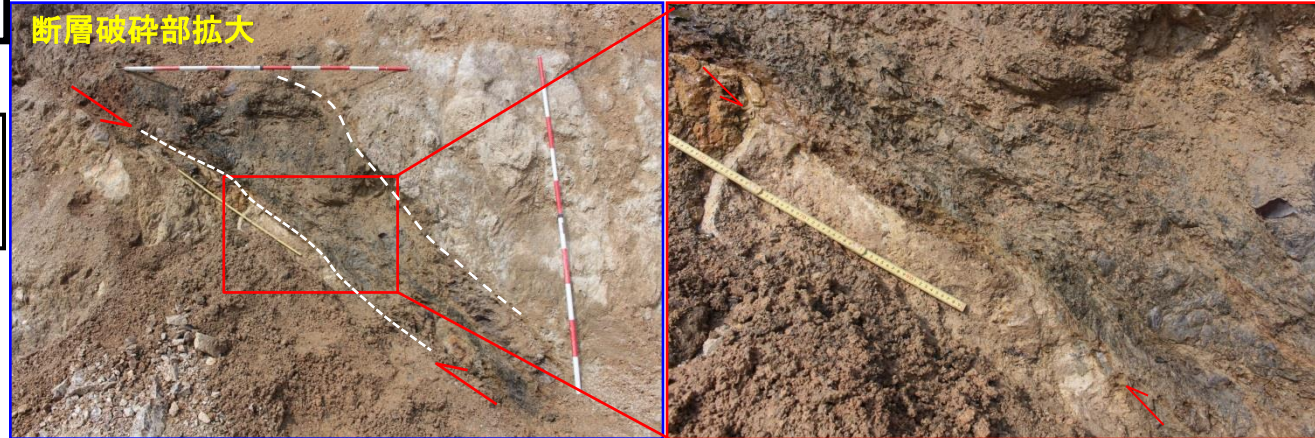


・流紋岩質火砕岩(成相寺層)中に断層(N77W/52Nの走向傾斜)が認められるが、法面上部では認められない。
・断層露頭⑤-2の法面上部では、低角度傾斜の亀裂が認められるが、法面下部から連続する断層は認められない。

本資料のうち、枠囲みの内容は公開できません。

変位地形・リニアメント(Dランク)

断層破碎部拡大



・破碎幅は最大で70cm程度で、一部、風化は進んでいるが固結・密着している。
・断層面には、極めて薄い粘土が認められるが連続性に乏しく、法面上部では確認されない。

露頭位置
層理面の走向・傾斜
断層面の走向・傾斜

露頭岩種
■ 泥岩
■ 砂岩
■ 礫岩
■ 安山岩質火砕岩
■ デイサイト質火砕岩
■ 流紋岩・流紋岩質火砕岩

- ・ 森山付近において、地表地質踏査等を追加実施(データ拡充)した結果、鹿野・吉田(1985)による断層通過位置付近に断層が推定される。
- ・ 断層(推定)通過位置の南側に位置する造成地西側法面(植生工の未施工範囲)には、成相寺層の流紋岩質火砕岩中に断層が認められるが、法面上部では不明瞭となる。
- ・ 断層は、N77W/52Nの走向傾斜を示し、破碎幅は最大で70cm程度で一部風化が進んでいるが、固結・密着している。

3. 宍道断層の評価 (4)地質調査(宍道断層の東側) ③森山付近 断層露頭⑥-1(地表地質踏査)



・造成地の東側には、沈砂地を掘り込んだ箇所です新たな露頭が確認される。
・断層は2条認められ、N57E/42N(a断層)及びN80E/55S(b断層)の走向傾斜を示し、造成法面西側の断層露頭⑤と異なっている。



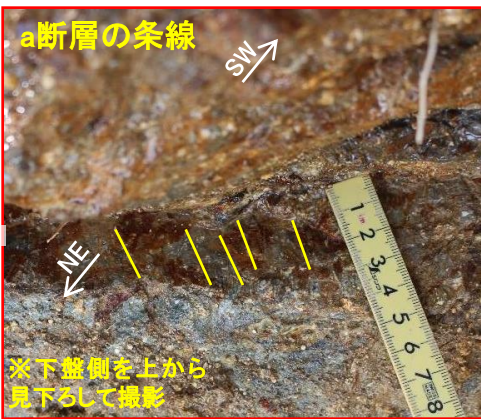
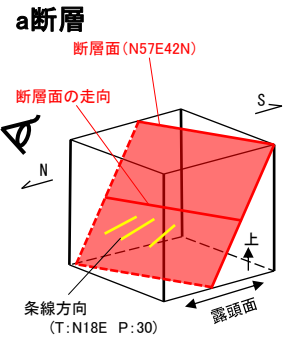
・断層露頭⑤と同様に、断層面に沿って安山岩が分布する。
・断層面は、固結・密着している。

本資料のうち、枠囲みの内容は公開できません。

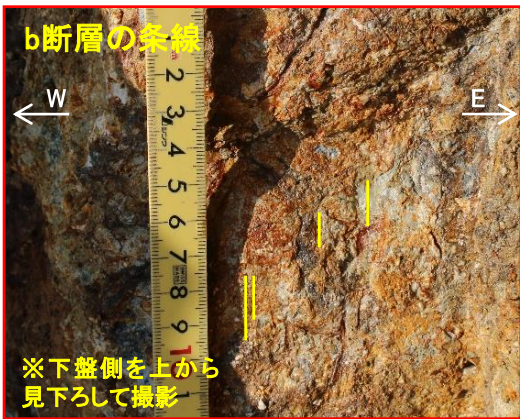
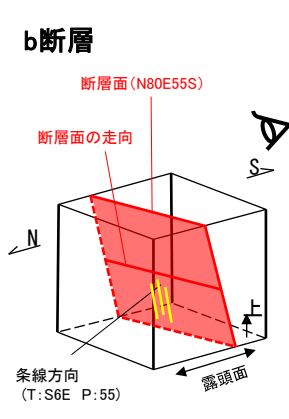
変位地形・リニアメント(Dランク)

- 原子力安全委員会のワーキンググループ3第17回会合参考資料第2号(2009)に記載された推定活断層の位置
- 鹿野・吉田(1985)による断層、伏在断層
- 今泉ほか編(2018)による宍道(鹿島)断層

- F.F.D 露頭位置
層理面の走向・傾斜
断層面の走向・傾斜
- 露頭岩種
- 泥岩
 - 砂岩
 - 礫岩
 - 安山岩質火砕岩
 - デイサイト質火砕岩
 - 流紋岩・流紋岩質火砕岩



・断層面には、不明瞭な条線(解釈線:白点線)が認められる。
・a断層の条線はT:N18E P:30, b断層の条線はT:S6E P:55であり、いずれも南北方向を示す。



・造成地東側の断層露頭⑥-1では、N57E/42N(a断層)及びN80E/55S(b断層)の断層が認められる。
・いずれの断層面にも不明瞭な条線が認められるが、いずれも南北方向を示す。また、断層面は固結・密着している。

断層露頭⑥-2(地表地質踏査)

変位地形・リニアメント(Dランク)

- 原子力安全委員会のワーキンググループ3第17回参考資料第2号(2009)に記載された推定活断層の位置
- 鹿野・吉田(1985)による断層, 伏在断層
- 今泉ほか編(2018)による宍道(鹿島)断層

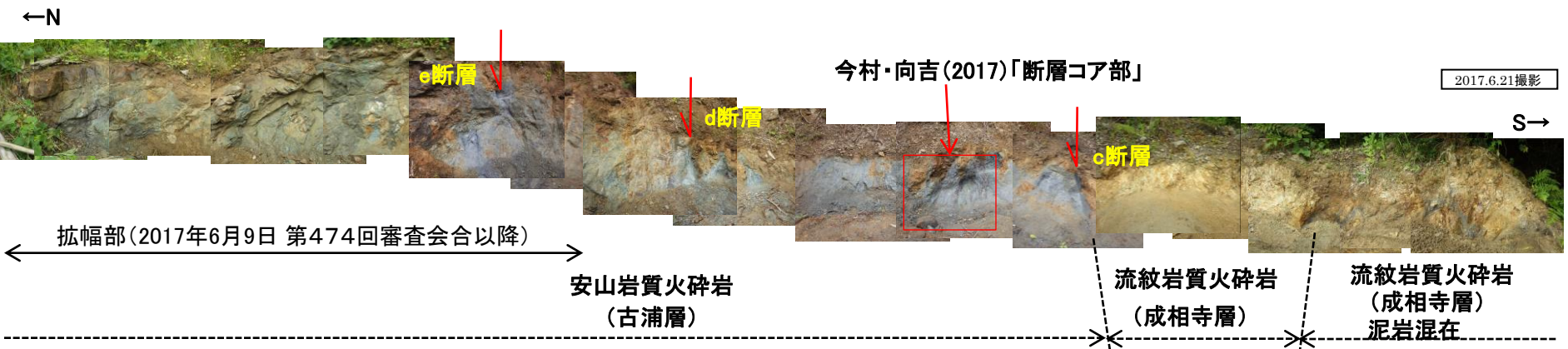
露頭位置
層理面の走向・傾斜
断層面の走向・傾斜

露頭岩種

- 泥岩
- 砂岩
- 礫岩
- 安山岩質火砕岩
- デイサイト質火砕岩
- 流紋岩・流紋岩質火砕岩



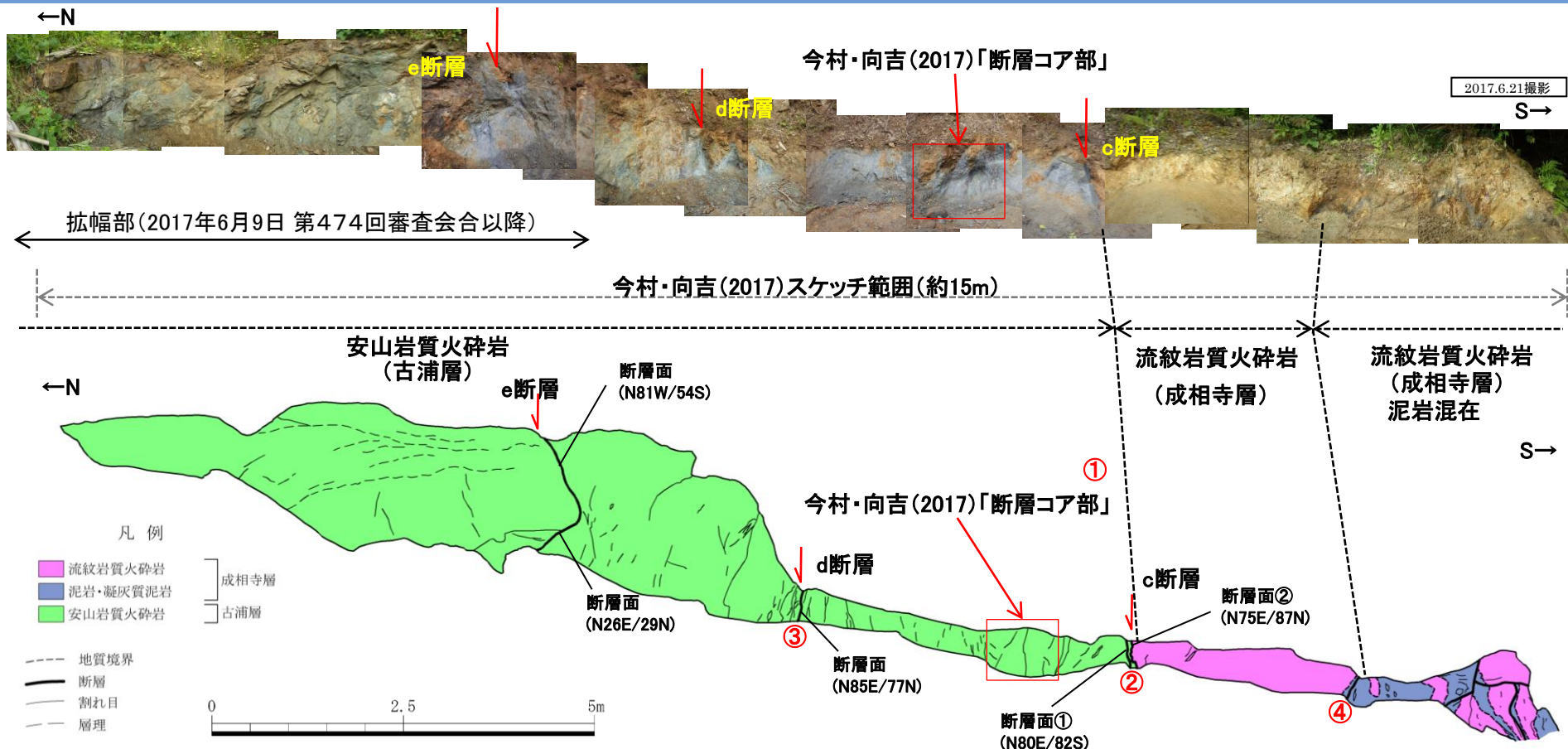
本資料のうち、枠囲みの内容は公開できません。



今村・向吉(2017) :
・古浦層と成相寺層を隔てる断層で破碎帯(約15m)が確認でき、断層コア部(幅約1m)中では細粒のガウジとともにせん断面を確認。姿勢は東西走向のものが多く、条線の姿勢は水平に限らず垂直に近いものも確認できる。

- ・造成地東側の断層露頭⑥-2では、古浦層の安山岩質火砕岩と成相寺層の流紋岩質火砕岩を境する断層(c断層)及び古浦層の安山岩質火砕岩中の断層(d断層, e断層)が認められる。露頭全体が熱水変質作用を受けており、それに伴う白色脈が認められる。白色脈は露頭中央の熱水変質部付近で多く認められる。この露頭は今村・向吉(2017)の「C)森山断層露頭」に対応する。
- ・南側の流紋岩質火砕岩中には、造成地西側と同様に、泥岩が断片的に観察される。

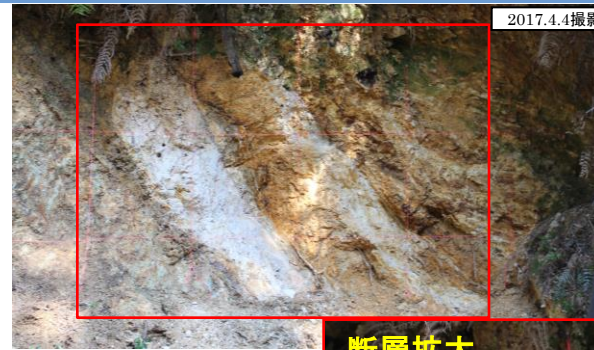
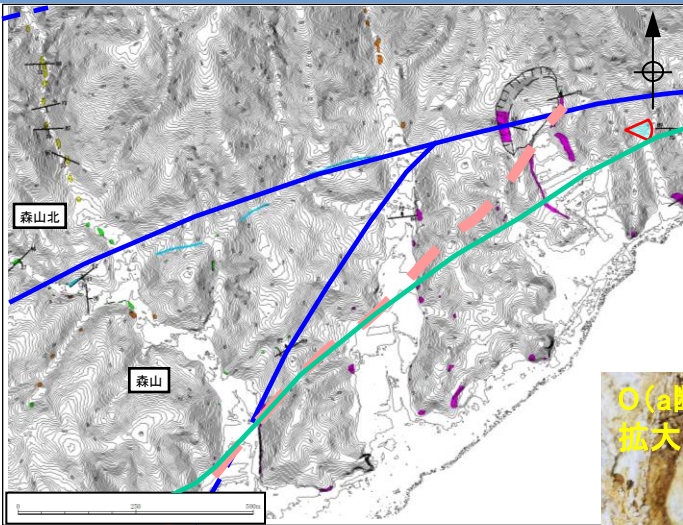
3. 央道断層の評価 (4)地質調査(央道断層の東側) ③森山付近 断層露頭⑥-2(スケッチ図)



今村・向吉(2017) :
 ・安山岩質火山礫凝灰岩のダメージ帯中には幅約1mのガウジ帯(断層コア部)及びより細粒なガウジを伴うせん断面が観察された(①)。ガウジ帯及びその周辺で4条の断層が認められる。
 ・古浦層と成相寺層の境界に断層があり(②), N83E90の断層面にN83E/15の条線が認められる。
 ・ガウジ帯北約3mに凝灰質泥岩ダメージ帯があり(③), そこで4条の断層が認められる。
 ・古浦層と成相寺層の境界から南約3mにシート状泥岩が引き伸ばされた構造が認められる(④)。

○当社の調査結果
 ・①の断層に対して当社は、いくつかのゆるく湾曲し連続性に乏しい性状を示す小断層と評価。
 ・②の断層に対して当社は、今村・向吉(2017)と同様に地質境界の断層(c断層の断層面②)と評価。ただし、主断層は地質境界から数cm北側(古浦層側)に分布する断層面①と評価。
 ・③の断層に対して当社は、安山岩質の細粒凝灰岩中の断層(d断層)と評価。
 ・④の断層に対して当社は、泥岩が断片的に観察される箇所ので認められる小断層と評価。

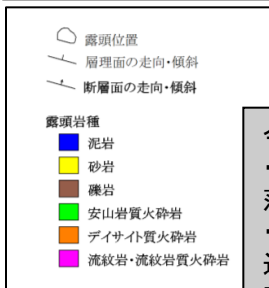
3. 宍道断層の評価 (4)地質調査(宍道断層の東側) ③森山付近 断層露頭⑦(地表地質踏査)



断層箇所近景

変位地形・リニアメント(Dランク)

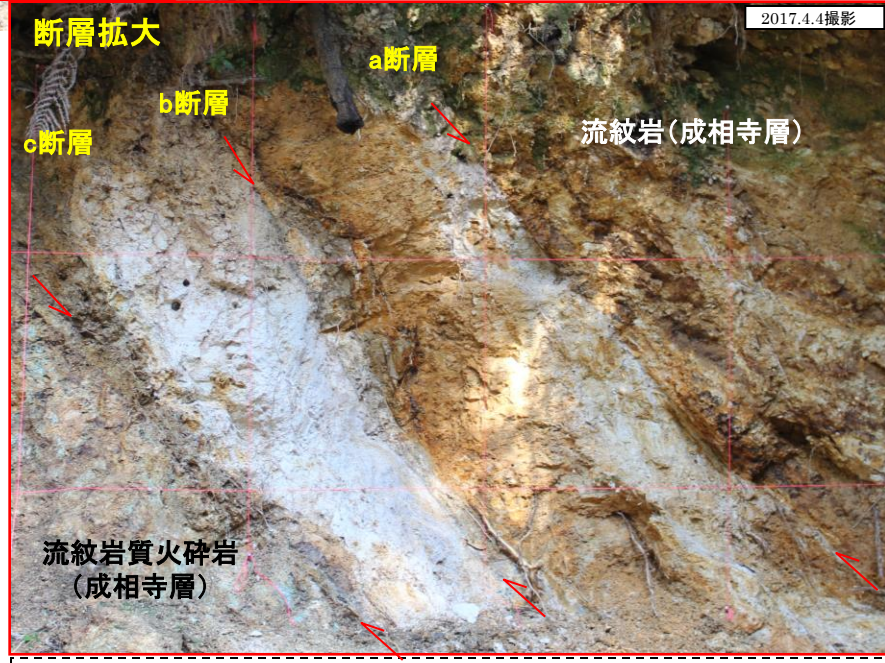
- 原子力安全委員会のワーキンググループ第3第17回会合参考資料第2号(2009)に記載された推定活断層の位置
- 鹿野・吉田(1985)による断層, 伏在断層
- 今泉ほか編(2018)による宍道(鹿島)断層



今村・向吉(2017) :
・流紋岩(成相寺層)中に南落ちの低角な正断層を確認。
・室内観察の結果, 正断層, 逆断層センスの断層が伏在していることが確認できる。



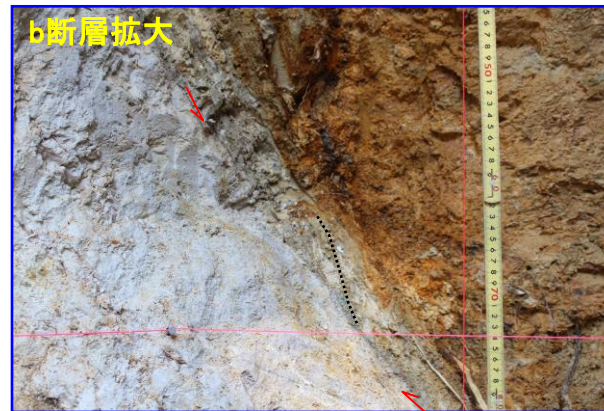
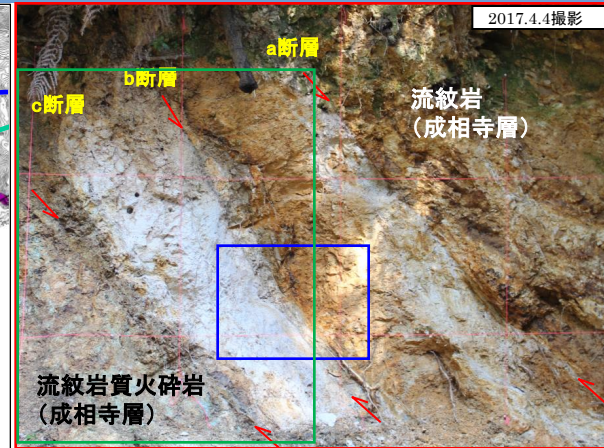
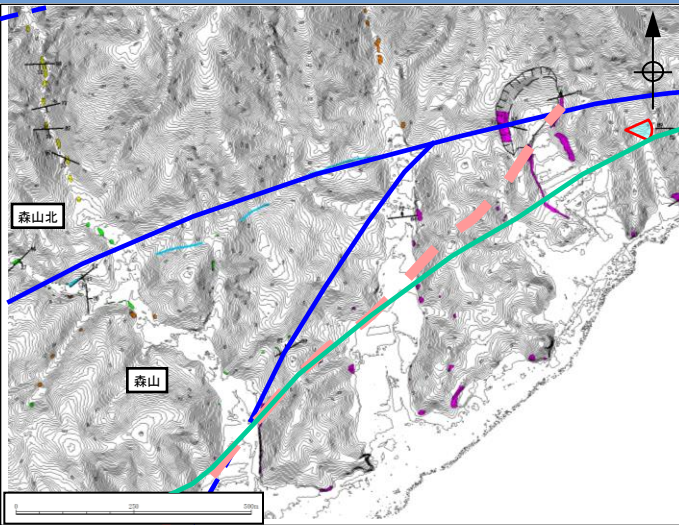
断層aで認められる条線は最急勾配方向(折尺に平行な方向, T:S1W P:59)を示す。



- ・流紋岩中の断層(a・b断層)及び成相寺層の流紋岩と流紋岩質火砕岩を境する断層(c断層)が認められる。
- ・a断層はN89W/59S, b断層はN60E/64S, c断層はN44E/68Sを示す。
- ・主に断層沿いで熱水変質とみられる粘土化が進み, 軟質となる。

- ・森山付近において, 地表地質踏査等を追加実施(データ拡充)した結果, 鹿野・吉田(1985)による断層通過位置付近に成相寺層の流紋岩中及び流紋岩と流紋岩質火砕岩を境する断層が認められる。この露頭は今村・向吉(2017)の「B」森山南東断層露頭」に対応する。
- ・主に断層沿いで熱水変質とみられる粘土化が進み, 軟質となる。また, 断層aの上盤側に正断層変位を示唆する引きずり構造が認められる。
- ・条線観察の結果, 上盤側に, 縦ずれ(走向方向から90°回転)の条線が認められる。

3. 宍道断層の評価 (4)地質調査(宍道断層の東側) ③森山付近 断層露頭⑦(地表地質踏査)



・b断層では逆断層変位を示唆する粒子の配列(解釈線:黒点線)が認められる。

・c断層では逆断層変位を示唆する引きずり構造(解釈線:黒点線)が認められる。

- 変位地形・リニアメント(Dランク)
- 原子力安全委員会のワーキンググループ3第17回会合参考資料第2号(2009)に記載された推定活断層の位置
- 鹿野・吉田(1985)による断層, 伏在断層
- 今泉ほか編(2018)による宍道(鹿島)断層

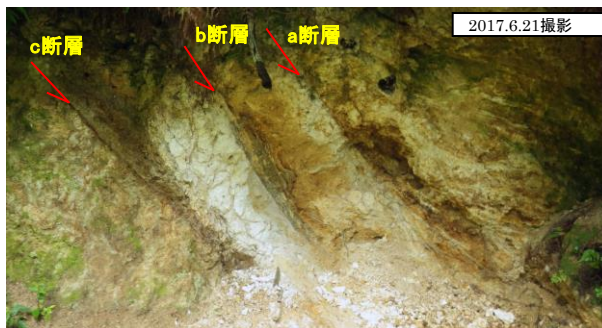
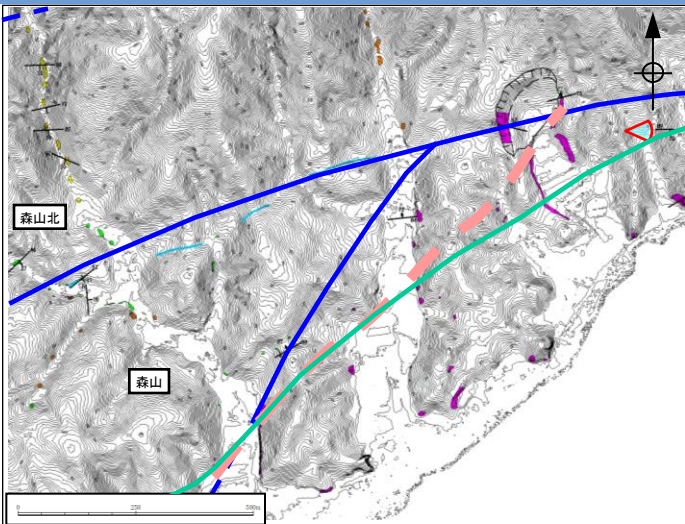
露頭位置	露頭岩種
FFD	泥岩
層理面の走向・傾斜	砂岩
断層面の走向・傾斜	礫岩
	安山岩質火砕岩
	デイサイト質火砕岩
	流紋岩・流紋岩質火砕岩

・ b断層及びc断層では、いずれも逆断層変位を示唆する構造が認められる。
 ・ 本地点で確認された断層は熱水変質とみられる粘土化が進み、軟質となるものの、いずれも縦ずれ変位を示す(条線観察は次頁参照)。

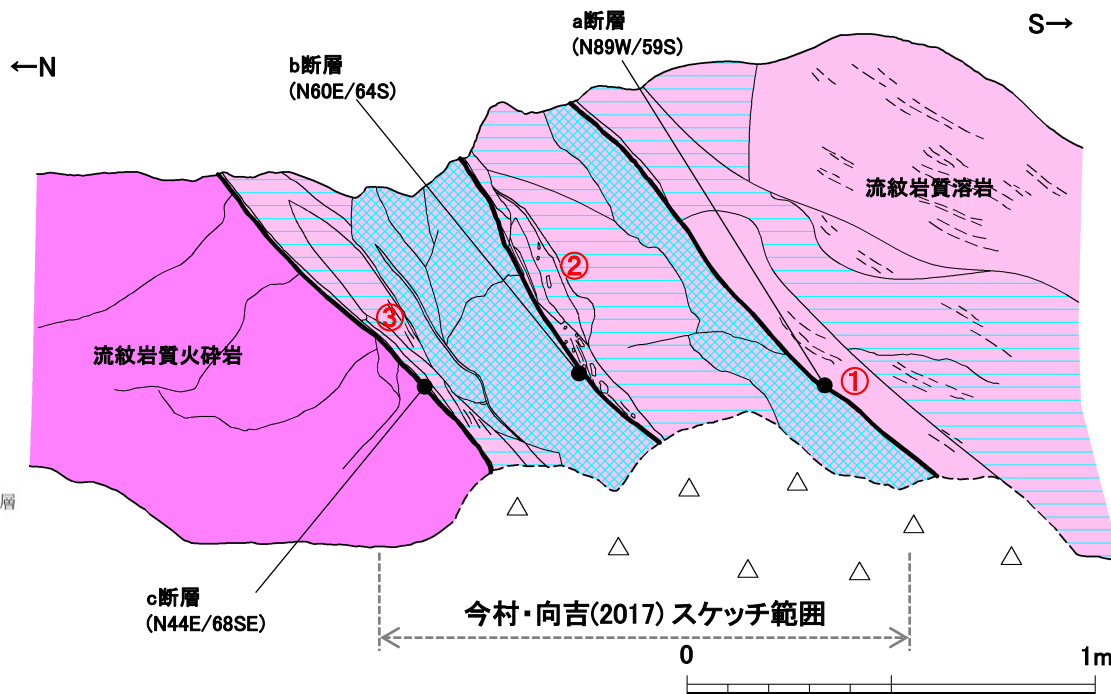
・ 山陰地域における応力場の変遷(新第三紀中新世～第四紀)を踏まえると、断層露頭⑦の最新活動面は、逆断層変位を示すb断層, c断層と考えられる。

3. 中央断層の評価 (4)地質調査(中央断層の東側) ③森山付近

断層露頭⑦(スケッチ図)



断層箇所近景



- 変位地形・リニアメント(Dランク)
- - - 原子力安全委員会のワーキンググループ3第17回会合参考資料第2号(2009)に記載された推定活断層の位置
- 鹿野・吉田(1985)による断層, 伏在断層
- 今泉ほか編(2018)による中央(鹿島)断層

- 凡例
- 崖錐堆積物
 - 流紋岩質火砕岩
 - 流紋岩質溶岩
 - 白色変質部
 - 褐色変質部
 - 地質境界
 - 断層
 - 割れ目
 - 流理
- 露頭岩種
- 泥岩
 - 砂岩
 - 礫岩
 - 安山岩質火砕岩
 - デイザイト質火砕岩
 - 流紋岩・流紋岩質火砕岩
- 露頭位置
層理面の走向・傾斜
断層面の走向・傾斜

今村・向吉(2017) :

- ・南落ちの正断層(a)①中には, 周囲のガウジに比べ, より細粒なガウジを伴う構造が確認でき, せん断面はシャープなものである。
- ・室内における研磨片観察では複合面構造より正断層(b)②が確認できる。
- ・室内における研磨片観察では複合面構造より逆断層(c)③が確認できる。

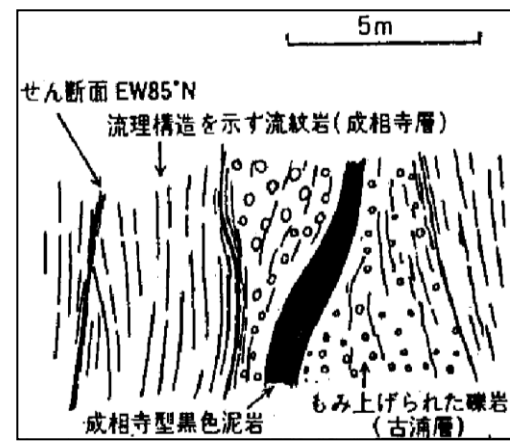
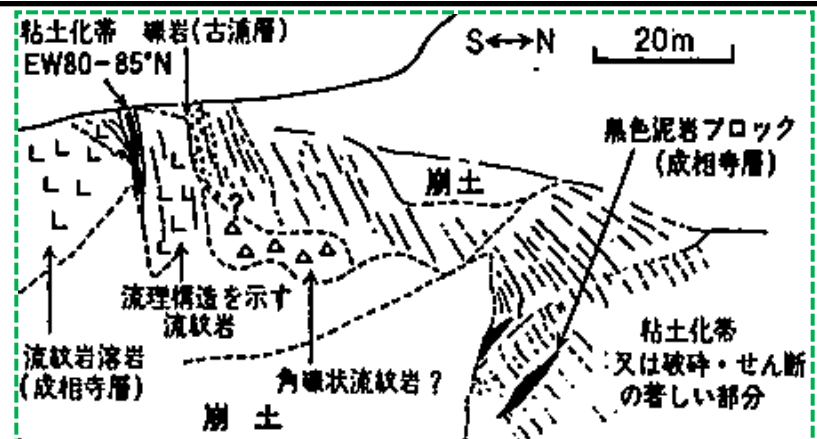
第474回審査会合以降, ブロック試料採取によって掘り込まれた露頭のスケッチを実施した。

○当社の調査結果

- ・①の断層に対して当社は, 正断層(a断層)と評価。
- ・②の断層に対して当社は, 逆断層(b断層)と評価。
- ・③の断層に対して当社は, 逆断層(c断層)と評価。

3. 宍道断層の評価 (4)地質調査(宍道断層の東側) ③森山付近

森山付近で確認された断層露頭の連続性・活動性評価



鹿野・吉田(1985)より引用

上図:断層露頭⑤に対応
下図:断層露頭④に対応

本資料のうち、枠囲みの内容は公開できません。

- | | | |
|---|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> □ 沖積層 ■ 地すべり堆積物 ■ Mf面段丘堆積物 ■ 流紋岩・流紋岩質火砕岩 ■ 砂岩・礫岩 ■ デイサイト～流紋岩質火砕岩類 ■ 安山岩質火砕岩 | <ul style="list-style-type: none"> — 地質境界 — 断層 — 断層(推定) | <p>FD 露頭位置
層理面の走向・傾斜</p> <p>露頭岩種</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 泥岩 ■ 砂岩 ■ 礫岩 ■ 安山岩質火砕岩 ■ デイサイト質火砕岩 ■ 流紋岩・流紋岩質火砕岩 |
|---|--|--|

変位地形・リニアメント(Dランク)

- 原子力安全委員会のワーキンググループ第3第17回会合 参考資料第2号(2009)に記載された推定活断層の位置
- 鹿野・吉田(1985)による断層, 推定断層, 伏在断層
- 今泉ほか編(2018)による宍道(鹿島)断層

「断層露頭④, 断層露頭⑤及び断層露頭⑥」と、「森山ボーリング調査, 森山トレンチ調査及び断層露頭調査により確認された断層」について, 鹿野・吉田(1985)に示されている断層に対応する破碎幅が数m～数10m程度, 破碎部に泥岩が取り込まれている, 地質境界付近に位置する等の共通的な特徴が認められることから, 鹿野・吉田(1985)による断層に対応する断層と考えられる。森山トレンチ調査等の結果, 後期更新世以降の断層活動は認められない。「森山北(ピット調査)」では, 鹿野・吉田(1985)の宍道断層の通過位置に対応するが, 後期更新世以降の断層活動は認められない。

3. 宍道断層の評価 (4)地質調査(宍道断層の東側) ③森山付近

森山付近(まとめ)

1. 地表地質踏査

- ・造成地付近の地表地質踏査の結果、複数の断層露頭(断層露頭④～⑦)を確認している。
- ・森山(造成地付近)における今村・向吉(2017)(断層露頭④, 断層露頭⑥-2及び断層露頭⑦)を踏まえ、データ拡充を実施した。
- ・データ拡充結果を踏まえた各断層露頭の性状は、以下のとおりである(第474回審査会合以降のデータ拡充部は下線部)。

(1)断層露頭④(造成地の南西側の露頭)

- ・今村・向吉(2017)によると、「流紋岩、泥岩基質の礫層中に断層を確認。露頭における複合面構造、条線姿勢より高角の右横ずれを伴う南落ち正断層であることが示唆される。」とされている。
- ・鹿野・吉田(1985)による断層通過位置付近に断層が確認される。断層は破碎幅50cm程度で風化が進み、直線性に乏しい。
- ・研磨片観察及びCT画像解析の結果、断層面は湾曲しており、複合面構造は認められない。

(2)断層露頭⑤(造成地の西側法面の露頭)

- 鹿野・吉田(1985)による断層通過位置付近に断層が確認される。
- ・断層露頭⑤-1
断層は、幅0.2m～1m程度の破碎部を伴うが、断層面には連続する粘土は認められない。また、断層の上部は破碎を受けておらず、断層面は密着している。
- ・断層露頭⑤-2
断層は、破碎幅は最大で70cm程度で一部風化が進んでいるが、固結・密着している。

3. 宍道断層の評価 (4)地質調査(宍道断層の東側) ③森山付近

森山付近(まとめ)

(3)断層露頭⑥(造成地の東側法面の露頭)

鹿野・吉田(1985)による断層通過位置付近に断層が確認される。

・断層露頭⑥-1

断層は、固結・密着している。

・断層露頭⑥-2

・今村・向吉(2017)

「古浦層と成相寺層を隔てる断層で破碎帯(約15m)が確認でき、断層コア部(幅約1m)中では細粒のガウジとともにせん断面を確認。姿勢は東西走向のものが多く、条線の姿勢は水平に限らず垂直に近いものも確認できる。」とされている。

・c断層

古浦層の安山岩質火砕岩と、成相寺層の流紋岩質火砕岩を境する断層(c断層)が認められる。最新活動面と判断される断層面①には、縦ずれ優勢の条線が認められる。なお、断層面②では、横ずれ優勢の条線が認められる。また、c断層付近を境に北側と南側で色調が異なるのは、間隙率の違いによる風化程度の違いと考えられる。

・d断層

古浦層の安山岩質火砕岩中に、小断層(d断層)が認められる。断層面には、縦ずれ優勢の条線(逆断層センス)が認められる。断層面付近では、全体的に熱水変質作用を被っており、網目状の白色脈が認められる。

・e断層

古浦層の安山岩質火砕岩中に、大きく屈曲する小断層(e断層)が認められる。

・熱水変質部

・熱水変質部(中央)

古浦層の安山岩質火砕岩中に、網目状の白色脈で特徴付けられる熱水変質が全体的に認められる。その中で、ゆるく湾曲し連続性に乏しい性状を示す小断層が見られる箇所では試料採取を行い、各種分析を実施した結果、断層面には、濁沸石が晶出しており、それに変位・変形が認められないことから、後期更新世以降の活動性はないと考えられる。

・熱水変質部(北側、南側)

CT画像解析の結果、明瞭なせん断面及び複合面構造は認められないことから、熱水に伴う粘土脈と考えられる。
また、実体顕微鏡観察の結果、縦ずれ優勢の条線(正断層センスあるいは逆断層センス)である。

3. 宍道断層の評価 (4)地質調査(宍道断層の東側) ③森山付近

森山付近(まとめ)

(4)断層露頭⑦(造成地の南東側の露頭)

- ・今村・向吉(2017)によると、「流紋岩(成相寺層)中に南落ちの低角な正断層を確認。室内観察の結果、正断層、逆断層センスの断層が伏在していることが確認できる。」とされている。
- ・鹿野・吉田(1985)による断層通過位置付近に、3条の断層が確認され、南より正断層変位を示すa断層、逆断層変位を示すb断層、逆断層変位を示すc断層である。本地点で確認された断層は熱水変質とみられる粘土化が進み、軟質となるものの、いずれも縦ずれ変位を示す。
山陰地域における応力場の変遷を踏まえると、最新活動面は、逆断層変位を示すb断層、c断層と考えられる。
- ・a~c断層の研磨片観察及びCT画像解析の結果、いずれの断層面も直線性に乏しく、複合面構造は認められない。

2. 断層露頭の連続性・活動性評価

- ・森山の造成地付近で確認された断層露頭の連続性確認の結果、「断層露頭④、断層露頭⑤及び断層露頭⑥」と、「森山ボーリング調査、森山トレンチ調査及び断層露頭調査により確認された断層」については、破碎幅が数m~数10m程度、破碎部に泥岩が取り込まれている、地質境界付近に位置する等の共通的な特徴が認められることから、鹿野・吉田(1985)に示されている断層に対応する断層と考えられる。
- ・上記断層について、森山トレンチ調査等の結果、後期更新世以降の断層活動は認められない。

3. まとめ

地表地質踏査(造成地付近)で確認された断層露頭について、上載地層(後期更新世の地層)が存在しないため、上載地層による評価ができないが、個別地点の露頭観察及び室内試験の結果及び断層露頭の連続性・活動性評価の結果を踏まえると、後期更新世以降の活動は認められないと考えられる。

余白

3. 宍道断層の評価 (4)地質調査(宍道断層の東側) ④東端(美保湾及び美保関町東方沖合)の調査結果 美保湾及び美保関町東方沖合い(音波探査, 調査位置図)

凡 例

PE PE 主な断層のうち後期更新世以降の活動が認められないもの(海域)

PE PE 主な断層のうち後期更新世以降の活動が否定できないもの(海域)

中国電力株式会社音波探査測線 (スパーカー)

中国電力株式会社音波探査測線 (エアガン・マルチチャンネル)

中国電力株式会社音波探査測線 (ウォーターガン・マルチ) (2014年調査)

中国電力株式会社音波探査測線 (ブーマー・マルチ) (2014年調査)

中国電力株式会社音波探査測線 (エアガン・マルチ) (2014年調査)

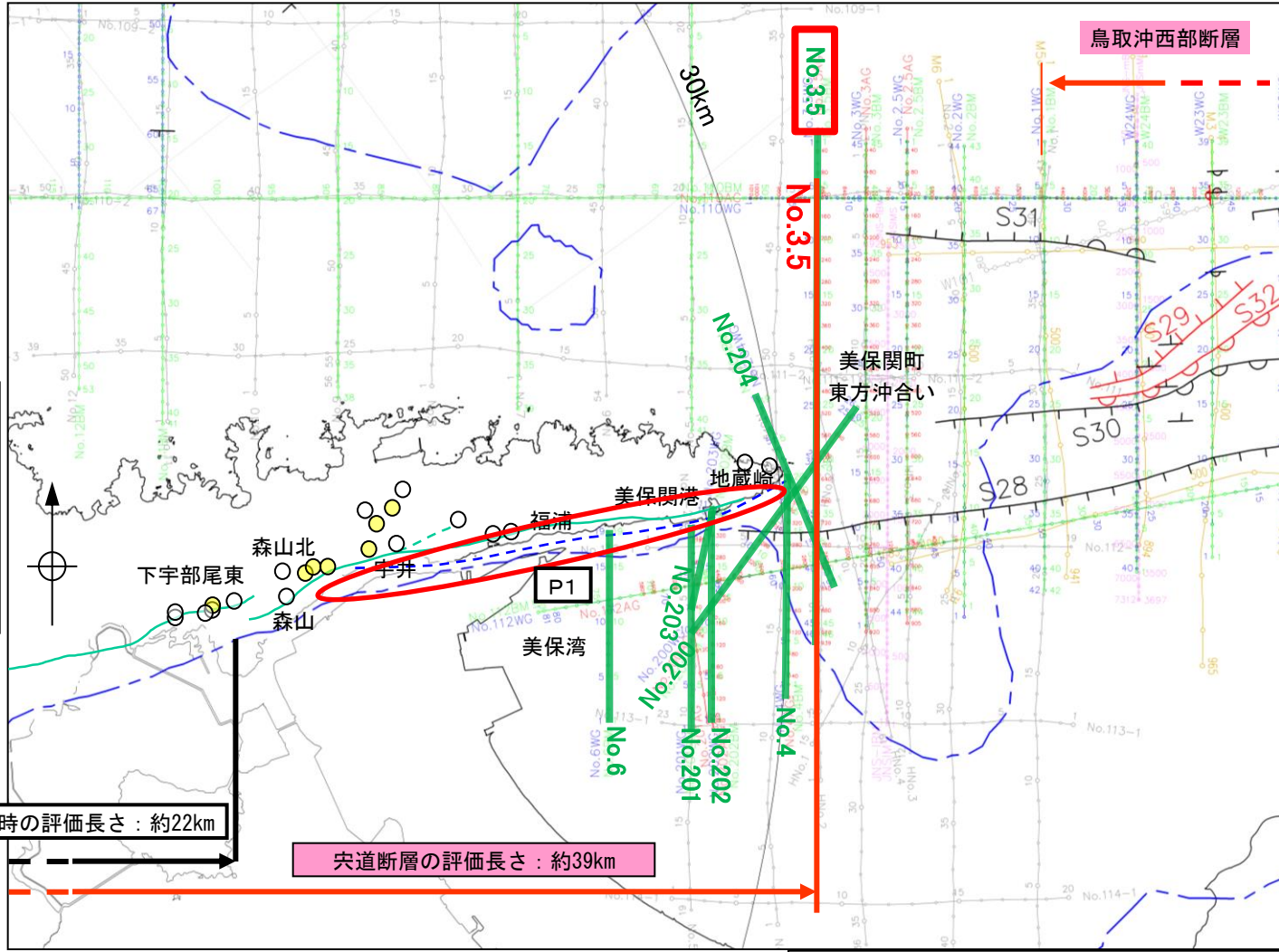
原子力安全・保安院音波探査測線 (ブーマー及びウォーターガン・マルチチャンネル) (2008年調査)

鉛直1次微分のゼロコンター

鹿野・吉田(1985)及び鹿野・中野(1985)による伏在断層(宍道断層の海域のみ記載)

今泉ほか編(2018)による宍道(鹿島)断層帯, 推定活断層

重力異常・地質構造から推定された構造不連続(P1)(地震調査委員会(2016a))



申請時の評価長さ: 約22km

宍道断層の評価長さ: 約39km

調査地点

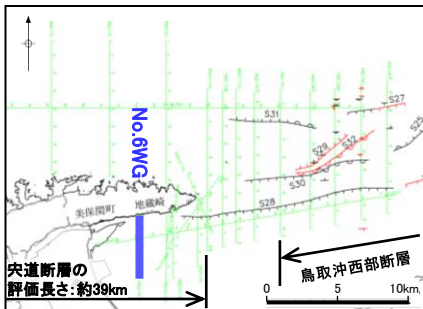
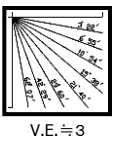
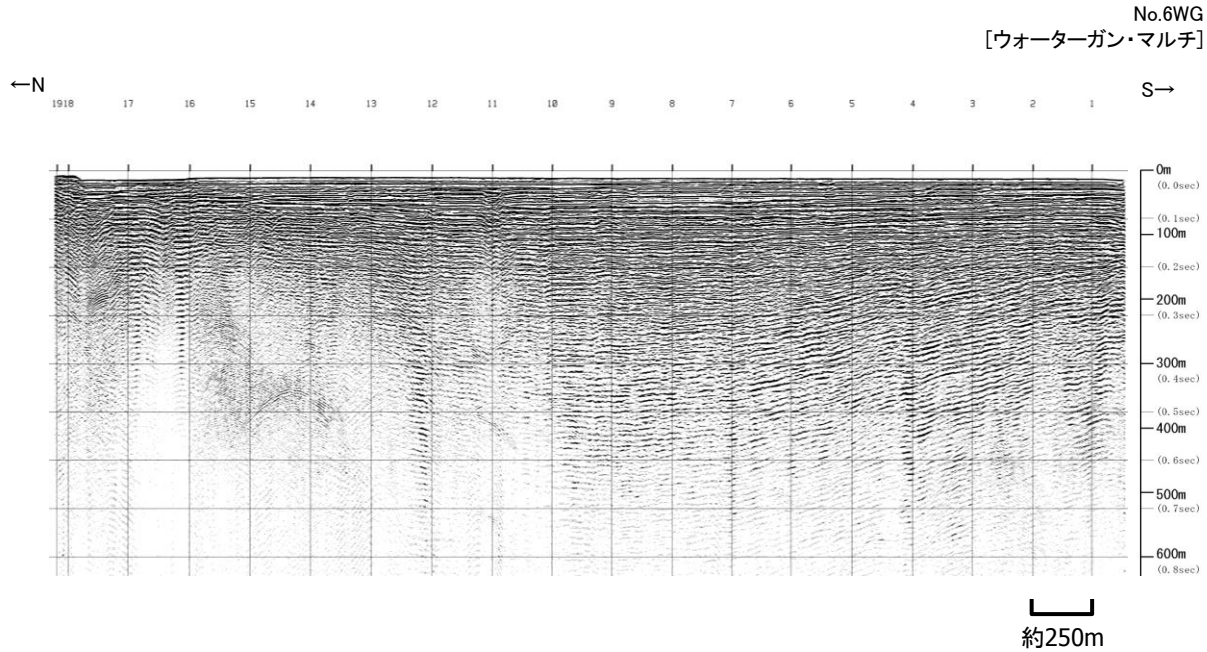
○: 後期更新世以降の断層活動が認められない

●: 後期更新世以降の断層活動が完全には否定できない

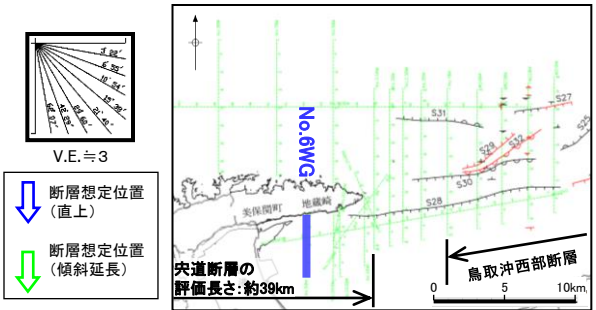
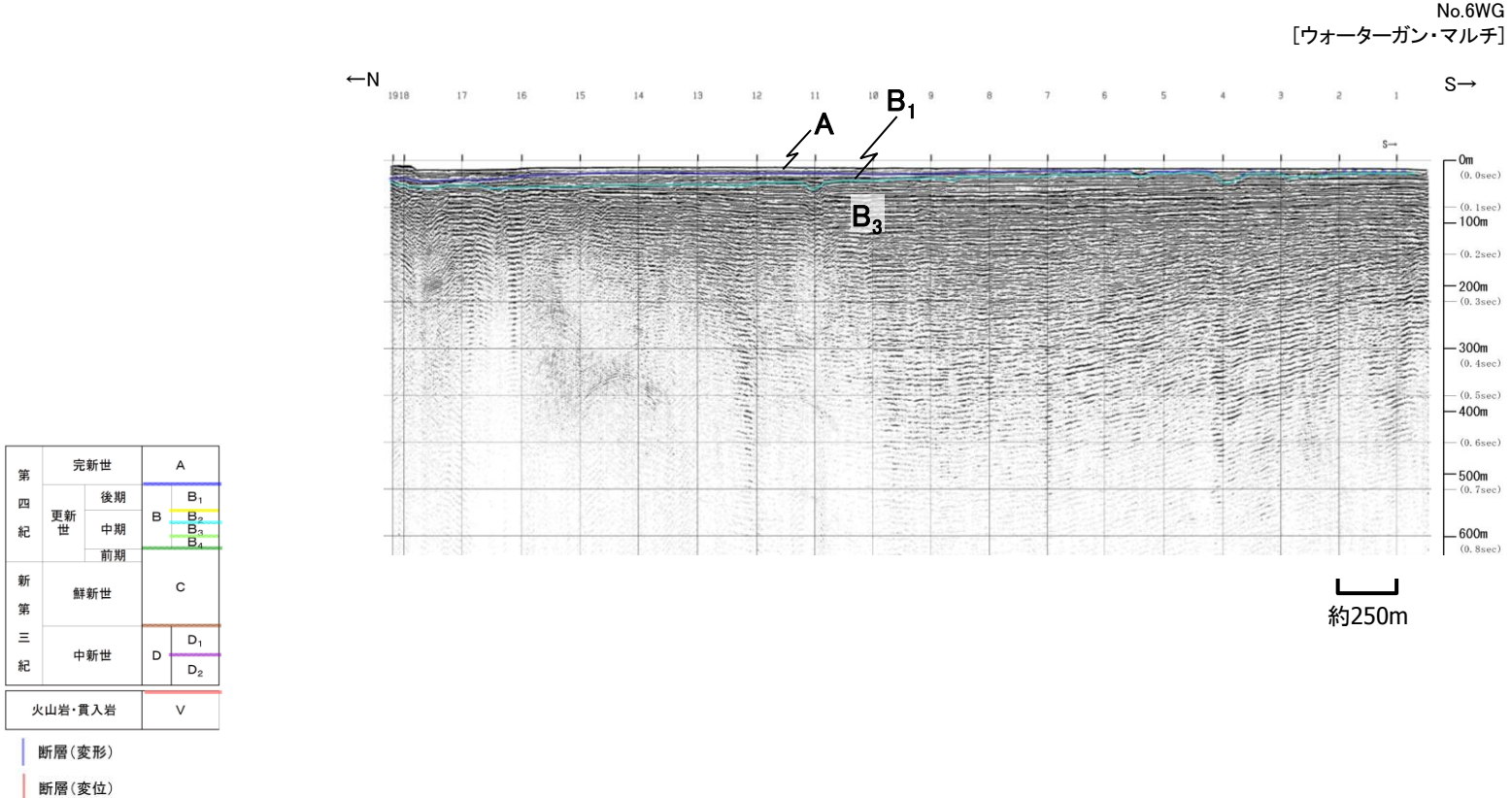


・美保湾及び美保関町東方沖合いにおいて, 複数の音源を用いた音波探査により, 断層の存否を確認した。

3. 宍道断層の評価 (4)地質調査(宍道断層の東側) ④東端(美保湾及び美保関町東方沖合)の調査結果
美保湾(No.6WG測線 音波探査記録)

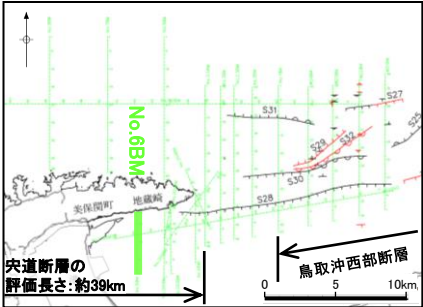
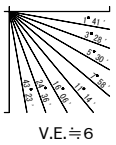
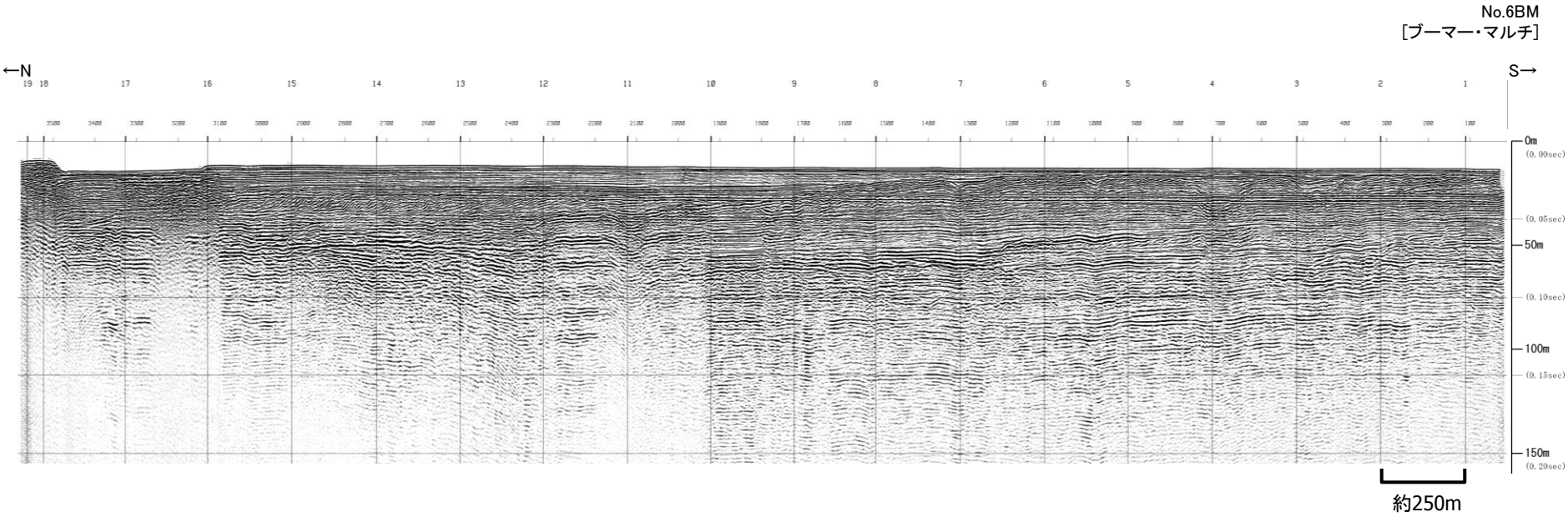


3. 宍道断層の評価 (4)地質調査(宍道断層の東側) ④東端(美保湾及び美保関町東方沖合)の調査結果
美保湾(No.6WG測線 音波探査解析図)

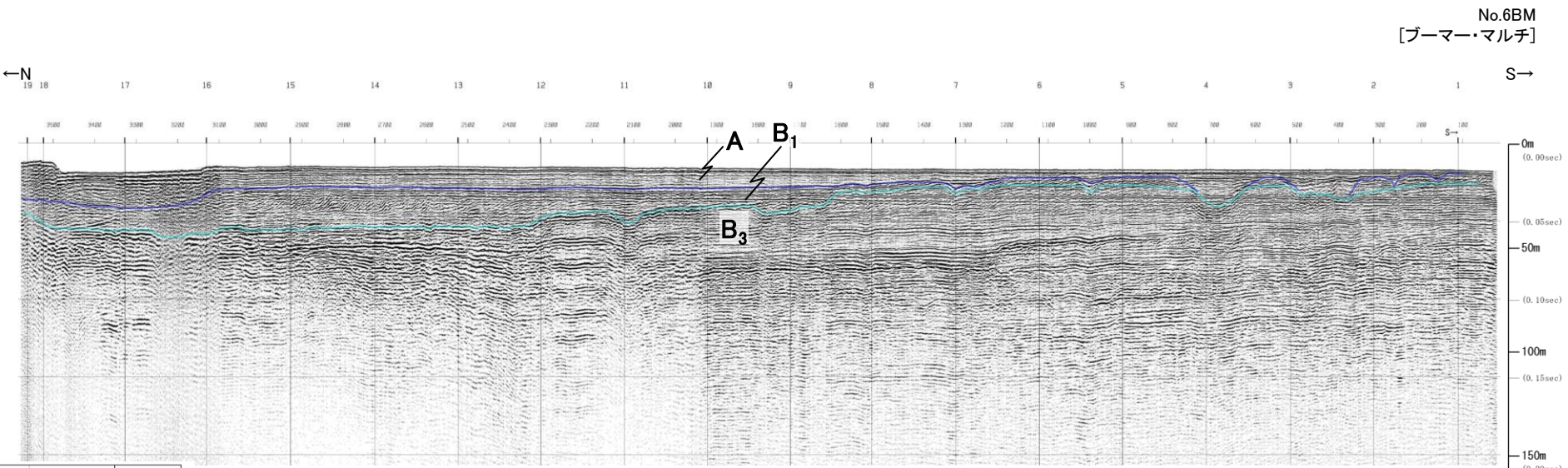


・B₁層以上に断層活動を示唆する変位や変形は認められない。

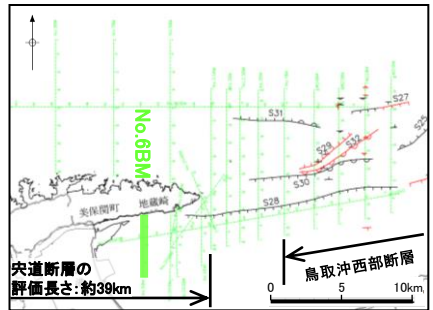
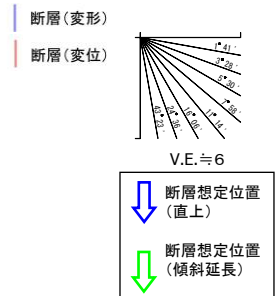
3. 宍道断層の評価 (4)地質調査(宍道断層の東側) ④東端(美保湾及び美保関町東方沖合)の調査結果
美保湾(No.6BM測線 音波探査記録)



3. 宍道断層の評価 (4)地質調査(宍道断層の東側) ④東端(美保湾及び美保関町東方沖合)の調査結果
美保湾(No.6BM測線 音波探査解析図)

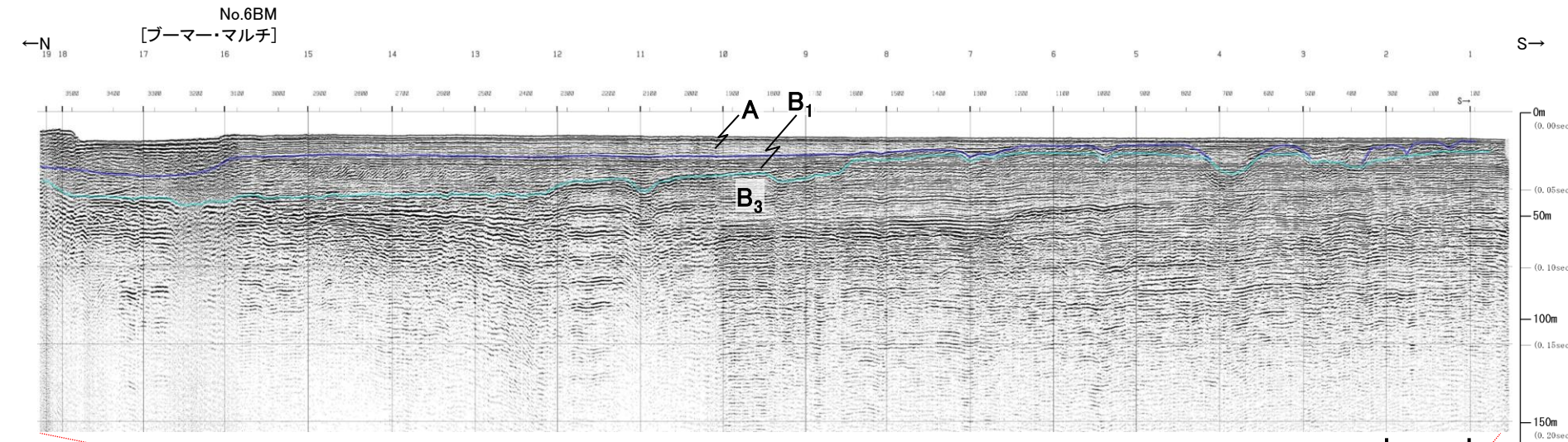


第四紀	完新世	A	
	更新世	後期	B ₁
		中期	B ₂
			前期
新第三紀	鮮新世	C	
	中新世	D ₁	
		D ₂	
火山岩・貫入岩		V	

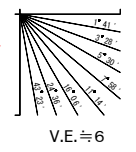


・B₁層以上に断層活動を示唆する変位や変形は認められない。

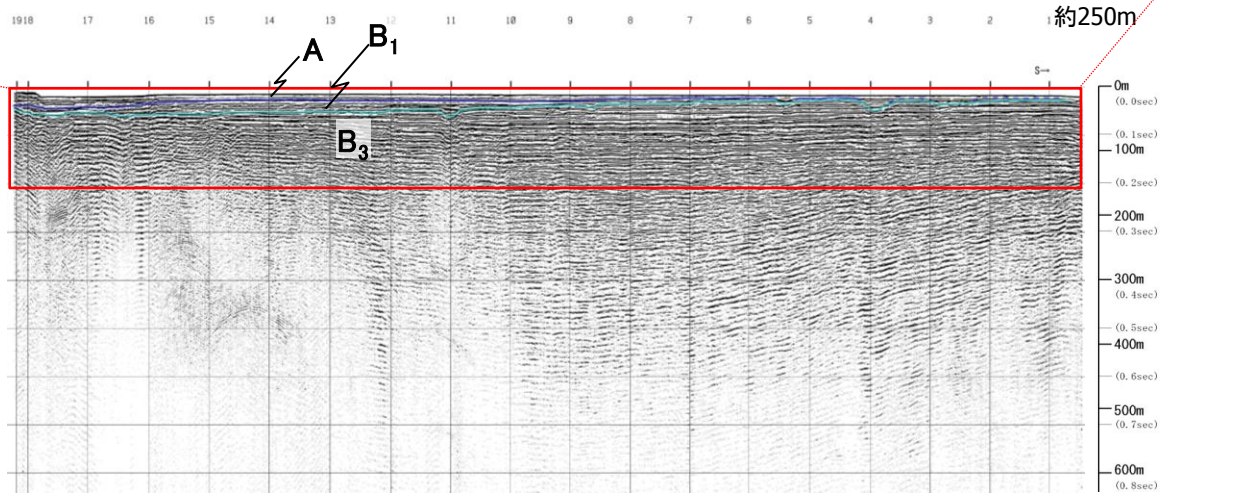
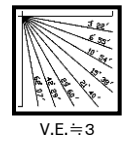
3. 中央断層の評価 (4)地質調査(中央断層の東側) ④東端(美保湾及び美保関町東方沖合)の調査結果
美保湾(No.6測線 音波探査解析図)



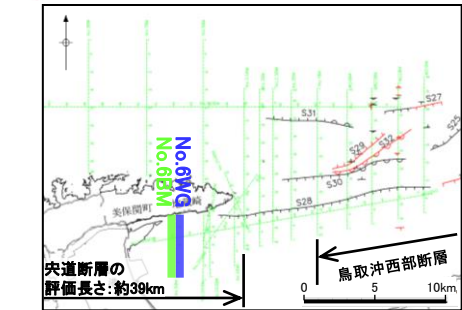
第四紀	完新世	A
	後期	B ₁
	中期	B ₂ B ₃
更新世	前期	C
	鮮新世	C
新第三紀	中新世	D ₁ D ₂
	中新世	D ₂
火山岩・貫入岩		V



No.6WG
[ウオーターガン・マルチ]



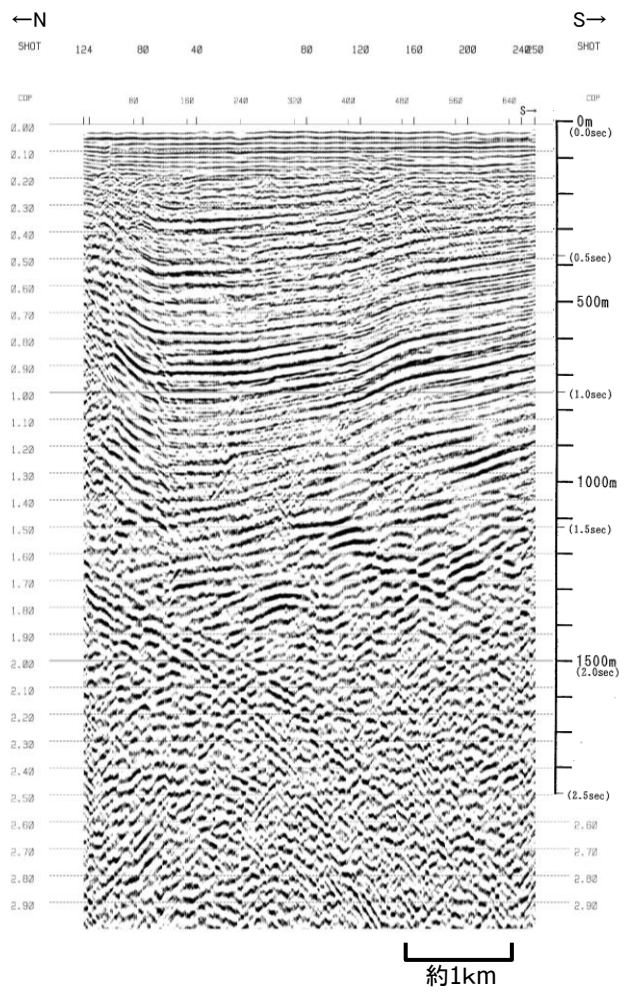
・ブーマー記録においてB₁層以上に断層活動を示唆する変位や変形は認められない。



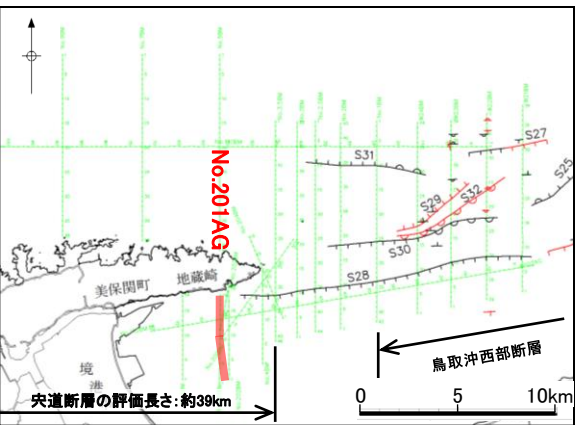
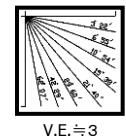
余白

3. 宍道断層の評価 (4)地質調査(宍道断層の東側) ④東端(美保湾及び美保関町東方沖合)の調査結果
美保湾(No.201AG測線 音波探査記録)

No.201AG
[エアガン・マルチ]

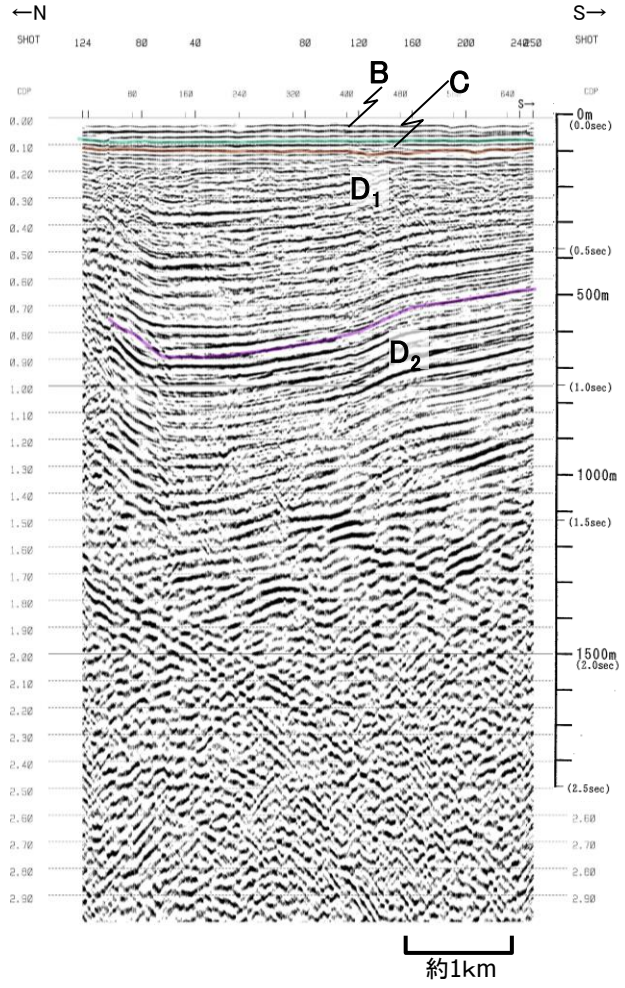


約1km



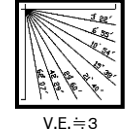
3. 宍道断層の評価 (4)地質調査(宍道断層の東側) ④東端(美保湾及び美保関町東方沖合)の調査結果
美保湾(No.201AG測線 音波探査解析図)

No.201AG
[エアガン・マルチ]

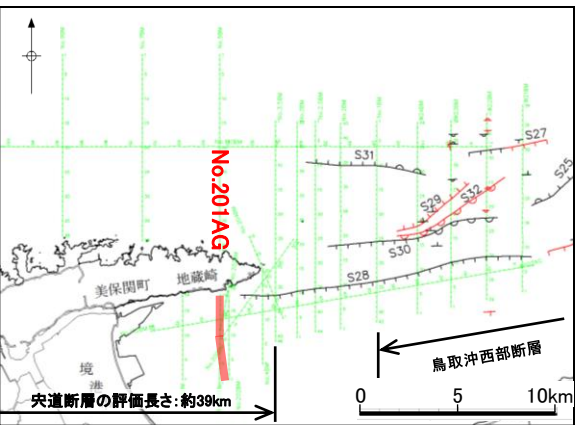


第四紀	完新世	A
	更新世	後期 B ₁
		中期 B ₂
		前期 B ₃
新第三紀	鮮新世	C
	中新世	D ₁ D ₂
火山岩・貫入岩		V

断層(変形)
断層(変位)



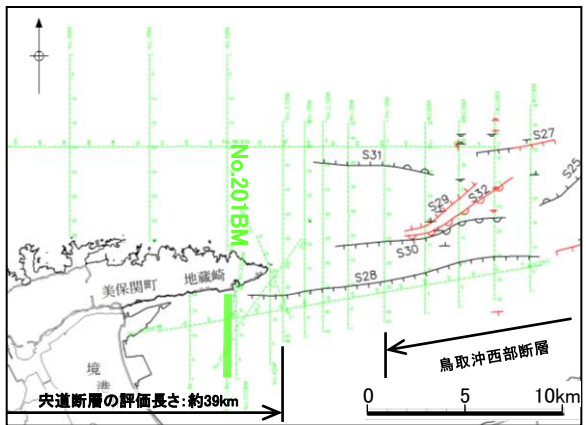
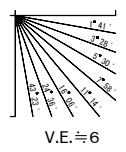
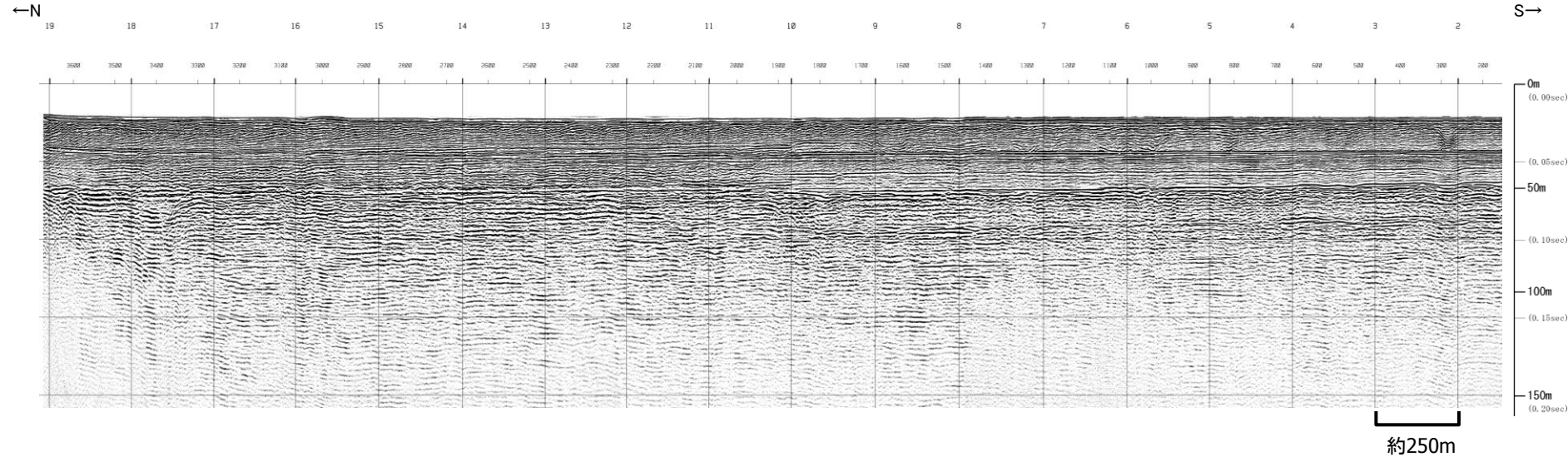
断層想定位置(直上)
断層想定位置(傾斜延長)



断層活動を示唆する変位や変形は認められない。

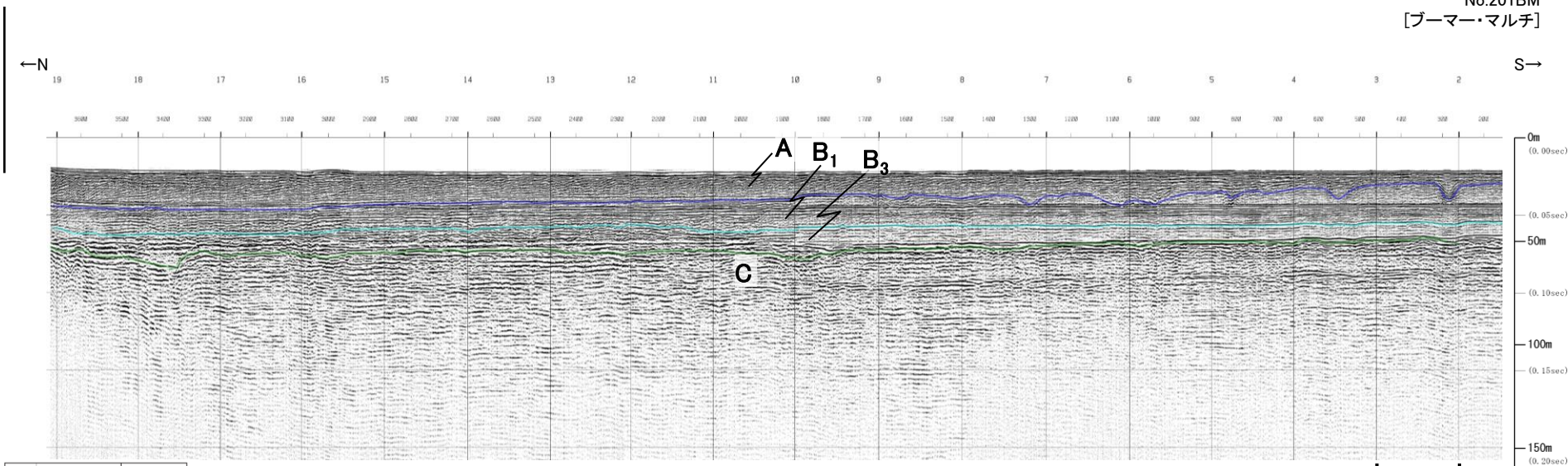
3. 宍道断層の評価 (4)地質調査(宍道断層の東側) ④東端(美保湾及び美保関町東方沖合)の調査結果 美保湾(No.201BM測線 音波探査記録)

No.201BM
[ブーマー・マルチ]

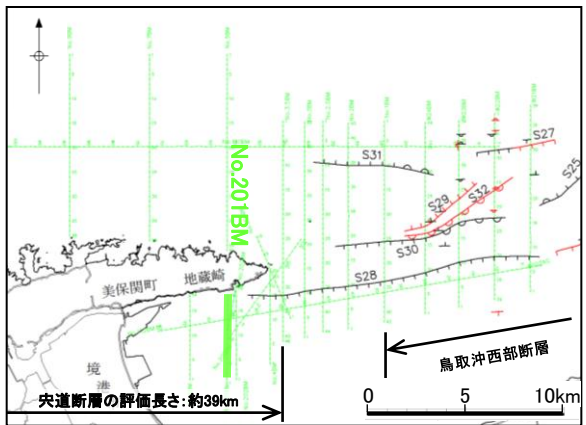
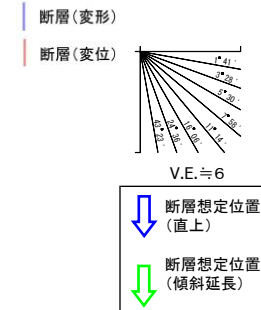


3. 中央道断層の評価 (4)地質調査(中央道断層の東側) ④東端(美保湾及び美保関町東方沖合)の調査結果 美保湾(No.201BM測線 音波探査解析図)

陸海境界



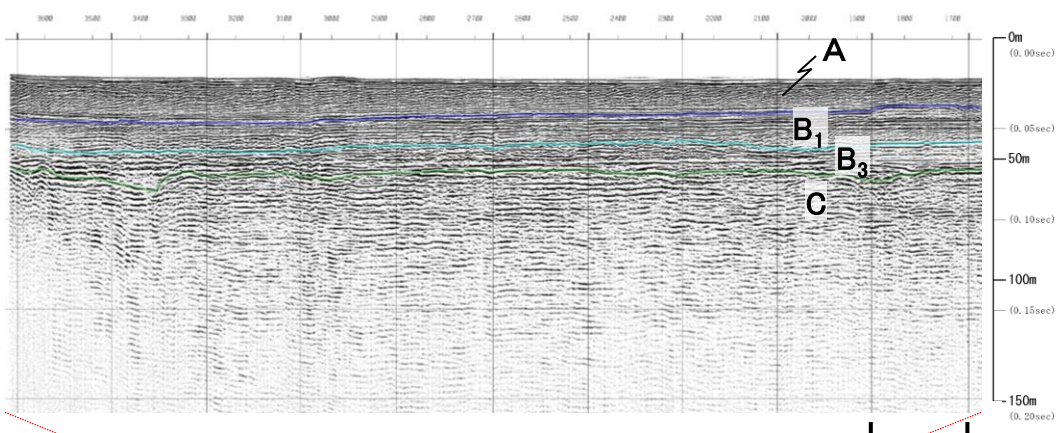
第四紀	完新世	A	
	更新世	後期	B ₁
		中期	B ₂
		前期	B ₃
新第三紀	鮮新世	C	
	中新世	D ₁	
		D ₂	
火山岩・貫入岩		V	



・B₃層以上に断層活動を示唆する変位や変形は認められない。

3. 宍道断層の評価 (4)地質調査(宍道断層の東側) ④東端(美保湾及び美保関町東方沖合)の調査結果
美保湾(No.201測線 音波探査解析図)

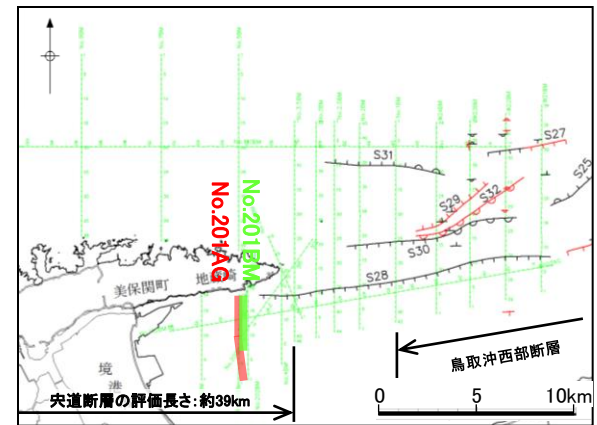
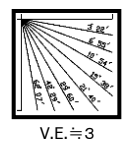
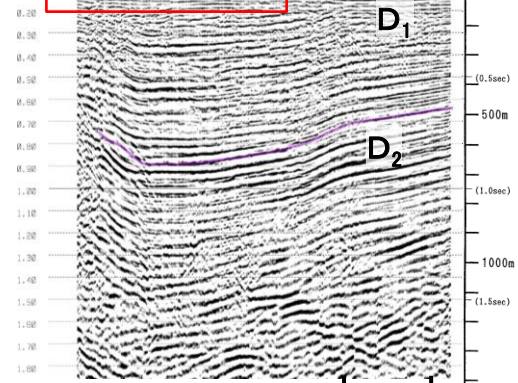
陸海境界 ←N S→No.201BM
[ブーマー・マルチ]



第四紀	完新世	A
	更新世	後期 B ₁
		中期 B ₂ B ₃ 前期 B ₄
新第三紀	鮮新世	C
	中新世	D D ₁ D ₂
火山岩・貫入岩		V

断層(変形)
断層(変位)

←N S→
No.201AG
[エアガン・マルチ]

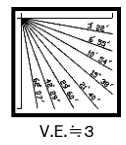
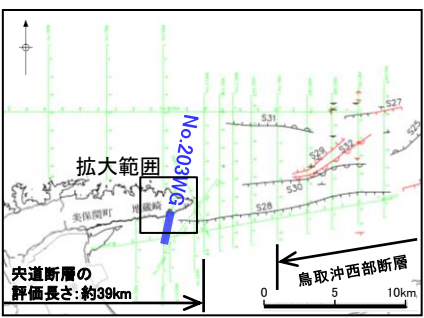
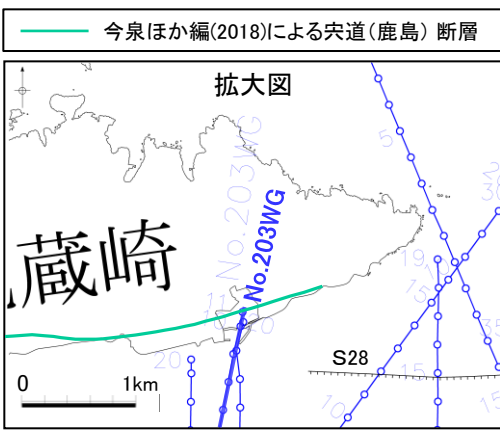
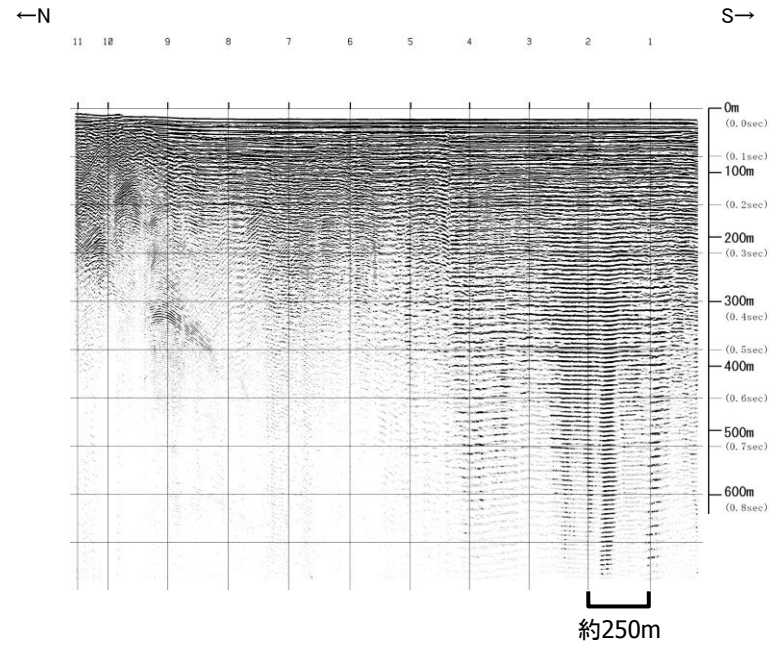


・ブーマー記録においてB₃層以上に断層活動を示唆する変位や変形は認められない。

余白

3. 宍道断層の評価 (4)地質調査(宍道断層の東側) ④東端(美保湾及び美保関町東方沖合)の調査結果 美保湾(No.203WG測線 音波探査記録)

No.203WG
[ウォーターガン・マルチ]

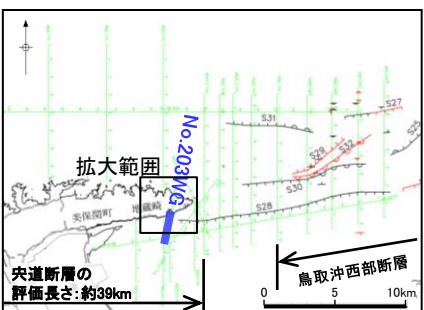
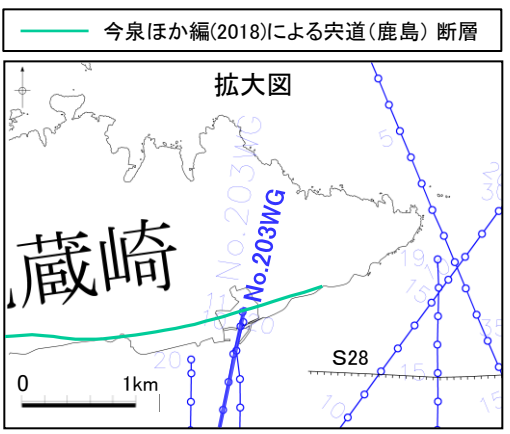
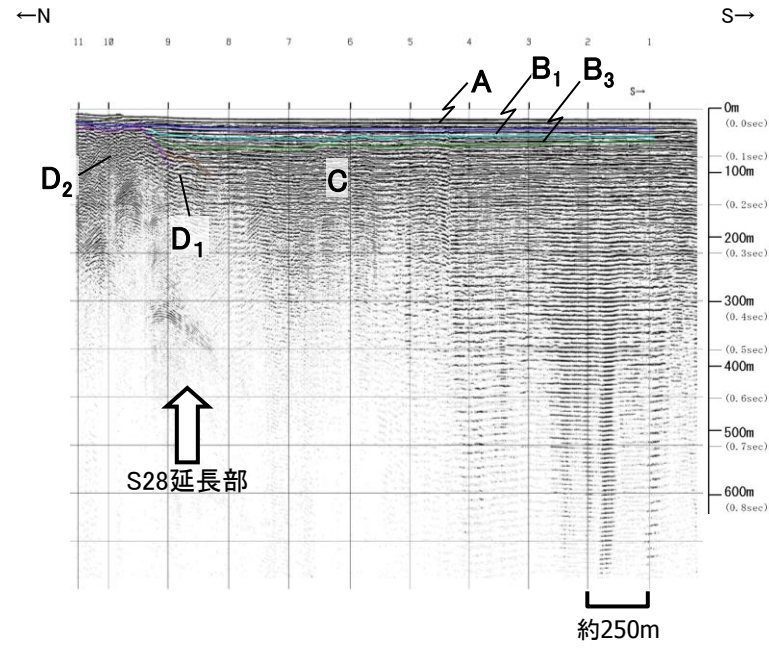


3. 宍道断層の評価 (4)地質調査(宍道断層の東側) ④東端(美保湾及び美保関町東方沖合)の調査結果
美保湾(No.203WG測線 音波探査解析図)

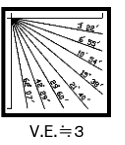
第四紀	完新世	A
	更新世	後期 B ₁
		中期 B ₂
		前期 B ₃
第三紀	鮮新世	C
第三紀	中新世	D ₁ D ₂
	火山岩・貫入岩	V

断層(変形)
断層(変位)

No.203WG
[ウォーターガン・マルチ]

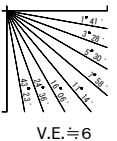
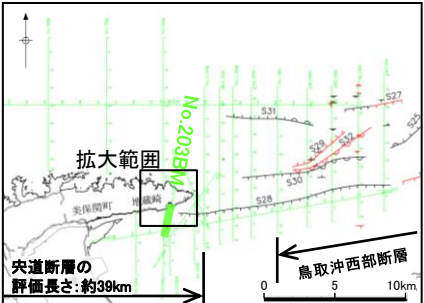
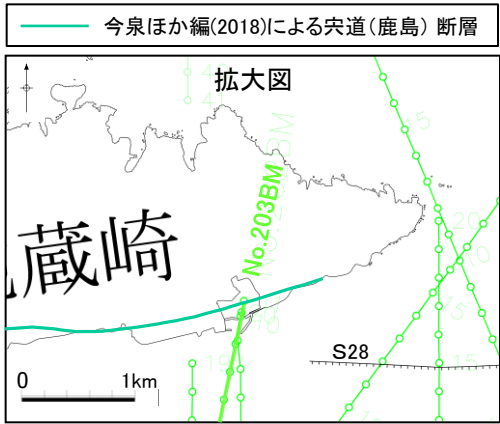
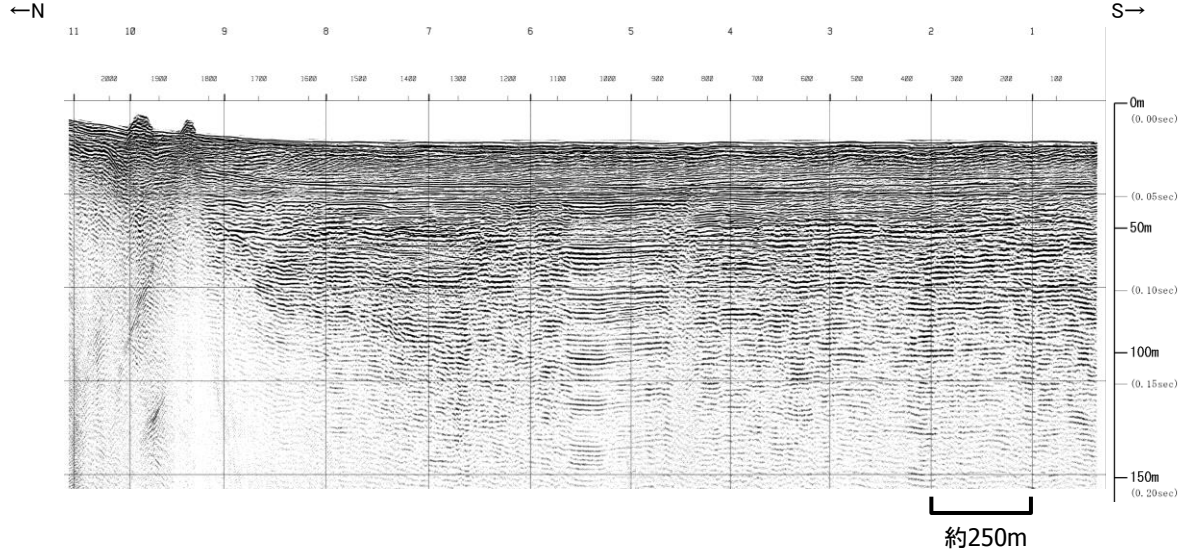


- ・陸海境界付近まで調査するため、堤防間を通り、湾内まで調査を実施した。
- ・S28断層延長部においてC層以上に断層活動を示唆する変位や変形は認められない。



3. 宍道断層の評価 (4)地質調査(宍道断層の東側) ④東端(美保湾及び美保関町東方沖合)の調査結果 美保湾(No.203BM測線 音波探査記録)

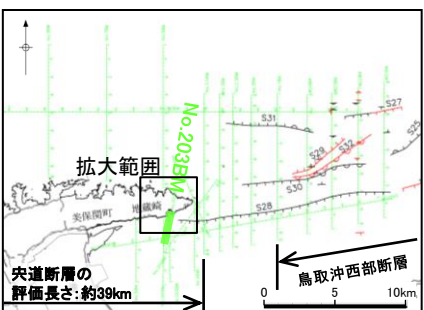
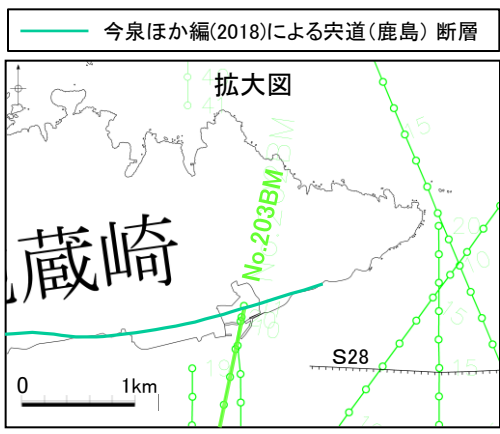
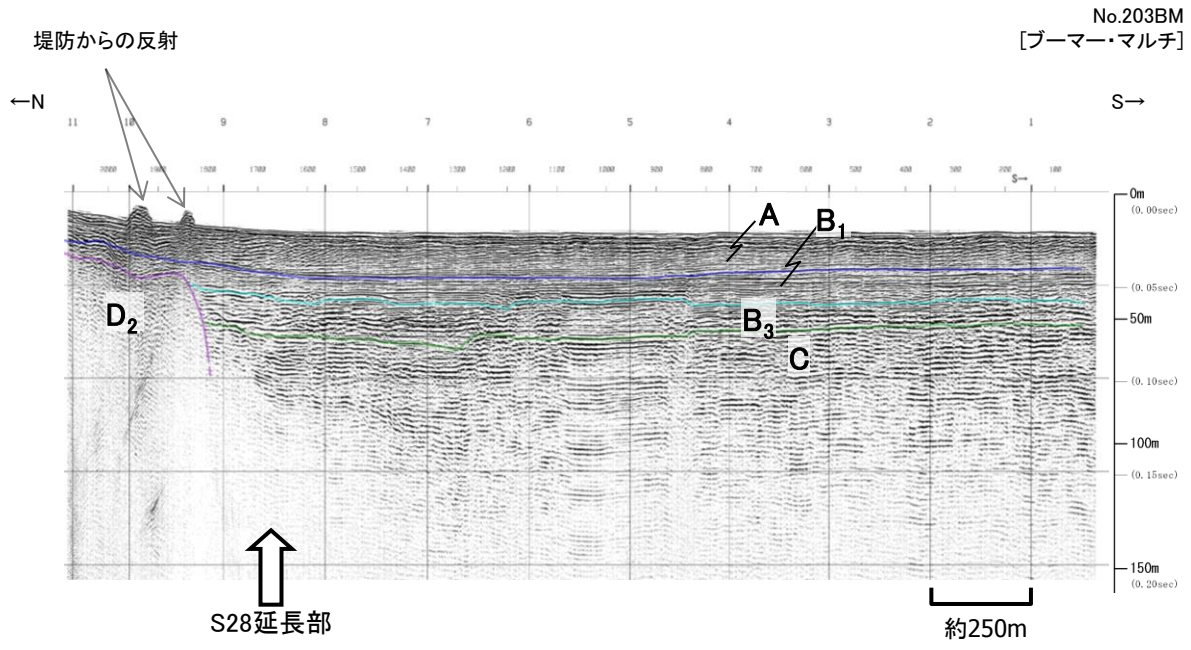
No.203BM
[ブーマー・マルチ]



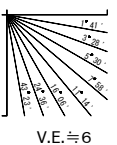
3. 宍道断層の評価 (4)地質調査(宍道断層の東側) ④東端(美保湾及び美保関町東方沖合)の調査結果
美保湾(No.203BM測線 音波探査解析図)

第四紀	完新世	A	
	更新世	後期	B ₁
		中期	B ₂
			B ₃
前期	B ₄		
新第三紀	鮮新世	C	
	中新世	D ₁	
D ₂			
火山岩・貫入岩		V	

断層(変形)
断層(変位)



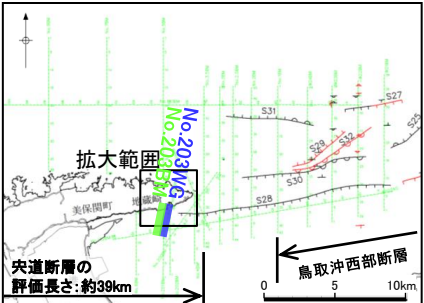
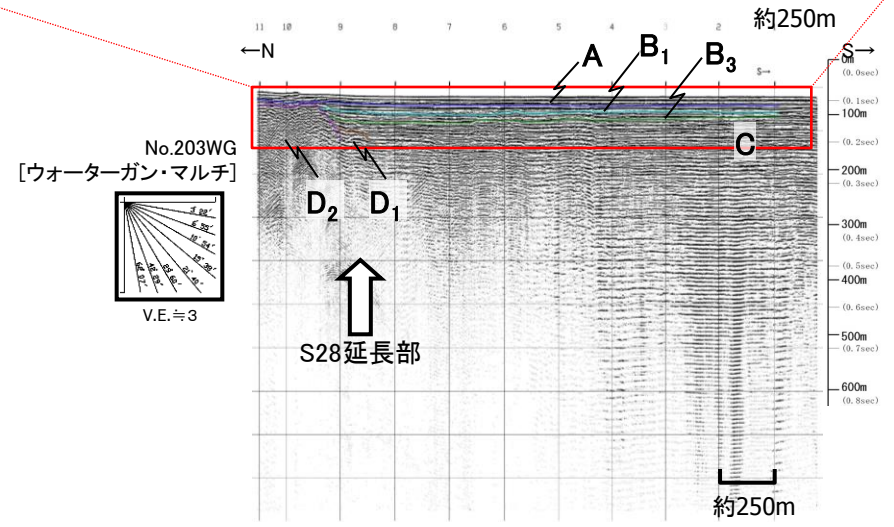
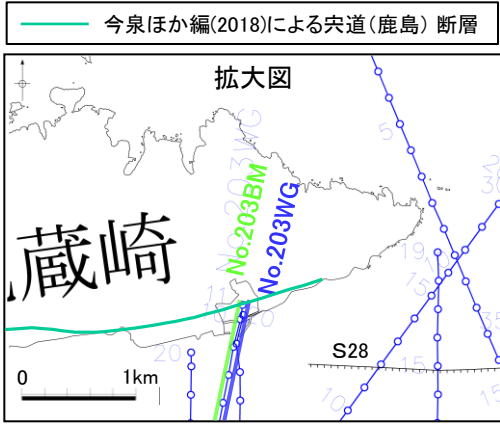
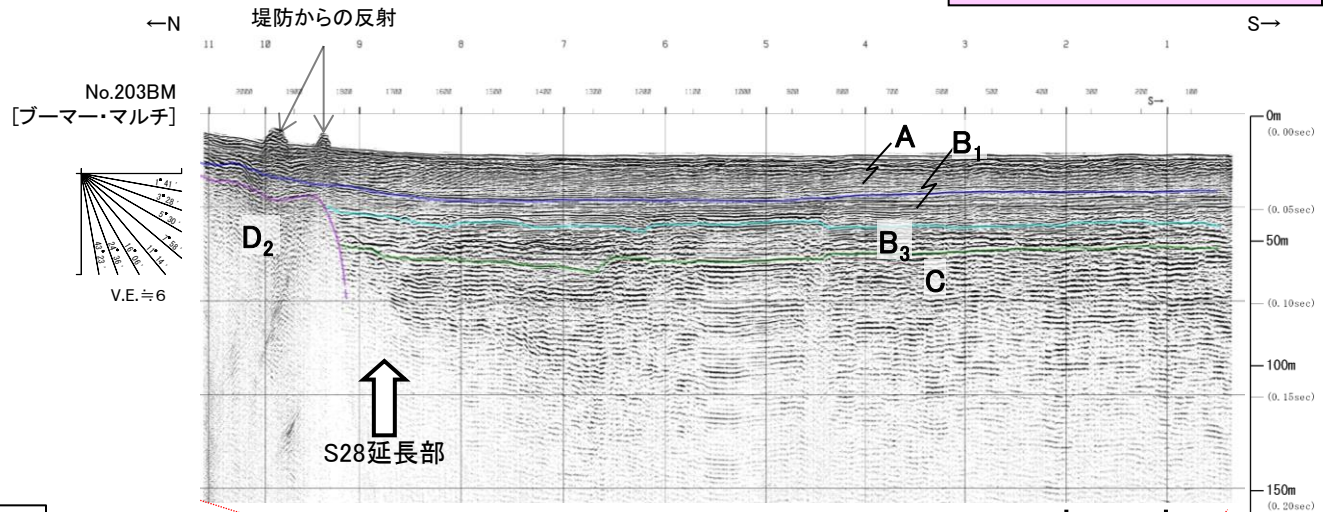
- ・陸海境界付近まで調査するため、堤防間を通り、湾内まで調査を実施した。
- ・S28断層延長部においてB₃層以上に断層活動を示唆する変位や変形は認められない。



3. 宍道断層の評価 (4)地質調査(宍道断層の東側) ④東端(美保湾及び美保関町東方沖合)の調査結果
美保湾(No.203測線 音波探査解析図)

第四紀	完新世	A
	後期	B ₁
	中期	B ₂ B ₃
新第三紀	鮮新世	C
	中新世	D ₁ D ₂
火山岩・貫入岩		V

断層(変形)
断層(変位)

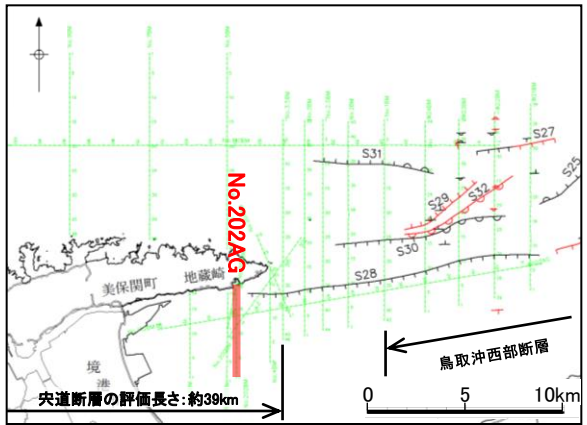
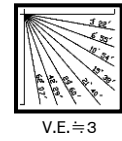
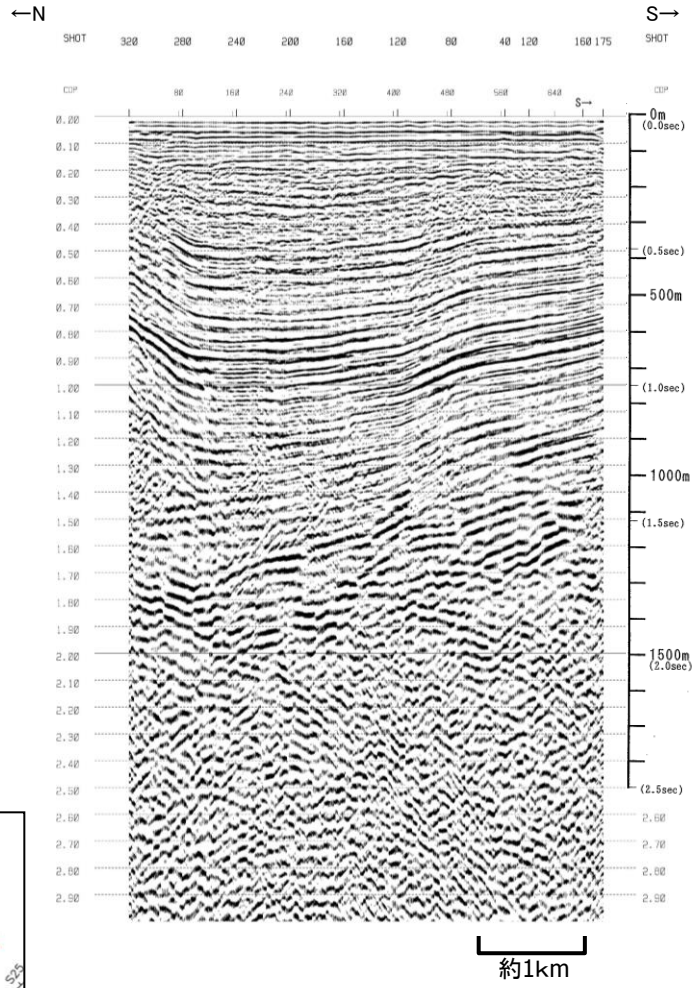


・陸海境界付近まで調査するため、堤防間を通り、湾内まで調査を実施した。
・陸海境界付近において、B₃層以上に断層活動を示唆する変位や変形は認められない。

余白

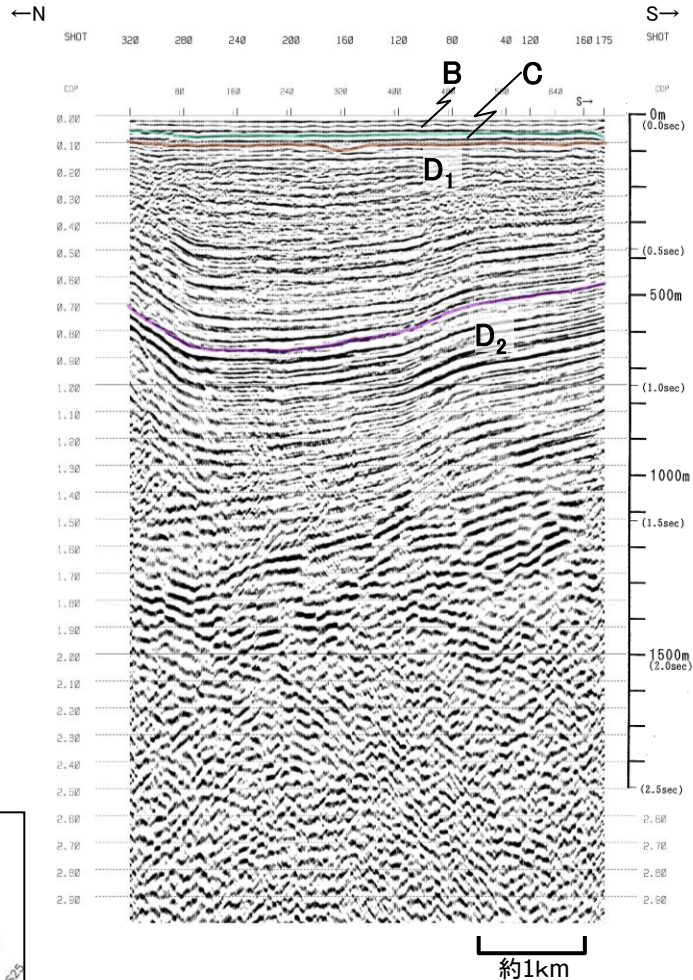
3. 宍道断層の評価 (4)地質調査(宍道断層の東側) ④東端(美保湾及び美保関町東方沖合)の調査結果 美保湾(No.202AG測線 音波探査記録)

No.202AG
[エアガン・マルチ]



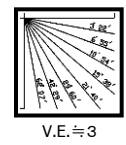
3. 宍道断層の評価 (4)地質調査(宍道断層の東側) ④東端(美保湾及び美保関町東方沖合)の調査結果 美保湾(No.202AG測線 音波探査解析図)

No.202AG
[エアガン・マルチ]

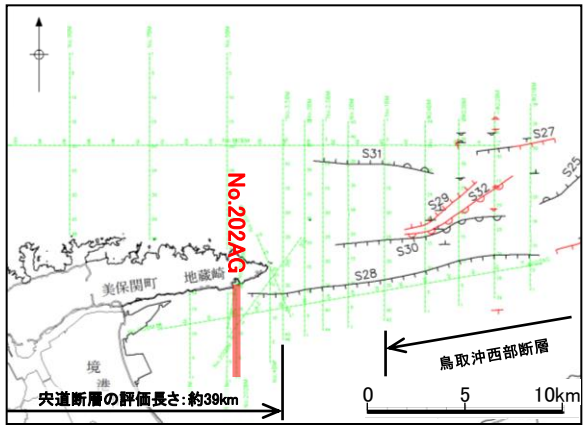


第四紀	完新世	A
	更新世	後期 B ₁
		中期 B ₂ B ₃ B ₄
		前期 C
新第三紀	鮮新世	C
	中新世	D ₁ D ₂
火山岩・貫入岩		V

断層(変形)
断層(変位)

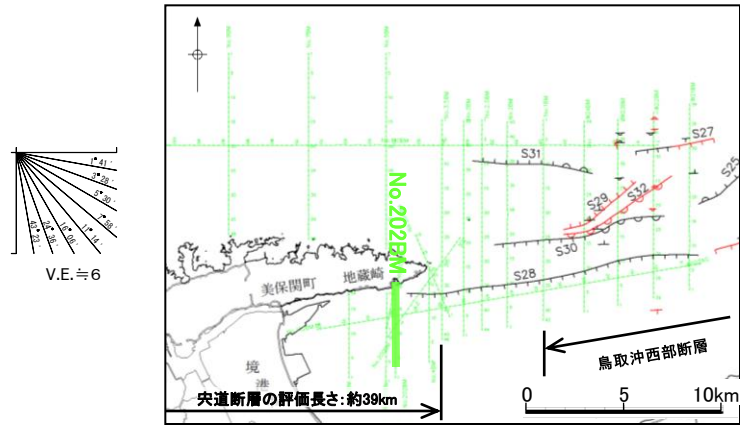
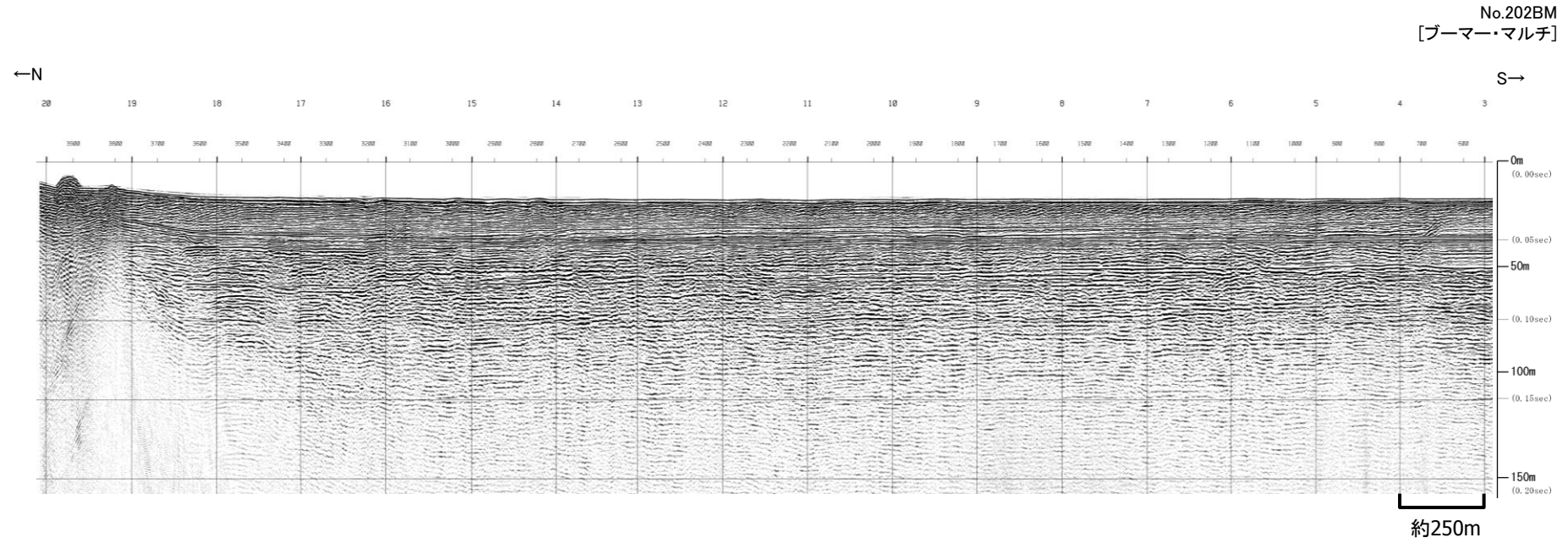


断層想定位置 (直上)
断層想定位置 (傾斜延長)

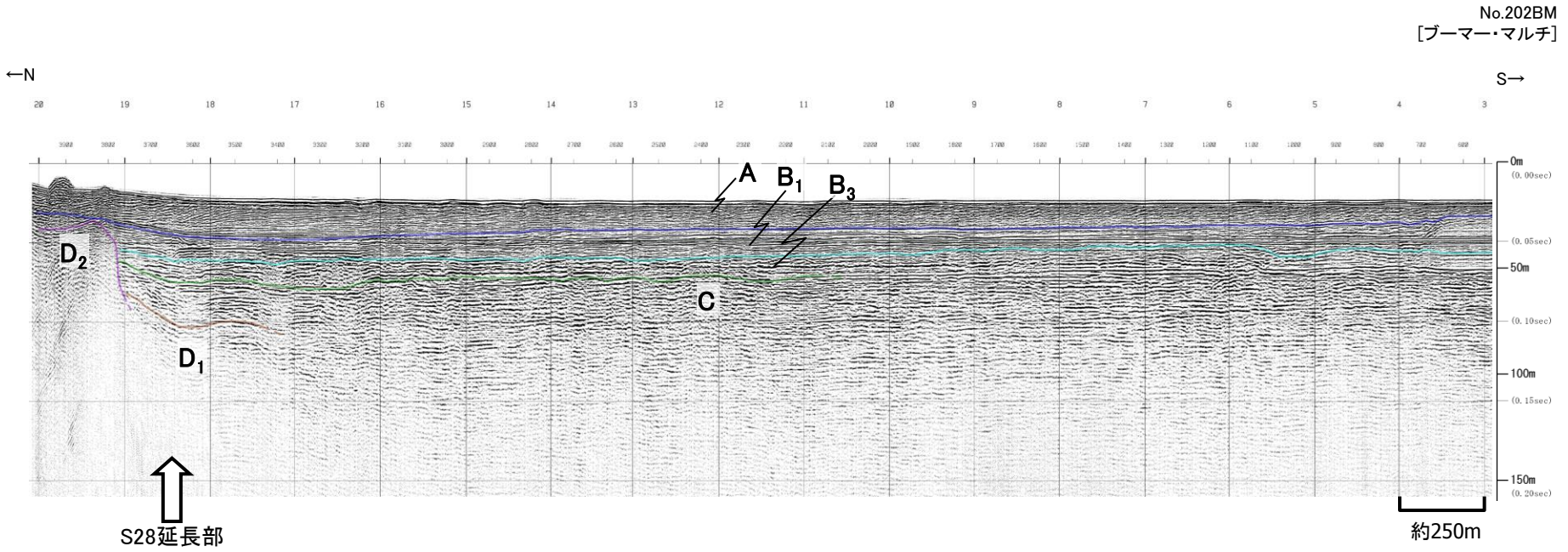


・断層活動を示唆する変位や変形は認められない。

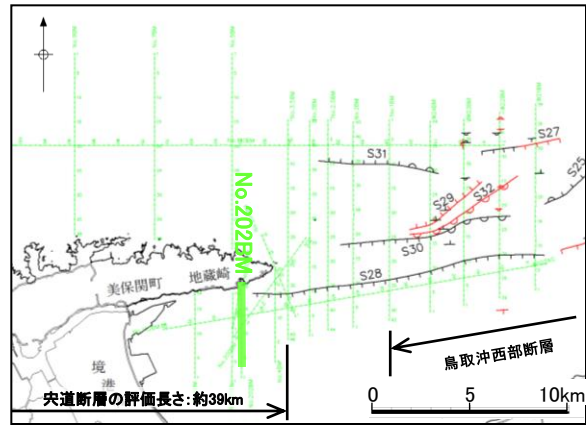
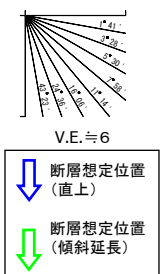
3. 宍道断層の評価 (4)地質調査(宍道断層の東側) ④東端(美保湾及び美保関町東方沖合)の調査結果
美保湾(No.202BM測線 音波探査記録)



3. 中央断層の評価 (4)地質調査(中央断層の東側) ④東端(美保湾及び美保関町東方沖合)の調査結果
美保湾(No.202BM測線 音波探査解析図)



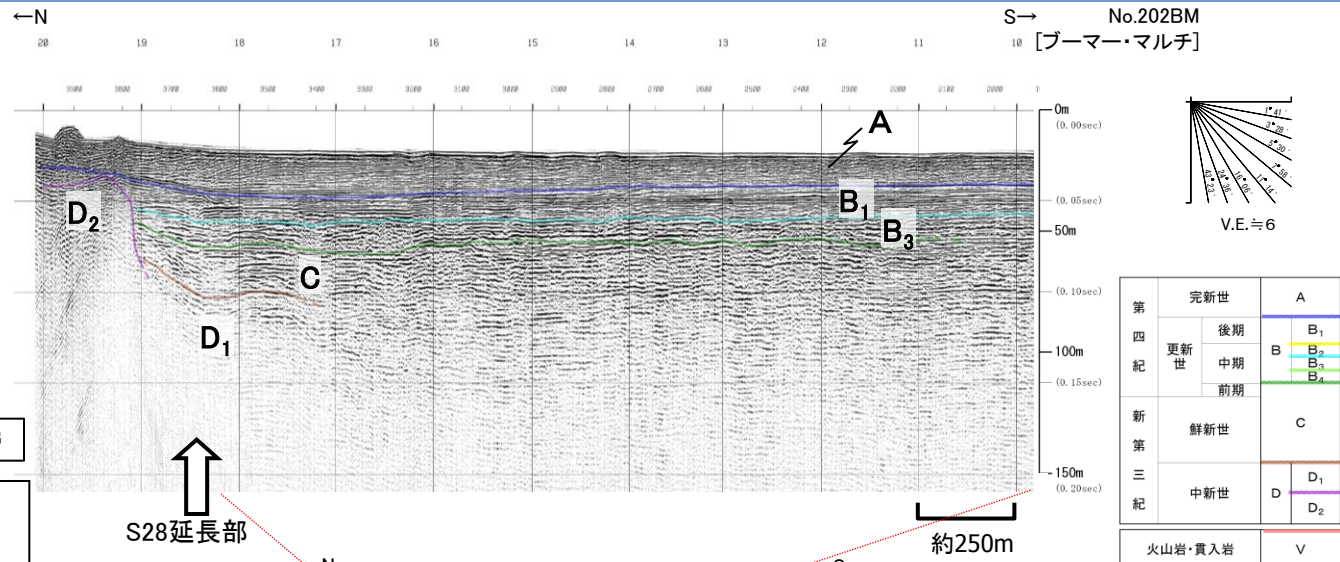
第四紀	完新世	A
	更新世	後期 B ₁
		中期 B ₂
		前期 B ₃
新第三紀	鮮新世	C
	中新世	D ₁
		D ₂
火山岩・貫入岩		V



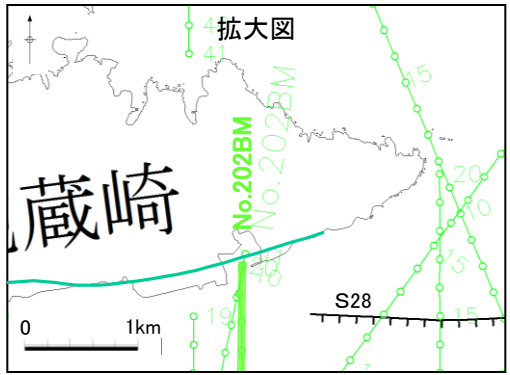
・S28断層延長部において、C層以上に断層活動を示唆する変位や変形は認められない。

3. 宍道断層の評価 (4)地質調査(宍道断層の東側) ④東端(美保湾及び美保関町東方沖合)の調査結果
 美保湾(No.202測線 音波探査解析図)

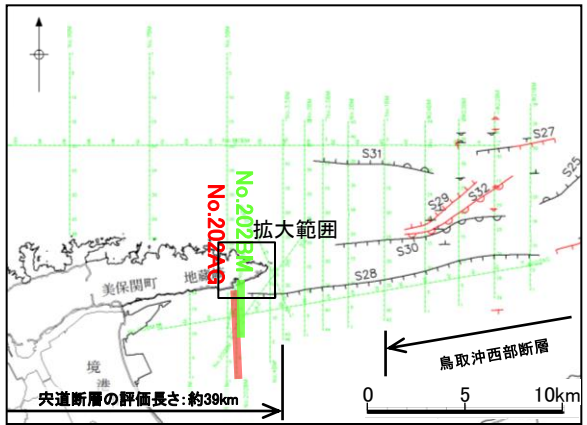
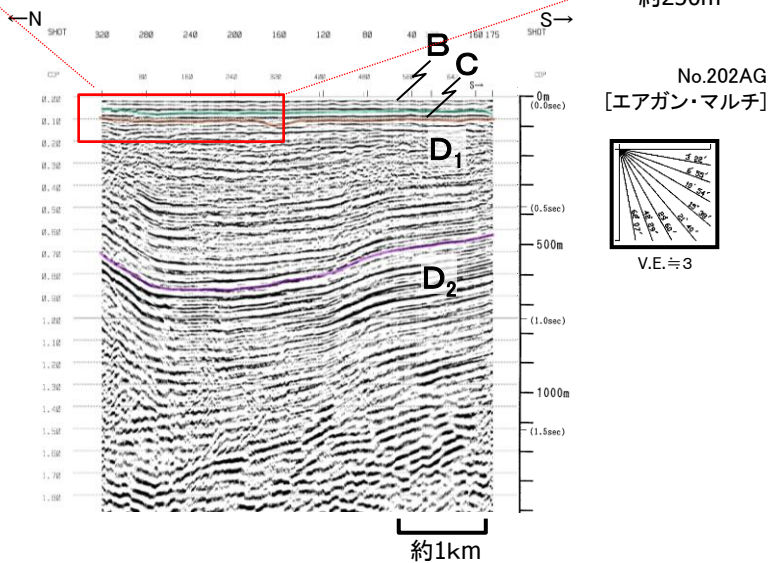
第226回審査会合資料3 P111 加筆・修正



今泉ほか編(2018)による宍道(鹿島)断層



S28延長部

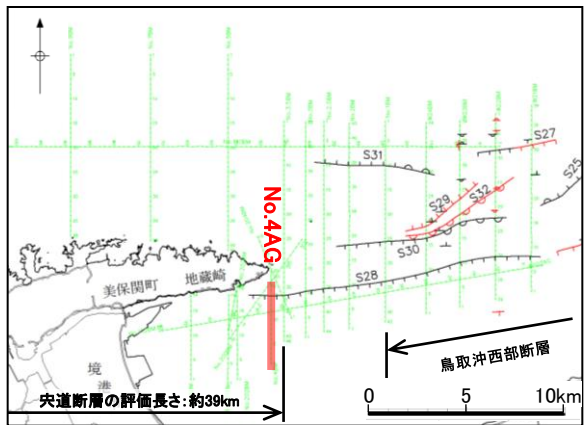
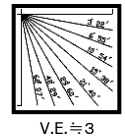
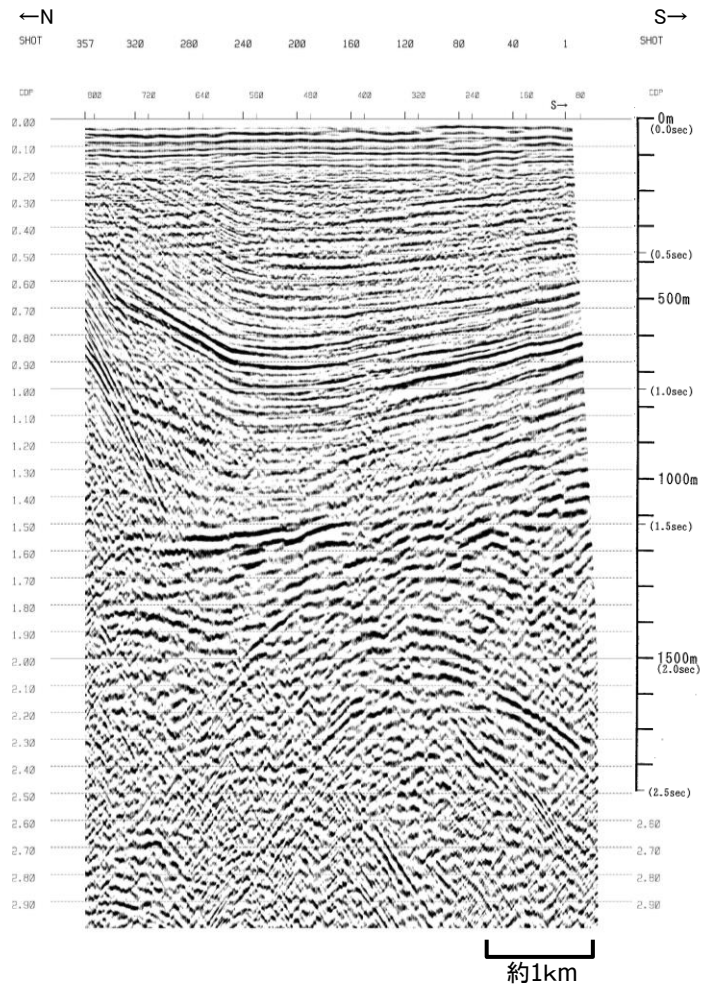


・陸海境界付近において、C層以上に断層活動を示唆する変位や変形は認められない。

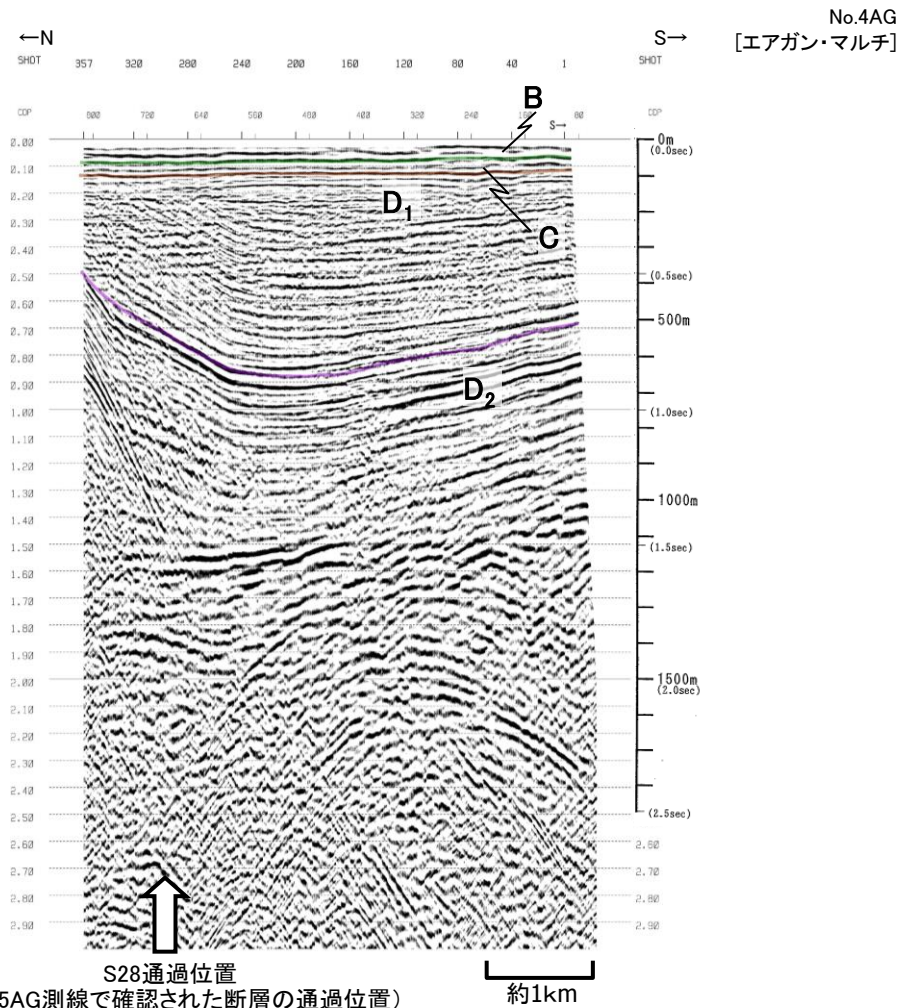
余白

3. 中央断層の評価 (4)地質調査(中央断層の東側) ④東端(美保湾及び美保関町東方沖合)の調査結果
美保湾(No.4AG測線 音波探査記録)

No.4AG
[エアガン・マルチ]

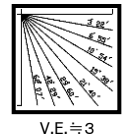


3. 宍道断層の評価 (4)地質調査(宍道断層の東側) ④東端(美保湾及び美保関町東方沖合)の調査結果
美保湾(No.4AG測線 音波探査解析図)

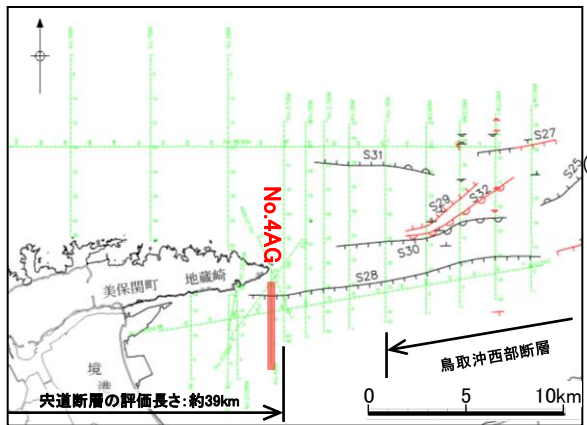


第四紀	完新世	A	
	更新世	後期	B ₁
		中期	B ₂
		前期	B ₃
新第三紀	鮮新世	C	
	中新世	D ₁ D ₂	
火山岩・貫入岩		V	

断層(変形)
断層(変位)



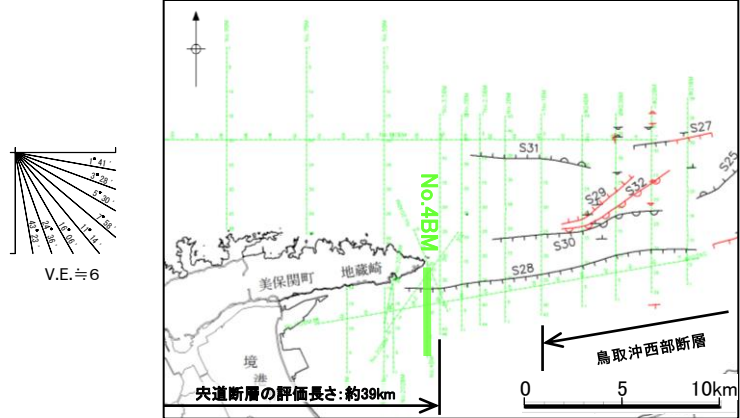
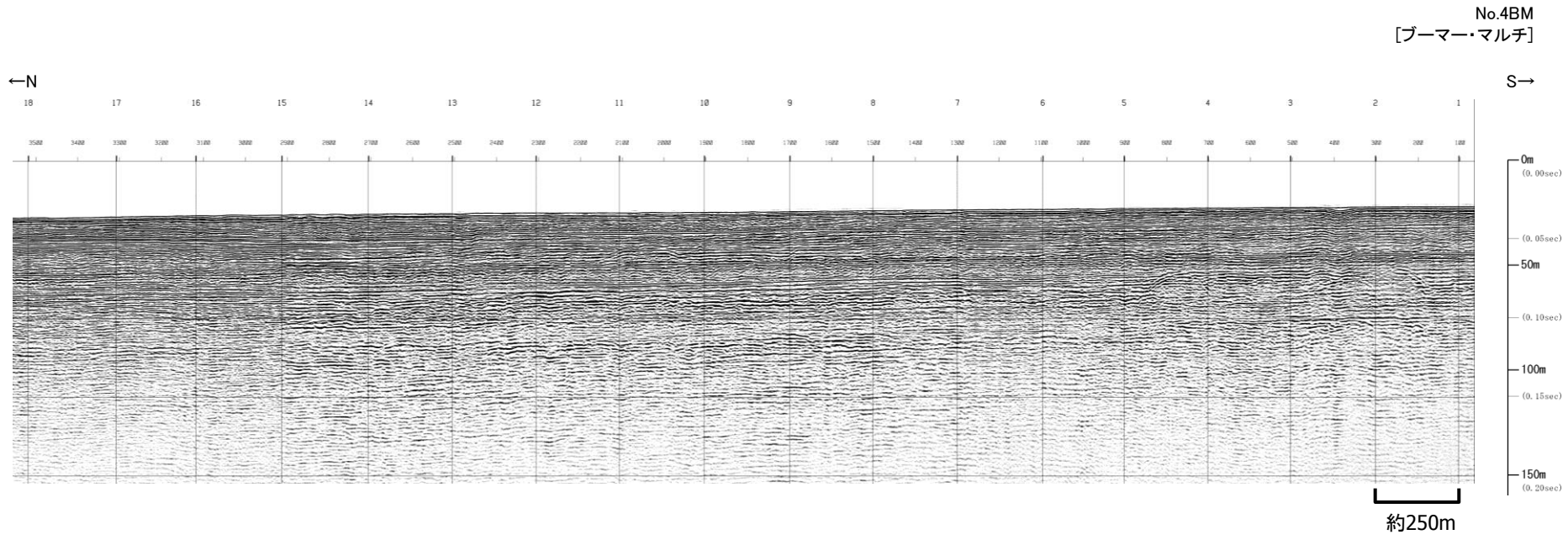
断層想定位置(直上)
断層想定位置(傾斜延長)



S28通過位置
(No.3.5AG測線で確認された断層の通過位置) 約1km

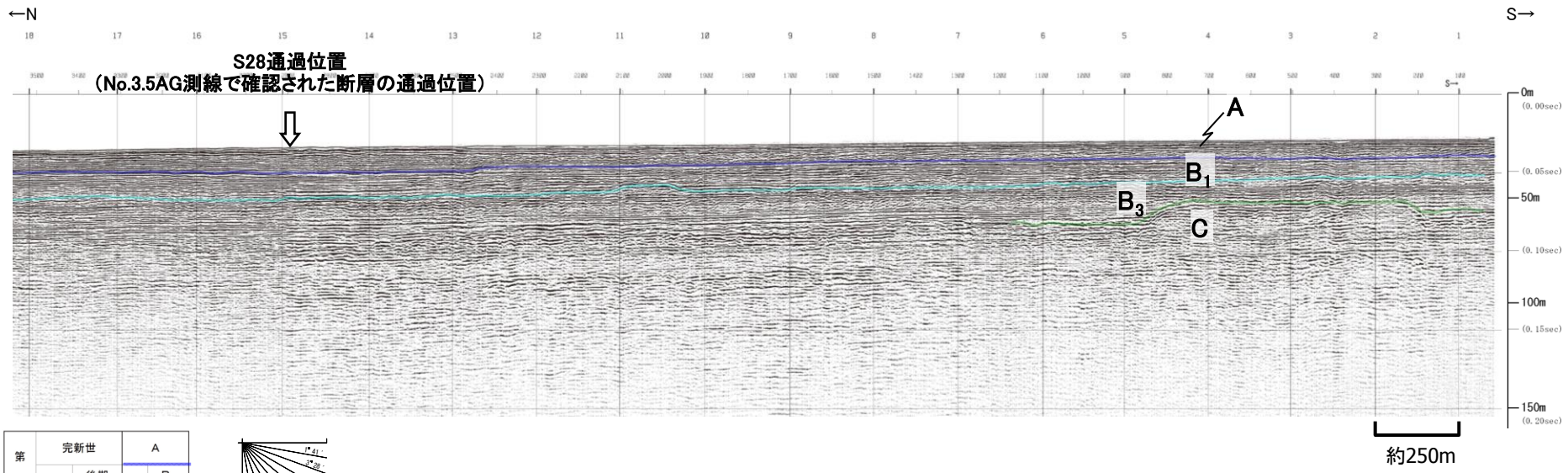
断層活動を示唆する変位や変形は認められない。

3. 宍道断層の評価 (4)地質調査(宍道断層の東側) ④東端(美保湾及び美保関町東方沖合)の調査結果
美保湾(No.4BM測線 音波探査記録)



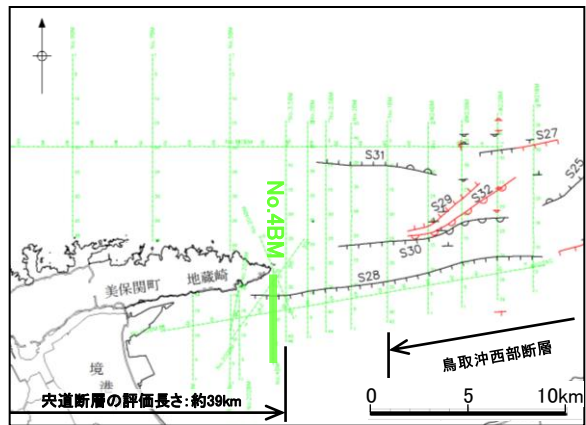
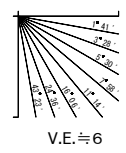
3. 宍道断層の評価 (4)地質調査(宍道断層の東側) ④東端(美保湾及び美保関町東方沖合)の調査結果 美保湾(No.4BM測線 音波探査解析図)

No.4BM
[ブーマー・マルチ]



第四紀	完新世	A
	後期	B ₁
	更新世	B
		中期
前期	B ₃	
新第三紀	鮮新世	C
	中新世	D ₁
		D ₂
火山岩・貫入岩		V

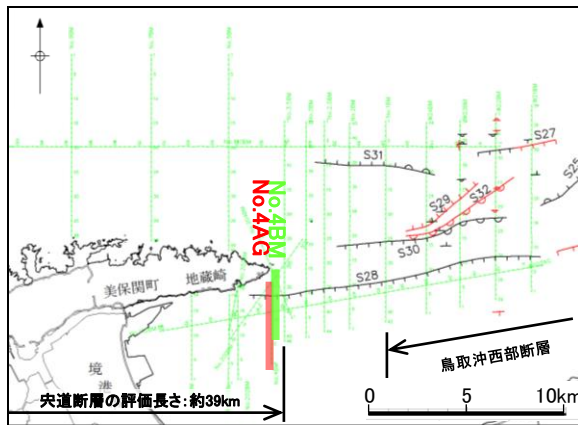
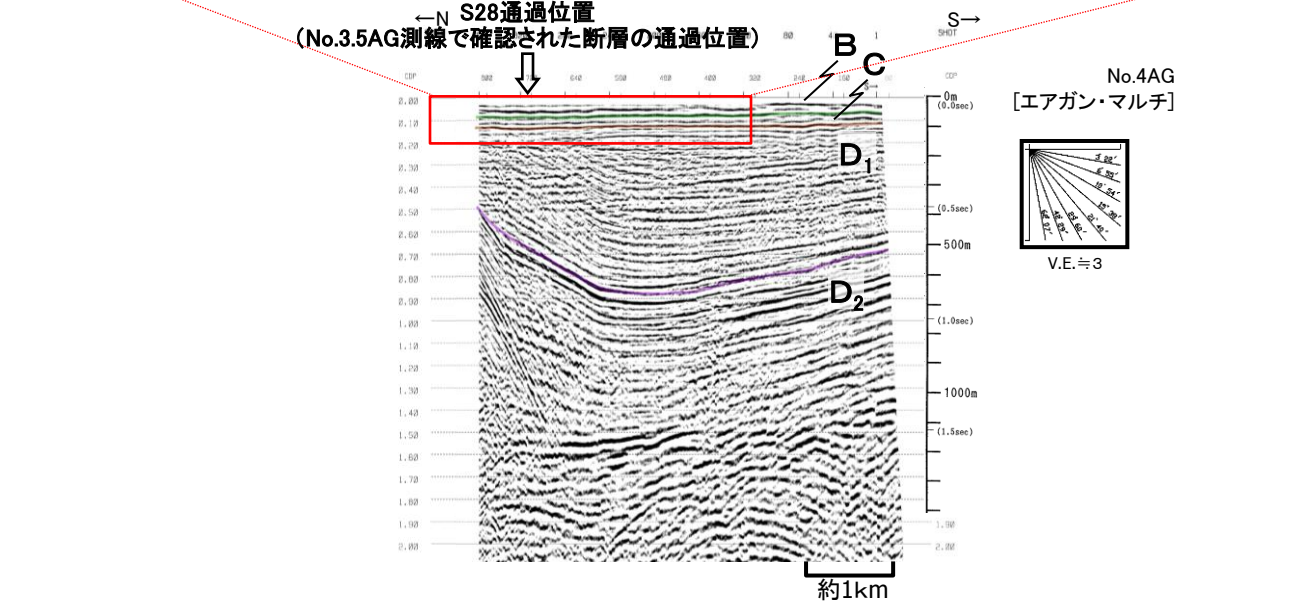
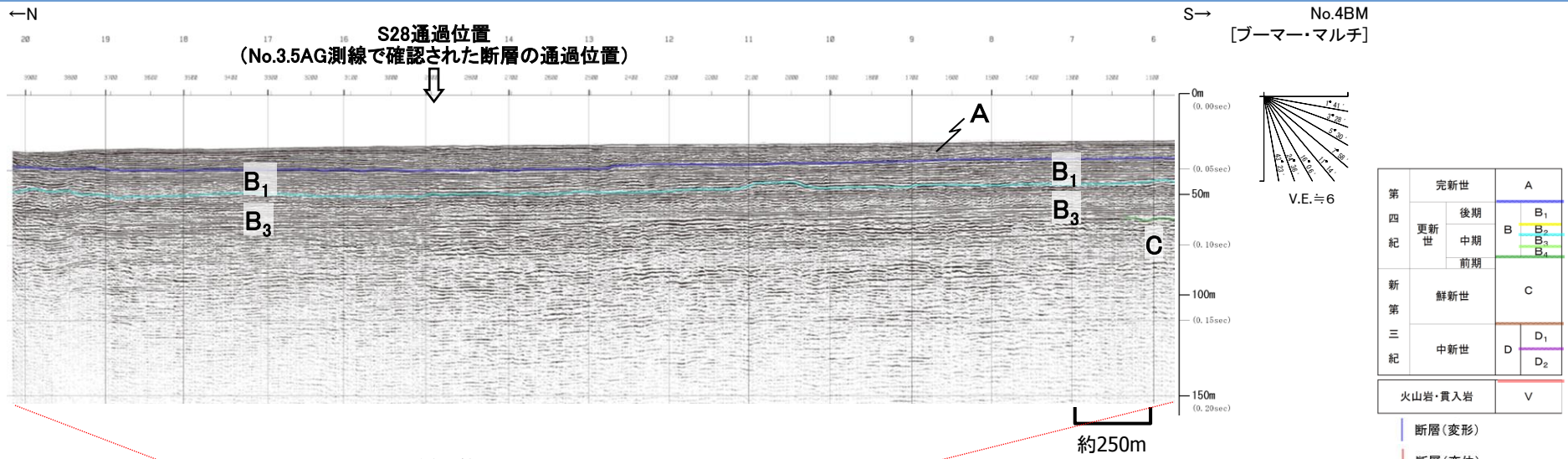
断層(変形)
断層(変位)



・S28断層通過位置においてB₁層以上に断層活動を示唆する変位や変形は認められない。

断層想定位置
(直上)
断層想定位置
(傾斜延長)

3. 宍道断層の評価 (4)地質調査(宍道断層の東側) ④東端(美保湾及び美保関町東方沖合)の調査結果
 美保湾(No.4測線 音波探査解析図)

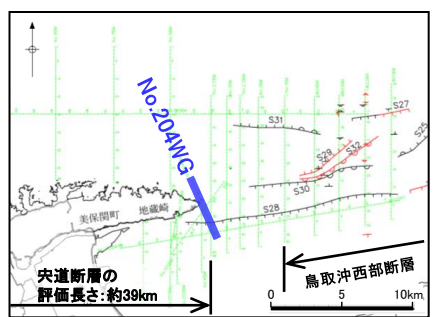
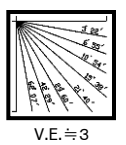
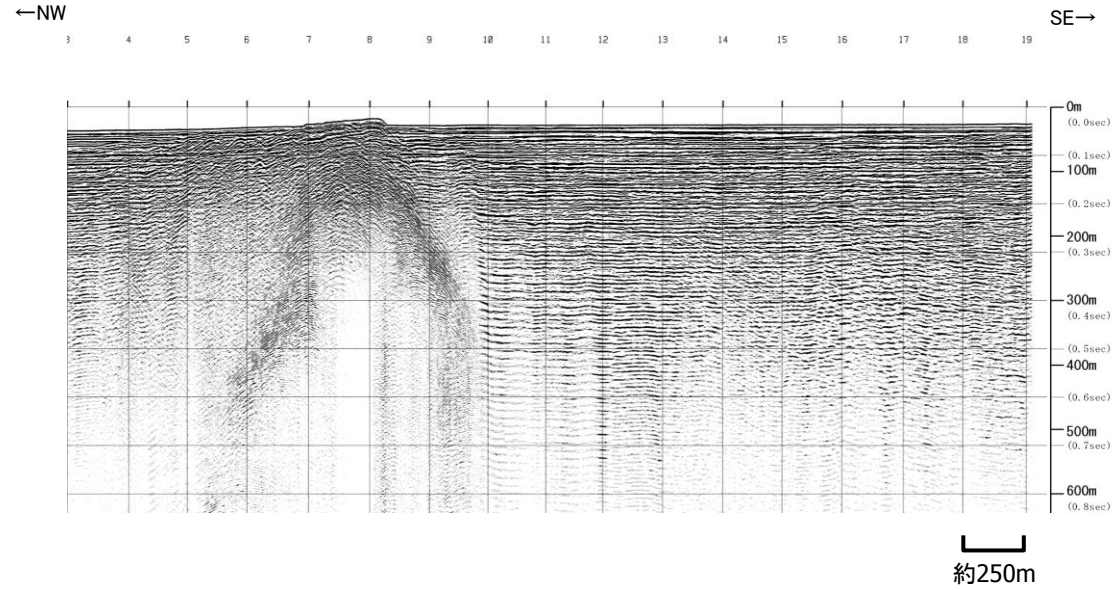


・S28断層通過位置において断層活動を示唆する変位や変形は認められない。

余白

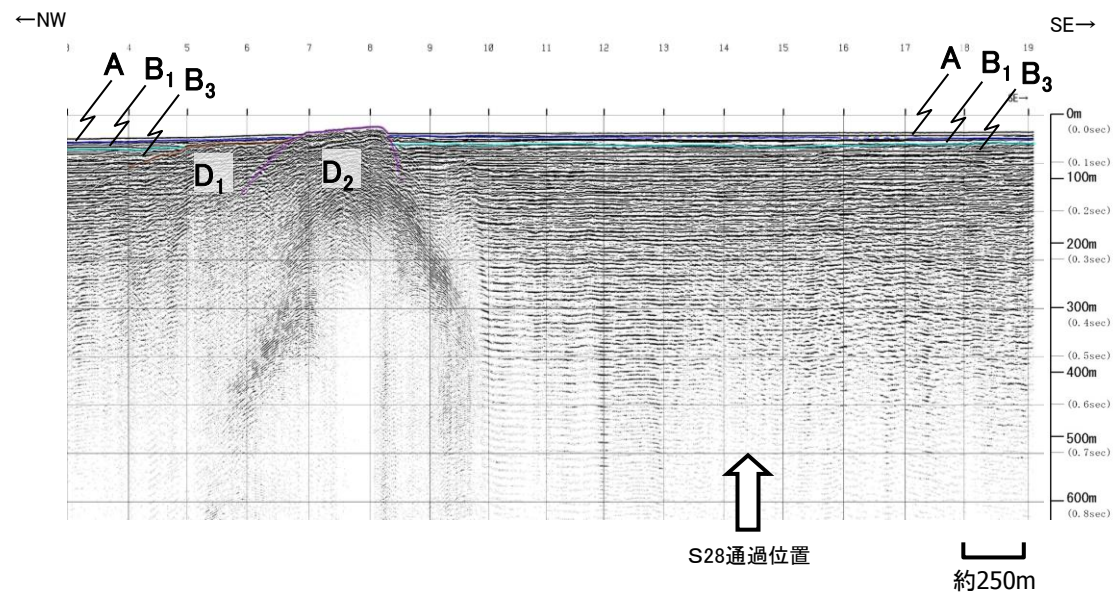
3. 中央断層の評価 (4)地質調査(中央断層の東側) ④東端(美保湾及び美保関町東方沖合)の調査結果 美保湾(No.204WG測線 音波探査記録)

No.204WG
[ウォーターガン・マルチ]



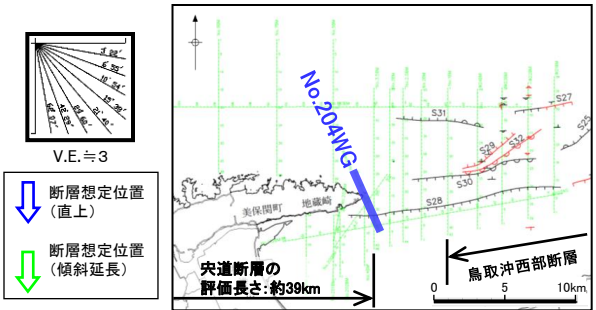
3. 中央断層の評価 (4)地質調査(中央断層の東側) ④東端(美保湾及び美保関町東方沖合)の調査結果
美保湾(No.204WG測線 音波探査解析図)

No.204WG
[ウォーターガン・マルチ]



第四紀	完新世	A
	後期	B ₁
	中期	B ₂
新第三紀	前期	B ₃
	鮮新世	C
新第三紀	中新世	D ₁
		D ₂
火山岩・貫入岩		V

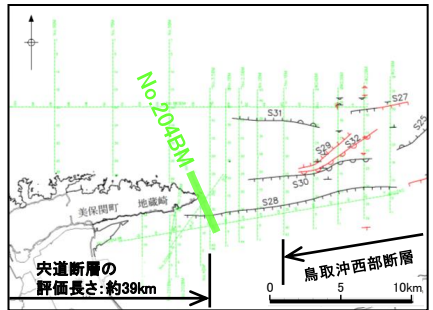
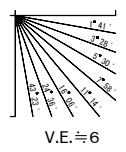
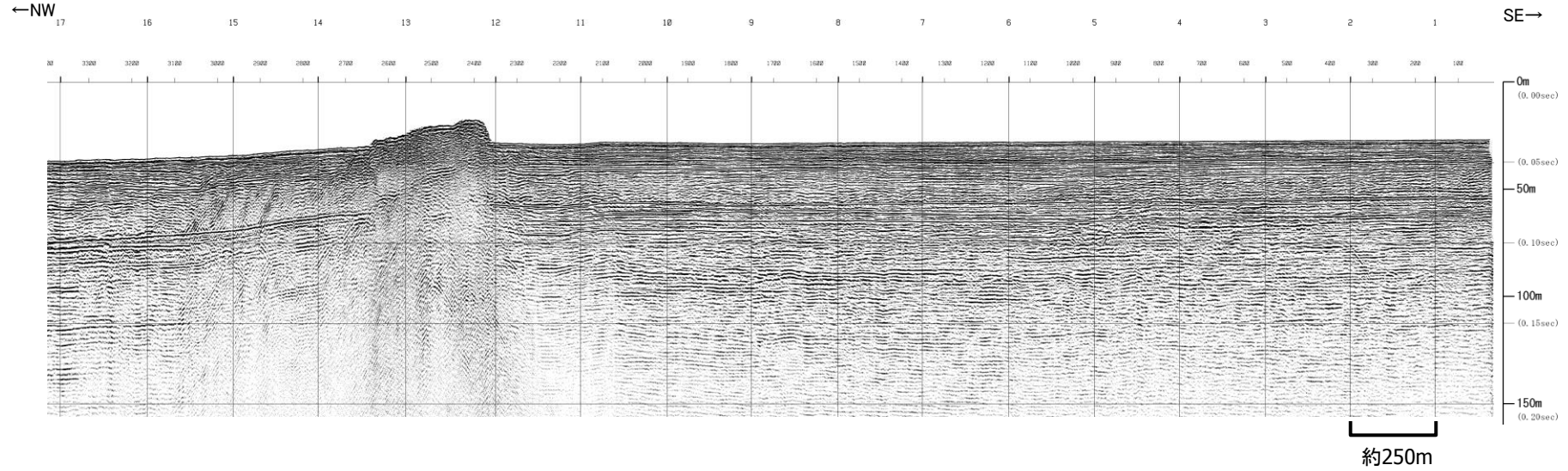
断層(変形)
断層(変位)



・S28断層通過位置において、B₁層以上に断層活動を示唆する変位や変形は認められない。

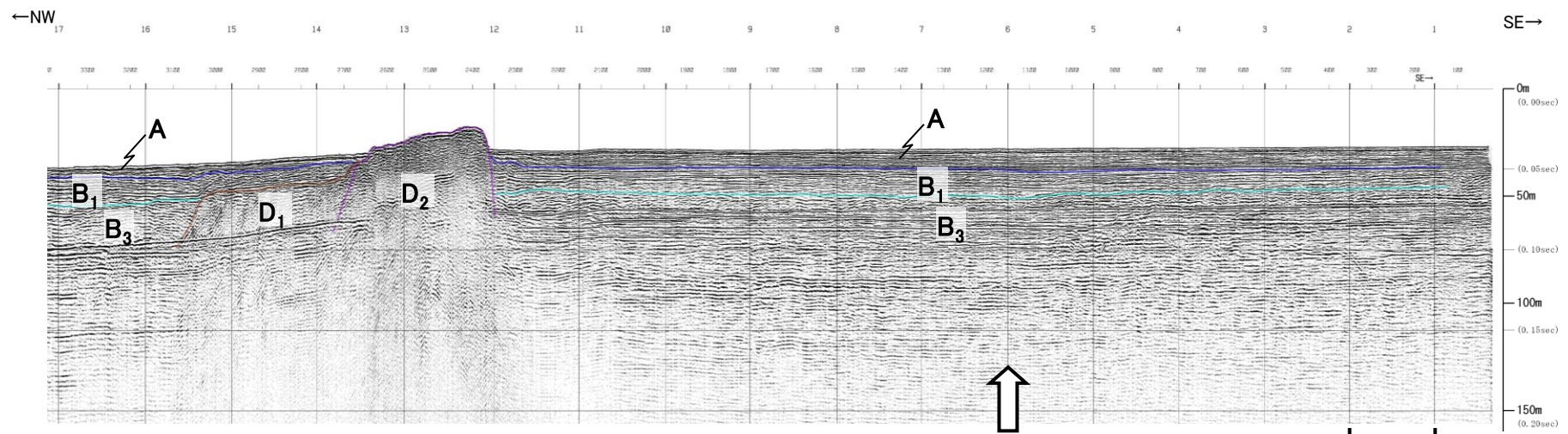
3. 宍道断層の評価 (4)地質調査(宍道断層の東側) ④東端(美保湾及び美保関町東方沖合)の調査結果 美保湾(No.204BM測線 音波探査記録)

No.204BM
[ブーマー・マルチ]



3. 宍道断層の評価 (4)地質調査(宍道断層の東側) ④東端(美保湾及び美保関町東方沖合)の調査結果
美保湾(No.202測線 音波探査解析図)

No.204BM
[ブーマー・マルチ]

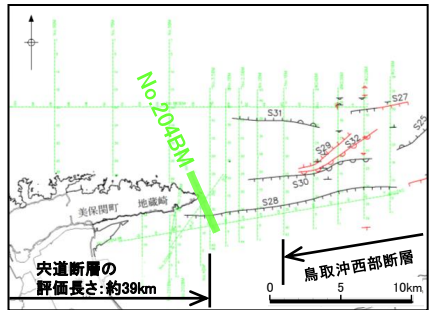
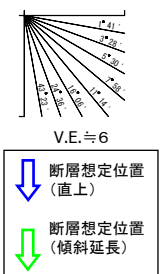


S28通過位置

約250m

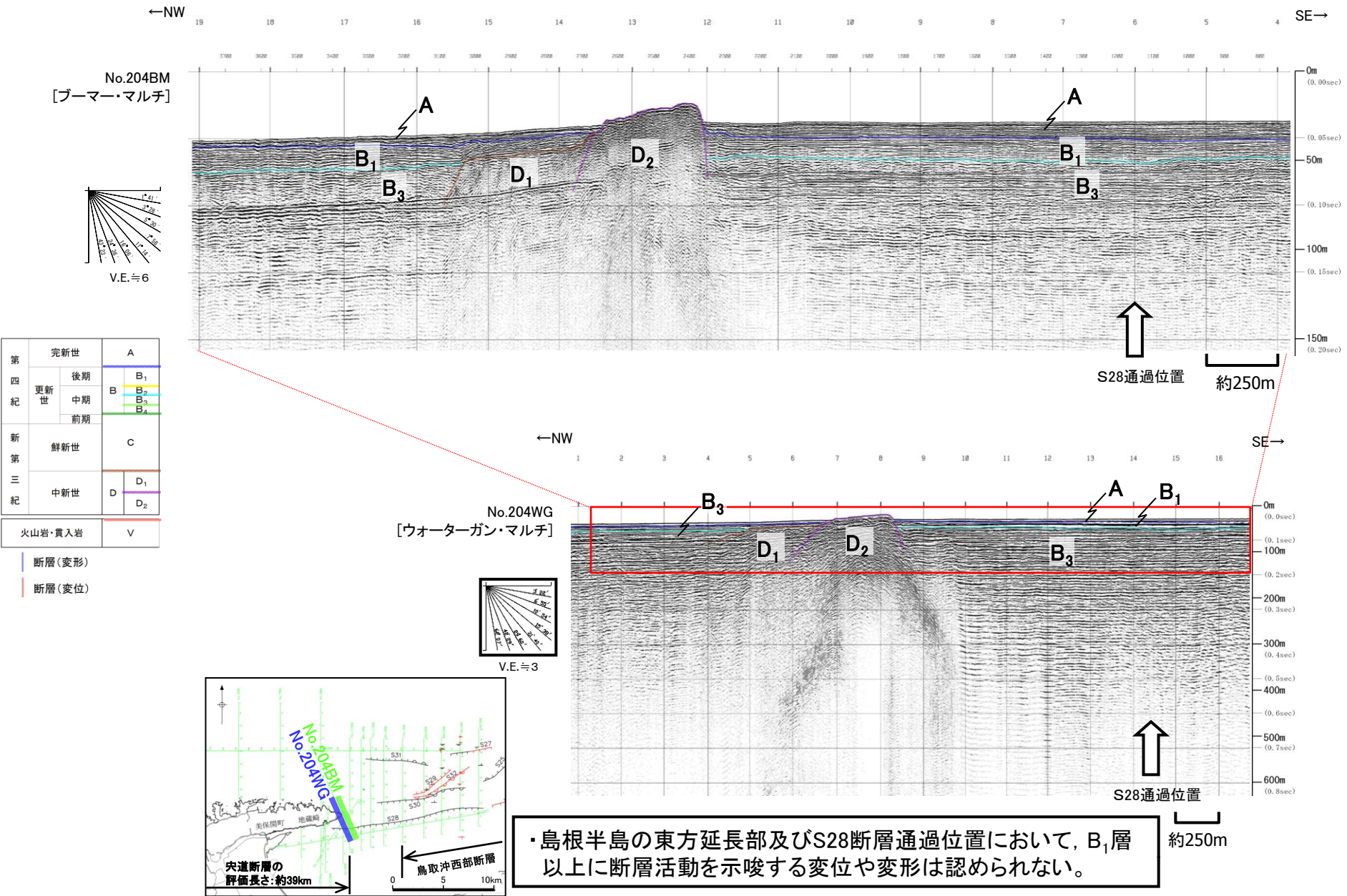
第四紀	完新世		A
	更新世	後期	B ₁
		中期	B ₂
		前期	B ₃ B ₄
第三紀	鮮新世		C
	中新世	D ₁ D ₂	
火山岩・貫入岩			V

断層(変形)
断層(変位)



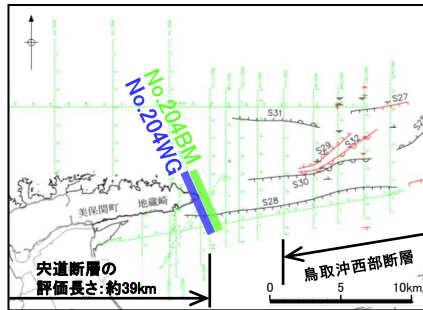
・S28断層通過位置においてB₁層以上に断層活動を示唆する変位や変形は認められない。

3. 央道断層の評価 (4)地質調査(央道断層の東側) ④東端(美保湾及び美保関町東方沖合)の調査結果
美保湾(No.204測線 音波探査解析図)



第四紀	完新世	A
	後期	B ₁
	中期	B ₂ B ₃
第三紀	鮮新世	C
	中新世	D ₁ D ₂
火山岩・貫入岩		V

断層(変形)
断層(変位)

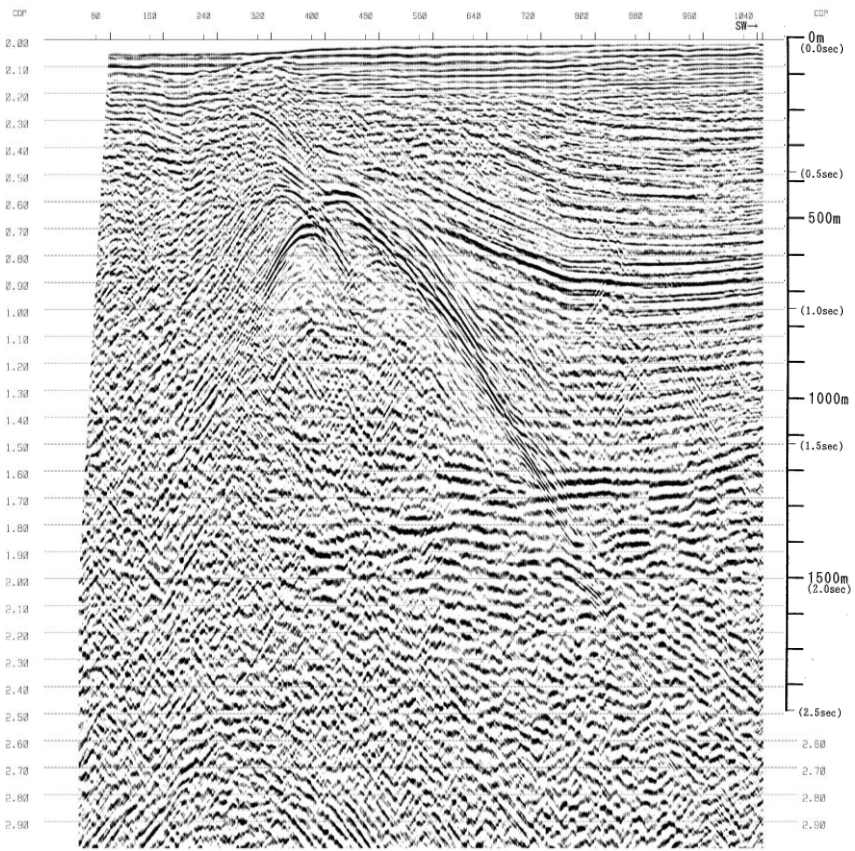


・島根半島の東方延長部及びS28断層通過位置において、B₁層以上に断層活動を示唆する変位や変形は認められない。

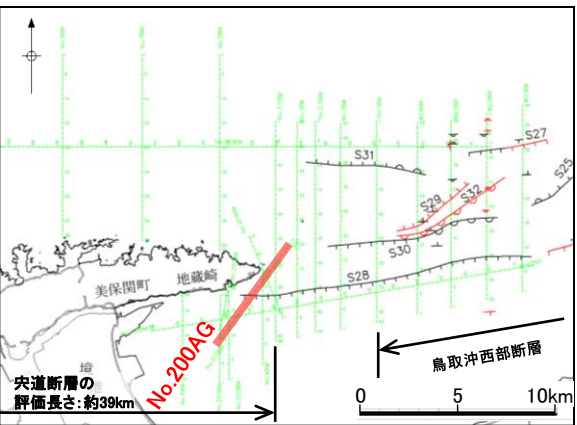
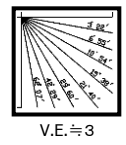
余白

3. 宍道断層の評価 (4)地質調査(宍道断層の東側) ④東端(美保湾及び美保関町東方沖合)の調査結果 美保湾(No.200AG測線 音波探査記録)

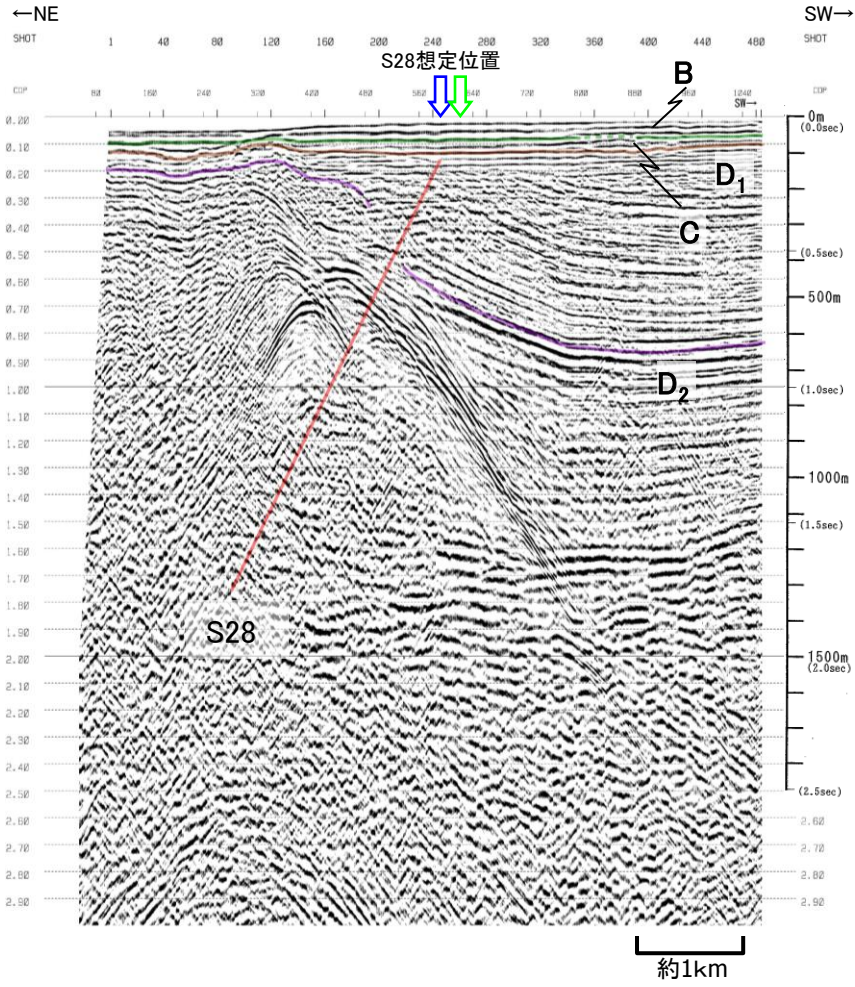
←NE SW→ No.200AG
SHOT 1 40 80 120 160 200 240 280 320 360 400 440 480 SHOT [エアガン・マルチ]



約1km

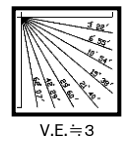


3. 突道断層の評価 (4)地質調査(突道断層の東側) ④東端(美保湾及び美保関町東方沖合)の調査結果
美保湾(No.200AG測線 音波探査解析図)

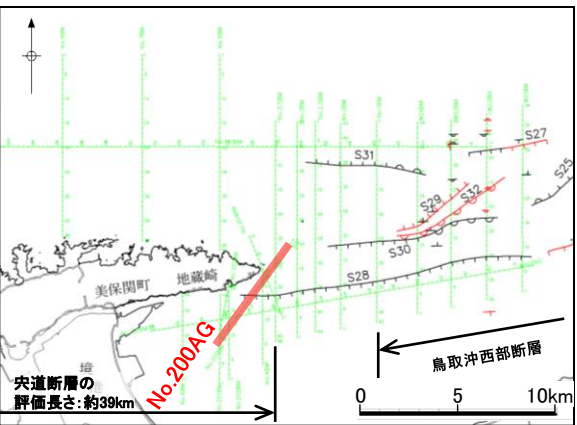


第四紀	完新世		A
	更新世	後期	B ₁
		中期	B ₂ B ₃
		前期	B ₄
第三紀	鮮新世		C
	中新世		D ₁ D ₂
火山岩・貫入岩			V

断層(変形)
断層(変位)



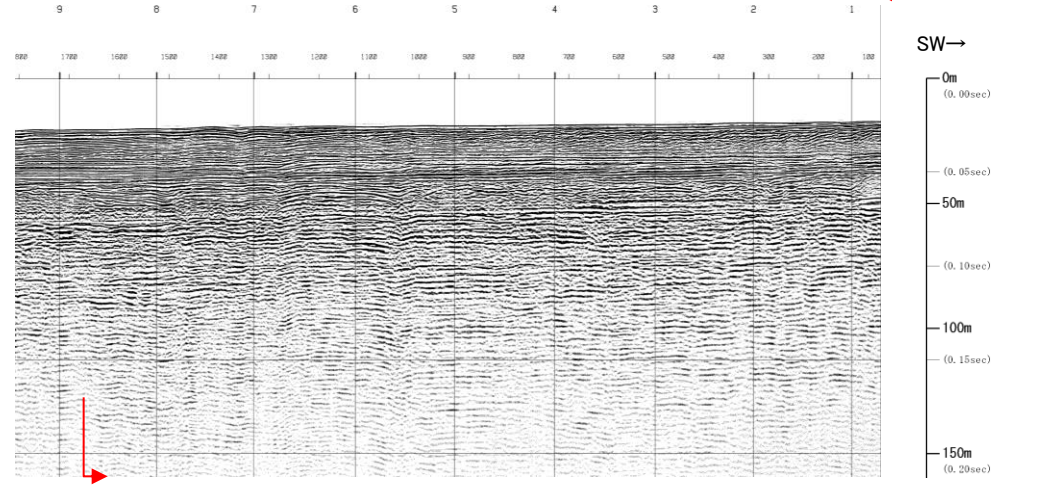
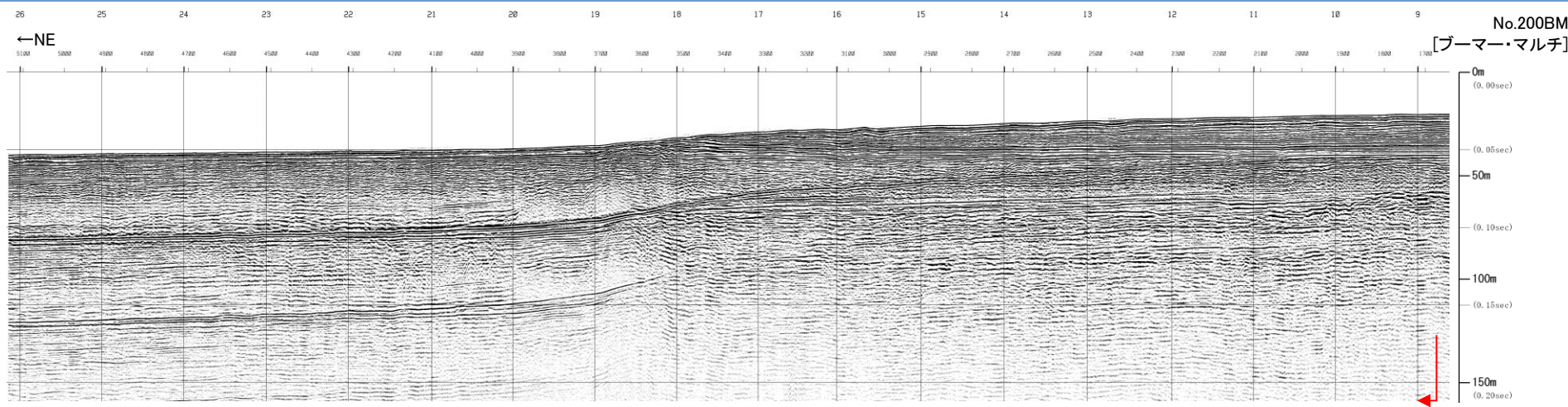
断層想定位置(直上)
断層想定位置(傾斜延長)



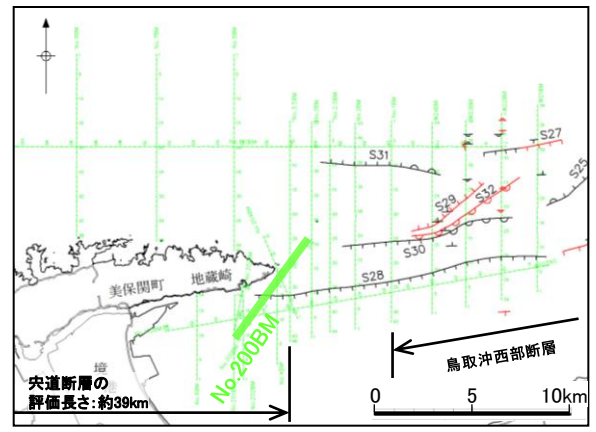
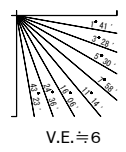
- ・S28断層が認められる。
- ・S28断層はD₂層の高まりの南縁に位置することから、突道褶曲帯の南縁に分布する断層と考えられる。

3. 宍道断層の評価 (4)地質調査(宍道断層の東側) ④東端(美保湾及び美保関町東方沖合)の調査結果 美保湾(No.200BM測線 音波探査記録)

第226回審査会合 資料3 P101 加筆・修正

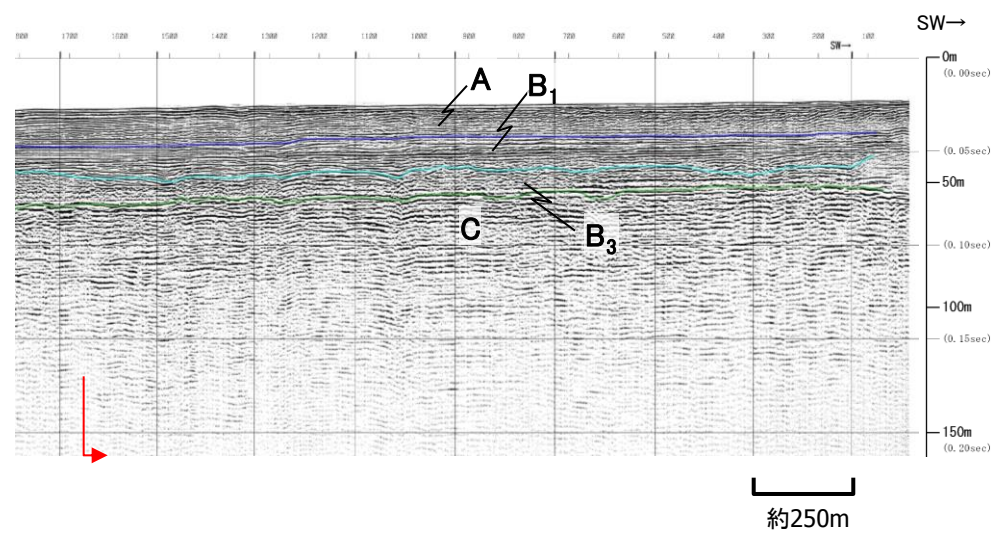
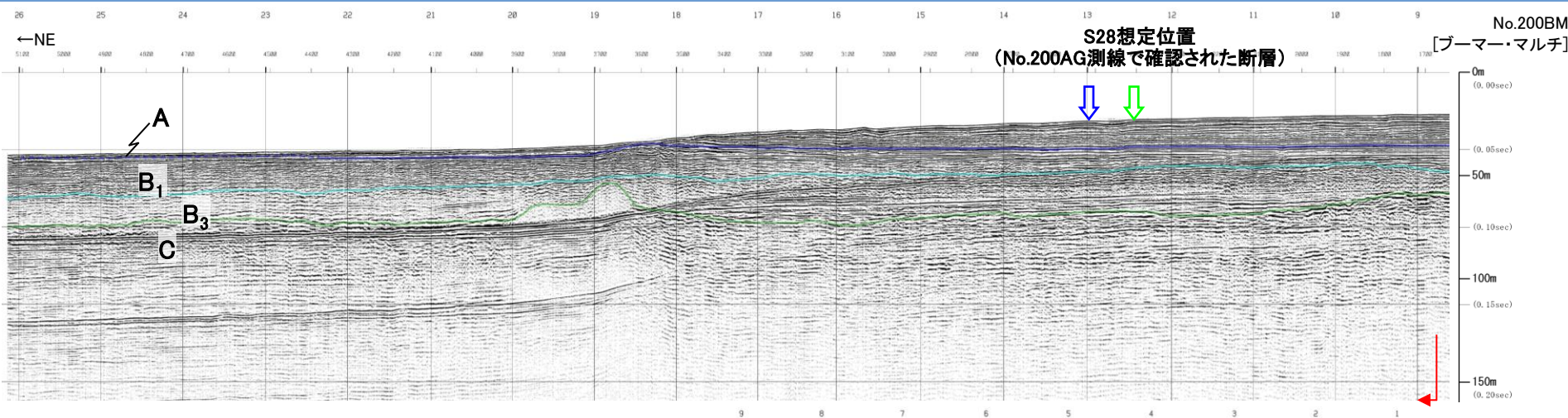


約250m

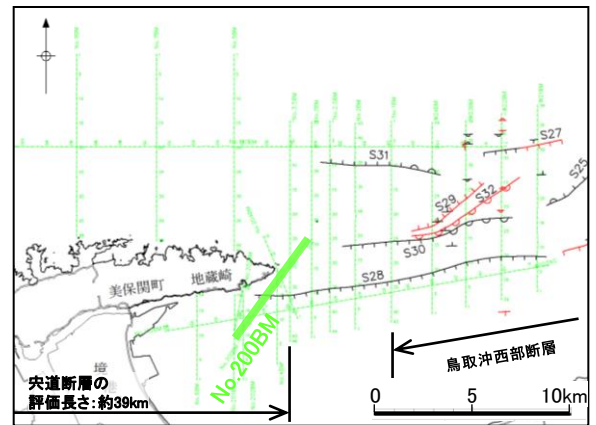
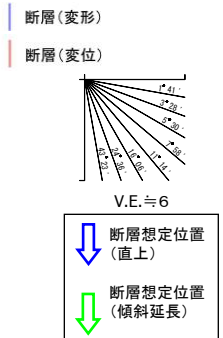


3. 宍道断層の評価 (4)地質調査(宍道断層の東側) ④東端(美保湾及び美保関町東方沖合)の調査結果
 美保湾(No.200BM測線 音波探査記録)

第226回審査会合 資料3 P102 加筆・修正



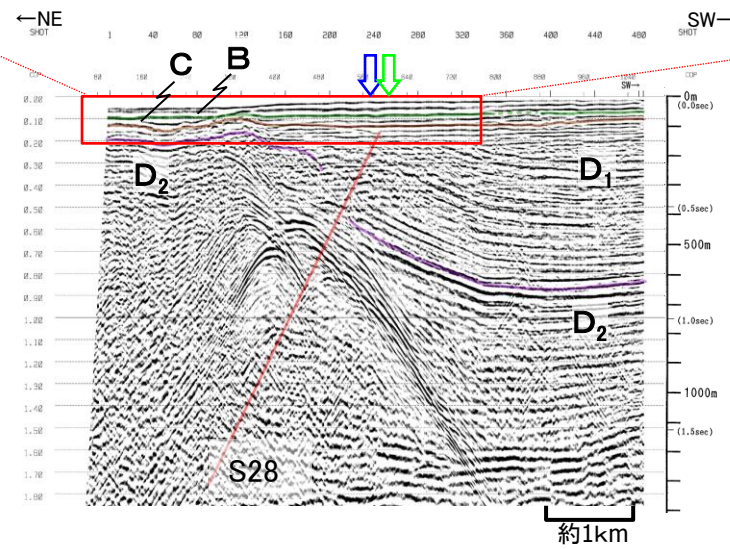
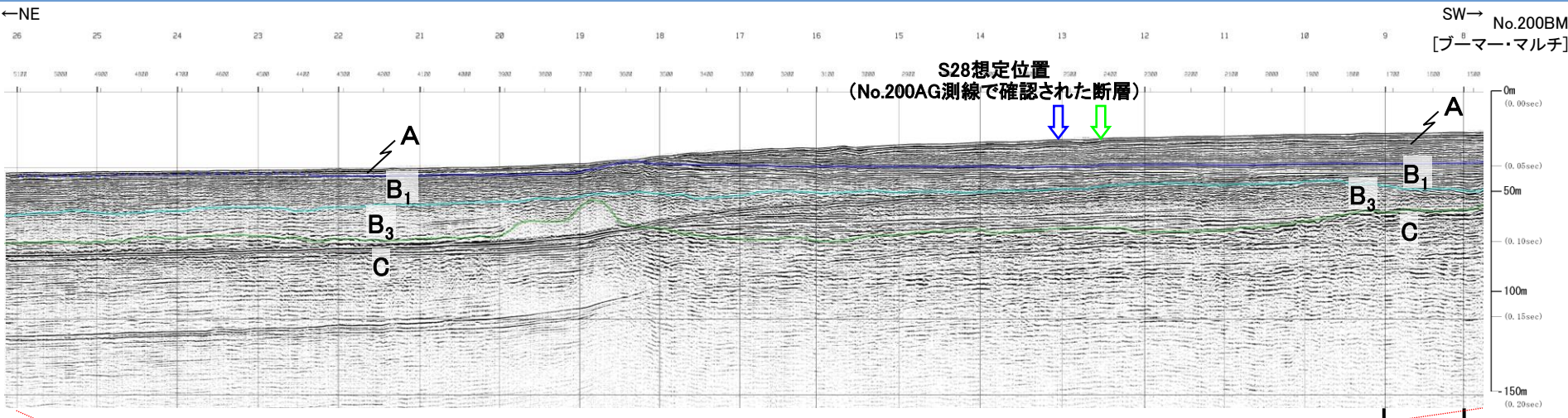
第四紀	完新世	A	
	更新世	後期	B ₁
		中期	B ₂
		前期	B ₃ B ₄
第三紀	鮮新世	C	
	中新世	D ₁	
		D ₂	
火山岩・貫入岩		V	



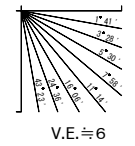
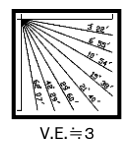
・S28断層想定位置においてB₃層以上に断層活動を示唆する変位や変形は認められない。

3. 宍道断層の評価 (4)地質調査(宍道断層の東側) ④東端(美保湾及び美保関町東方沖合)の調査結果
 美保湾(No.200測線 音波探査解析図)

第226回審査会合 資料3 P103 加筆・修正



No.200AG
[エアガン・マルチ]

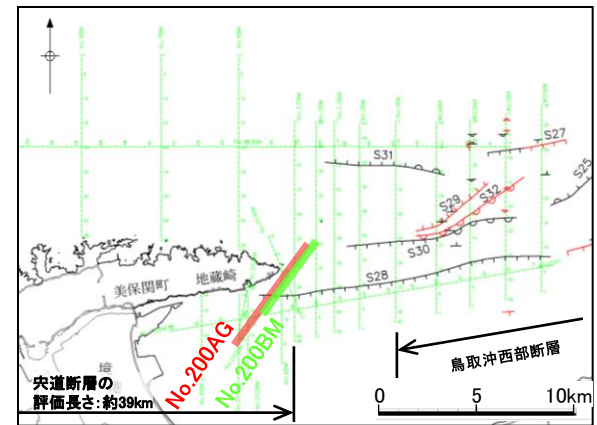


- 断層想定位置 (直上)
- 断層想定位置 (傾斜延長)

- 断層(変形)
- 断層(変位)

約250m

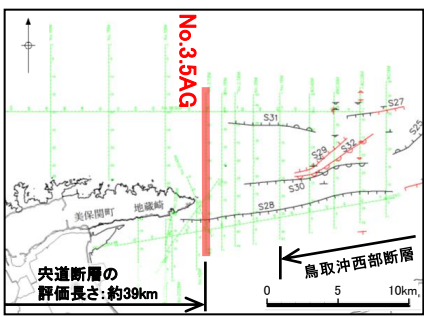
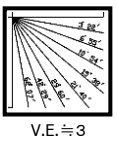
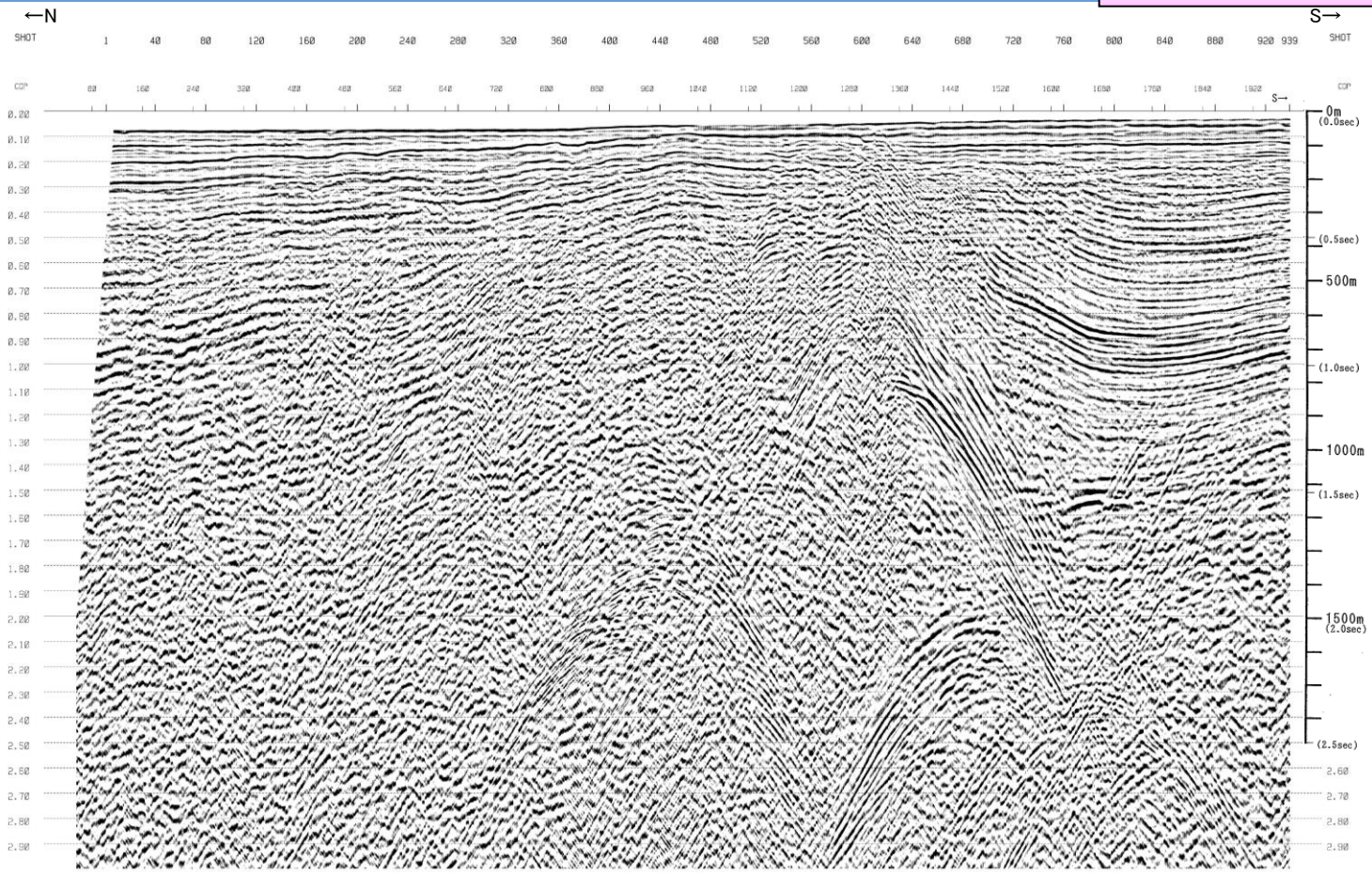
第四紀	完新世	A	
	更新世	後期	B ₁
		中期	B ₂
		前期	B ₃
第三紀	鮮新世	C	
	中新世	D ₁	
		D ₂	
火山岩・貫入岩		V	



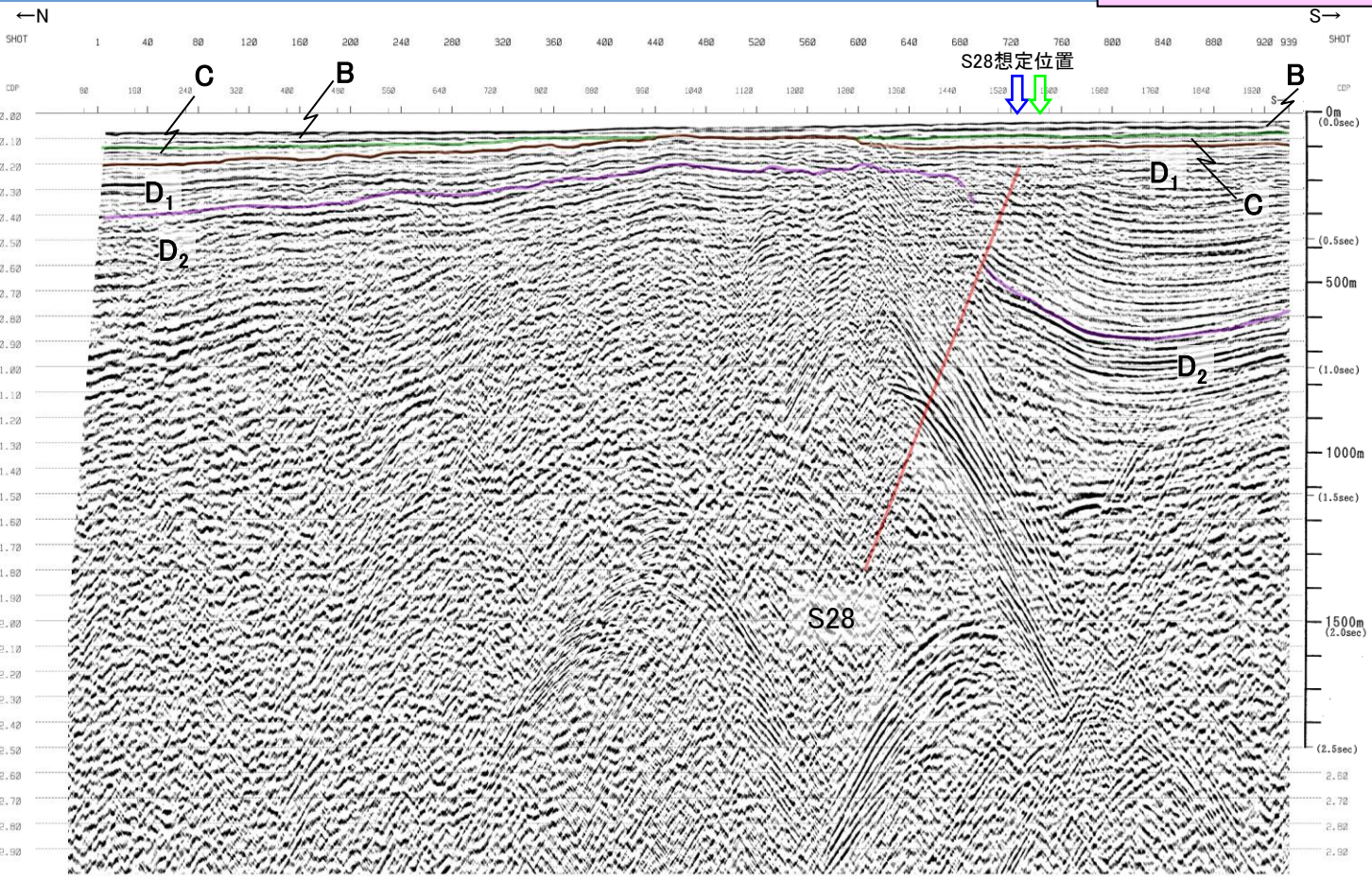
・島根半島の東方延長部及びエアガン記録において認められたS28断層は、ブーマー記録においてB₃層以上に断層活動を示唆する変位や変形は認められない。

余白

3. 宍道断層の評価 (4)地質調査(宍道断層の東側) ④東端(美保湾及び美保関町東方沖合)の調査結果
美保関町東方沖合い(No.3.5AG測線 音波探査記録)

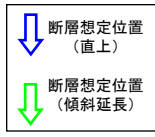
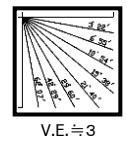


3. 宍道断層の評価 (4)地質調査(宍道断層の東側) ④東端(美保湾及び美保関町東方沖合)の調査結果 美保関町東方沖合い(No.3.5AG測線 音波探査解析図)

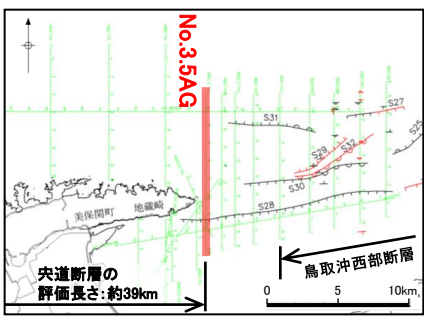


第四紀	完新世		A
	更新世	後期	B ₁
		中期	B ₂
			B ₃
前期	B ₄		
第三紀	鮮新世		C
	中新世	D ₁	
		D ₂	
火山岩・貫入岩		V	

断層(変形)
断層(変位)

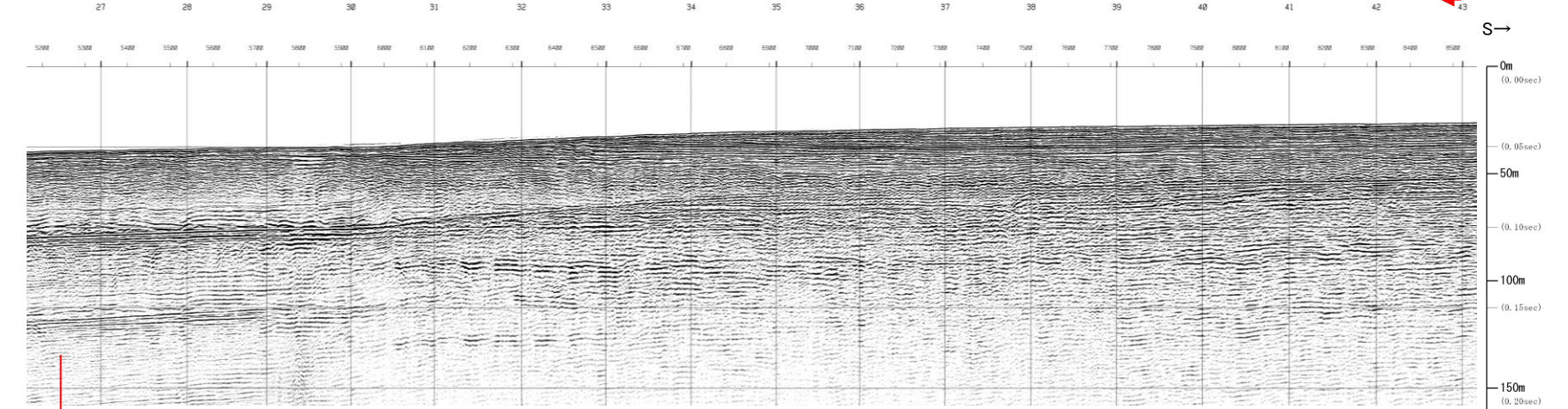
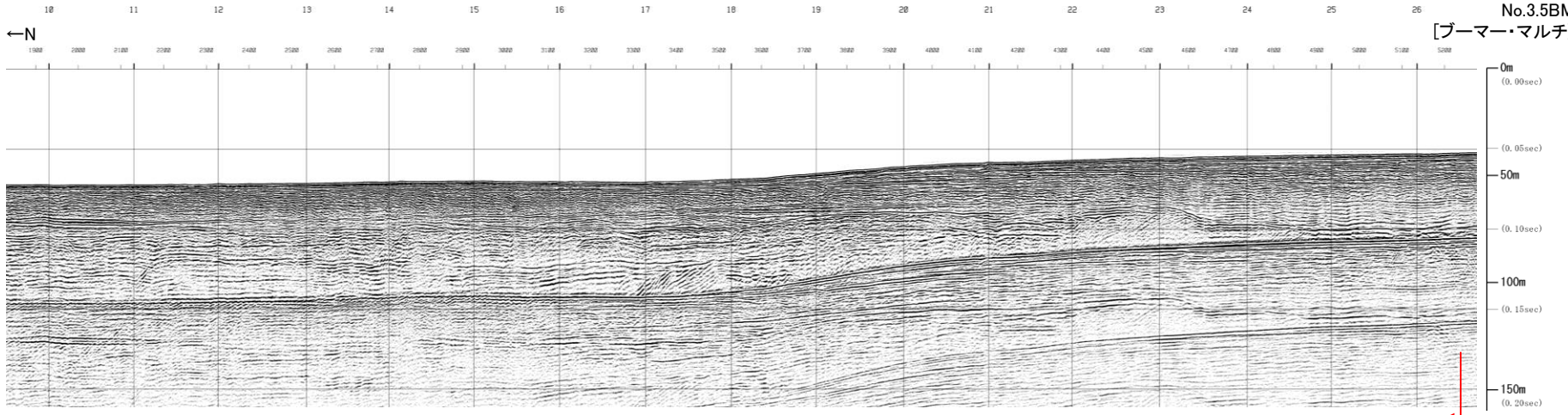


約1km



- ・S28断層が認められる。
- ・S28断層はD₂層の高まりの南縁に位置することから、宍道褶曲帯の南縁に分布する断層と考えられる。

3. 中央断層の評価 (4)地質調査(中央断層の東側) ④東端(美保湾及び美保関町東方沖合)の調査結果 美保関町東方沖合い(No.3.5BM測線 音波探査記録)



約250m

